三宅島大学
MIYAKEJIMA UNIVERSITY

あしたばん全集

慶應義塾大学加藤文俊研究室

あしたばんについて

『あしたばん』は、三宅島の〈あした〉を語る、かわら版です。二〇一一年六月に創刊し、およそ二年半にわたって「三宅島大学」プロジェクトの様子を伝えてきました。不定期ではあるものの、みんなで続けてきたおかげで、五〇号。ようやくひと区切りです。『あしたばん』は、三宅島観光協会をはじめ、島内の施設・商店などで配布しているほか、ネットを介してすべての記事を公開しています。

あらためて読み返してみると、こうして束ねられたかわら版は、「三宅島大学」プロジェクトの記録であるとともに、ぼくたちの成長の軌跡でもあるということに気づきます。ぼくたちが、少しずつ島の暮らしを理解し、共に育つことの意味を学んだ歴史が、ここに綴られているのです。

三宅島とのご縁がなければ、『あしたばん』は生まれていませんでした。これまで取材等でご協力いただいたみなさまに、心より感謝しています。ありがとうございました。そして、これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

加藤文俊

あしたばん

2011年
(平成23年)
6月19日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

創刊号

始動、三宅島大学！

初めての三宅島、新たな出会いを求めて



「三宅島大学」プロジェクトが始動する。三宅島に仮想の大学をつくり、そこで島民の方々とふれあい、交流する場をつくるというプロジェクトだ。仮想といっても、きちんと学生証が発行され、授業も行われる。近々、スクールカラーやロゴも決まるだろう。大学の開校日はまだ未定だが、九月中旬頃を予定しており、また入学に厳しい制限もない。

今回は、その事前リサーチのために三宅島を訪れる。東京藝術大学の日比野克彦研究室、慶応義塾大学の加藤文俊研究室、東京文化発信プロジェクト室のスタッフを中心に、総勢二十六人が集まった。建築家、映像作家、写真家、陶芸家など顔ぶれも様々だ。さらに今回は、六月十九日に三宅島の子供たちを対象とした水中スケッチ大会が、二十二日にはこの五日間の成果発表会が開かれる予定だ。

六月十七日金曜日、午後六時。浜松町で出発式が行われた。全員が集まるのはこれが初めて。五泊六日の長旅に備え、大きな荷物を抱えてくるメンバーもいた。式は終始、穏やかな雰囲気であったが、何度もプロジェクトの目的について確認、議論しあう場面もあり、そこには、メンバーの意識の高さが伺えた。

午後二十二時。乗船所に再び集まり、チケットを受け取った。そこでは、想像していた以上にたくさんの人が船を待っていた。出航して外に出ていると、近くから二十歳くらいの女性の話し声が聞こえてきた。



「今日はそんなに揺れなさそうだね～。波が穏やかだ。」

彼女はきっと島の出身で、この船にも乗り慣れているのだろう。三宅島に旅行に行く人もいれば、帰省するひともいる。そんなことを、ふと思い出させてくれた。

六月十八日土曜日、午前五時。船内アナウンスで目が覚めた。外はすでに明るく、三宅島もはっきりと目にうつった。これからの出来事に思いをふくらませながら、足を踏み入れた。



異国籍船上パーティーから

竹芝から出発した汽船。客室の外で船上プチ・パーティーを繰り広げる、十数人の外国人観光客を発見した。彼らは何をしているのだろう？

外国人観光客の来日理由は様々だ。日本の景観が好き、日本食が好き…。数ある地域のなかから「三宅島」を目指す、彼らにインタビューを行った。

お話いただいたのは、パーティーの中心でビールを片手に楽しんでいた、ニュージーランド出身のジュディーさん。彼らは同じ会社の仲間たちで、イルカと泳ぐことを目的に三宅島に向かっている。イルカをみるために、三宅島を選んだ理由は「島」であること、だそうだ。

ニュージーランド出身の彼は「島」の魅力を次のように語る。「日本では、新島や八丈島にも行ったよ。ニュージーランドから来たから、やっぱり島がすきなんだと思うね。本土から離れているってところと、感動するものがあるからかな」

船上パーティーを開いていた彼らだが、三宅島ではキャンプ・パーティーをする予定だそうだ。彼らは島に向かう船の上から、全力で楽しんでいるように見えた。三宅島では、どんなパーティーをしているだろう。



三宅島への思いを話す、ジュディーさん

この「あしたばん」は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

意気込み！インタビュー

「三宅島大学」開校にむけ、
今回のリサーチへの思いを語ってもらった。



みんなで、歩こう。

加藤文俊（慶應義塾大学環境情報学部教授）

加藤先生が「三宅島大学」に関わるきっかけとなったのは、昨年秋に墨田区で行った「墨東大学」というプロジェクトだった。何もない場所に大学をつくるということを、もっと別の場所でもやってみたいねと話していたところ、三宅島でやらないかという話をもらった。

加藤先生は今まで三宅島に来たことがなかったため、具体的にイメージできたのは、噴火があったということ、ダイビングができるということくらいで、島に大学をつくるという具体的なイメージは、まだないという。三宅島の火山が噴火したとき、テレビのレポーターがとても慌てて焦っているのに対して、インタビューに答えていた島の人が意外と冷静で、その対照的な姿はとても印象に残っていた。

「三宅島は僕たちにとって本当に未知の世界で、だからこそ今回ここに来たことで、どんな大学になるか具体的なイメージができるといいなと思っていた。三月に震災があって、ただ三宅島に大学をつくるだけでなく、噴火のときの様子を伝える場や、復興に対しての取り組みとしても、大学のあり方を考えられたらいいなと思った。今までになかったメンバーと一緒に取り組めることに不安はなく、とても楽しみだ」と言う。

このようなプロジェクトは、すぐに答えを求められがちだけど、もっと長い目で、三宅島に根づいていくような活動ができたらいいなと考えている。こちらが講座を開き、島の皆さんに参加して頂くだけじゃなく、島の人から私たちや島の外の人たちに島のことを教えてもらうことも大切だと思っているんです。

（高木　静香）



サバイバルのプロ

五十嵐靖晃

東京藝術大学日比野克彦研究チームに所属する、アーティストの五十嵐靖晃さんに話を伺った。

五十嵐さんは様々な地域に単身で乗り込んで、その地域の人と仲良くなってしまう。そのため「サバイバルのプロ」とも呼ばれている。「一人で現地に行くと、寂しい。けれど、寂しいからこそ出会いをつくるようになる。そして一度出会いが出来ると、そこから予期せぬ出会いが続くことがある。まるで出会いがパズルのようにはまっていくよう。そして、きっとそれが続くプロジェクトはおもしろくなっていく。」

五十嵐さんは、このプロジェクトについて、「日比野先生に三宅島大学のことを聞いて興味が湧き、さらにそれまで訪れたことのない島に行って色々な人に出会ってみたい。土地の魅力は人の魅力」と語った。

「この三宅島大学では、島の人のためになる仕組みのようなものを見つけたい。それを島の人たちから学んでいきたい」。ただし、そのためにはその地域への礼儀正しさが大事だと言う。そうでないとせっかくおもしろくなるはずのプロジェクトもそのせいで台無しになってしまう。

「島への挨拶、土地への感謝」そう語る五十嵐さんに、三宅島ではどういった人々との出会いが待っているのだろうか。

（小澤　慶輔・長富　将成）



編集後記

今日初めて、船に乗りました。
今日初めて、船で一泊しました。
７時間かけてわたしたちが目指すのは、「三宅島」。電車で行けない東京都三宅島には、これからどんな出会いがあるのか、そこからどんな三宅島がみえてくるのか。この「あしたばん」を通して、より濃い三宅島の旅にしていきたい。

かわら版、発行します！

今回、わたしたち慶應義塾大学加藤研究室チームは、六月十八日から二十二日までの五日間、かわら版を発行します。

そのタイトルは「あしたばん」。その日に採った葉が明日には生えてくる、三宅島名産の「あしたば」のように、私たちもその日の出来事を「あしたばん」で皆さんにお知らせしていきます。どうぞ、よろしくお願いします。

Twitter では、「#38P_u」このハッシュタグでつぶやいているので、興味のある方はぜひご覧ください。もちろん参加してくださるのも、大歓迎です！

あしたばん
2011年
(平成23年)
6月19日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net
第二号

ぐるり一周

三宅島大学プロジェクトチーム　リサーチ開始！



六月十八日、日比野克彦研究室、加藤文俊研究室チームが、今秋開校予定の三宅島大学始動のため、島内各地を巡る下見を行った。

一同は最初に、立根地区にあるアカコッコ館を訪問し、地元の中学生が七年間かけて作り上げたという三宅島の模型を囲みながら、三宅島の鳥の生態系や火山活動に関する話に耳を傾けた。話の途中、再生機で実際に鳥の鳴き声を聞いたり、二〇〇〇年の噴火活動に関する映像資料を見たりして一同興味津々であった。鑑賞中、語り部の穴原さんが「火山は人を殺さない」と仰っていたのが、非常に驚きであったのと同時に、火山とともに育んできた三宅島の生活を感じさせてくれるような一言であった。

その後、周りの自然を観察しながら山道を十分程下り、大路池を訪れ、記念撮影を行った。桟橋から見えた遠くの山に立ち枯れている木々があったのが印象的であった。

そして正午過ぎに、阿古地区にあるレストラン、サントモにて昼食休憩を取った。サントモにて皆の注目を集めた物は、飯倉さんという方が描いたスケッチブック。

そこには、島のロゴやマークが描き込まれており、皆の注目を集めていた。

その後、火山ガスの高濃度地区に定められたため、その機能を学校内に移した役場を訪れた。併設されている郷土資料館では、三宅島の二〇〇〇年の噴火後の模型が展示されていた。同じ建物内で教科書を販売していた方に、二十年周期で噴火が起こる三宅島になぜ住み続けるのかと聞いたところ、その方の口から、「この火山は人を殺さない。だからここに住める」という言葉を聞いた。奇しくも先ほど穴原さんからも同じ言葉を聞いたのだが，もしかしたら三宅島に暮らす人には火山を嫌うという考えはないのかもしれない。その方は、火山があると互いに気を使い合うようなることで、周りの人との距離が縮まるということを仰っていた。

その他にも、水中スケッチ大会の下見のため、伊ケ谷や大久保、長太郎池を訪れ、そのあと溶岩に埋もれてしまった建物などを実際に見てまわった。

まだまだわからないことの多い三宅島。今後のリサーチで迫っていきたい。

（小澤　慶輔・長富　将成）

スケッチブックに描かれた三宅島

昨日の島内リサーチで訪れたレストランサントモに、手書きの可愛いガイドブックが二冊置かれていた。B4サイズのスケッチブックに、丁寧に色づけされたイラストと、島の情報が書かれている。表紙には「三宅島観光案内」と書かれているが、内容は観光スポットの紹介だけではない。噴火の時の様子、島の地形や歴史など、島に関するいろいろな内容が本当にぎっしり詰まっている。

お店の方に話を聞くと、このガイドブックは二〇〇〇年の噴火後に作られたのこと。噴火後、最新のガイドブックが作れるような環境が整っていない中で、島の情報を伝えるものがあったほうがよいと考え、ペンション・オレンジハウス・バロンの方に作ってもらったものだった。みんなでガイドブックを読んでいるうちに、島の方から直接島についてのお話を聞かせていただきたいなと改めて感じた。私たちもかわら版を通して、このガイドブックのように、三宅島で見つけた素敵なモノ・コト・ヒトなどを紹介していけたらいいなと思う。

（高木　静香）

民宿つくばのお母さん

民宿つくば。ここでは、明るくて気さくな「お母さん」、筑波幸枝さんが出迎えてくれる。初めて会ったのにも関わらず、初対面での遠慮や気まずさなんて気にもさせないその人柄は、一瞬で私たちの心に入ってきた。そんな幸枝さんに、お話を伺った。

民宿つくばは、昭和五十四年から続いている歴史ある民宿である。幸枝さんは宿泊客と話をすることが好きで、私にも明るく声をかけてくれた。そんな人柄から、島を離れたあとも幸枝さんファンは多い。お客さんから手紙や本が届いたりするのも、多くの方から愛されている民宿だということを感じとれる。幸枝さんが東になった原稿を見せてくれた。それは過去につくばに宿泊し、三宅島についての本を執筆中の方のものだそうだ。嬉しそうに原稿を見せてくれる幸枝さんは、本当にお客さんのことが好きなんだなということを感じる。

「三宅島に来た人々には、何かひとつ印象にのこって、また来たいなと思ってもらいたいのよ！」

この言葉は実に幸枝さんらしく、この民宿に泊まってよかったなと思える。そして今日も、幸枝さんが台所にいるとついつい話にいってしまう。

（上地　里佳）



道具を通じてみる それぞれの旅

持ち物は、その人の人柄を表すことが多い。たとえば、バックパッカーはスーツケースを持つ人よりも歩くことに慣れているかもしれないし、野外が好きかもしれない。また、荷物を多く持つ人は慎重なのかもしれない。

東京藝術大学日比野克彦研究室チームは、このリサーチでテーマを見つけ、作品をつくることになっている。そのなかで、普段からモノづくりをする彼らが、三宅島という限られた場所にどんな道具を選んで持ってきたのか。わたしたちは、彼らの持ち物を通してアーティストそのものを探りつつ、また三宅島についても知り得ることがあるかもしれない。そう思いインタビューを行った。

▼日比野克彦研究室チーム
東京藝術大学大学院修士一年
上地　由衣さん

上地さんは利島出身で、お父様は現在御蔵島で中学校の副校長先生をされている。

さっそく、持ち物調査をさせてもらった。今回上地さんが持ってきていたものは、まずノートパソコン。曲をつくったり、映像をつくったりする。だいぶ使いこまれているような感じがあった。その他には、クレヨンや、スティックボンド、布を縫うための針や毛糸を見せてくれた。モノづくりのためには大体いつもこういったものを持ち歩いているそうだ。かわいい感じのものを、と笑いながらひとつひとつ説明してくれた。思っていたよりもたくさんあったが、これらの道具でどんなものが生まれるのか楽しみだ。



上地さんは身体表現に興味を持ち、高校生のときからダンスをやっている。これまでにも人間が入れるくらいの大きな万華鏡をつくり、そのなかで自分の映像を流したり、踊ったりしながら身体を表現した。上地さんは、先端芸術表現科に所属しているが、これを英語にするとインターメディアアート。ひとつだけでなく多分野を巻き込んでいく。上地さんは、映像とパフォーマンスの横断の研究をされている。これからも自分のやりたいことをやるだけ、そう語ってくれた。

（新飼　麻友）

▼日比野克彦研究室チーム
美術家
村上　慧さん



封筒にビニールテープの取っ手をつけてつくられた、即席のカバンを持って現れたのは、アトリエそらねずみのメンバーであり、今回は東京藝術大学日比野克彦研究チームの一員として参加されている、村上慧さん。

彼にとってビニールテープは必需品で、いつもバッグに入っている道具なのだとか。元々は、テレビ局のバイトでケーブルを束ねるために使っていたが、強度や粘着力、そして実はは手で切れるという便利さに魅力を感じて、木材を自転車にしばったり、寝袋を小さくまとめたりするなど、様々な用途に活躍している。

また、他のこだわりグッズとして紹介してくれたのはクレヨン。自分にあった描画材とのこと。ぐりぐりと握って、なんだか描きたくなってしまうし、何よりかわいいところが好きとのこと。

ポケットサイズのクレヨンを、本当にポケットから取り出して語りだした笑顔には、クレヨンを手にしてお絵描きをする、少年のような無邪気さを感じた。

（飯田 達彦）

はじめて出会った島の味、「にがったけ」

本土から船にゆられ、わたしたちが三宅島に降りたったのは午前五時。島ではじめてたべたものは、民宿「つくば」さんの朝ごはんだった。白いごはん、目玉焼き、そしてお味噌汁。日本の朝ご飯、といったメニューになにやらお味噌汁に見慣れないものが…。

「にがったけ」。わたしたちが最初に出会った三宅島の味。ちょっと苦くてよい歯ごたえ、なんだか苦さがくせになる。その後もペンション「サントモ」さんでいただいた、生姜焼きのなかに「にがったけ」。買い物先に、お漬け物の「にがったけ」。みつけるたび、なんだか三宅島に少し近づけたような感じがしてくる。生姜焼きには野菜はタマネギ、という食べ方しかしていなかったわたしだったが、独特のすこしの苦みがいい味をだしている「にがったけ」に惹かれる。

「やっぱり、ここに来たら三宅のもの食べないと！」民宿のおかみさんが笑顔で「にがったけ」について教えてくれた。同じ東京なのに、食べるものが違うことへの驚き。「島らしさ」が滲み出る、にがったけの愛され方に少しうらやましくもあった。まだまだあるだろう、島の味。ちゃんと味わって、三宅を味覚でも思い起こしたい。

（大西　未希）





三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
6月20日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

第三号

水中スケッチ大会 行われる

伊ヶ谷浜で水遊びをする子供たち



今回のリサーチ期間中で初めての島民との交流イベント、水中スケッチ大会が昨日伊ヶ谷浜で開かれた。午後一時になると、徐々に浜に子供たちが到着し、保育園児から小学校六年生まで、集まったのは約十五人。今日は漢字検定の開催日でもあったが、試験のあとに駆けつけてくれた女の子もいて、会場は元気な声であふれていた。また、小学校の先生も様子を見に来ており、生徒たちの緊張もほぐれたように見えた。



東京藝術大学の日比野研究室チームが中心となったイベントで、ユポ紙と専用のクレヨンを使って、水際で濡れながらスケッチを描く。海にはよく遊びに行くが、水中でスケッチを描いたことがある子供は誰もいなかった。日比野先生から大会の説明が終わると、学生がリーダーとなり七つのグループに別れた。子供たちも分散し、指示に従いながら水中スケッチを楽しむ。始めは戸惑ってなかなか描き出せなくても、徐々に調子が上がり、海ではしゃいでいる姿が見られた。一枚だけでは飽きたらず、二枚目に突入する男の子もいて、それぞれが楽しんでいたようだ。三十分から四十分くらいかけてスケッチを描いた後は、浜で記念撮影をした。自分の絵を持ちながら、嬉しそうに写真に写る子供たちはとても微笑ましかった。



―実際に水中スケッチを体験してみて

普段全く経験しないことだけに、絵を描いているうちに気分が盛り上がり、子供の頃に戻ったような気持ちでスケッチを楽しんでしまった。得意ではないわたしでも、多彩に多様に表現することができた。水の中でスケッチをする感覚は不思議で、足に冷たい水を感じながら、水中のキャンバスに描く。いつもよりも、クレヨンの滑りがなめらかなような気がした。

見たままを描く子供たちは、青や茶色を使って海を表したり、砂浜を描いたりしていた。

子供たちには少し早い夏休みがやってきたようだった。

（新飼　麻友・高木　静香）



大久保浜はステージ

日比野先生の水中スケッチのインタビューをするために、大久保浜に訪れると、どこからかサックスの音が聴こえてきた。目を凝らしてみると、遠目に車のトランクに座っている人が見える。音の鳴る方へ歩いて行くと、そこにいたのは、浜の近くでお店を出している山下広範さんだった。山下さんは二〇〇〇年に東京へ避難し、昨年家族とともに島に戻って来たという。

姪から買い取ったサックスは、しばらく家に置きっぱなしになっていた。東京へ避難した時、大人のための音楽教室の案内を見て、一度は島に置いて来たサックスを持ち出し、習い始めることにした。目標は、自分の好きな曲が吹けるようになること。「避難がきっかけで、サックス以外にもいろいろな習い事ができた。避難生活は辛いばかりじゃなくて、意外と楽しかった」と笑顔で話してくれた。現在は日曜日など、時間がある時には浜へ出てサックスを練習しているそうだ。「島内には練習の成果を披露できる場が多くはないけれど、この浜は自分にとってステージのようなものなんだよ」と私たちに教えてくれた。いつか大久保浜で、島の皆さんを集めてライブフェスティバルなんかやったら面白そうだなあとぼんやり考えていた。

（新飼　麻友・高木　静香）



この「あしたばん」は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

巨大な紙に軌跡を残す

日比野克彦氏による水中スケッチ

黒い砂浜と、透明な海。十九日午前、波は高く、大きな音を合間なくたてる。ここに集まる二十数人の間に緊張が走るのは、アーティスト・日比野克彦氏による実験的ともいえる作品制作が行われるためだ。

「水中スケッチ」と呼ばれるこの取り組みは、砂浜から紙を伸ばし、そのまま海に入り込んでスケッチをするというもの。百メートルにも及ぶ紙を海へ広げる…この行為だけで異様な、不思議な感覚が見た人に広がる。

日比野氏のスケッチは、とにかく速い。紙に身体をへばりつかせるような格好で、次々に「見たもの」に沿って腕を動かす。その通りに、オイルクレヨンの線が残る。山から覗く民家、かと思うと目の前にある人の影、海岸と道路をつなぐ階段、砂浜の砂利。直線上に集まる線たちは、日比野氏の視界の軌跡の集大成だ。

そして、いよいよ水の中へ向かう。スケッチの後、日比野氏は「砂浜にいながらも、背中で迫り来る水を感じていて、どうしようかとも頭のなかにあった。」と話した。緊張と集中の中、白い紙は波の起こるままに折れ曲がり、浮かび、沈む。波と戦いながら、見守る人々が「もう継続は無理かもしれない」と思いながらも、日比野氏は描き続ける。思いもよらぬ方向に折れ曲がる紙を両手で押さえ続け、押さえている「跡」を刻み付けるのだ。このことで砂浜上とは、予想しなかった方向に描き方が変わる。「ここから海の中に入った」という確かな印が、紙を傷つけるように、象徴的にそこにある。



砂浜から海。絵を描く時に、自分の表現を自由に描く環境ではきっとないだろう。しかし、ここに刻まれているのは砂浜から見える景色と水中で感じた波、すべての軌跡であるのだ。日比野氏が語ったのは、この水中を通して感じたことだった。「砂から波打ち際、そして水中に入る連続した行為。これは衝撃で身体に染み付いたし、三宅島につく船の気持ちになったような感覚だ。」

（大西　未希）

島が好きで好きで仕方がないから

そう言って、三宅島に移り住むことにした理由を語ってくれたのは梶野亜喜史さん。小さな頃から三宅島の別荘に遊びにくるうちに、その魅力にとりつかれていったそうだ。その別荘が古くなったため、新築に建て替えて、三宅島に住み始めようとしていた矢先に、二〇〇〇年の噴火が起きた。梶野さんご自身は三宅島に戻ってきたが、奥さんと四人のお子さんは東京に今も住んでいるそうだ。



島に戻ってから、梶野さんはバスの運転手をするようになった。そこで大事にしているのは「ふれあい」。観光バスでは、お客さんにいい想い出をつくってリピーターになってもらえるよう、おもてなしの心をもってふれあう。路線バスを運転するときに、いつも乗ってくる高校生が来ないと、少し他のお客さんにも待ってもらうようお願いする。本数が少ない島ならではの対応だ。農家のお年寄りからスイカをもらうこともしばしばあるそう。

噴火後に変わった島内の状況を鑑みて観光バスの経路を変更したり、噴火以前のカラーリングで駄目になってしまった古のバスを、噴火以前に自分たちで塗り直したりすることもある。それも、乗客の顔が見えている梶野さんだからのことだろう。

「子どもたちの集まる場所を作ってあげたい。」大好きな島に対する希望を語ってくれた。バスのフリー切符を持つ子どもたちに、豊かな自然はもちろん、その他にも遊べる環境、人が集まることのできる場を作ってあげたいとの思いを伺ううちに、三宅島大学を少しでもその環境づくりのきっかけにしたい、三宅島大学を活かしていきたいと、私たちの中でイメージを膨らませていた。（飯田 達彦・森部 綾子）

一メートルのコミュニケーション

体育館に絶え間なく響く太鼓の音。下はまだ小学校にも通っていない子どもから、上は六十歳を超えた年配の方が入り交じって一心不乱に太鼓を叩いている。

「木遣り太鼓は江戸時代から続いていて、木遣の起原は労働歌なんだよ」。温和な口調で休憩中の子どもたちにそう語るのは津村晉さんだ。自身三回の噴火を経験して、家族を台車に乗せて避難したこともある津村さんは、毎週日曜日に太鼓を通して地元の人々に島の文化、歴史を伝えている。

津村さん曰く、祭りや太鼓は、世代を超えたコミュニケーションを取る際、最も有効な方法とのこと。なるほど、太鼓を介して一メートルの距離を挟み、片面ずつ真剣に太鼓を叩き、相手の鼓動を感じ合う。言葉はなくとも互いに通じ合うことが出来る瞬間。



最近は人口不足に伴い、叩き手も不足していると口にしていたが体育館には保育園児を始めとする子どもたちも大勢いた。その理由を津村さんに伺うと、叩き手不足の対策として最近では、保育園の頃から子どもたちに太鼓を教えているとのこと。

そうした活動の甲斐あって、叩き手に子どもたちが増えたと同時に意外な発見をしたらしい。津村さんは語る。「最近では最初から男女同時にスタートするけど、長くやっていると辞めずに続けるのは女の子なんだよね。女の子の方が祭りが好きなんだね。ぜったいそうだね」。その背景として、以前は女性の祭りの参加が禁止されていた等の理由もあるが、非常に驚きである。種類は違えど、共に自然災害の被害にあった被災地の東北の人々に対して太鼓を通して祈りを届けたいと、はっきりした口調で語ってくれた津村さん。一メートルの距離で紡いでいくその想いはきっと東北に届いています。

（長冨　将成）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
6月21日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

第四号

二時間／三年間にかける思い

～三宅高校ナインが挑む夏



三宅島唯一の高校である、都立三宅高校。全校生徒は四十一人で、男子生徒は二十二人。その内十一人の男子が所属している「大所帯」である野球部に取材に出かけてきた。

「入学当初はキャッチボールもできなかった選手が、最後の大会でヒットを打ったときは本当にたまらないね」。三宅高校の教員で、野球部監督、更に住職の顔も持つ山本政信（やまもとせいしん）監督はそう語る。

監督自身は三宅高校出身で、高校時代は軟式野球の全国大会に出場。その時観衆の前でプレーした時の感動を後輩であるナインにも味わってほしい気持ちでチームを率いる。

離島の唯一の高校という条件のため、練習試合は大型連休に泊まりがけで出かける一試合のみ。そのため、経験不足は否めない。

「大会でもウチのグラウンドでやれば勝てる試合があったのに、よそに行くと固くなっちゃうんだよね」山本監督は残念そうに語る。

しかし、そうした試合経験の不足を補おうと、毎年大会前にはOBが集まり現役の選手と試合を行っている。同じ経験をしたOBだからこそわかる苦労、時折グラウンドに顔を出して練習を手伝う等OBとの繋がりは深い。

監督がこれまで指導をしていて毎年思うことがある。「最後の試合で負けた三年生は九十九％大粒の涙を流す。特に一生懸命取り組んできた選手ほどよく泣く。人間こんなに大勢の人の前で感情を表す経験は、この先まずないね。それは地区予選の一回戦で負ける高校も甲子園で準優勝する高校も皆同じ」。

多感な高校生の時期を野球に費やした球児にとって、それを失ったときの虚無感は相当なものだ。だからこそ大粒の涙を流すのだろう。

監督の言葉でひときわ印象に残った言葉がある。「高校野球は、夏の大会の二時間でこれまで積み重ねてきた三年間の結果が出る。残酷だけどそこに醍醐味がある。三年生にとって夏の大会は卒業試験のようなものだね」。十二年ぶりの夏の勝利を目標に、三年生五人を含む十一人の選手たちが今年も「卒業試験」に挑む。

（長冨　将成）

【お知らせ】七月十一日　12：30～
vs本郷高校（球場未定）十二年ぶりの勝利を目指す三宅ナインをぜひ応援しましょう！！

伊ヶ谷港に高速ジェット船あらわる

六月二十日、この日は三宅島にとって記念すべき日となった。午後一時を前に、高速ジェット船「夢」が伊ヶ谷港に就航した。カラフルな船体で、水しぶきを上げてこちらに向かってくる様子は、遠目にもはっきりと見えた。港ではセレモニーが行われ、村長も駆けつけた。ジェット船が港に着き乗客が下船してくると、自然と周囲から拍手が湧き起こった。その後、三宅島から初となる乗客が乗り込むと無事、定刻通りに出航した。このジェット船は従来の船の約半分の時間で運行する。まだ試験運航の段階だが、島民の間では大きな期待を集めている。ここで早速、一足先に帰宅した私たち加藤研究室のメンバーから体験談を聞いた。

―色鮮やかな船に乗り込むと、ぐらぐらと船体が揺れる。窓の外には、こちらに向かって手を振ってくれている人たちが見える。船内は椅子が並べられているだけの簡単なつくりで、部屋はなかった。乗船客は、外からきた旅行者というよりも、これから東京に出て行く三宅島の人が多いように感じた。また、家族連れもいて、楽しそうにしていた。乗り物酔いがひどい私は、揺れをとても心配していたが、速度が上がると徐々におさまり、ひどく揺れることはなかった。ジェット船は、現在三宅島と東京の直通便がなく、伊豆大島で乗り換えなければならない。船が苦手な人にとって、ジェット船による運行時間短縮は嬉しい限りだが、これから運行が本格的に開始されるにつれ、東京との直通便ができることを期待したい。

（新飼　麻友）



お詫びと訂正　第二号の「ぐるり一周」の記事にて、「教科書を販売」と表記しましたが正しくは「教科書を展示」の誤りでした。訂正します。

この「あしたばん」は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

号外

あしたばん

2011年
(平成23年)
6月21日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

あしたばん制作の裏側に迫る

六月十八日から二十二日、東京藝術大学の日比野克彦研究室、慶応義塾大学の加藤文俊研究室、東京文化発信プロジェクト室のスタッフが、三宅島大学プロジェクトのリサーチのために三宅島を訪れている。



今回、加藤文俊研究室の学生は学部二年から修士一年までが参加し、滞在期間中に毎日かわら版を発行、配布している。かわら版のタイトルは「あしたばん」。三宅島名物のあしたばと、その日の出来事が明日には発行されていることからそのタイトルとなった。三宅島で体験したことや、出会った人のインタビューなどをかわら版として制作することで、三宅島へのアプローチを試みている。

船での宿泊を合わせると五泊六日の滞在となり、加藤ゼミでは今までにない長期滞在でのリサーチである。宿泊場所は、元気で明るいお母さんが迎えてくれる「民宿つくば」。朝はそれぞれ取材に出かけ、夜になると編集作業が始まる。部屋にはあしたばん編集部が集まり、持参したパソコンでその日に取材したことを記事にしていく。なかには、パソコンではなくケータイで文字を打ち、約千文字にもなる記事を書いた学生もいた。文章ができると、お互いに校正をしていき、感じたことや伝えたいことを整理することを繰り返していく。この作業は深夜まで続いていくが、学生たちは眠気に負けず作業し続ける。



二十一日現在、四号まで着々と発行することができている。また、徐々にではあるが、三宅島の人々に配ることもできてきた。

ある日、民宿つくばの電話が鳴った。「にがったけ、好きね?」と、記事を読んだ方からの電話。「他の記事も読みたいから、ぜひもらいたい」という言葉をいただいた。また、ある朝、「次の号、できた?」と声をかけていただいた。地元の人に読んでもらっているという実感と、一人でも待っている読者がいる喜びを感じることができた。待っているかもしれない読者に想いを馳せ、あしたばん編集部は、今日も発行のために編集し続ける。

(上地　里佳)

一同集結

三宅村村長・三宅島大学プロジェクト実行委員会を表敬訪問

二十日朝、私たち島外から訪れた三宅島大学プロジェクトチームは、平野村長および三宅島大学プロジェクト実行委員会を表敬訪問し、初めて今回のリサーチに関わるメンバーが顔を一同に合わせた。

実行委員会からは、池山副村長、政策推進室長副参事の佐久間さん、観光協会会長の浅沼さん、教育委員会教育長の櫻田さんら、そうそうたる顔ぶれで、張りつめた雰囲気のなか表敬訪問はスタートした。

しかし、慶應義塾大学加藤文俊研究室や東京藝術大学日比野克彦研究室の学生たちが、三宅島に訪れてからの二日間の素直な感想を交えて自己紹介をしていくうちに、徐々に場の緊張感もほぐれていった。

リサーチに参加することになったきっかけや目的は違えども、どの言葉の端々からも三宅島に向き合っていこうとする真剣さや、これから何かしていこうという熱意がこもっていた。その気持ちが伝わったのだろうか、島の実行委員会の方々からも、三宅島大学に対する期待を力強く語ってもらえたような気がする。

今年はちょうど、今後十年の三宅島の総合計画を考える年。これからの島の方向性を決める一因に三宅島大学を進めていく決意をかため、今回のリサーチを全速力で駆け抜けることを決めた。(飯田　達彦)



この「あしたばん」は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅高校なう。

三宅島大学を開校するべく、三宅島へ上陸して三日目。実際の学校を見たいという思いで、三宅島の教育機関を見学に三宅高校を訪問させて頂いた。

▼ムロアジで、餃子!?三宅高校と栄養士学会によるコラボレーション企画

二十日、調理室では家政科の生徒四人と、村瀬先生、三宅村栄養士学会による『三宅島の食材をつかったレシピ』の調理実習が行われた。

第一回は、「三宅島といえば!」の、あしたば。第二回の今回は、「ムロアジ」を使った料理。くさやのサラダを前菜に、ムロアジのチーズ焼きやムロアジの餃子、ミートソース。デザートには、あしたばプリン!これは商品化したら、きっといいお土産になるなあと思うくらい美味しい。抹茶プリンのような甘みに、ふわっとあしたばの香りが鼻を通る。

なんとこれ、生徒さんがレシピを考えているのだ。それぞれが作ったお料理の感想も書きあうそう。

▼溶岩、地層、幻の滝…三宅島に散らばる、文化資源を伝える、川澄先生

三宅高校で火山について授業を行う、川澄先生。主にフィールドワークを中心にしている。「三宅島には、火山噴火の跡がとてもキレイに残っています。これがいかに学術的で、いかに美しいか、生徒たちに伝えて郷土愛を持ってもらいたい」と語っている。



川澄先生が、生徒と外に出て行くのは「三宅島の価値」に先生自身が惹かれているのだろう。「火の跡がとてもキレイに残っています。これがいかに学術的で、いかに美しいか、生徒たちに伝えて郷土愛を持ってもらいたい」と語っている。

先生によれば、島内には雨の日しか見られない「幻の滝」がいくつもあるらしい。この幻の滝、まだ未開拓の場所もありそうとのこと。雨が降っても、歩いて滝を探すのが楽しくなりそうだ。

▼高校生と、下校してみた。

最後の路線バスの時間の近づく十八時ころ。部活が終わった生徒たちが、校舎を出て歩いていく。調理実習で一緒になったふたりと、一緒に下校してみた。十年程一緒に机を合わせる生徒同士はもちろん、先生と生徒も手を振りあって「さよなら」の挨拶をしている。これが、実にいい風景だった。下校時間、久しぶりの追体験に少しうれしくもなる。



三宅高校の「なう」を見てきて、三宅島大学の「これから」を想像した。最初に予想していたものよりはるかに多くの「三宅島のいいところ」が凝縮されそうだ。島全体がキャンパス、みんなが先生で生徒。暮らしていてもわからなかった魅力、観光に来ただけではみつけられない場所。教え合ってわかちあう、コミュニケーションの真ん中を「大学」にしていきたい。

(大西　未希)

お土産を受け取りに

三宅島で過ごしていると、金沢からメールが届いた。「三宅島の沖山さんに会ってお土産を受け取ってください!」、三宅島大学のリサーチで島へ入ることを話していた金沢の知り合いからのメールだ。

金沢で mogu というカフェをやっているひさこさんという知り合いは、沖倉商店のオリジナル商品をネットで購入していたり、入院したときに沖山さんから験担ぎに手ぬぐいを送ってもらったりしていたらしい。



そこで阿古地区にある沖倉商店へお土産を受け取りに沖山さんを訪ねたら、偶然にも他のリサーチチームが取材中だった。この取材チームはツイッターでやり取りをして沖山さんの商店を訪ねていて、今の時代らしいネットでの繋がりに驚かされた。そして、島の良さや今後の島の事をお話しいただいて印象に残ったことは、政治家や有名人が島に来た後にドンドンとビッグになっていくという「アゲ島」説。なんとなくパワーに溢れている島だからこそこの話は納得してしまうのだ。

沖山さんがいろんな角度、分野から島を盛り上げるために考えている方法は、離島はもちろん、東日本、さらに日本全体にとても必要な事だと強く感じた。

金沢へは美味しい焼酎とアゲ島の話をお土産に持ってかえる事にしようと思う。

(喜多　直人)

三宅島リサーチ経過報告

現在、三宅島大学開校に向けて各自リサーチ活動を行う中、三宅島にある建物や場所を巡って、その位置関係を地図上で確認して、そこから三宅島の各地域のことを理解しようとしているグループに参加している。

例えば場所を神社とすると、「富賀大祭」の際に神輿を一時的に保管する神社の位置関係について調べると、伊豆~神着の間と神着~坪田の間の神輿を担ぐ距離が大きく異なることがわかる。神社だけでなく、調べる対象を変えて調査を続けていくことで、三宅島の理解を深めていきたい。

(小澤　慶輔)

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

潮風をあびながら

鳥のさえずりで気持ちよく目を覚まし、カメラ片手に雨上がりの細道を歩いてみた。
そこを抜けると目の前には海が広がり、降り注ぐ太陽のエネルギーを体いっぱいに取り込み、
元気いっぱいに。三宅島に来て早いもので５日になる。
ここで少しでも多くのものを感じ取って帰りたいとの思いでシャッターを切り続けてきた。
そのほんの一部をご紹介したい。（森部　綾子）



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2011年
(平成23年)
6月22日
水曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net
第五号

たくさんのありがとうを

―三宅島での五日間―



「ちょっとこっち来い。手伝えばいいことあるぞ」。そう言われ、台所へ行くとまな板の上には目の色も透き通るほどの新鮮なイカが。さばいたそばからその切れはしを私に差し出してくれた。ほのかに感じる甘み、歯ごたえのよさが、なんとも贅沢なつまみ食いである。このイカを釣ってきたのは私たちがお世話になっている民宿つくばのご主人、筑波昭一さん。皆から親しみをこめて「じい」と呼ばれ、自らのことも「じい」と称している。じいは三宅島で指折りの漁師。天草漁で右に出るものはおらず、昔はこれひとつで十分に生計を立てていけたと自慢げに笑顔で話す。岩にがっしりとついた天草を獲る際は、指先の力が必要とされるため、長年の漁で薬指の爪が変形してしまっている。じいのぶ厚くごつい手は島の男の生きざまそのものを物語っているように感じた。漁を始めたばかりの頃は、長く潜ることが苦手で、悔しい思いを沢山してきたという。先輩を越えたい思いから、オートバイに乗り、過ぎゆく電柱の数を数えながら息を長く止める練習を繰り返し行って自らを鍛え上げていった。その甲斐あって、みるみるうちに成果を上げ、周りから「化け物」と言われるほどまでに漁師としてその名を島内に轟かせるようになった。今でも現役ばりの活躍で我々の食卓を豪華に飾ってくれる。

民宿つくばには、夜にスナックつくばへと姿を変えるじいの部屋がある。「じいが島の話いっぱいしてやるから。」と夕食後、じいと共に炉を囲み、焼きたての貝などをつつきながら語らう空間となっている。滞在中のことを思い出しつつ、楽しく語らいながらたくさんのことを教わった。「もし違うところ泊まってもまた必ず会いに来いよ。」触れ合いを大切にし、ありがとうの気持ちを持って送り出すというじいの心意気にも密接に触れることができた時間だった。じいから教わった、どこに行っても変わらない、ありがとうの気持ちを持つことの大切さを身体にしみこませていきたい。

今回のリサーチ活動を通じて沢山の方とお会いできたこと、ご協力して頂けたことに対してありがとうの気持ちを持って、またお会いできる日を楽しみに我々は三宅島を後にする。ありがとうございました。

（森部 綾子）

パピロってなんですか？

お昼ご飯で「パピロ」という名前のパンを買った。地元の人に聞くと、「むしろ東京にはないんですか？」と聞き返されてしまうほど、三宅島では定番商品のようだ。その聞き慣れないパンの名前の由来が気になり、製造元である築穴製菓の築穴一也さんにお話を伺った。

ここは、昭和から続いている昔ながらのパン屋である。現在は、父の跡を継いだ一也さんが二代目として日々製造している。三宅島にはもともと三つのパン屋が存在していたが、今は築穴製菓のみとなっており、ここで製造されたパンは島中に配達され、また学校給食のパンも製造している。「昔ながらのパンなんですよ。」と言う築穴さん。創業当初の四十年前からある窯で、今も昔も同じ窯でパンを焼き続けている。昔から続くパンの種類や味は、世代を問わず島民から愛され、三宅島のパンとして地域に根付いていた。

ちなみに、「パピロ」とは、パンにはさまっているクリームの名称だそうだ。パピロは全国各地で形を変えて存在しているらしい。どこか旅行へ出かけた際には、三宅島で出会ったパピロを思い出しながら探してみようと思う。

（上地 里佳）

リサーチ期間終了

六月の十八日から二十一日までの四日間で、三宅島でのリサーチ期間が終了した。後半二日間は、都道を利用してまわっていった。向かった先は、三宅島の学校や公民館、役場等の施設や、寺や神社等の文化財的なもの、三宅島観光協会のようなインフォメーションセンターや、商店や飲食店等の建物をまわっていき、そこにいた人に話を聞いていった。三宅島観光協会の方にお話を伺うと、三宅島には元々五つの村があり、それまでは往来はあまりなかったが、交通手段が出来て、各集落間の距離が近くなり、三宅村になった現代も、以前の名残りで五つの集落には生活に必要な機能が置かれていた。小学校や幼稚園、郵便局はすべて五つずつあった。噴火等の影響で、今は五つないものもあるが、三宅島の規模に対して郵便局を見かける頻度が多く感じるのもそのためとのこと。もし、三宅島にある機能を今必要な量に変えるとするなら、高速ジェット船が乗り入れるくらいに観光業が盛んな三宅島に、一ヶ所しかない今の観光協会の数は少ないと言えるのかもしれない。三宅島大学の拠点であったり、何か場所づくりを考えていく際に、三宅島に足りていない機能を補完できるようなものを考えられると、長い目で見たときに三宅島のためになっていくかもしれない。

（小澤 慶輔）

この「あしたばん」は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

生徒とのふれあい

―行ってきました。こども会

二十一日、三宅高校の図書室において家政科専攻の学生による、こども会が開催された。当日は雨天にも関わらず、七ヶ月～四歳までの子を持つ親子が五組ほど集まった。こども会の内容は、紙芝居、指遊び、絵本読み聞かせ、手遊び歌等、盛りだくさん。約十名の学生たちは、最初はおそるおそるだったが、時と共に子どもたちとも打ち解け、後半は真剣にかくれんぼを楽しんでいた。みんなでお弁当を食べた後、ご挨拶代わりに自分も短い出し物をさせて頂いた。その場の全員で即興でお話を考えて紙芝居をつくってゆくという物だったが、皆さんの協力あって、楽しく二つのお話を作ることが出来た。冬に今度は学生自身がプログラムを組む事になるらしい。お話を聞いてくれた学生の真剣な眼差しが印象的だった。

（佐藤悠）

―陶芸家の一日講師

今回、東京藝術大学チームの金沢宏紀さんが、美術の授業の一日講師をした。金沢さんは普段、天草で陶芸をしている。「僕は教えるのが上手ではないので、わからないことがあったら聞いてください」というセリフで授業は始まった。いかにも金沢さんらしい。



授業中も終始落ち着いた様子で、口で説明するよりも、実際に作品をつくる様子を何度も生徒たちに見せていた。ひとつの作品をつくり出す時間は一分弱。とても早い。よくあることだが、金沢さんが粘土をいじっていると、誰でも簡単に陶芸をつくれそうな気になる。ろくろの上に粘土を置き、かたち造っていく姿は芸術そのもので、先生も含め全員が見入っていた。繊細な指先で柔らかい素材を扱う。そのとき金沢さんの顔は真剣そのものだった。

（新飼 麻友）

半・島民になりたい

明日僕たちは三宅島での五日間の生活を終え、本土に帰る。

五日間の島の生活の中で、何人かの素敵な人達と出会う事ができた。出会いの中で、忘れたくない思い出はたくさんできたけど、その中でも一番印象に残っているのは、居酒屋「沙梨」で出会った、ドミニカ共和国出身の一朗さんと海に潜ったこと。

沙梨で飲んでるときに、僕がサラッと「三宅島の海潜ったことないんすよー」と言ったのを一朗さんが拾ってくれた。翌日の夕方には、僕たちは坪田の海に一緒に潜っていた。

水に入ったばかりのとき海はとても冷たく感じて、正直僕は「やめとけばよかった」と思ったけど、泳ぎ始めたら不思議と温かく感じて、泳いでいるのが楽しくなってきて、だんだん目が慣れてくると、珊瑚やイソギンチャクや貝や魚などたくさんの生き物が見えるようになってきて、もうあっというまに楽しくなっちゃって、五分後には一朗さんと水中写真を撮りまくってはしゃいでいた。

そこで一朗さんは尻高貝の採り方を教えてくれた。その貝を民宿のおばちゃんに託すと、翌日の夜には煮付けになって食卓に並んでいた。

旅行に行くたびに思うんだけど、自然が残る良い景色とか歴史的に価値のある文化資源をどれだけたくさん見るより、そこで暮らす一人の人間と深く付き合えたなら、それは後々まで記憶に残る楽しい思い出になるし、また行きたいという気持ちにもなる。島を訪れる人と、島に住む人を繋げるような新しい仕組みを考えられないだろうかと思った。



島を支える、若さの底力

三宅島大学プロジェクトのリサーチチームが島に入って、早くも四日が過ぎた。リサーチも佳境に入り、情報の量は増え、その密度も濃くなりつつある。

島をまわって出会えた方、さらに紹介してくださって出会えた方、twitterなどのメディアを通して知り合えた方など、精力的に楽しみながら、島を盛り上げようとしている多くの若いつながりを得たことが、今回の収穫のひとつであると思う。

これまで加藤文俊研究室のプロジェクトで訪れた全国各地の地域コミュニティには、どんな地域であっても、「若い力」が必ずどこかには存在してきた。今回もその例にたがわず、何かしていこうという想いを持った若い方に出会えて安心すると同時に、まだまだ力が眠っていると実感した。

ただ、若いと言っても、二十代だけではなく、四十から五十までも「若い」と感じられた。それは、島の現実だろう。出来れば早く次の世代に託したいから、今のうちにその基盤をつくっているんだ、という言葉もあった。

出会えた方の話を聞くなかで、一度は島外に出たが噴火をきっかけに戻ってきた、出身は三宅島ではないが、馴染みがあって島に移り住んできた、という話が印象に残った。島の外を知っているから、島にしかない魅力もわかるし、問題点を改善しなくてはいけないのだろう。三世代で住み続けないと、「島民」と認められないこの場所において、私たちはよそ者だ。しかし、だからこそわかることもある。これから三宅島大学をつくる過程で、若い力を後押しする追い風となるような、新鮮な風を吹き入れていきたい。

（飯田 達彦）

三宅島大学リサーチ参加メンバー

▼日比野克彦研究室チーム／日比野克彦・橋本匠・佐藤悠・村上慧・五十嵐靖晃・上地由衣・松田唯・金沢宏紀・喜多直人・山城大督・西澤徹夫・安野太郎・長島確　▼加藤文俊研究室チーム／加藤文俊・上地里佳・大西未希・小澤慶輔・森部綾子・飯田達彦・新飼麻友・高木静香・長冨将成　▼東京文化発信プロジェクト室／森 司・大内伸輔・芦部玲奈

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
7月18日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

第六号

お待たせしました！『あしたばん』

初めての三宅島大学リサーチから三週間が経った。学期末が近づく七月十一日、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス最寄り駅近くの焼き鳥屋に、加藤文俊研究室から今回のリサーチに参加した学生達が集まった。

三宅島大学リサーチのふりかえりと、次号からの『あしたばん』の企画会議のためである。リサーチ後、参加したメンバーでゆっくりと話をすることができたのは今回が初めてで、学生一人ひとりが三宅島でのリサーチの印象を語りながら、三宅島大学の今後について話し合った。

研究室の授業でリサーチの話をした際には、今回参加できなかった学生もより興味を持ったようで、これからメンバーが増えることも期待される。

リサーチの間発行していた『あしたばん』は、今後も発行を続ける。

次号は七月二十五日、八月中にも数号発行する予定だ。

学生達は、今後も様々な形で三宅島との関わりを深めていく。加藤文俊研究室としても長期的なかわら版の発行は初めてで、今後が楽しみである。

（高木 静香）



ロックの島へようこそ

『東京愛らんどフェア』開催

―新宿駅西口広場―

『夏はクールアイランド　東京愛らんどへ』―涼やかなキャッチコピーを掲げ、新宿駅西口広場に、東京都の島々が大集結した。

伊豆諸島・小笠原諸島の物産・観光PRとして開催された「東京愛らんどフェア」。開催初日の六月二十五日、土曜日ということもあり、会場はまるでお祭りだ。特産物を並べた各島のブースは人にあふれ、太鼓の音が聞こえる。お客さんだけでなく、隣の島のブース同士でも会話がはずんでいて、そこにいるだけでたのしい。

イベントコーナーでの三宅島PRタイムでは、いよいよ公開間近の『ロック～わんこの島～』の告知と、島で楽しめる夏のイベントの紹介がされた。加藤文俊研究室メンバーも公開を楽みに、手帳に予定をくみこんでいるところだ。

三宅島ブースでひときわ目を引いたのは『ロック～わんこの島～』公開記念ラベルの焼酎、「雄山一」。「水で割らないでくださいね、『ロック』ですから！」と沖山さん。沖倉商店の手ぬぐいに焼酎をくるみ、一本はお土産に。もちろん、「ロックでお楽しみください」とのメッセージつきで渡そう。

（大西 未希）



川越から三宅島に想いを馳せる

埼玉県川越駅からバスで約十五分、仲町停留所を下車すると、昔ながらの建築物が並んでいる風景が広がる。大通りから一つ東の通りに入ると、「三宅島」と描かれたのぼり旗が置かれている店があった。その店こそが松本醤油商店であり、『三宅島アンテナショップ』が常設されている店である。

店内の一角にはポスターや写真が飾られ、あしたばや焼酎、天草といった三宅島の特産品がずらりと並ぶ。初めて見る三宅島の特産品もあり、ひと月前に降り立った三宅島を思い出しながら商品を眺めていた。その中で私が興味を持ったのは、松本醤油商店で製造している醤油や味噌と、三宅島産の島唐辛子とのコラボ商品だ。これらの商品は、松本醤油商店で働く島出身の方がきっかけで開発に至ったそうだ。

二〇〇〇年の全島避難によって、島にとって変化したコト・モノは多くあるだろう。しかし、それを機に生まれたつながりもきっとあるに違いない。三宅島への想いは、島内に留まることなく、遠く離れた土地に根付き始めていく。

（上地 里佳）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島を ふりかえってみる

今回で第六号となる『あしたばん』の発行日は、我々が「三宅島大学」のリサーチのために島へと足を踏み入れてからちょうど一ヶ月後。

節目となる今号では、一ヶ月前に行ったリサーチに区切りをつけるという意味合いも込め、滞在中に紙面に載せられなかった出来事を掲載した。

五日間を締めくくる、リサーチ成果発表会

六月二十二日、三宅村臨時庁舎の旧阿古小学校で、三宅島大学リサーチの成果発表会が開かれた。

リサーチに参加したメンバーは一人ひとり、出会った人やつくったもの、考えたことなどを、それぞれの形式で発表した。

日比野克彦研究室の上地由衣さんは、同研究室の松田唯さんが地元の方から頂いた浴衣を用いて制作した衣装を身にまとい、三宅島のお祭りの動画を背景に演舞を披露した。

五日間という短い期間であったが、どのメンバーも三宅島で得た刺激をしっかりと表現していた。

しかし、「成果」として、今回の滞在で私たちが見たものや感じたことを発表するには、あまりにも濃密で情報量も多く、消化しきれなかったのだろう。いずれの発表も、何かをやりきった、つくり終えたという手応えよりも、これからどうしていきたいか、次へのステップとして何をしたかなど、今後への想いを発表しているように感じられた。

発表会の最後は、加藤文俊研究室の新飼麻友さんが滞在中に制作した、出発から発表会の冒頭までを編集したビデオを観て、リサーチをふりかえった。

（飯田 達彦）



島をあとに

滞在中、すっきりしない空模様が続いていたが、島を去るこの日だけは朝から澄みわたる青空が広がっていた。

「晴れだったら、仕事が入るから見送りに行けない」

前夜に民宿つくばの「じい」から言われた一言が頭をよぎった。

成果発表を終え、船が着く三池港へ。近づいてくる船を見ながら、初めて訪れた三宅島での五日間を思い出し、リサーチを通して出会い、ご協力いただいた方々への感謝の気持ちで胸がいっぱいになっていた。

「じいが来ている」

仲間の指す方を見ると、両手いっぱいに紙テープを抱えたじいの姿が。忙しい合間をぬって駆けつけてくれたのだった。デッキから色とりどりの紙テープがのびていく。溢れる涙で景色が滲んでいたが、手を振り続けるじいの姿だけははっきりと見えた。

島が遠くなってもデッキで一人涙を拭っていると、そっと仲間達がビールを持ってきてくれた。今回のリサーチに対する労のねぎらい、この先三宅島大学を動かしていくにあたっての新たな決意、島への思いを熱く語り合いながら、船上だからこそのゆっくりとした時間を存分にかみしめた。

（森部 綾子）

映像編集を終えて

三宅島滞在中に、リサーチの様子を毎日ムービーに記録し続け、それらを繋ぎあわせてドキュメント映像を作った。これはリサーチの最終日、旧阿古小学校で行われた成果発表会で上映された。そしてこちら（神奈川）に戻ってきてから、完全版を仕上げた。そこには、つくばの「じい」と感動的な別れのシーンも映っている。

これはYouTubeにアップされているのだが、先日ページを訪れてみたところ、なんと再生回数が一六〇回を超えていた。リサーチに参加したメンバー以外の方にも、多く観ていただけたのかと思うと、大変嬉しい。また「三宅島大学」という活動を広く知ってもらえるきっかけにもなるのではないだろうか。

「38°c_110617」と検索するとトップに出てくるので、ぜひ御覧ください。

（新飼 麻友）



▼映像制作のつど寄美に頂いた三宅島大学トートバック

人ごみの中で

三宅島を離れてはや一ヶ月、三宅島を訪れて以降自分の中で様々な変化があったが、一番大きな変化は、自分を改めて見つめ直せるようになったことだ。

都会の人々は電車の中にいても新聞、本、携帯電話に目をやっていて、隣に座っている人を気にかけることも無い。真っ暗な地下鉄の中で窓を見ると無表情で、だけど少し疲れた自分の表情が見える。

そんな時ふと三宅島で出会った人を思い出す。夜、外出しようとしたら、懐中電灯を渡してくれた民宿のお母さん。こちらが質問すると子供のように澄んだ瞳で嬉しそうに答えてくれた三宅高校の地学の先生。使い古された言葉だが、本当に温かかった。

三宅島を訪れなければ今日も何も考えず当たり前のように電車に乗り、騒がしい町並みの中を歩いていただろう。しかし、三宅島の人々と接することができたおかげで、忙しい日常の中で自分を見つめ直すことができるようになったと思う。

（長冨 将成）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2011年
(平成23年)
7月25日
月曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net
第七号

まだ見ぬ三宅島を想う
「ロック〜わんこの島〜」

「明日の昼間、ヒマですよね？」

久しぶりに加藤先生に声を掛けていただいたと思ったら、ヒマ人扱いだった。先生の期待に違わず、（たまたま）翌日はヒマだったので、お誘いに乗ることにした。

そのお誘いは、映画「ロック〜わんこの島〜」の鑑賞会。参加メンバーは加藤先生、学生、OBなど計四人。話題の夏休み映画が公開されたこともあり、映画館は家族連れで賑わっていた。

私は、三宅島を訪れたこともなく、三宅島に関する知識もほとんどない。知っているのは三宅島で噴火があったこと。そして、自分が卒業した加藤文俊研究室が今年から三宅島でプロジェクトを始動したことぐらいだ。私と違い、加藤先生と加藤研所属の院生の上地は六月に三宅島に足を運び、さらに上地はこれから一ヶ月、三宅島に滞在する予定だ。三宅島の風景を知っている二人は、私と映画に対する期待値が違うように感じた。

「ロック〜わんこの島〜」は噴火をきっかけに、避難することを余儀なくされた家族とそのペットである犬のロックの物語だ。三宅島で火山の噴火が起きたこと、そして、そのために多くの島民が避難生活を余儀なくされていたことは、メディアなどを通して知っていた。しかし、それはあくまで出来事の一つとしてしかとらえていなかったものだ。だが、この作品を観たことによってその意識が少し変化した。

抗えない理由のために、故郷を去らなければならないということは、どれほど辛いことだろう。私には想像できないし、簡単に「共感した」などという言葉は用いたくない。突然に新しい土地での生活を強いられ、そしていつ叶うかもわからない帰郷を希望に日々を暮らしていく。もちろん、その日々には幸せを感じる出来事もあるだろう。映画の中では、その幸せの鍵を犬のロックが握っていた。自然と寄り添い、生きてきた島の人たちは強く、しなやかに違いない。自分たちがコントロールできないものに向き合い、それを慈しむことを知っているのだと思う。私もいつか、三宅島に足を運び、その力を感じたいと思った。

私が映画を観てこんな感想を持ったのは、きっと加藤先生や上地と一緒に鑑賞したからだ。島の風景を知っている二人と観たからこそ、三宅島や、そこで生活する人そのものに想いを馳せることができたのだろう。当事者意識は伝搬していくのだと感じた。

（仲尾 千枝）



上田義彦写真展「火山の島」へ
―なぜ、心動かされるのか―

七月十七日、私は銀座リコーフォトギャラリー／RING CUBEで開催中の、上田義彦写真展「火山の島」へ向かった。三宅島大学を通じて、島をより知っていきたいと思うことや、もともと上田義彦氏の写真の世界観がとても好きだったこともあり、告知を見たときから必ず行きたいと思っていたのだ。上田氏の作品はそこにある人やモノの空気を写真にしているようで、まるで絵画のような美しさがある。そして物語を感じる。この取り合わせを知ったとたん、自分の見てきた三宅島の海や人、風景がフラッシュバックして、想像していただけで涙が出そうだった。

ギャラリーにたどり着くと、まず挨拶文が目に飛び込んだ。そこにあったのは、三宅島の海や人、風景と向き合って写真に残してきた上田氏の言葉だった。何度も噴火を経験し、危険もあるなかで「島に戻る」ことを選んだ島民の方々の思い。わたしがそれを代弁することはできないが、「避難」によって身体は守られても、島民の方々にとっての「こころ」は、やはり三宅島にあるのではないかと展示を通じて感じた。写真にうつる方々の表情は豊かで、風景はなにかを語りかけてくる。やはり絵画のようで美しいのだが、強さをも感じる。予想していた以上に、思いがこみ上げた。

わたしはなぜ、心動かされたのだろう。考えてみれば、写真にうつっている強さや美しさを、実際に三宅島で感じたからだと思う。わたしがまだ知らない、魅力が島中にあるのだろう。そのひとつひとつを大切に、感じていきたい。

（大西 未希）



doughnuts 企画
上田義彦写真展「火山の島」
【期間】七月十三日（水）〜三十一日（日）
火曜日休館／入場無料

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島への意気込み

この二人が伺います！

八月、加藤文俊研究室から二名が三宅島へ向かう予定をたてている。渡航にあたる意気込みを綴った。

わたしの夏休み

初の三宅島上陸から、早いもので一ヶ月が過ぎた。そして今週末、私は再び三宅島行きの船に乗る。築穴製菓さんで約一ヶ月間、アルバイトをさせていただくことになったのだ。

きっかけは、『パピロ』というパンを取材した際に(『あしたばん』第五号の記事参照)、築穴さんが「八月にアルバイトの募集をしているんだよね。」と言ったことだった。その話を聞いた二日後には、私はアルバイトのお願いの電話をしていた。「三宅島にまた行きたい！」という強い想いと、島のパン屋で働ける機会があることに運命的なものも感じたのだ。私の出身は沖縄県宮古島で、両親はパン屋を営んでいる。「島」と「パン屋」という共通点に、不思議な巡り合わせを感じずにはいられない。

三宅島に一ヶ月間滞在する。前回とは違って長期での滞在、また二年に一度の祭の開催など、島の人々や文化に触れられる機会は多い。まずは、前回のリサーチでお世話になった方々に会いに行こう。そして、これからお世話になる築穴製菓さん、三宅島の皆さん、どうぞよろしくお願いします。

（上地　里佳）



太鼓の音に、思いを馳せ…

はじめての三宅島訪問は、初夏の香りのする六月末。いま、二度目の渡航の予定を立てながら、胸を躍らせている。前回の訪問で、太鼓の練習風景を見学させていただいた。そこでお話を伺ったのが、三宅島のお祭り「富賀神社大祭」の存在だった。

「八月のお祭りに合わせて、ぜひ行きたい！」と決めた私は、さっそく準備をはじめ、八月二日～五日に訪問予定だ。この『あしたばん』七号を届けながら、三宅の方々に新たにきることを願っている。ぜひお祭りの楽しみ方をご指南いただければ幸いあたたかく受け入れてくださだ。

今回の訪問にあたり「助手申し入れを受け、共に三宅島になった。慶應義塾大学総合政策学部一年生、岩橋史弥君だ。愛称「ワトソン君」と呼ぶ事にしし仲間と一緒に、どんな三が見られるだろう。少し、季節ているだろうか。三宅島の海音を思い出しながら、今日も夜が更ける。

（大西　未希）

目指せ！最優秀作品賞！

公益財団法人東京都島しょ振興公社が、伊豆諸島・小笠諸島の魅力を多くの人々に知ってもらうための観光ポスターを募集する「第四回 伊豆諸島・小笠原諸島ポスターデザインコンテスト」を実施している。

なんと優秀作品には賞があり、最優秀作品賞には、賞金三十万円と副賞として東京諸島への旅行券十万円相当、記念品が贈られる。入賞作品は、「入賞展」に出品されるだけではなく、今後のPRツールとして活用される予定だそうだ。

三宅島に対して思い入れを持ち始め、深く関わっていく予感がしている私たち。このコンテストに出品して、賞の旅行券で三宅島を訪れ、私たちが制作したポスターをどこかで目にすることを想い描いてしまう。

昨年度は、全国から九十九点にものぼる応募があったとのこと。競争はなかなか激しそうだ。

（飯田　達彦）

ごちそうさまでした

お腹が空いて集中力も切れかかってきた頃、しょうゆの香ばしいにおいが漂ってきた。心待ちにしていたあしたばご飯のできあがりを知らせる合図である。この日は研究会活動の後にあしたばんの編集会議が予定されており、その腹ごしらえとして、あしたばご飯を食べることに決めていた。特別な仕込みは必要ない。米と三宅島で購入したあしたばご飯の素」を炊飯器にセットし、後は待つだけ。こんなにも簡単にあしたばの炊き込みご飯を味わうことができるとは思ってもみなかった。

炊きあがったご飯はほんのり茶色く色づき、かき回してみると、底の方には少しお焦げができていた。あしたばは濃い目に味付けされていたが、ご飯と一緒に食べるとちょうど良い味わいで、ほのかな苦みにどこか懐かしさを覚えた。それと同時に島で味わった数々の食材のうまみを忘れないうちにまた島へ行きたい、もっと島の味に触れたいという思いが頭の中をめぐり、お腹も心も十分に満たされていったのだった。

（森部　綾子）



三宅島大学
9月中旬開校に向けて、着々と準備中！
M
Comming soon !!
※このロゴは仮のものです。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
8月1日
月曜日

あしたばん編集部
編集・発行　加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

号外

『KAITEKI のかたち』とは

―『KAITEKI のかたち～アートと技術の化学反応～』

大久保浜に沈めた全長百メートルの紙。陸から海へとつながるその紙に絵を描き続けながら、海底から上がってくる日比野克彦氏の姿は圧巻だった。あれからもう、ひと月がたつのか。

渋谷スパイラルガーデンにて開催された『KAITEKI のかたち～アートと技術の化学反応～』。ここに、三宅島で制作された日比野氏の作品が展示された。白い円形の会場に、アルミ質の銀円柱型の仕切りが吊されていて、現代的な雰囲気は入っただけで不思議な感覚になる。

目をひくのは、会場に張り巡らせたあの、日比野氏の作品。海岸で広げ、制作に立ち会った二十名ほどで必死に紙を巻いた、あの作品。

百メートルの紙は、重さにするとなんと三十キロ。海岸の砂をとりながら、乾かしながら、「あ、ちょっと右に寄ってる！少しずらして！」などと声を掛け合いながら、重くなっていく作品を巻きとる。こんなアートの現場に立ち会えたことは希有な体験で、その記憶が鮮明によみがえってくる。

あのときは、どんなふうに展示がなされるのか想像もつかなかった。黒い海岸に広がるその作品はとても存在感のあるものだったが、展示会場の壁一面に広がった光景を前に、またこの作品制作がいかに大きな取り組みであったかを体感する。

百メートルの全貌は縮尺版になり、日比野氏の解説つきで展示されており、実際の作品は巻き取られた作品から一部が公開されていた。この公開されている部分は、一番表現したかった『キワ』であると日比野氏は語った。

「陸は、人の生活圏。海の中はボンベを背負ったり、不自然な状態でしか行けない。陸と海の行き来は日頃しないことだけれど、この両方をとらえることはこれから考えていかなくてはいけないところだと思う」

―わたしたちの生活は、自然の力と助け合いながら、成り立っている。自然を制圧するだけではなく、「ともにある」感覚―それがこれから考えるべき、「KAITEKI」のかたちなのかもしれない。陸と水、その狭間である「キワ」への挑戦は、自然と人の生き方を考えさせる種なのではないだろうか。

（大西　未希）



新企画！動画連動記事

この記事は、動画と一緒に見るとより楽しめます。携帯電話からバーコードを読みとるか、URLよりアクセスしてください。
http://www.youtube.com/watch?v=GKkmK-cbBfk

三宅島に再上陸

三宅島大学チューター　上地がゆく

七月三十日、ぐずついた天気の中、三宅島行きの船『かめりあ丸』に乗船した。今回の旅路は、前回と違って一人での乗船ということもあり、賑やかというよりは、じわじわと三宅島へと近づいていることを感じながら就寝した。

そして翌朝、三宅島の錆ヶ浜港に到着した。以前の来島から一ヶ月経っていたこともあり、少し緊張しながらの上陸となった。そこでは、今回お世話になる『築穴製菓』さんが迎えに来てくれており、車内では三宅島の自然や、文化についての様々な話をしてくださって、聞いているだけでとてもわくわくした。

そして、この日は『マリンスコーレ』という祭りが伊ヶ谷港にて開催されており、地区ごとにある伝統芸能を実際に見ることができた。それぞれの地区にどのような伝統芸能があるのかを知るとともに、地区に根付く文化を少し垣間見ることができた。私は、それらを初日に見ることができたことに感動しっぱなしだった。また、祭りには、前回の来島でお世話になった方、また初めてお会いする方など、多くの方々に会うことができたので、また改めて会いに行こうと思う。

まずは、三宅島での一日目が終了した。三宅島に再び来て感じたのは、まだまだ知るべきことはあるし、会いたい人もいる、ということだ。また、実際に生活をしていく上で、見えてくる文化や発見はいくつもあるだろう。一ヶ月の滞在で、どこまで自分自身の好奇心を掻き立てられるものと出会うのか、すごく楽しみである。

（上地　里佳）



『あしたばん』
バックナンバーは
こちらから

あしたばん
オフィシャルサイト
http://ashitaban.net/

「三宅島大学」は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環として編集・発行しています。

あしたばん

2011年
(平成23年)
8月8日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第八号

富貴神社大祭、始まる

七月四日。いよいよ富貴神社大祭の始まりである。

この富貴神社大祭は、二年に一度開かれる祭りであり、約一週間かけて三宅島の五つの地区を神輿が巡回していく。神輿は、阿古、伊ヶ谷、伊豆、神着、坪田という順番で受け渡される。それぞれの地区間での受け渡しの様子からは、三宅島の独特の文化が垣間見ることができ、地元住民だけではなく観光客も見に来るほどだ。そこで、『あしたばん』では富貴神社大祭の各地区の様子を伝えていく。

富貴神社に行くと、まず目に付いたのは阿古地区の人々の浴衣姿だった。同じ柄の浴衣に鉢巻き、タスキ、白い足袋で揃えていて格好良い。私が行った時間には、納められている社から神輿を出す儀式が始まっていた。まず、白い布で神輿を囲み、その内側で神主さんが神輿に御神体を乗せる。それが終わると、阿古地区の人々が神輿を担ぎ、一旦、社から出される。神輿が建物から出ると、ギャラリーからは大きな歓声と拍手が起こり、一気に高揚感が高まったのが感じられた。富貴神社から神輿が出発する時刻は午前十一時と決まっており、阿古地区の方々は今か今かと待ちわびているのが伝わってくる。



ついに出発時刻となったその時、日の丸が描かれた扇子が上がり、それを合図として、獅子舞い、太鼓、木遣りが始まった。獅子が飛び出していくと、それに合わせて神輿も出発する。木遣りをしながら少し進めば、「ヨーオ、ヨーオ」というかけ声とともに、神輿が大きく波打つように揺れた。これを「揉む」と言い、神輿に乗った神霊の威光をさらに高めるために行なわれるものらしい。神輿を揉んでいるところを初めて見た私は、神輿を必死に担いでいる人々、揺れることで鳴る音、観客の歓声、すべてに興奮していた。重量がある神輿を、ただひたすら担ぎ、揉むことを繰り返している人々からは、自らの地区への深い愛情を感じ取ることができた。獅子を先頭にして、第一、第二、第三の門を通り、神輿はまず阿古地区へと渡っていった。

（上地　里佳）



「もう少しで、届きそう。」
―ボルダリング初体験―

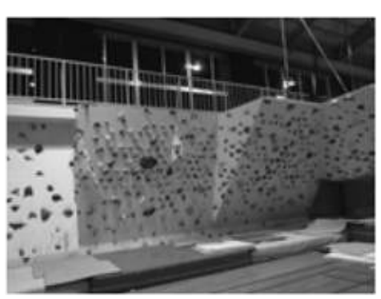
ライトに照らされた壁には色々な岩。星、丸、四角など「形」も多様多種だが、文字通り「色」もだ。未知の世界を凝縮して飾ったかの様な光景。それは中学校の体育館に広がっていた。

ボルダリング。決められた岩場を身体一つで登っていくスポーツ。ルールは指定された岩を下から順番に登ってゴールの岩を両手で掴むこと、など二、三あるだけでとても明確なルールだ。見ているだけでは分からないと、まずは挑戦してみた。

一見、筋力至上主義の様だが実際は違った。筋力は勿論必要だ。自分の体重を支えなければならないから。しかし、それが唯一ではなく必要なものは他にもある。手足の先まで体重を把握するバランス感覚、理想のルートを探る判断力・想像力。なんだか、生きることみたい。自分自身を知った上で、ゴールまでのルート頭の中で描く。そして一手一手、一歩一歩進んで行く。想像が外れ、思う様にいかない場合もある。落ちてしまう場合もある。ただ、その失敗が次の糧になる。夢中になった。七転八倒。

翌日、筋肉痛で若さを感じつつ、お世話になった沖倉商店の沖山さんにお話を伺った。「天候の変わりやすい三宅で気にせず遊べ、施設で人が共有して出来ることがいいですよね。あと三宅島には、ボルダリングが出来る自然の岩場もあるんですよ。錆が浜や釜の尻に。」三宅島のいいところを一つ発見出来た気がする。今度またボルダリングをしてみよう。本土でも三宅島でも。

（岩橋文弥）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

海の教室

七月二十九日（金）～八月一日（月）の四日間、穴原甲一郎さん、奈都さんらが主催する「海洋自然体験リーダー養成講座2011in三宅島」に参加した。これは海の生き物の名前やスノーケリング・シーカヤックの基本を、初心者にある程度レクチャーできる「リーダー」を育成するというもので、クマノミの性転換を発見した事で有名な海洋生物学者の故・ジャック・モイヤー博士が二〇〇〇年の噴火前に始めた海の教育活動が起源となっており、五年目の今年まで毎年続けられてきた。

三日間は講師によるレクチャー（座学と海での実習）を受け、四日目に小中学生を呼んで実際に体験教室を開き、そこでリーダーとなって教える実習を行った。これまでの三宅島滞在で深く海に関わることがなかった私にとって、この講座は新鮮な体験だった。特に驚いたのは五十メートルプールほどの広さしかないタイドプール「長太郎池」で見た多様な生物の数々だった。

ウツボ、ウニ、ベラ、チョウチョウウオなど様々な生物の生活が、顔から二十センチのところで観察できる。講師の先生からひとつひとつ名前を教えてもらい、みんなで図鑑で調べ、観察できた種の数は二十種類以上だった。なかには毒をもつ危険な生物もいて、それも顔からすぐのところで観察できた。とても貴重な体験をさせていただいた。

この講座を受けて思ったことは、三宅島は「海と人が自然な近さを保っている」ということだ。島には海水浴場がいくつかあるが、そのどれもが綺麗に整備されたものというよりは、人が泳げる海辺を海水浴場にしたという印象を受ける。長太郎池などはその典型で、噴火によって流れ出た溶岩に囲まれた場所であるため、大小さまざまな岩がごろごろしている。なので、海中に多くの陰影ができ、生き物が住みやすい環境になっている。そんな中で、観光客と島民が一緒に泳いで、生き物の観察をしている。とても素敵な光景だった。三宅島大学でも、このような海に関する活動は欠かせないと思った。

（村上 慧）



三宅島大学、プレ授業!? じいの釣り教室

三宅島滞在二日目。じいに、「釣り、やるか？楽しいぞ。」と声をかけてもらった。民宿つくばの「じい」こと筑波昭一さんは、この『あしたばん』第五号でも紹介したように、漁師さんだ。じいのお誘いに二つ返事でついていかせてもらった。着いた場所は、坪田漁港。釣りを楽しんでいる方が、すでにいらっしゃった。じいは釣り竿を貸してくれて、お手本を見せてくれた。餌のオキアミをスプーンですくって海に投げ、そこに釣り竿を垂らす。じっと海を見つめ、魚が海面から見えるところに餌を投げる。釣り竿の垂らし方も、手をとって教えてくれた。

何度も魚を逃してしまった。そのたび、「ヘッタだなあ～」とじいは笑う。何度目かにやっと魚がかかって、海から上げる事ができた。アジだ！

「やったなあ。」アジが釣れたこともとても嬉しい。こんなふうに教えてもらう、一緒に楽しむ、三宅島のいたるところが教室になっていったら素敵だ。

わたしには、「田舎」と呼べる場所がない。東京でずっと暮らしていたし、両親の実家も近く。今回の滞在で民宿つくば」でじいと幸枝さんに「いらっしゃい」と迎えてもらったときは自分の田舎に帰ってきたみたいな気分になった。

不思議と、今までなかった経験なのにあたたかい気持ちはこみ上げて、「ただいま」と言いたくなる。

三宅島のみなさんが、私にとっては島を教えてくれる「先生」だ。体験してわかる、このあたたかさを伝えていきたいと実感する、じいの釣り教室だった。

（大西 未希）



三宅島大学 開校式の為の音楽 メンバー募集

三宅島大学では、作曲家の安野太郎による、三宅島大学開校式の音楽実現の為に、十人の演奏メンバーを募集しています。富賀神社のお祭を作曲家がリサーチした事による独自の再解釈で、島オリジナルのハンドベルによる楽曲を創作します。

演奏は簡単。楽譜を読める必要はありません。二人一組になって、ベルの受け渡しを行いながら演奏します。ベル受け渡しの法則によって、五つの地域を表す五つの音階が入れ替わり立ち替わり変化していき、様々なメロディーが立ち上がります。

同じメロディーが繰り返されることはありません。これは、島に流れる悠久の時間を表現しています。

演奏のワークショップは、八月後半の練習期間に行います。参加者の年齢は問いません。お友達とお気軽にご参加下さい。

■募集人数：男性五名・女性五名（計十名）楽譜を読める必要はありません。年齢不問

■練習期間：八月二十三日～八月二十五日、九月十七、十八日

■本番日程：九月十九日（三宅島大学開校式）

連絡先

安野太郎
作曲家
日本大学藝術学部
東京藝術大学 講師

taro@poino.net

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
8月15日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第九号

富賀神社大祭での各地区の受け渡し
最終日までを完全レポート！

【二日目】この日は、阿古地区から伊ヶ谷地区へと神輿が受け渡される日である。神輿の受け渡し時刻は十六時までと決められており、受け渡し場所には神輿を置く位置と、両地区の境界線が描かれている。伊ヶ谷の人々は、龍が背中に描かれた浴衣で統一され、神輿の到着を待っていた。そこへ、阿古の人々が担ぐ神輿が姿を現した。しかし、すぐには神輿を置こうとはせず、伊ヶ谷の人々に神輿を揉んでいる姿を見せ、じらしている。この受け渡しを見に来た観客も、その様子に興味津々だ。阿古では神輿を揉むたびに歓声があがり、伊ヶ谷では、いまかいまかと神輿を待ちわびているのが伝わってくる。ついに神輿は受け渡し場所に置かれ、その場にいた人々から拍手がわき起こった。神輿が置かれると、役員の方々が神輿に異常がないか確かめ、両地区の代表者から神主と役員の方々にお酒が注がれる。役員の方々が三本締めをした後、白いのぼりとお盆に乗せられた生魚が阿古から伊豆へと渡された。



全ての受け渡しを振り返ってみても、生魚を受け渡すのはこの地区間だけだ。そして、阿古の木遣りが始まる。聴こえづらかったのか、伊ヶ谷からの木遣りが半歩遅れて返ってきた。それに対して阿古の担ぎ手たちは業を煮やし、お互い収拾がつかなくなり始めた中での神輿受け渡しとなった。一騒動起こる場面も見られたが、その数分後にはお互いへ賞賛の拍手を送り、神輿は無事に伊ヶ谷へと渡っていった。私は、初めて見る受け渡しの現場の熱気に興奮と感動を覚えながら、伊ヶ谷へと渡った神輿を見送った。

【三日目】伊ヶ谷地区から伊豆地区へと神輿が受け渡される。伊豆の人々は、裾あたりに扇が描かれた浴衣で統一されていた。こちらも定刻直前まで神輿を担ぐ姿を見せつけており、それに対して伊豆では獅子が踊り続けていた。また、伊豆の太鼓には女性が多く見受けられ、その力強く、たくましい姿が格好良い。神輿が置かれると、前日とは同じように木遣りまでの儀式の流れが始まった。伊ヶ谷からの木遣りは伊豆へと確かに届き、木遣りが終わると伊豆の担ぎ手たちは神輿のほうへと走り、神輿は伊豆へと運ばれていった。そのとき伊ヶ谷の担ぎ手たちは、昨日打って変わって、拍手で神輿を見送り「頑張れよー」といった声援まで聞こえてくる。私は、昨日との受け取り方の違いに、まるで別の祭りを見ているかのような気分だった。情熱や熱気で溢れた雰囲気もいいが、爽やかで潔さに満ちた雰囲気も、またいいものだと感じた。

【四日目】伊豆地区から神着地区へと神輿が受け渡される。神着の担ぎ手たちは、カモメが描かれた浴衣を着ている。この地区間は、受け渡し前も興味深かった。神着には、獅子だけでなく、ひょっとこの姿も見え、挑発をしながらも神輿の到着を待っている。それに対し、伊豆の太鼓勢は声を出し、最後まで伊豆の神輿を盛り上げていた。神輿を置くと、観客から拍手が沸き起こり、伊豆の担ぎ手の顔は清々しさが感じられた。それぞれの木遣りが終わると、伊豆からは「頑張れー」や「重いぞー」など冗談まじりの声援が聞こえてくる。神着の担ぎ手たちは、勢いよく神輿のもとへと飛び出していき、神輿を担ぐと、その場で神輿を揉み始めた。そのことに伊豆の担ぎ手たちは腹を立てる場面も見られたが、しかし最後には、お互いを拍手で称え合い、神輿は神着地区へと渡されていった。

【五日目】神着地区から坪田地区への受け渡しの日だ。いよいよ神輿の受け渡しも最後となる。これまでと大きく違うのは、太鼓以外に横笛や金棒が登場したこと、坪田の担ぎ手たちの格好が、浴衣ではなく「祭」と背中に書かれた青い法被だということである。白と青で分かれた両者が、とても鮮やかだ。金棒を突く音、横笛の音色、太鼓のリズム、どれもが祭りをさらに盛り上げる。神輿が置かれ、木遣りが始まる。神着の力強い木遣りに、坪田も負けてはいない。木遣りが終わると、一斉に坪田の担ぎ手が飛び出し神輿を担いでいく。それに対し、神着の担ぎ手も飛び出していく。この日が最後の受け渡しということもあり、最後まで両地区の熱気冷めやまぬ受け渡しとなった。

【六日目】いよいよ最終日は、神輿を富賀神社へと奉納する。六日間にわたったこの祭りも、クライマックスである。富賀神社には第一、第二、第三の鳥居とあるのだが、第一の鳥居には選ばれた担ぎ手しか入ってはいけない。奉納の時間が近づくと、坪田の選ばれた若衆が神輿を担ぎ、第一の鳥居に進んでいく。そこでは若衆だけで神輿を担ぎ、崩れたり、落としたりすることは許されないプレッシャーの中、神輿を三回揉むこととなっている。木遣りに合わせて、最後の力を振り絞り神輿を揉む姿には感動せずにはいられない。そうして無事に神輿が奉納されると、その場にいた人々からは大きな拍手が沸き起こった。阿古から始まり、伊ヶ谷、伊豆、神着、そして坪田。どの地区も、神輿に対しての熱意、敬意、意地は凄まじいものを感じた。島をまんべんなく巡回した神輿は、また二年後のこの祭りに向け、社に納められた。



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

神着のひょっとこ

富賀神社大祭が始まり、伊豆から神着へと神輿が受け渡される日、神着側に「ひょっとこ」が現れた。これまで阿古、伊ヶ谷、伊豆と受け渡しを見てきたが、ひょっとこが現れたのは初めてのことだった。受け渡しを見に来た観客はもちろん、伊豆側にいる人々も、思わず笑ってしまうひょっとこの面と独特の踊りを見ずにはいられない。先ほどまで受け渡し現場にいたにも関わらず、数分後には既に自身の商店で魚をさばいていた人こそが、ひょっとこ役の一人である山下広範さんだった。



山下さんがひょっとこを始めたきっかけは、祭りに出かけたときに見たひょっとこの踊りに、これまで見てきたものとは違う何かを感じたからだそうだ。それから様々な祭りに出かけては踊りの研究をしたり、パリエーションを覚えたりしている。「ひょっとこをやると、お面の目の隙間から、みんなが笑ってくれるのが見える。それだけで幸せだよね。」と笑顔で話してくれた。たしかに、私は受け渡し場所でひょっとこが踊っているのを見て、挑発されながらも笑っていた。そんなひょっとこに、また再来年、会えるのが楽しみだ。

（上地　里佳）

三宅島からのお便り

八月三日から五日まで、三宅島に再上陸した。はじめて行ったリサーチでは、三宅島の概観を見ることが主になっていたが、今回は三宅島で様々な方にお会いすることができ、とても充実した二泊三日となった。

『あしたばん』8号でも紹介したが、ご好意で釣りをさせていただいたり、人を紹介していただいたり、本当に三宅島の皆様にお世話になった。じっくりお話をすると、三宅島のみなさんの暮らしが少しずつ伝わってきて、「ひととの繋がりを大切にする」という、シンプルだけれどとても大切なことを教わったと思う。

東京に帰り、慌ただしい毎日が帰ってきたころ、家に一通の絵はがきが届いた。築穴製菓さんでアルバイトをしている、同じくあしたばん編集部の上地からの手紙だった。



ちょうど、わたしが東京に戻る船を待っていたときにお世話になった、伊ケ谷港の「サンセットハウス」で撮られた写真のポストカードだ。上地は三宅島での滞在中、撮った写真を絵はがきにしているらしい。数日前までいた三宅島の海の風や匂いがよみがえってくるようだ。

メールや twitter でのやりとりで、待ち合わせや連絡もできてしまう今、「手紙」をもらうのは純粋にうれしい。また、三宅島で彼女の感性で切り取られた風景が添えられているポストカードは、同じ場所を共有したからならではのコミュニケーションになっていると感じる。「ひととの繋がりを大切にする」。こういうかたちでのやり取りを実感させた。

（大西　未希）

盆踊りの夏

八月十三日からお盆が始まった。多くの人がお墓にお参りに行って線香を上げ、家の玄関先ではご先祖様を迎える光景が多く見られた。そんなお盆の期間中に行われるのが、盆踊りである。坪田地区では十二～十三日に旧坪田中学校グラウンドにて行われ、阿古地区では十三～十五日にふれあいの湯の駐車場にて行われている。

せっかくなので、坪田地区の盆踊りへと出かけてみた。グラウンドには煌々と色とりどりの提灯が飾られ、盆踊りの音頭が切れ目なく流れている。また、夜店も多く出店されており、会場は熱気に溢れていた。流れてくる音頭は、定番の炭坑節から、あじさい音頭、新三宅島音頭といった島を感じさせるもの、ドラえもん音頭といった子ども向けのものまで幅広い。私にとって初めて踊る音頭ばかりで、最初は見様見真似だったのが、慣れてくると踊ることに楽しさを感じ、結局アンコールまで踊っていた。こうして大人から子どもまで盆踊りを楽しみながら、三宅島のお盆の夜は更けていった。

（上地　里佳）



三宅島大学が■紹介されました!■

『OZ magazine』（スターツ出版株式会社発行）9月号―アート大特集―に「三宅島大学」が紹介されました。

「誰もが学生に、あるいは先生に。全島がキャンパスとなった自然あふれる三宅島を舞台に、あらゆる人が学び合う!」（本文より抜粋）



注目される開校式は、九月十九日。島のあちこちで、学び合う授業が行われる予定です。これからの展開を、『あしたばん』でも紹介していきます。続報をお楽しみに!

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
8月22日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十号

三宅島大学、開校日決定!!

「三宅島大学に、大学ができるらしい。」そんな噂が、少しずつ三宅島で伝わってきていることを聞き、嬉しい。「三宅島大学って、何なの?」この疑問に、こたえていく日が着々と近づいてきている。

この『あしたばん』が創刊された、二〇十一年六月の初三宅島大学リサーチから、約二ヶ月。いよいよ三宅島大学の開校が決定。開校日には「開校記念式典」が行われ、開校記念スペシャル講座も開講される予定だ。今回、この開校式にあわせ入学者を募集するチラシが完成した。

「大学」といえど、難しい入学試験があるわけではない。どなたでも入学することができ、「三宅島大学の学生」になることもできるし、「三宅島大学の先生」にもなることも。三宅島全土が、キャンパス。学び合って、三宅島の自然を、人を、知り合う。三宅島大学はそんな「学びの場」をつくる仕組みだ。



記念すべき「三宅島大学」のはじまりの日。式典は二〇十一年九月十九日(月・祝)阿古船客待合所にて行われる。気持ちのよい三宅島の海をバックに、式典が行われることが今から楽しみだ。

（大西　未希）

『あしたばん』Tシャツプロジェクト

三宅島大学開校にあわせ、『あしたばん』Tシャツが誕生。海・山・森にちなんで3色（ディープブルー・ダークブラウン・アイビーグリーン）異聞予定。『あしたばん』への愛着が増しそうな一枚だ。



「三宅島」島民四人と一ぴき写真展

～アイランドシック　帰りたくなったよ～

―どうして、島に帰りたいと思ったの?

「そんなの、島が好きだからだよ!」

こんな声が聞こえてきそうな、三宅島の写真展。八月十七日から、東京都庁南展望室にて五日間行われた。

『あしたばん』で写真展について紹介するのは二回目となる。今回の展示は、サントモ（ペンションオーナー）さん、カンパチ（沖倉商店四代目）さん、スナッパー（民宿、ダイビングショップ代表）さん、シュガー（maihana ネイチャーガイド）さん、そして映画のモデルにもなった民宿の看板犬、ロックといった三宅島に暮らす四人と一匹による写真展。この写真展の「お世話係」ことペンジーさんが、三宅島のいまをブログによって発信されている四人の方に声をかけ、今回の写真展開催にいたったそうだ。

感想はもう、「アイランドシックになった」の一言。アイランドシックという言葉は、シュガーさんの発想から出た言葉だそうで、島から離れたときのホームシックのような気持ちのこと。海にかかった大きな虹、ペンションのみなさんの笑顔の集合写真、穏やかな波、新鮮な貝…。写真のどれもに、「三宅島が好きだ!」という思いであふれているみたいだ。

わたしはまだ、三宅島の初夏から夏の季節しか知らない。それでも、まるで絵で描いたような鮮やかな青の海や、雨上がりのあとの大きな空。歩いていて、はっとする景色に何度も出会って「三宅島に来られて、よかった」と思えた。

この大自然のなかで生きる、島民のみなさんに学びたいことがたくさんある。一度出会ったら、アイランドシックになってしまう三宅島。またその種に出会えていくんだろうと、今日の三宅島を想像しながら新宿をあとにした。

（大西未希）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

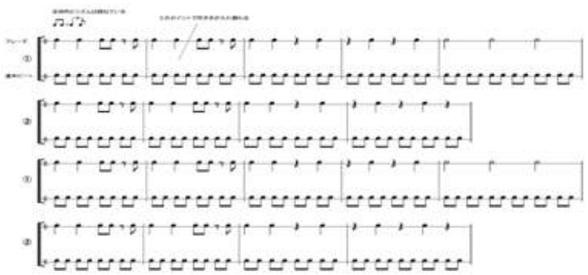
神着太鼓の勝手な分析

私は、三宅島の二回目のリサーチで富賀神社大祭の際に神着地区で叩かれる太鼓の練習を目撃しました。僕は作曲家として、三宅島大学のプロジェクトに参加していますが、実はドラマーとしての顔も持っています。なので、太鼓がなると胸が騒ぎます。この日は神着地区の太鼓がどのように叩かれているかじっと観察したので、その結果を記事にしようと思います。

まず、神着地区は大太鼓を低い位置に配置して、叩き手は腰を低く構えて叩きます。太鼓は表と裏の二面に皮が張ってある大太鼓を使っており、両側に一人ずつ叩き手が配置されます。つまり、一つの太鼓を二人で叩くことになります。

一人は基本となるビートを叩いて、もう一人は独特なフレーズを叩きます。これはおそらく神着地区のオリジナルだと思われます。僕はドラムをやっているということもあり、基本的に西洋音楽を聴く耳でフレーズを分析してしまうのですが、なんとかこの神着フレーズを楽譜に記録してみました。神着フレーズは、二つの部分から成っており、それらが常に繰り返されています。

楽譜を見てみると、第二フレーズが、五小節で最後の小節が六拍、第二フレーズが四小節で最後のフレーズが五拍になっています。この五拍の部分が特に特徴的で、常に∞ビートで乗ることのない、この地区独特のノリがここに現れています。



神着太鼓の分析楽譜
（安野　太郎）

また、一人で延々と叩き続ける事は体力的にも不可能だということで、叩き手は何人もいて、常に交代しながら叩いています。

交代するタイミングは第一フレーズと第二フレーズを二回繰り返してからなのですが、交代するポイントは第一フレーズの途中です。フレーズの切れ目ではないポイントで交代することによって、遠くで音を聴いているだけでは、フレーズに切れ目がないように聴こえるので、延々と一人が叩き続けているように聴こえます。

この一点が、「体力の限界」などというものとは縁の無い何か超越的なパワーが今この音の鳴っている場所に来ているということを表現する為の工夫なのではないでしょうか。僕はこの太鼓がただの娯楽としての音楽でなく神事としての音楽という側面を強く三宅島で感じました。

この勝手な分析は本当に私の勝手な分析ですので、全て正しいとは言えません。真相を知っている方は連絡下さい。

（作曲家
日本大学藝術学部・
東京藝術大学講師
安野　太郎）

小さな海の生物との出会い

伊ヶ谷港にあるサンセットハウスで、クジラやイルカの小さな木のストラップが目についた。それは、木目がとても綺麗で、愛らしい表情が印象的なものだった。あまりの可愛いさに感動した私は、作製者の浅沼稔さんの工房『M's CRAFT』を訪ねてみることにした。



浅沼さんが作製を始めたのは一九九四年のことで、もともと好きで作製しており、それが友人に好評だったことが販売のきっかけとなったそうだ。工房には、木で掘られたクジラやシャチ、カメなどが並んでいて、見ているだけでも楽しくなる。これらは、二〇〇〇年の噴火前に切られ、保存されていた三宅島の「ツゲ」の木で作製されているそうだ。浅沼さんが一つずつ工寮に手作業で作製しているため、一つひとつ表情が違っているのだが、どれも穏やかで優しい表情をしている。また、「それぞれ形に特徴があるから、シルエットでも分かるところがいいんだよ」と話してくれた浅沼さんの作る海の生物たちは、種類によって動きが違っている。それは、浅沼さんが切り取った魅力的な瞬間の姿であり、その生物らしさが出ていて、それぞれの違いを比べてみても面白い。コロンとした小さな海の生物との出会いは、またひとつ三宅島の魅力を教えてくれた。

（上地　里佳）



M's CRAFT
東京都三宅島三宅村神着100-1

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
（平成23年）
8月26日
金曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

号外

島内ぐるり民宿めぐり

三宅島大学開校に向け、授業準備進む

三宅島大学開校まで、とうとう一ヶ月をきった。今回の三宅島大学リサーチは、二十三日から二十六日まで。そのなかでも、私たち加藤文俊研究室の学生チームは、三宅島大学に関するお話やご協力のお願いをするために、島内の民宿を数十ヶ所うかがった

九月十九日から開校する三宅島大学。しかしながら、まだまだ私たちは三宅島について知らないことの方が多い。そこでまずは、島で暮らす方々に、私たちがお話を聞くところからはじめられるような授業の準備をすることになった。ただし、もちろん授業とするからには、お話を聞くだけで終わりというわけにはいかない。それでは、いったいどのような授業になるのか。

現在、準備を進めているのが「ポスターづくり」の授業だ。授業を受ける学生は、インタビュー取材をして、写真を撮って、ポスターという一つの形にまとめる。そうすることで、学生が取材のなかで感じたこと・受け取ったものを、写真と言葉で目に見える形にすることができる。それを見ることで、ほんの少しかもしれないが、三宅島のことを知ることができるかもしれない。今まで知らなかった三宅島の一面を知るきっかけになるかもしれない。ポスターが発するメッセージがきっかけに、会話など何かがうまれるかもしれない。そのような、つながりの種となるようなものを、授業のなかでつくることができるのではないだろうか。

そして、肝心のインタビュー先をどうするか。今回スポットを当てたのは、民宿のおかみさん。観光にたずさわっていることもあり、三宅島の名所について詳しく、お客さんと接することが多い分、話をすることにも慣れているのではないかと考えられたためだ。そうして、今回の私たちの三宅島大学リサーチは、島内の民宿めぐりをして、おかみさんにご協力をお願いすることになった。

突然の訪問にもかかわらず、民宿のお仕事の合間をぬって、みなさん優しく出迎えてくださった。印象的だったのは本当にそれぞれが魅力的だったことで、九月の授業のときには、どこも自分が取材にうかがいたいと思ったほどだ。民宿を始めてもう長年になる方もいれば、まだまだ若い方、お一人で切り盛りされている方や、二代目という方、海に近くダイバーの多い民宿や、少し山の方にあって眺めのいい民宿など、お人柄も民宿の雰囲気もさまざまであった。

しかしながら共通するのは、その優しさ。朝採りたての野菜をくださったり、自家製のジュースをごちそうしてくださったり、暑いからとペットボトルのお茶をくださったり、昔のガイドブックなどの資料をくださったりと、こちらがお願いしに民宿を訪れているはずなのに、多くのお土産をもらってしまった。

前回のリサーチで三宅島に訪れたときは、曇りがちの天気で、バスでの移動も多かったため、一回目のリサーチとしては十分すぎるほどいろいろ見て回ることもできたが、なかなか三宅島の細かい部分を見ることはできなかった気がする。しかし、今回はレンタカーで民宿をまわるために島を数周し、天気にも恵まれた。民宿のおかみさん一人ひとりのお話に加え、また少し三宅島について知ることができた。九月からの三宅島大学がより楽しみになった。

（飯田 達彦）

初めての三宅島への思い

青い海に広い空、そんな期待とは裏腹の空模様だったが、それさえ吹き飛ばすような温かい沢山の笑顔が私の三宅島初上陸を歓迎してくれた。小さな港町があり見上げると緑にハイビスカスの赤が映えているような爽快とした夏景色、そんな漠然としたイメージを胸にこの島に降り立った。理想そのものの景色だが、なぜだか私は違和感を抱いたのだ。

翌日島内を車で移動している時にその違和感が明らかになった。それは夏の緑を遮るようにポツポツと立っている白い木だったのだ。

表面がパリパリで芯まで乾燥しきっているそれは、あちこちにあり頂上へ近付くほどその密度は高くと立ち入り禁止看板と共に白い一面が広がる。これは噴火によって出た火山ガスが周りの木々を枯渇させたものとみられる。木は腐るわけでもなく、まるで景色の変わり様にその場にただただ立ちつくしているようだった。また島内の道路はどこもかしこもサビだらけのカーブミラーやガードレールがあり、高濃度地域に入れば柱が崩れてしまっているものもあった。

この初三宅島四日間で何度も見上げ思わずシャッターを切ってしまうほどの美しく、青々しい空。ほんとうにここで噴火が有ったのだろうかと信じられないようなものだ。

しかし確かな三宅島人の力があったから、今もなお続いているからこその空。これが三宅島力なのだと私に訴えかけているような気がした。

最後に三宅島初上陸で唯一果たせなかった思いがある。それは島の方々の思いが聞けなかったことだ。もちろん、民宿の女将さんから民宿に対する思いなどを聞く機会はあったがこの三宅島に何を感じ、どのような気持ちで避難解除から再び地に足を踏み入れたのか？突然の噴火によって避難を余儀なくされた状況を味わっている方からの声を聞くことだ。私事であるが、現在注目されている福島県は私の出身地でもある。現在の福島と三宅島は非常に状況が似ていると感じ、今わたしが出来る事とは何かという目的を持ちこの三宅島に来たのだ。残念ながらこの四日間でその目標を達成することは出来なかったが、今ここであしたばんに思いを綴ることで次へステップに繋がることを信じている。来月の三宅島大学にご協力頂く皆さま、またこれから知って頂く為にも是非三宅島の方々と私達で互いに教え、学び輪を広げていけることを願っている。

（吉田 あんな）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

わたしたちの自炊生活

リサーチ二日目からわたしたちは伊豆避難施設に寝泊まりさせていただいている。避難施設と聞いていたので、もっと簡素なつくりなのかと思っていたが、中にはいってみると立派で、綺麗に掃除もされていて、とても避難施設とは思えなかった。部屋は二段ベッドが左右に置かれ、一部屋四人が寝泊まりできる。浴場も朝五時半から夜九時までと長い時間開放されている。朝が早いのは、到着する船の時間に合わせて、ということなのだろう。ヘリポートも近く、緊急の場合を想定していることがよく分かる。二〇〇〇年の噴火での全島避難の際に新しく建てられた建物と聞いたが十年以上経つ今でもこんなに綺麗なままで残っていることに驚く。

さて、今回わたしたちはこの避難施設で自炊生活をすることになった。前回三宅島を訪れたときには民宿に泊まり、朝から贅沢すぎるほど豪華な食事をいただいていた。朝も夜も、三宅島で取れた魚や野菜、貝など、島の食べ物がたくさん食卓に並んだ。食べ物に困ったことなど一瞬もなかった。しかし、実際に自炊してみて、それがどれほど裕福なことだったか身を持って体験した。どこに何が置いてあるかもわからないような慣れない場所で、食事を作る。食べないわけにはいかないから、どうしてもつくらなければならない。つくるのを諦めたところで、近くにお店があるわけでもないし、商店も十八時ごろにはもう閉まってしまっている。これは東京ではなかなか経験しないことだ。それは一見、不便であるようにも感じるが、商店の開いている時間にお店にいって、食材を買う。あるいは、前日の残り物に合わせて、必要なものを買い足す。これが、島の生活リズムをつくっているのではないだろうか。

今回は調味料までこだわった。島の醤油や、島のりなど、自炊だからといって普段から食べているようなものをつくるわけではない。島に来たからには、できるだけ島の料理を食べる。今回、わたしたちのリサーチチームのなかに、食をテーマにアートデザインの活動をされている、EAT&ART TARO さんという方がいらした。わたしたちはこのTARO さんの指示に従い、滞在中、朝食と夕食をつくった。避難施設生活一日目。久しぶりの家庭科の授業のような時間に胸をふくらませ、夕食の時間を楽しみに待っていると、TARO さんは「いきいきお魚センター」でみたこともないような魚を買ってきた。三宅島では通称「おじさん」と呼ばれるらしい髭の生えた赤い魚やウマヅラカワハギ、カツオ。これらを刺身にしたり、煮たり、湯掻いてサラダで食べたりした。厨房はとても広く、小学校の給食室でしかみたことのないような大きなお鍋や、炊飯器、食器の数などさすがに三百人もの人が暮らせるだけある。圧倒された。しかし、どれを見てみても、しばらくは使われていなかったのが目に見えてわかることも多かった。食器を洗うところから始まり、十人程度の食事をつくるのはなかなか大変だった。わたしは TARO さんのあとをうろうろしていただけだが、なにもない状態から、食事の支度が終わるまでは約二時間程度かかった。今回のリサーチでも、たくさんの民宿を回らせてもらったが、女将さん方は本当にとんど食べられていない。

島の人にお話をうかがうと、こういった、単純に島巡りをしていただけでは知り得なかったことを知ることができるのが面白い。島自体が興味深い情報であふれている。三宅島大学でも、こういったかたちを目指している。島の方々と交流することで、島のことをもらうのと同時に、わたしたちが島の方に向けて発信できることもあるかもしれない。そうやってお互いに成田さん自身は元々島の出身ではなく、二〇〇四年に三宅島に災害復旧工事の際に訪れた際、その経験をきっかけに島で働くことになった。

森林産業部長とはいえ、普段の業務内容があしたばアイスの販売や、酒瓶の回収作業に至るまで多岐に及ぶ自身を成田さんは「何でも屋」と称する。成田さん曰く、現在三宅島はマンパワー不足だとのこと。島全体に若い力が不足しているため、島の産業全体が人手不足に悩まされている。それと同時に、災害復旧工事等の公共事業が行われていない時期になると、仕事自体が無くなってしまうという大きな矛盾を抱えている。

そのため、成田さんは、公共事業に頼らずに、島の特産品を活かした生産的な新事業の創造を望んでいる。その一つとして期待しているのが、島の特産品であるあしたばを使用したあしたばアイスである。ただ、あしたばアイスを作る際、あしたばを愛知県まで運んだ後に再度島まで運ぶコスト等を考慮すると、実現に移し、継続していくには決して容易では無いことがわかる。

しかし、三宅島に対する思いを口にする成田さんの口調からは、三宅島を少しでも良くしていきたいという思いがひしひしと伝わってきた。

成田さんをはじめとする、様々な人の思いが詰まったあしたばアイスをぜひ一度御賞味してみてはいかがだろうか。（長冨 将成）



「新名物!?あしたばアイス」

八月二十四日、加藤文俊研究会のメンバーはあしたばアイスを食しに伊豆緑産を訪れた。一カップにあしたばの葉約十グラムを含むあしたばアイスを口に運ぶと、まろやかな舌触り、さらに、ほんのりと香るあしたばの香り、主張しすぎない甘さが口に広がる。まさに三宅島の自然がくれた甘さだ。

ただ、あしたばアイスは島で作られているわけではなく、島で採れたあしたばを愛知県に送り、現地の工場で加工、製造した後に三宅島に送られる。

あしたばアイスを食べる際に出会った、伊豆緑産の森林産業部長である成田信治さんにお話を伺ってみた。

開校まであと少しだが、次回、三宅島に来るのが楽しみで仕方がない。

民宿「さつき」さんから頂いた野菜も、大切に使わせていただきました。美味しかったです。（新飼 麻友）

あしたばん
2011年（平成23年）
8月29日
月曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
第十一号

火の山からの挑戦状
トライアスロン開催！

青い空と、眩しい日差し。八月二十七日、夏真っ盛りの快晴のもと、「火の山からの挑戦状トライアスロン大会 in 三宅島 2011」が開催された。今年は、総勢一二八名の選手たちが島内外から参加した。三宅島のトライアスロンは、スイム十五キロ・バイク四十キロ・ラン十キロのコースで、個人の部とリレーの部の二部門に分かれている。

錆ヶ浜で行われた開会式では、大会実行委員長の築穴辰雄さんと、三宅村長の平野祐康さんがそれぞれ選手を激励した後、全員で「みやけ〜〜!」と掛け声を出し、選手たちはレースへの意気込みをより一層高めた。

十三時十分、三宅村長の合図とともにスイムがスタートした。選手たちは勢いよく泳ぎ出し、選手の家族や友人、応援に来た地元の人々の熱も入る。スイムをトップ通過したのは、なんとリレーの部で参加している女性の堤沙織選手で、二位を大きく引き離し、会場を盛り上げた。バイクに入ると、コースの沿道から応援の拍手と「頑張れ〜」という声が聞こえてくる。中には、家族や友人からの応援に手を振って応える選手も見られた。早い選手は、バイクを終え、最後の種目であるランに入っている姿がちらほら見られ始めた。最後の種目ということもあり、選手たちにも疲れが見え始めてきたのが感じられる。これこそ、火の山からの挑戦状である。そんな選手たちを支えていたのは、やはり沿道からの応援ではないだろうか。約一三〇名の参加者ということもあり、一人ひとりの顔を見ながら応援できる距離であることを感じた。だからこそ、応援された選手たちは最後までゴールを目指すことができるのだ。本トライアスロンのフィニッシュ地点では、選手たちはみんな笑顔で、時には応援してくれた友人や家族と、協力し合った仲間とゴールテープに飛び込む姿が見られた。中でも、リレーの部で出場している三宅高生三人組の『Miyake Boys』がゴールすると、会場からは歓声が沸き上がっていた。波の音と、夕陽に包まれた会場からは、レースを完遂できた歓喜の声に溢れていた。

（上地 里佳）



開校に向け、着々と準備中！
三宅島大学リサーチ成果報告会

八月二十六日、伊豆避難施設において三宅島大学リサーチの成果報告会が開かれた。今回のリサーチは、三宅島大学の開校日が近づいて来ていることもあり、三宅島大学の開校式、その後の講座計画を意識したものなど、より具体的なものへとスポットを当てた発表が行われた。

加藤文俊研究室の学生チームは、「ポスターづくり」の講座の準備のため、島内の民宿を数十カ所ほど訪れ、三宅島に関する知識を深めつつ、島民の方々とも親睦を深めた（詳細は八月二十六日発行の『あしたばん』号外を参照）。開校式でハンドベル演奏を企画している安野太郎さんは、演奏者の募集と並行して、実際に三宅島在住の方を含めての実演を二日間行った。また、初めてリサーチに参加した EAT & ART TARO さんは、商工会女性部や栄養士の方々と交流し、「食」から見た三宅島の報告を行った。その他にも、アカコッコ館や神社仏閣など、三宅島に既にある情報施設や文化の発信方法についての報告も行われた。いずれの発表も、講座に発展していく可能性を持っており、どのような講座が開校されていくか楽しみだ。

具体的な講座日程や内容は、九月上旬に発表される予定である。発表され次第、『あしたばん』でも随時お知らせしていく。お楽しみに！

（上地 里佳）



「三宅島大学」は、いつでも、だれでも入学することができます。メールでの申し込み等も受け付けられるよう、準備がすすめられています。入学や受講、講座内容等に関する質問は、お電話で
04994-5-0984
三宅村役場政策推進室（三宅島大学プロジェクト実行委員会事務局）にお問い合わせください。

三宅島物産展
新宿ー三宅島の距離

東京都庁第一本庁舎2階の全国観光PRコーナーにて、三宅島の特産品販売が行われた。「三宅島にロック・オン！～映画「ロック～わんこの島」公開記念～三宅島パネル展」にあわせ行われたこの物産展、わたしが訪れたのは開催二日目のことだった。

受付で物産展の場所を聞くと、「昨日大盛況だったので、売り切れの商品が多いかもしれないですね…」とのこと。足を運ぶと、「三宅島」と書かれたオレンジ色ののぼりがみえてきた。

そして早速、入り口には「パッションフルーツ売り切れ」の文字。未だに三宅島のパッションフルーツを食していないわたしは、「二日目でも、遅かったか！」と悔やんだ。



物産展にならぶお土産を眺めながら、販売をされていた三宅村商工会の村上さん、三宅村役場の北川さんにお話を伺った。都庁見学に訪れた方や、噴火前の三宅島にゆかりのある方が、懐かしんで食材などを買っていかれたそうだ。

三宅島に訪れるようになって、ことあるごとに「三宅島」の話をしている。三宅の海の綺麗さ、火山遊歩道を歩いたときの感覚、自然の壮大さ、なにより人のあったかさ。そんな話をしていると、「わたしも三宅島に行ったことがあります」と声をかけられることが増えた。そのなかで共通しているのは、「また、行きたい」「風景を思い出す」と三宅島を懐かしむ言葉だった。物産展で、あしたばやパッションフルーツを手に取った方も、こんな思いを持っていたのだろうかと、想像した。

わたしはまだ三宅島のリサーチからこちらに帰ってきて、三週間ほど。それでも、なんだか民宿で食べたあしたばの天ぷらや、にがったけの生姜焼きが懐かしい。竹芝から六時間、同じ東京にある三宅島。距離にすれば、新宿から三百キロほどだろうか。この不思議な距離感にある三宅島に、惹かれる。一度訪れた人は、同じような気持ちを共感しているように思う。物産展で買った、三宅島の味…あしたばクッキーをほおばりながら、新宿をあとにした。

（大西　未希）

ちょっと、ひと休み。
ギャラリーカフェ　カノン

コーヒーの香りが漂う店内。壁には、三宅島の風景が描かれた絵。心地よい音楽が流れ、人々はそれぞれの時間を心地よく過ごしている。三宅島伊豆地区にある、ギャラリーカフェ『カノン』である。ここは、三宅島で数少ない中のカフェであり、穴原さん一家が家族で営んでいる。今回は、『カノン』で提供している料理全般を担当する、大宜味詩野さんにお話を伺った。

大宜味さんは、三宅島で生まれ育ち、二〇〇〇年の噴火で東京へ避難。もともと好きだったダイビングや、海の動物に関することを学ぶ学校へ進学し、卒業後は三宅島に帰島。最初のうちは、ペンションサントモにて約二年間働き、観光客や地元の人々と接しているなかから「カフェ」の構想が出来ていったそうだ。提供しているメニューは、あしたばパンや天草のスイーツ、季節の果物を使ったものなど、三宅島の特産品を活かしたメニューが多い。これは、「島で採れるものを使った料理を作る」という想いから生まれたものので、観光客だけではなく、地元住民からも人気の商品だ。

「やっぱり『島』が好きなんだよね」と、大宜味さんは笑顔で話してくれた。二〇〇〇年の噴火。当時中学生だった大宜味さんは、島が好きだったにもかかわらず、全島避難により島を離れなければならない経験をしたことが「三宅島で何かしたい」という想いに繋がっているのかもしれない、と話してくれた。「カノン」がオープンして、約一年と二ヶ月が経った。カフェをしていく中で、観光客と直接話す機会ができたり、接点がなかった地元の人々とも話すようになったりと、より多くの新しい出会いが生まれたそうだ。「このカフェが、三宅島に少しずつ浸透していって、そうやって続けていければ、それでいいんだよね。」と話す大宜味さんからは、三宅島への愛情を感じた。

噴火がもたらした三宅島への被害は大きい。しかし、噴火があったからこそ生まれた芽もある。今回の取材は、そのことを実感させてくれた。今日もカノンでは、島の特産品を使ったメニューが多くの人を楽しませているに違いない。また三宅島に来るときは、ふらっと訪ねてみようと思う。



（上地　里佳）

三宅島フォトコン2011

みなさんは、「三宅島フォトコン2011」をご存知だろうか。これは、今年から始まったフォトコンテストであり、募集テーマは、二つの部門に分かれている。自然風景や人物、歴史文化など、制限を設けない「フォトデータ部門」（データ形式での提出）と、2005年帰島以前の三宅島の写真を対象とした「アーカイブ部門」（紙媒体での応募も可）である。いずれも三宅島で撮影された写真であることが条件であり、島内外問わず、誰でも応募可能だ。「フォトコンを通し、島の新たな一面を知ったり、島の良さを再認識したりできる機会になって欲しい」という願いが込められたコンテストは、十一月末まで応募可能となっている。グランプリには、なんと賞金十万円、準グランプリには賞金5万円が贈呈される。「三宅島でカメラのシャッターを切ったら、即応募して欲しい。」と話してくれたのは、フォトコン2011実行委員会の津村さんだ。二十年に一度と言われる噴火周期と共に生きてきた三宅島。あなたが何気なく写した一枚が、三宅島を物語る一枚となるのかもしれない。（上地　里佳）

【応募・お問合せ先】

▼三宅島フォトコン2011実行委員会
〒100-1212　東京都三宅島三宅村阿古680-3　三宅島観光協会内
TEL：04994-5-1144
WEB：http://www.miyakejima.gr.jp/

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2011年
(平成23年)
9月19日
月曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
第十二号

いよいよ、三宅島大学開校！
ーみんなで、大学に入学しようー

九月十九日（月・祝）、三宅島大学が開校する。初めて島を訪れてから三ヶ月。たくさんの人に出会い、島ならではの体験もたくさんしてきた。そういったこれまでのリサーチ結果が少しずつ形となって、今日という日を迎えた。朝十時の記念式典をもって正式に開校し、式典終了後は、加藤文俊先生によるキックオフ講座「三宅島大学とは」が開かれる。式典に参加してくださる方には、ぜひこちらも参加していただきたい。また、同日には、日比野克彦先生や近藤良平さんによるワークショップも用意されている。

三宅島大学の入学方法はいたって簡単で、ひとつ以上講座を受ければ、誰でも入学が認められる。文字通り、誰でも、で、老若男女問わず、島民であってもそうでなくても気軽に入学することができる。受講、といっても難しい手続きは一切なく、全プログラム事前申込不要で、参加費も無料だ。偶然通りかかったり、興味本位での飛び入り参加ももちろん可能。また、学生証も発行されたり（島民以外の人は発行に五百円かかる）、グッズもあるので、いろんな楽しみ方ができるだろう。

下記が、九月に行われる全プログラムの予定であるが、この『あしたばん』をつくるワークショップは、二十日、二十二日、二十三日、二十四日に郷土資料館で行われる。どのようにしてこの『あしたばん』が作られているのか見てみたい、という人から実際に記事を書いてみたい、という人までどんな方でも、遊びにきていただきたい。来てくださった方には、あしたばん編集部のネームタグのプレゼントがある予定だ。また、私たちの別の活動として、民宿の女将さんにスポットを当てたポスター作りも行う。こちらも参加自由なので、興味のある方は、当日アカコッコ館にお越しください。（新飼　麻友）

19日 10:45-11:30 三宅島大学とは（阿古船客待合所）
14:00-15:30 Rock' n' dive（錆ヶ浜周辺海岸）
17:30-19:00 溶岩ダンスワークショップ（メガネ岩付近溶岩原）
20日 9:00-12:00 Future Sketch Workshop（三宅島漁業協同組合2階会議室）
10:30-16:30 かわら版をつくろう（郷土資料館）
21日 10:00-17:00 ポスターをつくろう（アカコッコ館）
22日 10:30-16:30 かわら版をつくろう（郷土資料館）
23日 10:30-16:30 かわら版をつくろう（郷土資料館）
14:00-16:00 坪田の言葉を聴こう（公民館）
24日 10:00-12:00 史跡と文化を知ろう（郷土資料館）
10:30-16:30 かわら版をつくろう（郷土資料館）
13:30-17:00 SUPER MOVIE CLASS（アカコッコ館予定）
14:00-16:00 連凧制作公開ワークショップ（郷土資料館）
19:00-20:00 クラシック講座（郷土資料館）
25日 9:00-10:00 溶岩鉢をつくろう（農林合同庁舎前）
11:00-14:00 三宅島大学＋凧揚げブース出展（漁業協同組合駐車場）
13:00-14:00 クラシック講座（あじさいの里）
14:00-15:30 連凧揚げ（錆ヶ浜予定）
18:00-20:00 夜凧揚げ（大久保浜予定）
19:00-20:00 クラシック講座（コミュニティセンター）

三宅島を味わう。
～「島酒・郷土料理を味わう宴」～

九月十六日（金）。吉祥寺北口の小道、雑貨店や商店のならぶハーモニカ横丁にはそこらじゅうに「三宅島」と書かれたのぼりとイベント案内のチラシが。この日、横丁の入り口すぐの立ち飲み屋『エイヒレ』にて三宅村役場主催イベント、三宅島の郷土料理と焼酎を楽しめる「島・郷土料理を味わう宴」が行われた。

ここハーモニカ横丁は、「ハーモニカの吹き口のようにお店が並んでいる」ことが由来して名付けられているとか。細い路地に並ぶお店には人であふれていて、昭和の佇まいが残っておりとても良い雰囲気の商店街。ここでタイヤキを買って、ふらっと歩いて商店街を眺めるのが、私の吉祥寺訪問の定例でもあった。「立ち飲み屋さんで一杯」に憧れながらも、機会に恵まれずはじめての夜のハーモニカ横丁。若干緊張しながら、ひとり会場に訪れた。

会場についたころにはすでにほぼ満席で、お店からはみ出てしまうほどの大盛況。お酒をふるまう観光協会、村役場、商工会の皆さんは大忙しだ。とくに「雄山一」は大人気で、次々に「ロックで！」「水割りで！」と注文がきていた。あしたばのおひたしをはじめ、三宅島から輸送されたカツオのお刺身や亀の手の塩ゆでなど、テーブルは郷土料理でいっぱいになる。

「明日から三宅島に行くんです。」そういうと、周りのお客さんたちから「おお、島好きだね～！」と声をかけていただき、お話した。普段からハーモニカ横丁にお酒を飲みにきていたり、知人の方からお知らせをもらって来ている方もいらっしゃり、立ち寄った経緯は様々。「三宅島はいいところなんだろうね～！」とお酒を交わしながら、盛り上がる。三宅島の方と、お店で知り合った方と。笑い声にあふれるお店のなかで、「語らって知る」心地よさを感じた。真面目に語るにも、笑い合うにも、間においしい島産のお料理やお酒があるとやっぱり違う。場所は離れていても、同じ東京である三宅島。島の香りを地元吉祥寺で感じられ、ハーモニカ横丁と三宅島のあたたかさに触れて、楽しいひとときだった。

（大西　未希）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

それぞれの三宅島
～島を器に記憶しよう！～

まだまだ夏を感じさせる九月。三宅島郷土資料館脇にて三宅島大学プレ講座『楽焼きワークショップ』が行われた。これは、粘土の持つ「記憶する」という性質を使い、島を歩き、自身が気に入った場所やモノに粘土を押し付け、形を採取することで、島を器に「記憶する」ワークショップである。



講師は、陶芸家の金沢宏紀さんだ。「楽しく、わいわい、みんなでつくろう」という思いが込められたワークショップには、子どもから大人まで、幅広い年代の島民の方々が参加した。参加した人々は、粘土を手にし、それぞれの三宅島の風景を採取するために見慣れたまちを歩きながら、元小学校の看板や、マンホール、葉っぱなどに粘土を押し付け、思い思いの器を作製していた。出来上がった作品は、形も模様も多種多様で、出来上がった作品を見る参加者たちは笑顔に溢れていた。参加者が作った作品は、開校式の会場で展示を予定している。二日間に渡って青空の下で行われたワークショップは、資料館に立ち寄った人々も気軽に参加できる雰囲気で、三宅島に流れる、ゆったりとした空気の流れに合っており、とても心地の良いものだった。いよいよ三宅島大学が開校する。プレ講座の様子を見ていて、こんな風にゆっくりと島民の方々と関わり合いながら、三宅島大学を緩やかに作り上げていきたいと感じていた。

（上地　里佳）

皆の思いを校旗に載せて

本日の三宅島大学開校に先立ち、一七日の十三時から三宅島郷土資料館にて行われた、芸術家の松田唯さんによる、「みんなで三宅島校旗を作ろう！ワークショップ」に参加してきた。

今回のワークショップは、三宅島大学の校旗のミニチュア版を、参加した方々が布にクレヨン、絵の具、刺繍等を用いて思い思いのデザインの三宅島大学の校旗を作成していくという、島の内外の人共同で作り上げる大学である三宅島大学のコンセプトを体現したものであった。

自分はクレヨンで旗の制作を行ったのだが、クレヨンを使用したのが小学生の頃以来というころもあり、実際に旗作りを行うと思いのほか思うようにいかず、悪戦苦闘した後になんとか作り上げた。作り終えた後に、郷土資料館やほかの参加者の方々におほめの言葉を頂いた時に、なんとも言えない達成感がこみ上げてきた。実際に参加してみて気づいたことは、作業の途中にほかの参加者と他愛もない雑談等、参加者との距離感の近さである。それを踏まえて自分が感じたことは、月並みではあるが、参加してみないと醍醐味はわからないということである。ワークショップの内容自体により得られる楽しさと同じくらい、他の参加者との交流で得られるものは大きいということだ。

そういった交流も含め、三宅島の良いところを再認識していく「三宅島大学」にぜひ参加してはいかがだろうか。

（長富　将成）

伊ヶ谷でビーチ相撲大会開催

日の光で力強く輝く伊ヶ谷の砂浜。快晴に恵まれた九月一八日、三宅島ビーチ相撲大会が開かれた。ビーチ相撲とは、その名の通り砂浜で取る相撲のこと。三宅島では昨年に続いて二回目の開催となる。ビーチ相撲のツアー参加者や観光客、島民など四〇名近くが集まった。

まずはビーチフラッグス、ビーチリレー、ウォーターファイトと海辺のスポーツで身体をあたためた。独自に加えられたルールを楽しみながら参加者で親交を深める。西日が差し込み始めたころ、ビーチ相撲が始まった。思い思いにつけた四股名で対戦が組まれる。主催者であり審判の加賀田さんによる独特の抑揚がついた呼び上げで、一気に本格的な相撲の雰囲気が生まれる。土俵際の粘り合いや女性ならではのたくましさが見える闘いなど、数々の真剣勝負が繰り広げられた。

大相撲の荘厳さとビーチのくだけた開放感。双方が見事に融合したビーチ相撲を通し、伊ヶ谷の浜は爽やかな連帯感で包まれた。

（三島　麻里江）

ビーチ相撲　体験記

「絶対に参加した方が楽しいって！」待ってましたと言わんばかりに、その言葉をいただいて私は体当たり取材に臨んだ。三宅島には、六月・八月と訪れ、これで三回目。ずっと海に入りたいと思いつつ機会を逃してきていた。そして今回の取材にあたって、ひょっとしたらその機会があるのではと、実は水着を持ってきていたのだった。

勢いよく参加したのはよかったが、あたりを見回すとしっかりと日焼けした肌に、引き締まった身体の人たち。今年の夏、海で過ごした時間の長さが、私とはまったく違うことが目に見えてわかる。そんなこともあり、最初は周りの雰囲気に入り込めるか少し躊躇してしまった。

しかし、それはまったくの杞憂であった。強い日差しは気持ちを高揚させてくれて、海に入ったときの気持ちよさをさらに引き立たせてくれた。大運動会という響きに子供心をくすぐられ、ビーチフラッグスや水鉄砲で遊んでいるうちに、いつの間にかチームの仲間たち、参加者の皆さんと盛り上がっていた。

そして、最後に本番とも言うべきビーチ相撲。熱い戦いの様子を克明に…書きたいところだったが、恥ずかしながら一回戦で負けてしまった。しかしながら、立ち会ったときの興奮、負けたときの悔しさは、参加しなければわからなかった。

通っている大学の先輩に会ったり、つい一週間ほど前に別の場所で出会った方との、思いもよらない偶然の再会があったりと、三宅島に何かの縁があると感じざるを得なかった。取材というよりも、夏の締めくくりにふさわしい思い出ができた。

（飯田　達彦）



あしたばん
2011年
(平成23年)
9月21日
水曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
第十三号

"いま"が響き続けるように

ついに十九日に開校した三宅島大学！天候が心配されたが開校を祝うかのような晴天の下で行われた。三宅島大学の学長である平野祐康村長の開校宣言から始まり、東京都生活文化局文化振興部長や、三宅島大学プロジェクトの実行委員会の来賓の方々の祝辞を頂き無事開校式を終えた。

式典では開校記念式典演奏曲として『二〇〇〇年のこども（世界初演）』が披露された。これは富貴神社大祭に感銘を受けた日本大学芸術学部の講師安野太郎さんが作曲し、三宅島高校音楽教師の會田鮎子先生とアカコッコ合唱団の渡辺昭洋さんを交えた十人で演奏した。

富貴神社大祭で阿古→伊ケ谷→伊豆→神着→坪田の順に神輿を担ぎ継いでいくように、五角形になり時計回りに演奏者が次々に移動していく演奏体系だ。ある規則によって奏者は動き、各地域が交ざっていくと共に音の変化が起こる。音階がないゆえにハンドベルの単音が一定のリズムで鳴らされていくことで、独特な空気感を作り出していくのだ。

このセレモニー発表に向けて既に一か月前から練習が行われていた。ベルを鳴らすタイミングや動きなど、あらゆる規則を試行錯誤していくうちにこの楽曲が出来上がった。一つの変化で大きく雰囲気が変わる。これは単音ハンドベルだからこその面白さでもあるだろう。

また東京芸術大学大学院に在学する松田唯さんがデザイン、制作ともに手掛けた衣装にも注目して頂きたい。各地区を表す五色（白・紫・黄・赤・緑）の同じ色の衣装を着る事で視覚的にも五地域の区別を分かり易くしている。

楽曲としては全員が最後に一斉に鳴らして終わる。しかしこの響きが千年後の三宅島にも続くように、と作曲者の思いが込められている。この三宅島で学び、教え、考える。この響きがいつまでも続いていく事を願いたい。

（吉田　あんな）

校旗　お披露目



青い空と、青い海。台風が接近してきているとは思えないほどの快晴のなか行われた三宅島大学開校式にて、プレ講座で作られた三宅島大学の校旗がお披露目された。プレ講座に参加した方々が作製した小さな旗は、一つひとつ縫い合わせられ、一枚の巨大な校旗となっていた。心地良い風が吹く海辺ではためく巨大な校旗は、来場者の目を惹いていた。

三宅島大学のロゴをもとに、こんなにも多種多様に表現された旗が出来上がったことに感動を覚えずにはいられない。開校式で隣に座った島民の方が「あの旗、私も作ったのよ。二枚も作っちゃったの。今日は写真を撮りたくて来たのよ。」と、満面の笑顔で話してくれた。その嬉しそうな顔を見ていると、じわじわと嬉しさがこみ上げてくる。開校式が終わり、その島民の方と校旗の写真撮影を行った。わざわざ購入して持って来たインスタントカメラで、たくさん写真を撮った。こうやって、島民の方と一緒に作り上げた校旗は、これから末永く親しまれる旗になってくれるだろう。

（上地　里佳）

学生のあかし

開校に伴い、入学者に学生証が発行された。入学方法などの詳細は三宅島大学のホームページを参照のこと。提示すると東海汽船の割引が受けられるなどの特典もある。

表面は三宅島の自然をバックに「三宅島大学 学生証」の銀字が刻まれている。溶岩や地面に生い茂る植物など四つの図柄があり、そのなかから気に入ったものを発行できる。伊豆に縁がある方は伊豆岬を、元気なちびっこは海を選ぶなどの傾向が見られた。

裏面は本人の署名と写真が入る。字にも個性があり、小さな子が書いたと思われる微笑ましいひらがなもあった。式典で手続きをした入学生はその場で撮影をしたため、爽やかな青空を背負った顔写真が出来上がっている。文字とお顔を見ながら、どんな方なんだろう、三宅島とどういった繋がりなんだろうと思いを馳せる発行作業だった。

ただひとつしかない学生証。三宅島でのコミュニケーションのきっかけになれば幸いだ。

（三島　麻里江）



三宅島大学の最新情報はこちら

■三宅島大学公式ホームページ
http://www.miyakejima-university.jp/
■三宅島大学 Facebook
http://www.facebook.com/MiyakejimaUniversity
■三宅島大学 twitter
@MiyakeUniv

島を感じる 開校記念講座

ついに開校した三宅島大学。阿古船客待合所にて行われた開校式典、キックオフレクチャーの後、日比野克彦氏（三宅島大学教授）による記念すべき開校記念講座である「Rock 'n' dive」が行われた。当初の予定では、錆ヶ浜周辺を廻りながら、日比野氏と一緒に水中散策を行う予定であったが、波が高かったために伊ヶ谷にてスケッチ釣りを行うことになった。

スケッチ釣りとは、参加者が水中に潜り、発見した物をクレヨンで紙に描き写すというものである。おもしろかったのは、描いたものによって取得できる単位数が異なるという点だ。石、海藻なら一単位、魚なら二単位、亀ならなんと十単位の単位を取得できるという非常にユニークなシステムであった。

参加者は二十人ほどで、偶然通りかかった際に興味を持って、Tシャツ、短パン姿で飛び入り参加してくれた方もいた。天気に恵まれ、気温が大変高かったせいもあり、気持ち良さそうに海に飛び込む人の姿が見られた。参加者は小さな子供からご年配の方々まで幅広く、波打ち際でスケッチする方もいれば、本格的な道具を携えて沖の方まで泳いでいく方もおり、実に様々であった。

授業を終えた後は単位の認定式が行われた。残念ながら亀を見つけた方はいらっしゃらなかったが、一から四単位まで無事に全員が取得した。全身で島を感じ、島を描いた参加者の顔からは、心地よい疲れと大きな満足感があふれていた。

（長富　将成）



溶岩ダンスワークショップ開催！

九月十九日の十七時半から、開校記念講座の第二弾として、振付家・ダンサーである近藤良平さんによる「溶岩ダンスワークショップ」が開催された。近藤さんは、ＮＨＫ総合『サラリーマンＮＥＯ』や連続テレビ小説『てっぱん』オープニングの「てっぱんダンス」振付などで知られ、近藤さんのファンという方もいらして、会場であるメガネ岩付近の溶岩原には三十名以上が集まった。

まずは地べたに寝転がって、ゆったりと身体をほぐしたのち、頭に溶岩を乗せながらそれを落とさないように、近藤さんが取るポーズの真似をした。沈みゆく夕日を背景に、近藤さんの小気味よい口調で面白いポーズを次々に取っているうちに、心もほぐれていった。そうして全体の雰囲気がよくなったところで、二人一組になりお互いの手を合わせ、片方は目をつぶり、片方は誘導しながら身体を動かした。目をつぶることで、島に吹く風を感じたり、足の裏からは溶岩のごつごつした触感を楽しんだ。

薄暗くなってきたところで、「てっぱんダンス」をはじめから習って、振付の動きを声に出しながら、全員で踊った。テレビで観ていた人が多かったのか、みなさん覚えるのが早く、スムーズに踊っていた。

最後に、即興で三宅島のダンスがつくられた。釣りや波、くさやなどキーワードを参加者が出していくと、それに近藤さんが振付をしていき、それぞれの動きには歌詞がつけられ一つにまとめられた。しかし、ダンスとしてはまだまだ未完成で、もっと発展させていかなくてはいけないとのこと。今後、どのようなダンスが出来上がるのか楽しみだ。時間も遅く真っ暗になってしまったが、ひとまず出来上がったダンスを踊って、溶岩ダンスワークショップは幕を閉じた。

（飯田　達彦）



日比野克彦氏と近藤良平氏による「Future Sketch workshop」が二十日、三宅島漁業協同組合の二階会議室で行われた。これは東京文化発信プロジェクト室のプロモーション事業であり、直接は三宅島大学と関係がなかったが、島民の方が朝早くにも関わらず参加されていた。スケッチということもあってか、小さい子供も多くいて、元気よく絵を描いている様子が印象的だった。

黄色のスケッチブック、Future Sketch Book に未来のことを好きに描く。今回は「千年後の三宅島」と「一万年後の地球」がテーマだった。二つのチームに分かれ、まずはあれこれ自分のスケッチブックに想うことを描いてみる。その後、日比野さん、近藤さんを中心にみんなでお話をしながら、それをＢＯサイズの巨大スケッチブックに落としこんでいく。前半の「千年後の三宅島」では、私の参加したチームでは火口がひとつのポイントになった。噴火が繰り返されて火口がハート型になったり、その中に家が建ち人が住めるようになったり、さらには鉄の蓋で火口を覆うという発想まで生まれた。また、噴火と共存していくなかで、溶岩ドーナッツや溶岩キャンディーが売りだされるのでは、という想像も。

島の歴史を振り返りながら、島の未来を考える。わずかな時間だったが、島の内外の人の発想が混じり合うことで、さらに不思議で面白いアイディアが生まれたのだろう。他の地域で行ったワークショップの様子もサイトで見られるようなので、ぜひ検索してみたい。

（新飼　麻友）



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
9月22日
木曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十四号

キックオフのあとで、考えた。

まずは「三宅島大学」の開校を、心から喜びたい。だが、「開校おめでとう！」という余韻に浸っているヒマはない。いよいよ、これからなのだ。

キックオフ講義で述べたが、大切なのは、誰もが「教わりたい欲求」だけではなく「教えたい欲求」も持っているということだ。どんなにささやかに思えることでも、「学び」をつうじて、ぼくたちの世界はどんどん豊かになる。だからこそ、誰もが弟子、誰もが師匠という関係性を、つねに意識しなければならない。いろいろなことを考えながら、日常生活にとけ込んだ、知恵や工夫への接近を試みよう。

「三宅島大学」の理念は、ゆるやかに身体になじませていかなければならない。それには、時間がかかる。そして、時間をかける甲斐がある。ぼくは、呪文のように建学の精神と夢を語り、島の形のロゴマークをいたるところに貼り付けていこうと思う。一回かぎりのイベント型のプロジェクトは、もう、終わりにしたい。永きにわたる関わりかたをつくろう。キックオフ講座では、その想いを表明したつもりだ。



『あしたばん』編集部も、覚悟を決めたほうがいい。この壮大な実験にどのように関わるのか。六月に創刊されてから、不定期ながらも、着実に紙面づくりがすすんできた。「三宅島大学」の開校を機に、『あしたばん』のありかたについて、あらためて考えてみてはどうだろう。どこにでもある「よく知られた報道」になってはダメだ。永きにわたる関わりのためのメディアとして、どうあるべきか。それが問われている。

ぼくの個人的な望みは、人びとの生活のなかのちいさな「ものがたり」を丁寧につぶさに綴るという姿勢を、いま以上にはっきりさせた紙面をつくることだ。写真入りの学生証を手にしたときの笑顔。ロゴマークのワッペンを胸につけたときの、ちょっと誇らしい気持ち。師匠に単位を認定してもらうワクワク。ひとつひとつは、些細な出来事に見えるかもしれない。だが、変革は、ちいさき〈モノ・コト〉からはじまるのだ。

（加藤　文俊）

あしたばん編集部に受講生が！

二十一日におこなわれた、「かわら版をつくろう」の授業に、さっそく鈴木則子さんの姿があった。鈴木さんは開校式にも参加され、二十日に『Future Sketch Workshop』で使われたノートに、手書きでいくつか記事になりそうなことをメモをしてくれていた。

電気の普及、プロパンガスの普及、電話の普及などの出来事から当時の三宅島での暮らしぶりに話を広げて、何を食べていたのか、どのような働き方をしていたか、どのように自然と付き合っていたかなど、島で生きるということについて詳細に何ることができた。

印象に残ったのは、嫌なことなんて何一つなかったという言葉。当時の暮らしを聞くと、小学校に入ると家の働き手として農作業や家畜の世話など様々な仕事を手伝いながら学校にも通っていたそうで、今では考えられない生活があった。

しかし、確かに大変だけど、すべて楽しんでいたとのことだった。忘れられないほどきれいな風景に出会ったり、厳しい環境でも強く根をはったり、花を咲かせる姿があったり、自然と付き合うなかでいつも発見があったから、楽しんでいた。どんな状況でもあきらめずに何か意味があるはずだと考えるから、嫌なことがなかったと話してくれた。実感のこもった「自然から学ぶ」という言葉が染み入ると同時に、それはやはり、三宅島には豊かな自然があるからこそなのだと思った。



きっと私は、三宅島で培われてきた生き方、自然に向き合う態度を学び、そして自分自身が自然から多くのことを学べるようにならなくてはいけない。『かわら版をつくろう』という授業で、むしろ私の方が多くのことを教えてもらっていた。

初めての講座でまさに、島で学び、島で考え、島で教える、という三宅島大学のコンセプトを実感した。三宅島の方々にとっては当たり前になってしまっていることのなかから、掘り起こしていかなければもったいない。そしてその過程で私たちが見つけたものから、島に還せるものもあるはず。丁寧に、出会うことすべてに向き合っていきたい。

（飯田　達彦）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

僕の足、島の石、人の意志。

三宅島大学で自分の企画（講座）を持つ。これは、そのリサーチの一日の記録だ。この時点で決まっているのは、「僕は島を一周走ってパフォーマンスをする」ということ。それは自分のやりたいことでもある。だが果たして、それがどのように島のためになるのか。

朝。台風が近づいている。天気は晴れたり曇ったり、よく分からない。自分に何が出来るのか、僕の頭の中も茫漠としていた。

人に会えば何か道が開けるかもしれない。とにかくバスに乗ろう。阿古で降り、サントモで遅めの朝食。スパゲティを食べ、この後の動き方を考える。店主が、「三宅島大学の方ですか」と声をかけてくれた（僕は資料を広げ、胸に大学のワッペンを付けていた）。三宅島大学の名前はかなり広まっているようだ。だが、「やろうとしている内容が今ひとつ分からないので、とてもやる気はあっても、どのように関わっていいのか分からない」というお話を伺った。僕も説明することを試みるのだが（「産業復興の…」）「じゃあ産業復興って、何をするの？」となって、言葉に詰まってしまう。なんといってもこのプロジェクトは昨日始まったばかり。会話をしていると、「理想の未来」と「今」とのギャップにたじろいでしまう。

分かりやすく島の人に発信することが、もっともっと必要だということがわかり、「頭張ってね」との声をあとにして、サントモを出発。雨宿りをしながら色々と考える。行き着くのは、僕は「島の自然環境」を面白いと思っているということだ。考えている企画でも、それが大きなテーマになる。そこで次の目的地を決める。島の自然を扱っている会社『伊豆緑産』だ。タバコを買おうと『はせがわ』に入る。そこで開校式で出会ったおばあちゃんに再会した。そうしたら、車で伊豆緑産まで送ってくれた。ノンアポで伊豆緑産の門を叩き、三宅島大学の名前を告げて「島の自然環境についてのお話を伺いたい」と告げた。伊豆緑産で働きながら島の自然ガイドもしている、西村さんという方が応対してくれた（なんとラッキーなのだろう）。

西村さんも、三宅島大学の名前自体は知っていた。僕が三宅島大学のパンフレットを渡すと、「こういうものがあると分かりやすい」と嬉しそうだった。『三宅島ジオマップ』（作成には西村さんも携わった）を見ながら、西村さんオススメの自然スポットについて色々な興味深いお話を伺った。それを一言でまとめてしまうと、「三宅島は〈噴火後の裸地〉から〈スダジイなどの極相林〉まで、緑が繁栄してゆく全ての過程を持つ希有な島」ということだ。そして話は、島の「人の魅力」に移っていった。過酷な自然環境のこの島では、人々はごく自然に助け合うのだ。車で送ってもらった事をはじめ、思い当たる節は数え上げればキリがない。

そして「自然の魅力」と「人の魅力」はきっと繋がっている、と西村さんは話してくれた。それを『三宅島大学』の目線で明らかにし、島の外に伝えてゆきたい、と。

西村さん自身、島の魅力に取り憑かれて二〇〇〇年噴火の前にこちらに移住したらしい。そして噴火を経験し、また三宅島に戻ってきた。周りからは「なんでわざわざ島に戻るのか」という声もあったらしい。また、「ガスマスクが要るんでしょ」というオーバーな誤解は今でもあるようだ。だから、島の魅力を解き明かして「元気な三宅島」の印象を発信して欲しい、と語られた。そのような使命を持って、三宅島大学には頑張って欲しい、と。話が終わり、僕は自分のやるべき方向性が何となく見えた気がする。

「自分の足で島を走る」という行為によって、「島の自然」と「人の魅力」、両方を拾うことが出来るのではないだろうか。それを作品として落とし込み、島の外、両方に向けて発信する。

来島は二回目。僕は島に到着した朝、この島が好きになりかけていることに気づいた。やるしかないという気持ちだ。

（橋本　匠）

インフォメーションデスクより
―授業、グッズ…三宅島大学の輪―

三宅島大学は開校式を終え、現在は「オリエンテーション」のような期間だ。学生証の交付や、近日中の講座の案内をしている。九月二十日から二十四日まで、あしたばん編集部は郷土資料館にインフォメーションデスクを構えながら『かわら版をつくろう』講座を行っている。

六月からリサーチで三宅島に訪れているが、インフォメーションデスクの役割を果たしながら、また新たに島民の方々に出会うことができた。同じ『三宅島大学生』として、なんだか一体感を感じられることが嬉しい。学生証を見せ合ったり、受けた講座の感想を教え合ったりする。まさに、新学期の大学の雰囲気だ。

九月二十日。デスクに「今日はなにやってるの？」と女性お二人がいらっしゃった。民宿『オーシャンクラブ』の浅沼多津子さんと、近本杏里さん。開校記念講座のスケッチ釣りにも参加されていたそうだ。「先生に、魚がよく見えるスポットを逆に教えたりしたの」と近本さん。感想や、授業のなかでの一コマの話を聞けるのは面白い。今度はこんな授業を受けたいという話にも発展するし、お互いの得意なことも共有できる。この日は、ダイビングをされている近本さんのことも知ることができた。こんなふうに、三宅島大学のなかで共通項をたどりながら自分の「先生」をたくさん見つけていきたいと思う。

お話をした後、限定発売しているアンオフィシャル「三宅島大学Tシャツ」もお買い上げいただいた。島の方に手にしていただくのは、これがはじめて。とてもうれしく、記念撮影までお願いしてしまった。これから島の色んな場所で、『三宅島大学』や『あしたばん』Tシャツを目にする日も近いかもしれない。

少しずつ三宅島大学の輪が広がっていってることを実感する、インフォメーションデスクでの出来事だった。

（大西　未希）



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2011年
(平成23年)
9月26日
月曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第十五号

ポスター完成！
～ご協力ありがとうございました～

開校式から約一週間が経とうとしている。様々な授業が行われる中、私達あしたばんスタッフは『かわら版をつくろう』に加え『ポスターをつくろう』講座を行った。これは『民宿の女将さん』をテーマとしてその人物にスポットを当てポスターを作る授業だ。

二十二日は島民の田中耕介さんと共に取材をした。（やまのべ旅館さん、SNAPPERさん、伊波君さん、ペンションオレンジハウス　パロンさん＊取材順）田中さんは坪田地区出身で専門学校に通う為に一度島を出た。八年ほど東京で生活し二〇〇〇年頃三宅島に戻って来た。一年ほど前に「、この風景が当たり前じゃないんだ。」と気付き、これを残したいという思いから写真を始めた。

三宅島で生まれ育った田中さんだからこその幼少期の思い出と女将さんの共通の地元話など、今までにない新たで貴重な取材を体験できた。



授業内容は取材先で約二時間お話しをさせて頂き、その後話の内容を基に私達が受けた印象等を踏まえ〝そのひとらしさ〟を表現する。ポスターとはいえ、単なる広告ではなくその方の輝いている所を自由に表現できるのがこのポスター作成の楽しさだ。写真選びからキャッチコピー、文字までその方を私たちなりに表現する。文字の大きさ、色、配置すべてにおいてこだわりがでるのだ。

最後に田中さんにこの授業参加について伺ったところ twitter（ツイッター：一投稿百四十字以内でつぶやきと言われる書き込みを行えるサービス）でこの授業を知ったそうだ。三宅島大学の公式アカウントで講義日程などについてお知らせするので是非皆さんに利用して頂きたい。

非常に残念ながら台風の影響により二十一日にご協力頂く予定だった民宿には伺えませんでしたが、またの機会にご協力頂けたらと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

（吉田　あんな）



一緒に『あしたばん』をつくろう

三宅島大学開校ウィークである九月二十二日、郷土資料館で行われた『かわら版をつくろう』講座には、親子での参加があった。参加いただいたのは、宮下千枝さんと潮音くん。『あしたばん』制作にどのような形で参加していただこうかとお話を伺っていると、三宅島大学プレ講座、『楽焼きワークショップ』にも参加されていたとのこと。楽焼きのときの思い出を潮音くんに絵にしてもらった。



ワークショップでは、自分の気に入った物に粘土を押し付けて、形を記憶させ作品づくりを行った（『あしたばん』十二号参照）。左下の絵は、跡をつけた粘土だそう。加えて、夏に海で食べたすいかの絵を真ん中に。最後に、水色やオレンジ色で空の色を加えて「しおん」とサインを書いてもらい、完成した。カラーで掲載できないのが残念だが、色鉛筆とペンを使ったカラフルな一枚になっている。



宮下さんは、「楽焼きワークショップはとても楽しかった。子ども達も粘土あそびが好きなので、一緒に参加できるのは嬉しい。陶芸が好きな方はたくさんいると思うので、もっと講座をつくってもらえたら」と話してくれた。かわら版づくり講座は難しそうと思ったけれど、どんなことをしているのか見てみたいと思い、来ていただいたという。こんなふうにじわじわと、三宅島大学で受けた思い出が島民の方に広がっていけたら嬉しい。

最後に、講座ログシートに内容と感想を記入いただき、講師からサインをする。認定単位「一」に丸をつけ、「また講座でお会いしましょう」と渡す。「三宅島大学で会ったら、また声をかけてくださいね」と宮下さん。潮音くんも、「バイバイ」と手をふってくれた。講師として、はじめての単位認定。その少しくすぐったい気持ちと、また少し島民の方との輪が広がった感覚で、嬉しさがこみ上げた。

（大西　未希）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

連凧が大空へ

遠藤一郎
連凧プロジェクト

この三宅島大学開校ウィーク中、大きく「未来へ」と書かれた、黄色いワゴン車をどこかで見た方もいらっしゃるのではないだろうか。この車、「未来へ号」で車上生活を行いながら全国を回っているのが、今回三宅島大学にて「連凧プロジェクト」を行った未来芸術家の遠藤一郎氏。二十四日は郷土資料館にて、連凧制作の公開ワークショップ。そして二十五日には、錆ヶ浜にて制作した「未来龍三宅島大空凧」揚げを行った。

郷土資料館では、空に揚げたい「夢」を、用意された凧に書いてもらうブースを設けた。黄色い凧にマジックで、それぞれの思いを綴る。家族の幸せを願う言葉。「宇宙飛行士になりたい」などの将来の夢。凧は凧揚げ当日までに約百枚が集まった。その凧を紐でつなげていく。



制作ワークショップを終え、郷土資料館駐車場にてテスト凧揚げが行われた。風に舞う連凧は、まるで龍が空を昇るごと左右上下にうねっていく。凧の動きは面白く、風の強さや吹き方で変化を続ける。いつまで見ていても飽きてこなく、不思議とそこにいた皆が笑顔になった。「あれ、虹だ!」どこかから声がして、目線を動かすと、なんと上空にうっすらと虹がかかっていた。皆の夢の書かれた連凧揚げをしていたときに見える、虹。素敵な偶然に、そこにいたから喜びの声があがった。



そして、二十五日。私たち加藤研究室チームは、この日の十四時の船に乗り込む予定で、連凧揚げが行われる錆ヶ浜から出航することを前日から祈っていた。願いは叶い、乗り込んだかめりあ号から綺麗に連凧を見る事ができた。見送りにきていただいた方々の姿。そして浜からみられる、黄色い連凧を目に焼き付け、帰路についた。

(大西　未希)

はじめての島市

九月二十六日。この日、私たちは三宅島から竹芝への船に乗る。阿古では、漁業協同組合の駐車場で島市が行われた。島市には、商工会女性部のムロッケやうまか棒、地元野菜を使った焼きそば、手作りパン、貝殻を使ったワークショップなど、様々な商品が販売、催しがされた。その中に、三宅島大学のブースも出店され、未来龍大空凧を描けるスペースや三宅島大学グッズの販売が行われた。私は、初めて島市に参加させていただいて、お祭りのような雰囲気に独特の高揚感を感じていた。ブースには、三宅島で行ったことのない店もあり、会場を眺めているだけでも面白い。また、島民の方々が多く参加していたこともあって、この滞在でお世話になった人や、これまでお世話になった人にも会うことができた。また、阿古芸能保存会の女性陣が踊りをお披露目し、大東京音頭が流れ始めると、島市に来ていた人も輪に入って踊り始めた。「ほら、入って入って!」と言われた私たちは、その輪に入り、下手ながらも見よう見まねで踊らせていただいた。こうやって地元の行事を通して島民と交流でき、最後までとても濃い時間を過ごせた気がする。今回は、帰る日だったため駆け足での参加になってしまったが、次回は私もオリジナルグッズを持参して、この島市で出店することができればいいな、なんて考えていた。

(上地　里佳)

優しさの味



「かわら版をつくろう」は、郷土資料館での開講だった。この場所をお借りすることで、普段から資料館に出入りしている島民の方々と接する機会を多く持つことができた。世間話から三宅島大学へのご意見まで、幅広くお話しした。

そのなかで、私たちがどこに泊まっているのか、何人で来ているのかを気にしてくださる方がいた。伊豆の避難施設に十人くらいです、と答えると、ご飯はどうしてるの?かぼちゃは食べた?と尋ねられた。大きな釜に米を炊きカレーや鍋料理を大量に作る自炊生活。野菜もそこまで摂っているわけではない。私の返事を聞くや否や、「じゃあ明日作ってきてあげる!」と顔をほころばせた。最初は遠慮していたものの、ちょうど丁寧な家庭料理に飢えていた頃。最後にはご好意に甘え、かぼちゃの煮付けとあしたばのシーチキン和えをいただくこととなった。

翌日が講座の最終日。撤収で屋外にいるときにお会いできた。「あしたばが出始めたばかりだからちょっとしかなくて、その代わりに」と、たくさんのじゃがいももいただいた。持つ手を替えながらでないと食べられないほど熱い。皮ごと丸かじりすると、ふわっとした蒸気とほのかな塩味、じゃがいもの淡白だが味わい深い風味が広がる。最初に話題にのぼったかぼちゃは塩と砂糖とだしちょっと、というシンプルな味付け。調味料に邪魔されていない優しい黄色で目も和む。初秋の風が吹きすさぶなか、両手で野菜を飛び跳ねさせながら食べるのはなんだか幸せだった。あしたばは夕飯でおいしくいただいた。私は今まで島に来たことがなかったので、あしたばも初めて。独特の苦味と香りでご飯が進む。

都心にいるとファストフードの強い味に慣れてしまう。島に来て、素材のあるがままを楽しむこと、またそれを分け与える姿勢を教えてもらった。

(三島　麻里江)

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
9月26日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

号外

東京都に実家ができました。

「おかえりなさい」。

三宅島で、この言葉を聞くとは、一ヶ月前には思ってもいなかった。『あしたばん』を読んでくれたことのある方はもしかするとご存知かもしれないが、私は八月いっぱい築穴製菓さんでアルバイトをしていた。一ヶ月というのは、終わってみればとても短いものだった。そして今回、約二週間ぶりに三宅島を訪れていた。

三回目の来島となった九月の三宅島は、季節の変わり目を迎えていた。蒸し暑い日が続いていたのが、少し肌寒さを感じる日々になり、なんと三宅島の台風も経験することができた。今回の滞在は、三宅島大学の開校式や、それに伴って開講された様々な講座、学生証の発行等、やることはたくさんだ。しかし、三宅島に来たからには、お世話になった築穴一也さんと美喜子さんには必ず会おうと決めていた。

三宅島の最終日の前日。加藤研究室の学生メンバーも呼んで、築穴家で夕食会をすることになった。築穴家に加藤研のメンバーがいるのは、友だちと先生が実家に来たようでちょっと照れくさいような、なんだか不思議な感じだった。この滞在中、(自炊の日々が続いていたため)島の料理を満足に食べられていなかった私たちは、芋のあんかけや島おじや、手作りワンタン、モツ煮込みなど、たくさんの手料理と自家製梅酒の美味しさに感動していた。ふと、一也さんが今年のカレンダーを出してきた。そこには、その日の天気やニュース、会った人のことがびっしりメモされている。一日、私が三宅島に来てから私の名前が出てくることだけではなく、故郷の宮古島のことや、友だちのことも書かれている。アルバイト期間のことが鮮明に思い出され、見ているだけで涙腺がゆるんでしまった。まだ二週間ちょっとしか経っていないのに、とても久々に訪れた気分になったことが、濃厚な一ヶ月を過ごしていたということを実感させてくれた。



三宅島から帰る日。一也さん、美喜子さんが色とりどりの紙テープを袋に入れて、港に見送りに来てくれた。紙テープを受け取った私は、かめりあ号に乗船し、早速紙テープを投げた。のだが、「あー!」という悲鳴と共に、なんとその袋は海に落ちてしまったのだ。なんとか無事だったテープを引っぱり、残りの紙テープでの見送りをしていただいた。予想外のハプニングに申し訳ない気持ちもあったけれど、印象的だったのは、しんみりする別れではなく、みんな笑顔で手を振っていたことだ。「ここは東京都の実家だから、いつでもおいで。」と言ってくれた築穴さんの言葉に甘えて、また近いうちにふらっと来させていただこうと思う。

(上地　里佳)

「災い転じて福となす」



しまった、見つからない。「ポスターをつくろう」の講座を終え、本部にしていた郷土資料館に戻ってきた私は、焦っていた。どうやら、取材ノートをどこかに忘れてきてしまったようだ。最後にどこで使っていたのか、おぼろげな記憶をたどる。帰りの車のなかでカバンは開いていないが、取材中にメモは確実に取っていた。とすると、おそらく最後の取材にうかがった「ペンションオレンジハウス・バロン」に置いてきてしまったようだ。

翌日に早速電話をかけて名乗るやいなや、「メモでしょ!」とのお言葉。すぐさま車を飛ばしてオレンジハウス・バロンに向かった。到着すると、「ママ」という愛称で親しまれている、飯倉則子さんが待っていてくれていた。タイミングが悪く、電話をされていたので、忘れ物を入れていてくれた封筒を受け取って、きちんとお礼を言えずに立ち去ってしまった。

郷土資料館に戻って封筒を開くと、ノートとボールペンのほかに、一枚の紙が入っていた。見てみると、「三宅大学頑張ってください」の文字(ママさん、正しくは三宅島大学だよ!)と、三宅島の絵が描いてあった。前日に、ちょっとしたことかもしれないけれど、気遣いのこころを形にすることを大事にしている、と取材で聞いていたからこそ、この手紙がじんわりとあたたかい気持ちにさせてくれた。

その翌日は、島市。商工会女性部でいらっしゃることを聞いていた。姿を見つけてママさんのところに向かい、一言。

「ママさん、ありがとうございました。」

取材で教わったとおり、きちんと口に出して感謝の気持ちをどうしても伝えたかった。たった一言だけれど、そう言葉に出すと、ママさんはかわいらしい笑顔を返してくれた。その笑顔を見たいがために、また今度もノートを忘れてしまうかもしれない。

(飯田　達彦)

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

あしたばん

2011年
(平成23年)
11月14日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第十六号

応援旗にこめられた想い

三宅島大学講座「応援学：応援旗をつくろう」

講座「応援学：応援旗をつくろう」が、十月十五～十六日に開講された。講師は、講座「凧揚げプロジェクト」でおなじみの遠藤一郎さんだ。応援学とは、いま、苦難を乗り越えながら未来へと向かって生きる全国の人々へ、どんな応援ができるのかを考え、実践する新しい学問だ。噴火、全島避難を経験した三宅島からどんなメッセージやアクションが発信でき、どのような力になれるのだろうか。そして今回は、その応援の気持ちを「応援旗をつくる」ことで表現する講座である。この講座は今後も行われていく予定となっている。作成に関して決まっていることは、「ファイト」という文字を描くことと、約一m四方の旗の形を少しでも変えてみることの二点である。参加者たちは、いろんな色を混ぜてみたり、ハサミで自由に切り込みを入れてみたりして、服や手が汚れるのも気にせずに応援旗の作成に熱中していた。

旗をつくり終えた参加者は達成感と笑顔で溢れ、出来上がった応援旗と、絵の具まみれになった手を見せながら一緒に記念撮影する姿も見られた。出来上がった旗は、文字が飛び出していたり、三宅島にあるものをモチーフに文字を描いていたり、円に切り取られた部分から顔が出せるようになっていたりと、同じものは二つとない、まさにその人のファイトが表現されていた。

二日目、遠藤さんが「三宅島はいいなぁ」と描かれた旗を作成した。その日の午後、さるびあ号が三宅島を出発するまさにその時、乗船している遠藤さんとスタッフにより、その旗が三宅島へ掲げられたのだ。そして、見送り側では講座に参加した中川彩さんが応援旗を掲げてくれていた。いつもは、三宅島へ手を振ることだけでしか感謝の気持ちを伝えられなかった。だからか、メッセージが込められた旗を掲げることは、これまでで一番大きく、そして強く、三宅島への想いが伝えられている気がした。こんな風に、それぞれが作成した応援旗が色んな場面で使われて、そこから何か想いを発信したり、受け取ったりしていけたらいいな、と思いながら三宅島をあとにした。

（上地　里佳）



アカコッコ館でカフェ！？

十月四日、講座「カフェ三宅島」がアカコッコ館にて行われた。講師は、食をテーマにした作品を作る現代美術アーティスト、EAT&ART TAROさん（以下、TAROさん）である。「おいしいコーヒーを飲みながら、ゆっくりと"食"について語る」という想いのもと生まれたこの講座は、今回限りではなく、定期的に開講されていく予定だ。参加者が集まりだすと、三宅高校生が作った器にお菓子が並べられ、参加者からのお土産も加わり、がらんとした部屋が徐々に「カフェ」へと変わっていった。



まず、TAROさんによるコーヒーの淹れ方講座が行われた。同じコーヒー豆でも、お湯の温度によって苦みが変化することや、蒸らす時間など、実際に淹れながら説明をしていく。参加者は出来上がったコーヒーの味を比較しながら、好みのコーヒーについて話していたり、淹れ方について熱心にメモをとったりしていた。



これがいいアイスブレイクとなり、徐々に参加者同士で話が盛り上がっていった。三宅島からスカイツリーは見ることができるか、グリーンフラッシュの映像や写真について、といった"食"とは関係ない会話かもしれいが、おそらくTAROさんはこれをねらっていたのではないかと思う。最初から"食"について語り合うのではなく、まずは参加者同士が心地良い場をつくる。そこには、「焦らず、ゆっくりと」というTAROさんの姿勢を感じることができた。これからも定期的に行われていくこの講座は、時間をかけて三宅島の"食"について考え、語り合うことで、三宅島に根付いたものになっていくだろう。

（上地　里佳）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

はじまりの一週間

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

三高祭。

物販、公演…　三宅高校と三宅島

十月二日、この日三宅高校は学園祭。テーマは「つながる～破顔一笑～」だ。八月に三宅島を訪れたとき、民宿つくばの幸枝さんは「三宅高校に行くの？あそこは毎年、ファッションショーがすごいのよ」と、昨年モデルとして出演されたお孫さんのことを話してくれた。学園祭当日も高校に行く途中、「学園祭に行くの？」と声をかけていただいた。

わたしの通っていた東京都内の某高校でも、毎年学園祭を行っていた。各クラスが喫茶店や軽食の出店を出したり、合唱コンクールをしたり。わたしの所属していたダンス同好会も、学園祭での公演をめざして練習したものだ。看板にペンキで絵を描いたり、教室の飾り付けをしたり…学園祭の準備をしていたころを思い出し、少し懐かしい気持ちになる。

しかし近隣の方が、学園祭の日にちまで把握していることなんてなかったし、来客はもっぱら他校に通う友人たち。「三宅高校学園祭」の周知度をひしひしと感じ、地元に根付いた高校のお祭りにうらやましさを感じた。

三度目になる三宅高校の校門。くぐるとすぐに、受付があり学園祭のはじまりを感じるアーチがあった。三宅島大学の講座で知り合った、何人かの方々にもお会いし、あちらこちらで挨拶をしているところが見える。



体育館では、ハンドベルの演奏や、合唱、ギター演奏。焼き鳥やクレープ、チュロスなどの物販。生徒たちは時間のシフトを組みながら、いくつかの掛け持ちをしていた。どこにいてもとても楽しそうで、こちらもわくわくする。

美術部の物販に訪れると、手作りの陶器やキャンドルを販売していた。「これ、わたしがつくったんです」と言ってもらうと、つい欲しくなってしまう。このやりとりがとても楽しく、珈琲カップとキャンドルをいただいた。誰かの手作りのものはやっぱり思い入れが強くなって、大事にしたくなる。学園祭に来たお土産ができて、またこれをを見せながら、どこかで三宅島での話をしたくなるな、と思う出来事だった。

ときめく　ファッションショー

午後一時。体育館には白いランウェイが用意され、少し緊張した雰囲気が流れる。夏休み中にファッションショー準備を行っている場面を見学させていただいたので、完成した衣装と演出をとても楽しみにしていた。

舞台が暗転し、映像が流れる。ショーのはじまりを予感させる音楽が流れて、いよいよはじまり。



準備の見学の際、ショーの一番はじめに登場する「テント」がテーマの衣装づくりに悩んでいるとひとりの生徒から伺っていた。いよいよか、と気構えていると、カラフルな三角形をかたどった衣装を着たモデルがランウェイにあらわれる。「テントは、こうなったのか！」はっとしながら、シャッターを切らずにはいられない。そこからはもう、食い入るように見入ってしまった。

少女が「理想のドレス」を探し求める、ストーリーある演出。テーマは、サーカス。今回のファッションショーはモデルも全員三宅高校生で、ウォーキングの仕方からもちろん衣装まで、とても細かく作り込まれていて、思わず「ほお…」と声が漏れてしまうほどだった。

会場からは声や拍手があがり、次にどんな衣装が見られるのか、ドキドキしながら見とれる一時間。本当にあっと言う間だった。三宅高校の生徒のみなさんにもう一度、楽しいショーへのお礼を伝えたい。（大西　未希）

新企画！

三宅島エッセイ

島びより

「島空模様」

三島　麻里江

初めて島に足を踏み入れた私を迎えてくれたのは、朝焼けの気配をわずかに孕んだ夜空だった。早朝に着くと聞いていたので少し戸惑ったのを憶えている。まだ星が出ていた。宿泊先に向かう車内で会話していると、いつの間にか窓の外は明けきっていた。

東の間の睡眠のあとに表へ繰り出すと、真夏のような日光が目を刺した。数時間前に見た夜明けの遅さや黒くぼんやりと浮かび上がった島の姿が夢のなかでの出来事に思えるほどだった。

翌朝の開校式のあと、夕方からの溶岩ダンスワークショップに参加した。思っていたよりも日の入りが早い。メガネ岩周辺に灯りがないことも手伝ってたっぷりとした暗闇があたりを包んだ。見上げると、これまでに見たこともない数の星が輝いていた。気がつくと、取り憑かれたように目を凝らしていた。生まれてから今までを東京二十三区の喧騒のなかで過ごしてきた私にとって、満天の星空なんてプラネタリウムのなかだけのものだった。深い闇とあまりのスケール感に、自分がそこにいるのかどうか分からなくなってしまう。ただただ圧倒された。

島の夜空はお茶目な一面も見せてくれた。宿泊施設での夜更かしの合間、自販機で何か買おうと外に出た。相変わらず空を眺めていると、視界の中央で、すうっ、となにかが流れた。流れ星だった。一瞬のことだったので目を疑った。疲れが見せた幻かもしれない。そうだとしても、なんだか腹のあたりから力が湧いてくるのを感じた。

次に訪れるのは十二月の頭。今度の空はどんな表情を見せてくれるのだろう。冬の澄んだ空気を思うだけで胸が躍る。

三宅島エッセイは、次号以降継続予定です。ご要望やご感想などお待ちしております。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
11月28日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第十七号

三宅島大学、十二月講座
―講師より予告―

九月の三宅島大学キックオフから、約二ヶ月。私たち加藤文俊研究室は、このキックオフ期間中に「かわら版をつくろう」「ポスターをつくろう」といった講座を開催した（『あしたばん』十二～十五号参照）。

来る十二月二日～四日、再び私たちは三宅島へ向かい、三宅島大学のいくつかの講座を担当する事となった。詳細は三宅島大学公式ホームページ、ツイッターからの広報を参照いただきたい。

今回はこの期間行う三宅島大学講座より、研究室メンバーが講師をつとめる講座を二つピックアップし、各講座の講師からの講座内容の紹介と意気込みを掲載する。

また、この期間中はこれらの講座を取材し記事として掲載する『あしたばん』も発行予定だ。三宅島大学講座会場で手に取っていただき、講座の様子を見たり、思い出していただければと思う。

「ポスターをつくろう」　第二弾開催！

第一弾のときは、残念なことに台風の接近と開講日が重なり、予定していた半数程度のポスター制作となってしまった。そこで今回は、前回の続編として引き続き民宿の女将さんにスポットを当てたポスターをつくる。

島の生活を知ると同時に、島外からの観光客とも接する女将さんの口から、仕事に対する考え方、暮らしぶり、島への熱い想いなどをインタビューで聞き出す。そして、「女将さんらしさ」が伝わる写真とともにポスターにする。刷り上がった現物を渡すときは、どんな反応をしてくれるか一番緊張する瞬間でもあり、一番わくわくする瞬間でもある。

前回ご協力いただいたやまのべ旅館さん、SNAPPERさん、伊波荘さん、ペンションオレンジハウスパロンさん（取材順）は、いずれも魅力的な女将さんで、それを最大限に表現するポスターをつくるのには頭を悩ませたが、楽しくて刺激的な悩みであった。

九月の講座では、島民であるころっちさんこと田中耕介さんも参加してくださり、写真やそれに添える言葉選びなどポスターのデザインに大きく関わっていただいた。



今回も広く参加者を募集する予定なので、普段は話すことが出来ない民宿の女将さんと話してみたい方、写真を撮るのが好きな方、ポスターをデザインしてみたい方など、少しでも興味を持った方は（info@yanotica.net）までご連絡ください。

（飯田　達彦）

授業名『ポスターをつくろう』
一二月二日（金）、三日（土）
午前十二時から十六時半まで（予定）
場所：アカコッコ館
持ち物：カメラ、メモ帳、筆記用具

冬の三宅島へ　―キャンドルをつくろう―



今回はついに冬の三宅島に上陸。前回訪れた際に、あちこちで見かけたハイビスカスはもう咲いていないのだろうか。一歩一歩と年の終わりに近づいて来た今日、三宅島の冬の顔に会えるのが楽しみだ。

さてそんな冬の三宅島でエッグキャンドル作りをしませんか。

キャンドル作成というと、蝋となる材料を様々な段階を踏み大変な作業と思ってしまいますが、今回のキャンドル作成は溶けた蝋燭を卵の殻に流して再び固めるだけ。お好きな香りを加えれば簡単にオリジナルのキャンドル作りが出来ます。もちろんご自宅でキャンドルを楽しめるようお持ち帰りもできます。

少しの時間、部屋の電気を消してご家族やお友達とキャンドルの光を楽しんでみてはいかがですか。奮ってご参加ください。以下詳細です。

授業名『キャンドルをつくろう』
一二月三日（土）
午後二時から四時三〇分まで（予定）
場所：アカコッコ館
持ち物：特になし（動きやすい服装）

電気を消してあたたかなキャンドルの灯りの中でゆったりとした時間を肌で感じてみませんか？ご家族やお友達とご一緒にご参加ください。

（吉田　あんな）

リニューアルオープン

三宅島大学講座、
講座予約についての詳細は
三宅島大学公式ホームページを
ご覧下さい。
http://www.miyakejima-university.jp/

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

「加藤研究室として、三宅島大学のこれから」 ―オープンリサーチフォーラム―

十一月二十二日～二十三日、東京ミッドタウンホール&カンファレンスにて「第十六回 SFC Open Research Forum 2011」が行われた。これは慶應義塾大学SFC研究所が主催する展示とトークセッションで構成されるイベントで、学生や教職員が研究成果を発表する場となっている。私たち加藤文俊研究室も出展し、研究成果展示を行った。

三宅島大学リサーチャーとして三宅島へ訪れた私たちであるが、研究会では「場のチカラプロジェクト」として活動をしている。人びとの暮らしや生活を理解するためのしくみをデザインし、実際にフィールドに出かけ、その有用性を試す事。その意味づけをおこなう実践が、主な研究内容だ。

今回の展示では活動成果をまとめた冊子の配布や成果物の展示をし、三宅島大学にて行った講座での成果物であるポスターも、スライドショーとして展示させていただいた。

二日間に渡る展示では、来場者の方へ研究室の学生から活動の説明を行う。ここで普段の研究や実践を「ことば」にしていくことで、たくさんの気づきがあった。わたしたちの活動は地域にでかけ、人と接することで生まれている。私自身もコミュニケーションについて、この活動のなかで何度も考えることになった。そして活動を通じて成果物を受け取った地域の方へも、なにかあたらしいコミュニケーションのかたちを感じてもらえたらと思う。この『あしたばん』の発行も、そのひとつ。届ける読者の方と接し、三宅島だからできる、コミュニケーションのかたちをつくりながら模索していきたい。展示と鑑賞者の方との対話から、こんなことを考えた。（大西　未希）



アイランダーの熱気 ～アイランダー2011～

十一月二十六日～二十七日の二日間にわたり、池袋サンシャインシティにて『アイランダー2011』が開催された。三宅島もブースを出すことを知り、アイランドシックな想いに引っ張られ、『あしたばん』の取材も兼ねて行ってきた。

会場には約七十もの全国の島々が一同に集まり、特産品の販売や島の物件紹介、工芸の体験など、それぞれの島が工夫を凝らしたブースばかりだ。統一した衣装、大きな声での呼び込み、島の伝統芸能が披露されるステージ、会場は活気で満ちていた。私はさっそく三宅島ブースに行ってみた。そこでは、おなじみの『牛乳せんべい』『くさや』『島のり』などがずらりと並ぶ。そして、三宅島のブースで呼び込みをしていたのは三宅島出身の大学生の三人だった。島を離れても、こうやって地元の島のPRをしっかりと手伝っている若者がいるなんて、素敵な光景だった。また、三宅島大学でもお世話になっている穴原奈都さんともお会いすることができた。会場を歩きながら、色んな島の友人を紹介してもらった。



三宅島エッセイ
島びより
「島とTシャツと私」

大西　未希

古着屋でアルバイトをし始めて、三年目になる。洋服が特別大好きだ、というわけではなかったのだが、「歴史や物語を感じるモノ」と接客が好きだという理由で門を叩いたが、まさかこんなに携わるようになるとは思わなかった。リーバイス501ジーンズのヴィンテージ。遠く南米の刺繍があしらわれたスカート。モノへの愛着はもちろんだが、お客様に提案をしたり、相談に乗ったり…接客が楽しくて、続いているのだと思う。

そんな相談に乗る側の販売員は、どんなものでも着こなせるのだろうと一般的に思われているのかもしれない。が、しかし。私にはコンプレックスがあった。夏の定番、鉄板である「Tシャツ」を着る事ができなかったのだ。どうしても着方がわからず、似合うと思えず、実は今年の春まで外出着として着た事がなかった。

この自分にとっての困難を吹き飛ばしたのは、九月の三宅島大学開校式だった。この開校式にあわせ、三宅島大学Tシャツ・あしたばんTシャツを制作し販売したのである。開校式当日、わたしはアイビーグリーンのあしたばんTシャツに袖を通す。宿泊していた施設のキッチンへ向かうと、続々と三宅島大学・あしたばんTシャツを着たメンバーが集まってくる。するとどうだろう、はじめて感じる種類の、わくわく感がみなぎってきたのだ。

何だろう、このわくわく感は。開校式の時間になり、気持ちのよい開けた空の下にでて、わかった。これは「一体感」だ、と。ひとつのことがらに向かう気持ちを、「同じものを身につけることで感じる。気づけば同じTシャツを着た人を目で追い、見付けると嬉しい気持ちになっているのだ。

郷土資料館や島市でTシャツの販売を行い、三宅島の方にを手にとっていただいた。いままで服の販売は行ってきたが、違う嬉しさがこみあげてくる。同じものを共有する、その連鎖を感じる嬉しさ。Tシャツは言ってしまえば「モノ」だが、意味をもった「モノ」に感じることができた。そして広い空の広がる三宅島では、開放的な気持ちになれて、この一体感を楽しめたのかもしれない。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2011年
(平成23年)
12月2日
金曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第十八号

ポスター完成！！
『ポスターをつくろう』講座

横なぐりの雨の中、九月二十五、二十六日に引き続き、三宅島大学では『ポスターをつくろう』講座が行われた。

民宿の女将さんを取材し、写真とキャッチコピーをもちいたポスターとして表現することで、そのひとの魅力を再発見する、というものである。

二日の昼ごろ、島民である田中耕介さんとあしたばんスタッフを含めた九名で取材が開始された。取材させていただいた民宿は、おしどり、ペンションサントモ、阿蘇、夕景（※取材順）の四つで、グループにわかれて二時間程度、お話をうかがった。

取材を終えたグループは、アカコッコ館やスタッフの滞在場所である伊豆避難施設でポスター作りをおこなう。

写真や言葉の選び方から、色、配置など、いたるところに受講者のこだわりがにじみ出るため、できあがったポスターから作成者の人となりを想像するのもポスターづくりの醍醐味だ。中にはこだわりを見せるあまり、夜おそくまでの作業にいたるグループもあるが、それもまた、楽しみのひとつである。



阿蘇の取材をおこなった笹野結衣さんは「女将さんのどんなときでも前向きでパワフルなところを表現したいと思い、このポスターをつくりました。」と、ポスターに込めたこだわりを話してくれた。阿蘇では田中さんも取材に参加しており、島民ならではの視点と話題で会話に花が咲いた。

『ポスターをつくろう』はポスターをつくることが終わりではない。一晩かけてつくったポスターを持って、取材させていただいた民宿を訪れる。そしてつくったポスターを見せたときの女将さんの笑顔をみて、「ああ、やってよかった」と思うのだ。これからも『ポスターをつくろう』はつづく…。

（丸本　智也）

阿蘇の女将さん

制作：笹野 結衣・田中耕介・丸本 智也

『ポスターをつくろう』第一弾、第二弾で制作されたすべてのポスターは、以下URLより閲覧ができます。

http://vanotica.net/38k_u/posters.html

つくってたのしい 食べておいしい

十二月三日十時～十二時アカコッコ館にて、三宅島大学講座「三宅島クッキーをつくろう！」が開かれる。

ただのクッキーではない。好きな色で好きなかたちをつくれる、「食べられる粘土」を用いての講座だ。食べられる粘土とは、カラフルで思い思いのものをつくれる粘土の一面とオーブントースターに入れると芳ばしい薫りとともに焼きあがるというクッキーの一面を併せ持った材料のことである。星やハートといったおなじみのかたちはもちろん、クリスマスツリーのような細かい装飾にこだわったクッキーもつくることができる。インパクトのある色だが、口に入れるとほどよい甘みが広がる。

粘土なんて小学生以来触っていないなんて方も多いのではないだろうか。私もそのうちのひとりだった。最初のうちは思うように生地がまとまらずイメージ通りの色をつくるのにも苦戦していたが、粘土の感触を手のひらいっぱいに満喫しているうちにわくわくした気持ちが湧きあがってきた。このなつかしくて新鮮な感覚をぜひ味わっていただきたい。「親子で参加できる講座がほしい」という声にも応え、子どもから大人までたのしめる講座を目指している。

ひとりひとり違う色とかたちに焼きあがるクッキーをいっしょにつくりませんか。島のみなさまにお会いできることを楽しみにしています。

（三島　麻里江）

授業名『三宅島クッキーをつくろう！』
十二月三日（土）
午前十時から正午まで
場所：アカコッコ館
持ち物：特になし

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

今回の『島びより』は、十二月一日に三宅島に初上陸した二人のメンバーによる渡航紀だ。この日、わたしたちの乗り込んだ「さるびあ号」は条件付き運航となっていたが、無事着岸することができ、冬の三宅島にたどり着くことができた。

島の洗礼

根岸　明子

（慶應義塾大学　四年）

夏に島に行っていた仲間の話から、三宅島は青い海に囲まれた、気持ちのいいアイランドだと思っていた。島に着く頃には揺れが大きくなるよ、という話も、まぁ何とかなるだろうと高を括っていた。結果、船の二段ベッドの枕元に置いてあったおにぎりが上から滑り落ちてぺちゃんこになり、港に着くなり横殴りの強風と雨にもみくちゃにされ、手荒い歓迎を受けたのである。島の自然は穏やかなものではなかった。

早朝は暗くてただ右へ左へ揺さぶられてバスで来た道は、昼間に出て見ると溶岩のせいでくねっているのが分かった。至る所に黒い焦げたような岩肌の丘があり、その合間で店や住宅が普段の生活を営んでいる。噴火が起きてから、この生活を再び手に入れるまでにどれくらいの苦労があったかは計り知れないけれど、道端の公衆トイレの便座は温かかったし、避難所はきれいで快適だし、小学五年生の時にテレビの中で見た真っ白な三宅島の姿はすぐに塗り替えられた。

私の日常の世界は、自然を人間が支配している。我が家は埋め立て地に立っており、街路樹は計画的に植えられている。山は切り開いて道路が作られ、工場の煙が木を枯らす。今年三月の地震で自然の脅威を思い知らされはしたが、私たちはまたすぐに忘れてしまうだろう。今回初めて三宅島に訪れて、一番感じたのは、ここは自然が支配している島だということ。波や溶岩の前では、人間は成す術がない。お店に寄る度に見られる笑顔の裏に、常に自然と向き合って生活する島民の覚悟を垣間見た気がした。



「怖い」という気持ちがどこかにあった。

廣野　吉隆

（慶應義塾大学　二年）

午前四時半すぎに島に着く。船はその大きな巨体を荒波に委ねて、私たちの足元を揺らす。天は真っ暗。島のシルエットさえ見ることはできなった。強い向かい風が私たちの上陸を妨げる。雨がどれほど強いのか、外灯の明かりを通して確認することができる。「自分が乗った船がどこに着いたのだろうか。」という恐怖感がそこにはあった。バスに乗り込み、宿へ向かう。窓の外を観察することはできない。暗闇の中、足場の悪い大地を進んでいく。見ず知らずのところを歩くというのは非常に怖いのだ。

たどり着いたのは避難所だった。避難所のなかは暖かく、極寒のなかを歩いてきた私たちを落ち着かせた。少し島のはずれにあるこの避難所はなぜだか少しだけ私たちを安心させる。それは「島らしさ」に欠けるからか。また、新しい施設は自分たちの住んでいる場所に近い存在だからか。

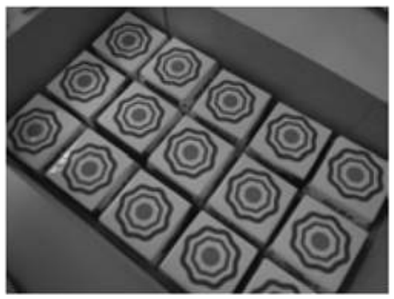
避難所が安心するなんて私たちにしか言えないことである。私たちはこの避難所を「宿」として位置づけているが、本当の意味での位置づけには「安心感」と「恐怖感」に溢れることになるのだろう。私たちに、この「恐怖感」が分かることはない。

雨の中を車で走る。あたりは溶岩で覆われた黒い大陸。焼きこげた木々。過去にあった天災の傷跡。「高濃度地区」という響きからは、福島の状況を思い出させる。しかし、そこにちゃんと人も暮らしている。彼らにとってこれが当たり前の景色なのだ。私たちは彼ら目線で島をみることはできない立派なストレンジャーであった。

三宅島のひとびとをめぐろう

三宅島に渡る前日、私たちはこの『あしたばん』を紹介する名刺サイズのカードを制作していた。これは今回の滞在で新たに行う『あしたばん放送局』プロジェクトの一環として、三宅島の方々に「来年の抱負」「来年こそ実現させたいこと」など、来る新年への思いを語っていただき、それを繋げた一連のビデオに編集しようという取り組みである。この撮影を通して『あしたばん』のことを知っていただこうという思いも含め、ビデオ公開先のURL等を掲載したカードをお渡ししている。

撮影初日の今日、十二月一日は商店をめぐり、過去記事にさせていただいた山下商店の山下広範さんや、この撮影を通しお話をした方々等ご協力いただき、少しずつ、新年への思いを集めている。



この撮影に参加いただいた方に、お礼として三宅島大学ロゴ入りのチロルチョコをプレゼントさせていただいている。島をめぐった際には、ぜひご協力いただけたらと思う。どんな方が登場されているか、楽しみにしていただきたい。

（大西　未希）

こちらのビデオは

「あしたばん編集部ブログ」

にて公開予定

http://ashitabanstaff.blogspot.com/

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2011年
(平成23年)
12月5日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第十九号

甘い香りと笑い声につつまれて

～三宅島クッキーをつくろう！～

十二月三日、三宅島大学の講座「三宅島クッキーをつくろう！」が開講された。あいにくの雨天にもかかわらず、小さな子どもから大人まで、約30名の参加者が会場のアカコッコ館に集まり、笑い声に囲まれながら終始にぎやかな講座となった。

参加者たちはまず、クッキーの生地を練るところからはじめた。うっすらと色のついた粉に少量の水を加え、透明なポリ袋の中でこねる。固まり始めるまでに少し時間がかかるため、子どもたちのテーブルからは「もっと水を入れよう！」という声も挙がっていたが、ここは我慢。最初は粉末状だったのが、こねていくうちに粘り気が出て、赤・青・黄・緑という、四色の「食べられる粘土」になっていく。参加者の中には、お互いの粘土を見せ合い、その固まり具合を自慢し合ったり、まわりより早く固めようとこね方を工夫したりする姿も見られた。



粘土ができあがると、クッキーの形づくりに移る。粘土を細かく切り分け、パーツごとに丁寧に形を整えていく人。いくつかの色の粘土を、とりあえず混ぜ合わせてみる人。キャラクターや動物をつくる人もいれば、文字を入れた看板をつくる人もいて、つくり方にも、つくるものの形にも、それぞれの個性が出ていた。

そしていよいよ、オーブントースターに入れて焼きあげる。一台しかないトースターを前に筆者があたふたしていると、その場にいた女の子・ハルナちゃん（五歳）が、自らお手伝い役を買って出てくれた。次々と焼き上がるクッキーを、まだ温かいアルミホイルにのせたまま、つくった人のところへ運んでいく。「躓いて落としてしまわないだろうか…」と父親のように心配しながら見ていたが、「できたよー」という可愛らしい声とともに届けられたクッキーは、より一層美味しく感じられたはずだ。部屋の中には甘い香りがただよい始め、あちこちで嬉しそうな声が聞こえてきた。

丹精込めてつくったクッキーを、誇らしげに見せ説明する子どもたち。子どもたち以上に真剣なまなざしで粘土をいじる大人たち。講師陣も含め、参加者同士がクッキーをつくりながら楽しそうにお喋りしていた様子が、とても印象的だった。

（水谷　晃毅）

ただいま三宅島

今年六月に初めて来て以来、今回は半年ぶりの滞在となった。前回、島を離れる際に、港で手を振る見送りの人々がどんどん小さくなっていってもあふれ出る涙を止められなかった。長い間滞在していたわけではないが、島で過ごした時間のなかで感じたもの、得たものがあまりにも大きかった。噴火を繰り返している火山と共に生きる暮らしがあるということ、その軌跡が島のいたるところにあるということなど、ありとあらゆるものを感じ、身体のなかに取り込まれていくような感覚を覚えた。

あのとき必ずまたここに来ると心に決めた。しかしその強すぎる気持ちとは裏腹に、都合をつけられずに二度のチャンスを逃した。三宅島大学の仲間達が、島での日々を重ねていくにつれて、私は置いていかれるような気がしてならなかった。それは、島での一日の価値を自分なりに噛みしめていたからかもしれない。一日でも多く島にいて、島の空気を吸って、島のこと、島で暮らす人びとのこと、そして島と自分たちとの関わりについて考え、それを何か形にして実践していく場に携わりたい、そして何よりも島をもっと知りたいと思いばかりが増していった。

今回、私はようやくチャンスに恵まれ、半年のブランクを埋め、欲張りすぎるくらい島での時間を無駄にしたくないという思いを抱いてここへ来た。島の空気を味わえたことはもちろん、取材を通じての新たな出会いや、三宅島大学が島に浸透し始め、講座の参加者が増えてきていることなど、様々な経験と、実感を得られたことがとても嬉しかった。そして何より活動に際して、多くの皆さまにご協力頂けたことに感謝したい。

久しぶりの割には、意外と道を覚えていたこと、地理感覚がつかめてきたことに少し驚いた。仲間の中で三宅島のことならあいつに聞けって言われるくらいになれたらと思いつつ、でもまだまだこれから。

悪天候のため、やむを得ず延泊になったが、帰れないのも悪くない、むしろ嬉しいくらいだった。ここでの生活、三宅島だからあること。これを受け入れてこそ、島との結びつきがまた少し強くなれる、一歩近づける気がした。ぎりぎりまで三宅島を存分に味わって、また近いうちに来られることを楽しみに、島を後にする。

（森部　綾子）

今回の講座レポートは、
三宅島大学Webにて
近日公開予定！

▼コチラからご覧ください。
http://www.miyakejima-university.jp

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

『ただいま』を言う日まで。

飯田　達彦

これで、四回目の三宅島。六月に初めて来てから、まだ半年しか経っていない。ずっと地元に住み続けている自分にとって、他の土地にこんなに継続してどこかに行くという経験はない。だから、三宅島には「通う」感覚を持ってしまった。

もちろん、回数だけでそう思うようになったわけではない。島の景色を見てまわり、島の料理を味わい、島での生活を身体が覚えようとした。そし何よりも、人びとの顔がわかるようになり、言葉を交わすようになったことが、「また会いにいかなきゃ」と自分に思わせるようになった。

本当に、色んなことが思い返される。就職先の選考を受ける前、選考中、結果が出てからと三宅島に来るたびに話を聞いて心配してくれた。インタビューのためにお邪魔した民宿に忘れ物をして取りにいったら、元気づけてくれる手紙も封筒のなかに入れてくれていた。三宅島大学の講座でつくったポスターを渡しにいったら、涙ぐんで喜んでくれた。自炊をしていて島のものを食べてないと言ったら、次の日にはタッパーいっぱいに手料理をくれた。家に招待してくれて、毎日の出来事を記しているカレンダーに自分のことを書いてくれた。まだまだここには書ききれないほど、一つひとつの出来事が頭に浮かぶし、お礼は言い尽くせない。

現在、大学四年生である自分。卒業するまでに三宅島に来る機会があるのか、卒業してからも、いつ三宅島にまた来られるかもわからない。けれど、もう三宅島には「通う」感覚が身に付いている。まだ三宅島大学だって卒業していない。だから、次に来るのはいつにしようか、頭が勝手に考えてしまっている。ちょっとあいだが空いてしまうけれど、きっと船に乗れば大丈夫。竹芝から六時間半、島のことを想うには十分な時間があるから。

一足早い、*クリスマス

十二月三日夜、三宅村公民館にてアカコッコ合唱団主催のクリスマスコンサートが開かれた。

私にとって、今回が初めての三宅島大学への参加である。三宅島の方々とお話する初めての機会だったので、ぜひ三宅島大学の講座やこのような時間を通してお話などできれば良いなと考えていたので、クリスマスコンサートに行くことができて本当に良かった。



わたしたちは、アカコッコ館で「キャンドルをつくろう！」の講座の片づけを終え、車に乗って公民館へ向かった。会費の五〇〇円をお支払いして会場の中へ入ると、手前の方にはたくさんのお料理が並び、舞台の方にはマイクや楽器が置いてあって、心なしかウキウキした気持ちになった。時間が経つにつれ、ぞくぞくと島の方々が入って来た。中には、先ほどアカコッコ館でのの講座に参加してくださった方々もたくさんいらっしゃって、改めて皆さんと違う場所でお話できたのが嬉しかった。

コンサートのプログラムは、三宅島合唱団の方々を中心に回されていた。「アメージング・グレース」のきれいな合唱から始まり、フラダンスやウクレレから、「青い山脈」などの懐かしい曲、讃美歌のソロまで、ジャンル豊かな内容であった。皆さんがそれぞれ楽しく充実した時間を過ごされていたように思う。皆で「ふるさと」を歌い、それぞれ故郷への思いを馳せた。

わたしたちは途中でおいとますることになってしまったが、こころがほっこりする、素敵な会に参加させていただいて本当に楽しかったです。ありがとうございました！

（川村　恵理）

初三宅島で ともった灯

十二月三日の午後二時から、アカコッコ館にて、三宅島大学講座「キャンドルをつくろう！」が開講された。この講座では、たまごの殻に溶かしたロウとアロマオイルを入れて固めたキャンドルを作った。

今回、私にとっては初めての三宅島上陸であり、三宅島大学参加であった。正直な話をすると、私は右も左もわからぬまま、二日の早朝、島に上陸した。あいにくの天気のせいで島を見て回ることもできず、二日は一日中、キャンドルの試作品を作ることになった。しかし、実際に作ってみるとなかなか上手くいかず、試行錯誤を重ねているうちに、気づいたら夜になっていた。ようやく試作品が完成し、キャンドルを灯す事ができた時、なんとも言えない嬉しさがこみあげてきて、早く島の方々とこの嬉しさを共有したいと思った。



三宅島大学での講座には、親子連れの方やお一人の方、友人同士でお越しの方など、たくさんの方々が参加してくれた。キャンドルに顔を描いた方や、持参の瓶でキャンドルを作った方など、作るものも十人十色、様々なものができあがった。皆が作った形も香りも違うキャンドルを、机の上に並べ、部屋の電気を消し、一つずつ灯す。全てのキャンドルが無事に灯ると、自然と笑顔と拍手がわき起こった。皆でキャンドルの灯を見ていたあの時間の温かさと嬉しさは、きっとあの場所にいた誰もが感じていた。

いつもは違う場所で、違う時間を過ごしている私たちが、同じ場所同じ時間に、何かを共有することができた。それだけで本当に嬉しくて、「三宅島に来られてよかった」そう思ったのである。

（関取　花）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成23年
1月31日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

二十号特別号

『あしたばん BOOKs』誕生

慶應義塾大学　加藤文俊研究室フィールドワーク展Ⅷ『栞』

三宅島へ訪問した際は、三宅島にある編集部。遠隔で発行している際は、大学のある藤沢市にある編集部。私たちあしたばん編集部は、場所を選ばずどこでも、記事を書き、編集する。そんなあしたばん編集部が、来る二月三日～五日、品川区に出張する。ＪＲ目黒駅近くのギャラリーやさしい予感にて行われる、「慶應義塾大学　加藤文俊研究室フィールドワーク展Ⅷ　栞」へ、あしたばん編集部員である上地里佳・大西未希の二人が出展することとなったのだ。

このフィールドワーク展は、今年で八回目を迎える。四年生の卒業制作、二・三年生のグループワーク、さらに研究室のＯＢＯＧも出展し、一年間のフィールドワークの成果を展示というかたちで発表する。あしたばん編集部は今回、昨年六月から発行している『あしたばん』の歴史を、大きな年表にしてふりかえる予定だ。展示会場では記事執筆者から検索できる目録も用意し、バックナンバーを持ち帰ることができるようになっている。編集中の裏話や、編集部員の日記などをあわせて見ていただき、『あしたばん』をより身近に感じてもらえれば幸いだ。

実はこの展示にあわせ、三宅島関連の発行物を刊行する編集社を設立することになった。今は会社組織でこそないが、今後の三宅島での研究をまとめ、発行物を定期的に刊行することを目指す。それが展示タイトルにもなっている『あしたばん BOOKs』である。発行物第二弾として用意しているのが、『三宅島研究』という冊子だ。これはいわゆる学会誌にあるようなアカデミックな用語をできるだけ用いず、「わかりやすく」三宅島での研究成果をまとめることを目的としている。展示会場にて創刊号の配布を予定しているので、ぜひ手にとっていただきたい。

（大西　未希）

慶應義塾大学　加藤文俊研究室
フィールドワーク展Ⅷ『栞』
http://vanotica.net/fw108/
同時開催　加藤文俊研究室ＯＢ展『帯』
【日時】
二〇一二年二月三日（金）～五日（日）
十一時～二十時（最終日のみ十七時まで）
【場所】
@Gallery「やさしい予感」
東京都品川区上大崎 2-9-25
http://www.yokan.info/



過去に想いを馳せて、いまを想う。

作品展示会「フォトコン 2011 in 三宅島」

緑深く生い茂るアカコッコ館。視聴覚棟では、一月末まで「フォトコン 2011 in 三宅島」の応募作品が展示されている。このコンテストは今回が初めての開催にも関わらず、アーカイブ部門、データ部門合わせて二五〇点もの応募があったそうだ。応募された写真作品は、アカコッコ館の他に、東海汽船ターミナル内愛らんどショップやウェブにて、一月三一日までご覧いただくことができる。

総合グランプリに輝いたのは、アーカイブ部門に応募された田中勘一さん撮影の「天草の頭上運搬釜方処理場」だ。この写真には、一人の女性が一枚の布では包みきれないほどの天草を頭に乗せ、それを三人の女性が支えながら運搬している様子が写っている。膨大な天草の量と、それを運搬するのに女性が参加していることが、三宅島にとって天草漁がいかに大きな産業だったのか物語っていた。アカコッコ館では応募された全作品が展示されており、それらの写真に知人が写っていたり、見たことのある景色、思い出深い行事の様子があったりして、三宅島に初めて来てから1年も経っていないのにも関わらず、なんだか懐かしい気持ちになった。他にも、マグマ水蒸気爆発が起こる前の新澪池の写真や、三池地区で撮影された集合写真など、美しい松の街道など、過去と今とで大きく変化してしまった風景写真を見ることができる。今とは違う風景に切なくなる気持ちもあるが、それ以上に多くのことを乗り越えてきた島の人々のたくましさを強く感じる。



多くの人々の様々な角度で記録された三宅島の写真たちは、今もなお火山活動が続いている島だからこその変化や、今も昔も変わらない島民の意地や優しさ、強さなど、溢れんばかりの島の魅力がつまっていた。

（上地　里佳）

あしたばん特製　バインダー?!

フィールドワーク展Ⅷ　栞「三宅島研究～あしたばん BOOKs～」ブースにて、「あしたばん最高！」とひとこと言ってくださった方先着一日十名様に、これがあれば『あしたばん』を集めるのが楽しくなる！特製バインダーをプレゼントします。手に入るのは、この機会だけ！ぜひ展示会場でゲットしてください。

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

ご愛読ありがとうございます！！

読者の皆様•編集部からあしたばんへ

昨年六月より発行を続けてきた『あしたばん』も、ついに 20 号を迎えた。
この「20 号特別号」発行に伴い、読者の皆様•あしたばん編集部から『あしたばん』へのメッセージを募集したところ、たくさんのお祝いの言葉をいただいた。



村上慧

あけましておめでとうございます。昨年の秋、赤い屋根の小さな家を担ぎ、映像を撮りながら島を一周した村上です。諸々の事情でそちらに行けないまま、４ヶ月経ってしまいました。僕はいま新潟にいます。寒いです。暖かい三宅島が恋しいです。秋に撮った映像を、島で発表したいと思っています。待っててください。



EAT&ART TARO

僕は、三宅島にいって島の人とコーヒーを飲んでいます。三宅島大学が島の皆さんに愛されて行く過程を、一緒に体感する時間だと思っています。
この時間は互いの事を知る時間でもあるし、そして一緒に何かを作って行く時間になるはずです。この時間を経て愛される出来事を生んで行きたいです。

初めての三宅島で、早朝の到着に寝ぼけ眼になりながら、その日の発刊 を目指して『あしたばん』創刊号の編集会議をしたことを思い出します。徐々に『あしたばん』が島に広がっていく過程と、自分が島を知っていくのが重なって、一緒に歩んできたような感覚です。これからも『あしたばん』を通じた出会いに期待しています。



飯田達彦

相原瑛里



20 号達成、おめでとう御座います！これからも三宅島の明日を伝えていってください、30、40 とこれからも増えていくのが楽しみですね！！

あるようで無かった、島内密着型新聞。あのオジやオバがあのお店が…誰もが主役になれる新聞あしたばん。でも、まだ今ひとつ、島民に伝わりきれていないのが残念。あしたばんの広がりと共に三宅島大学の講座ももっと広がるといいな。



田中耕介（ころっち）

新飼麻友



おめでとうございます！読者として、いち執筆者として大変うれしく思います。また記事を書く機会がいただけれ ばなぁ、なんて思います。そろそろあしたばを使った創作料理ニューなども載せてみてはいかがですか？！次は 50 号目指してがんばってください！



根岸明子

みやけに足を踏み入れたのは冬のこと だった。荒れ狂う海に驚きつつも、おおらかな島民、見渡す限りの自然に心を奪われた。その感動を伝えたくて、記事を書いたあしたばん。滞在中の差し入れにいただいたあしたばは、くせがあり、しかし温かい味がした。あしたばんもそんな存在。

加藤文俊



発行している立場ではありますが、第 20 号の発行をとても嬉しく思います。でも、このくらいで喜んでいるわけにはいきません。『あしたばん』であるからこそ書けることを書く。休むことなく、きちんと届ける。さらに質の高い紙面づくりを目指しましょう！

「にがったけ」の記事を書いたあと、「にがったけ、好きかね？」とお電話をいただいたこと。８月、「毎週一号発行」を目指し、毎週日曜の夜は編集に格闘して過ごしていたこと。ひとつひとつ､覚えている。一号一号、ちゃんと。発刊を重ねても、「ちゃんと覚えている」、そして伝えたい言葉を載せたものにしたい。20 号を迎え、そんなことを考えた。自分に、編集部に、三宅島に、おめでとう。



大西未希

半年前、初めて『あしたばん』を手渡したときのことを今でもよく覚えている。発行回数を重ねていくごとに「知ってるよ！」との声が聞こえるようになっていって、『あしたばん』を通じたたくさんのふれあいを持てたことが、とてもうれしかった。この先も少しずつ、島の皆さんと一緒に『あしたばん』を育てていけますように。



森部綾子



長冨将成

今回で、あしたばんは記念すべき 20 号を迎える。思えば本当にあっという間ではあったが、あしたばんのことを知っている島民や、発行を楽しみにしている人たちが増えてきていると耳にして素直に嬉しい。これからも島民に島の「あした」と笑顔を届けられるようなあしたばんを発行していきたい。



上地里佳

このかわら版が『あしたばん』と名付けられたのは、三宅島に初めて行く船中だった。あれから 20 号発行を迎えられたことは感慨深いものがある。島とのつながりが生まれ、徐々に読者も増え、かけがえのない人々に出会うことができた。これからも、三宅島での発見、喜び、疑問､好奇心を『あしたばん』で伝えていければと思う。



三島麻里江

最初に書いたのはビーチ相撲の記事だった。あしたばんを見せながら取材を始めたのを覚えてい る。この小さなかわら版を介して多くの人々と出会った。島の人にとって、あしたばんが話のネタになれば幸いだ。それと同時に島でのコミュニケーショ ンが記事のタネになる。これからも出会いを大切にするメディアであり続けたい。

『あしたばん』編集部では、
読者のみなさまからのご意見•ご要望•ご感想
をいつでもお待ちしております。

□お問い合わせ□
info@ashitaban.net
□バックナンバーはコチラ□
http://ashitaban.net/

三宅島エッセイ

島びより

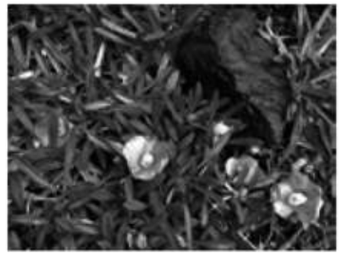
欠航流人の称号

上地　里佳

一月一九日、私は三宅島を訪れていた。今回は一泊二日の短い滞在予定。空は雲一つない快晴、陽気が暖かく、一月にも関わらず春の訪れを感じてしまいそうなほどの清々しい朝だった。しかし、その日の夕方から天候が一転、雨とともに強い風、島内放送からは東京発の船が欠航という知らせが流れた。島はまだまだ厳しい冬であったことを思い知らされた瞬間だった。その日から二日間は船、飛行機ともに欠航。一泊二日のはずだった予定は、三泊四日となった。

島外との交通機関が断たれたことで、私の週末の予定は一変した。三宅島での時間ができた私は、お世話になっている方々に会いに行くことができた。築穴製菓に行き、夏に築穴さんたちとよく行った『彦七』にご飯を食べに行った。伊豆避難施設を見学しに行けば馴染みの管理人さんに会うことができ、島名物の芋餅を焼きながら最近の三宅島の話をしながら楽しい時間を過ごした。行きたいと思いながら、夏以来ずっと行くことができていなかった商店にも顔を出すことができた。椿の花を鑑賞しながら歩いていたら道に迷ったり、おばちゃんが私の顔を覚えていて嬉しくなったり、新たな出会いも生まれた。夕ご飯に美味しい鍋と梅酒をごちそうになって、お互いの近況や懐かしい話で夜更かしもした。初めて着発の船を体験して、早朝にも関わらず用意されたサントモさんの鮭おにぎりの美味しさが身に染みた。もしかしたら、これが冬の島の醍醐味なのかもしれない。島には何者も出入りしない日々、自身ではどうしようもできない自然の力を身近に感じ、商店に卸される商品は徐々に減っていく。それでも島民は悠々とした心持ちで、自然に抗うよりも、それを受け入れて楽しんでいるような印象さえ受ける。

「欠航が二日以上続いた人たちを『欠航流人』って言うんだよ。」と欠航二日目に言われた。その言葉は、面白おかしく、しかし的確に私たちを表現していた。この状況下を嘆くのではなく、私たちをポジティブにさせてくれる言葉だった。私はその称号をありがたく頂き、貴重なお土産を手に入れた気持ちで三宅島を後にした。



『あしたばん』の記者大集合！

二十号を記念して、これまで記事を投稿してくれた記者一覧と、各々の記事の合計を整理してみた。なんと、これまで『あしたばん』に掲載された記事は計一一九記事も存在した。多くの人に『あしたばん』が支えられていることを実感するとともに、これからもよりよい誌面づくりに力を注いでいきたい。

【飯田達彦】
一号　表『始動、三宅島大学！』
二号　裏『道具を通じてみるそれぞれの旅　村上慧さん』
三号　裏『島が好きで好きで仕方ないから』
号外一　表『一同集結』
他、計二四記事

【岩橋文弥】
八号　表『もう少しで、届きそう。』

【上地里佳】
二号　表『民宿つくばのお母さん』
号外一　表『あしたばん制作の裏側に迫る』
五号　表『パピロってなんですか？』
六号　表『川越から三宅島に想いを馳せる』
他、計二四記事

【大西未希】
一号　表『異国籍船上パーティーから』
二号　裏『はじめて出会った島の味、「にがったけ」』
四号　裏『巨大な紙に軌跡を残す』
裏『三宅高校なう。』
他、計二四記事

【小澤慶輔】
一号　裏『意気込み！インタビュー　サバイバルのプロ五十嵐靖晃』
二号　表『くるり一周』
四号　裏『三宅島リサーチ経過報告』
五号　表『リサーチ期間終了』

【加藤文俊】
十四号　表『キックオフのあとで、考えた。』

【川村恵理】
十九号　裏『ひと足早い、クリスマス』

【喜多直人】
四号　裏『お土産を受け取りに。』

【佐藤悠】
五号　裏『生徒とのふれあい』

【新飼麻友】
一号　表『始動、三宅島大学！』
二号　裏『道具を通じてみるそれぞれの旅　上地由衣さん』
三号　表『水中スケッチ大会行われる』
四号　表『伊ヶ谷港に高速ジェット船あらわる』
他、計九記事

【関取花】
十九号　裏『初　三宅島でともった灯』

【高木静香】
一号　裏『意気込み！インタビュー　加藤文俊教授』
二号　表『スケッチブックに描かれた三宅島』
三号　表『水中スケッチ大会行われる』『大久保浜はステージ』
六号　表『お待たせしました！「あしたばん」』

【廣野吉隆】
十八号　裏『島びより「怖い」という気持ちがどこかにあった。』

【仲尾千枝】
七号　表『まだ見ぬ三宅島を思う「ロック～わんこの島～」』

【長富将成】
一号　裏『意気込み！インタビュー　加藤文俊教授』
二号　表『くるり一周』
三号　裏『一メートルのコミュニケーション』
四号　表『二時間／三年間にかける思い』
他、計八記事

【根岸明子】
十八号　裏『島びより　島の洗礼』

【橋本匠】
十四号　裏『僕の足、島の石、人の意思。』

【丸本智也】
十八号　表『ポスター完成！！「ポスターをつくろう」講座』

【三島麻里江】
十二号　裏『伊ヶ谷でビーチ相撲大会開催』
十三号　表『学生のあかし』
十五号　裏『優しさの味』
十六号　裏『島びより　島空模様』
他、計五記事

【水谷晃毅】
十九号　表『甘い香りと笑い声につつまれて～三宅島クッキーをつくろう～』

【村上慧】
五号　裏『半・島民になりたい』
八号　裏『海の教室』

【森部綾子】
三号　裏『島が好きで好きで仕方ないから』
号外一　裏『潮風をあびながら』
五号　表『たくさんのありがとうを』
六号　裏『三宅島をふりかえってみる　島をあとに』
他、計六記事

【安野太郎】
八号　裏『三宅島大学開校式の為の音楽　メンバー募集』
十号　裏『神着太鼓の勝手な分析』

【吉田あんな】
号外三　表『初めての三宅島への思い』
十三号　表『いま、が響き続けるように』
十五号　表『ポスター完成！　～ご協力ありがとうございました～』
十七号　表『冬の三宅島へ―キャンドルをつくろう―』

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
3月3日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十一号

レディースパワー溢れる！

第二回三宅島レディース・ラン

濃いピンク色の公式Tシャツに身を包み、総勢一八〇名の女性ランナーたちが阿古体育館へ。三月三日、いよいよ第二回三宅島レディース・ランが幕を開けた。ひな祭りでもあるこの日、前日まで天候が心配されたが、受付がはじまる十二時半には快晴！想いが天に届いたのかもしれない。

今年で二回目の開催、今回は島外から一〇一名、島内から八〇名のランナーが参加した。「昨年の十月に三宅島へ来たときに教えてもらって。完走を目指します！」と話すのは、今日朝の船で三宅島に到着した藤井彩子さん。「大会にはよく出ていて、来週も名古屋でフルマラソンに参加します」と、平本美佳さん。様々な方が、思い思いにこの大会に集まっている。

十キロ部門優勝者は、ゴールテープを切る瞬間までさわやかな笑顔で走りきった、高岩由さん。「寒いのに、沿道の方が応援してくださって。本当に楽しかったです！とにかく景色がきれいで。」コース内に通った溶岩で埋まる景色や、気持ちのよい海にとても気持ちがよくなり、思わずそのまま観光に行きたくなったとも話した。五キロ部門で一際目立ったのは、赤い『テレタビーズ』のキャラクター姿で登場した宮崎美砂代さん。三キロ部門でもピカチュウや茄子のコスプレをした方が見えたが、五キロ部門では唯一。



ニックネームを書いた名札をつけたランナー、沿道で名前を呼びながら応援する観客。思わず、手を叩き「がんばれ！」と声をかけている。それが自然に出てくる会場はとてもあたたかく、レディースパワーを強く感じた。



（大西　未希）

ウェルカムコーヒー

三宅島の朝は早い。竹芝桟橋からの船が朝早く港に到着すると、民宿の方達が看板をもって出迎えてくれます。降りたときは暗くて不安ですが、民宿の人の顔を見てほっとすることが出来る。それが三宅島毎朝の風景です。

私が島に来るのは今回で五回目になりますが、もちろん毎回島の人に迎えてもらう側です。しかし島の人のように、朝早く起きて船を迎い入れる体験をしてみたいと思いました。そしてレディースランに参加する人達に温かい飲み物を渡したいと思い、缶コーヒーですがラベルをつけて熱々にして、ウェルカムコーヒーとして渡す事にしたのです。

朝、暗い海の彼方から、輝く船が段々と港に近づいてきます。大きな船が接岸する様子に見とれ、次々と降りてくる人を見て眠気が吹き飛びます。まだ暗い中での「おはようございます！」そして「ようこそ、三宅島へ！」歓迎の気持ちをコーヒーに乗せて渡しました。

（EAT&ART TARO）

ついに開催！ポスター展

三月三日（土）阿古体育館で三宅島大学の講座「ポスターをつくろう」で制作してきた、民宿の女将さんにスポットを当てた十六枚のポスターの展示を開催した。阿古体育館はレディース・ランの会場になっていたため、島外からいらした方、島民のランナー、スタッフの方など多くの人びとに見ていただくことができた。





「さっき送ってもらったばかりです！」と宿泊している民宿の女将さんがポスターになっていることに驚かれていたり、「これ、見ましたよ」と島民の方だとすでに目にしていた方もいて、様々な反応があった。また、「あそこの奥さんって、こんな人だったんだー」という声が聞こえてきたり、「この方は、実はこういう人なのよ…」と教えてもらったり、島内外の人びとが入り交じる場で、一緒にポスターを眺めてお話するなかで、知らなかった側面も見えてきた。

なにより嬉しかったのは、ポスターのご本人ともふたたび会話をできたことだった。ポスターをつくって少し時間が経ってから、取材のときを思い出し、ポスターを貼ってもらったあとの反応などその後について話すひとときは、ちょっと気恥ずかしくなりながらも不思議なあたたかみのある時間だった。

（飯田　達彦）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

「史跡と文化を知ろう」講座

二月二十六日、三宅村役場にて講座『史跡と文化を知ろう』が行われた。この講座が開かれるのは二回目で、今回は「阿古と伊ケ谷の神々」についての講義がされた。講師は前回と同じ、元阿古中学校で校長を務めていた窪寺昇さんだ。講座に参加した方々からは「窪寺先生」と呼ばれ、親しまれている。

三宅島には驚くほどの数の神社が存在しており、その数はゆうに一〇〇を超えるらしい。三宅島に住んでいても、知っているようで知らない三宅島の神々について学べるということで、参加者は興味津々だ。私は前回参加できなかったこともあり、どのような講義が始まるのか楽しみにしていた。実際に見慣れている写真が出てきて、その中で私たちがあまり注目していなかった模様や、書かれている文字などについて丁寧に説明したり、たまに手書きのイラストで紙芝居の紹介や、実際の音声を交えて説明したりするなど、多くの工夫がされていた。話を聴いていると、実際にそこに行きたい気持ちが芽生え始めた。この目で一つひとつ確かめながら、窪寺さんの説明が聴きたいと思った。祀られている神々の関係や、各地区との関わりを知ることは、また違った角度から三宅島を学ぶことができて面白い。参加した島民の方々にとっては、きっと自らのルーツを知るひとつの機会ともなるだろう。

講義が終わったあとも、参加した学生たちは積極的に質問や会話をする姿が見られた。知っていることを話す。知らないことがあっても、別の誰かが知っていることだってある。そして、それが新しい知識へと結びついていく。それが面白いよ、と窪寺さんは言う。それこそが「島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。」という三宅島大学のコンセプトなのだ。

（上地　里佳）



とれたてを捌こう！「魚の捌き方」講座

二月も終わりが近づいてきて、三宅島ではだんだん春の暖かさが感じられるようになってきた。二十五日、伊豆避難施設の厨房にて『「魚の捌き方」講座』が行われた。

講座には、主婦から若者、おじさんたちまで、多くの老若男女が参加した。講師の木村吉行さんは、坪田地区で割烹『池吉』を営んでいる方で、参加者と和気あいあいと話しながら講座が始まった。今回捌く魚は、『ムロアジ』『カツオ』だ。参加者で五、六人のグループをつくり、三枚下ろしをするための下ごしらえを行った。まず、最初に木村さんのお手本が披露される。あまりの手際のよさに、参加者からは感嘆の声があがった。木村さんは「自分でやらないと覚えないよ」と言い、参加者は早速包丁を手にとりながら、その方法やコツなどが説明された。そして、それらを刺身に切っていく。興味深かったのは、魚の上身と下身で切り方が違うということだ。皿への盛りつけ、また実際にお客様に出して食べるときのことを考えて生まれた、昔ながらの細やかな気配りだった。魚を捌くことから、日本の文化を少し垣間見ることができた気がする。何事にも理由があって、切り方ひとつ取っても、「なぜこうなっているのか」という少し深い部分まで学ぶことができるのは、中々ない機会である。今回は刺身にするまでで講座は終了した。参加者たち、特に主婦の方々からは、「夕食が一品増えた」と笑顔で言う姿が見られた。今後、魚の骨格について学んだり、参加者同士で調理したりして、「魚を食べる」ことを学ぶ場を設けていくことができれば、さらに面白いものとなる気がした。

（上地　里佳）



三宅島エッセイ

島びより

三宅島の歩き方

鳥羽　彩加

初めての三宅島に胸を高鳴らせ、私は船から島に足を踏み入れた。

去年の終わり、たまたま手にとった三宅島大学のパンフレット。

三宅島＝噴火というイメージを覆す面白い取り組みを知り、ぜひ自分の目で見たいと思い船に揺られ初めての船旅に来た。

火山灰の黒さや透き通る水色の海に癒されながら、自然の景色に圧倒され、三宅の特産物に舌鼓を打ち、パワフルで温かい島の人との会話を楽しんだ。様々なスポットへ足を運んだが、中でも私一押しのスポットを紹介したい。

まず錆ヶ浜。ここへは本とおやつとカメラを片手に岩の上に座り読書を楽しんだ。

潮の香りに和みながら波の音をBGMに、都会のどんなお洒落なカフェでも味わえない有意義な時間を過ごすことが出来る。

次にひょうたん山。なだらかな斜面を登れば噴火口を見下ろす事が出来るひょうたん山はアウトドア好きなら一度は訪れたいスポット。火山弾を観察する事が出来るのはもとより、絶景も圧巻である。

四日間という短い時間ではまだまだ三宅島を語るには恐れ多い。次は虹を拝みに訪れたいと思う。



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
（平成24年）
6月22日
金曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十二号

今年もやります、伝えます！

島の魅力「女将さん」に迫る

昨年の三宅島大学の開校以来、慶應義塾大学加藤文俊研究室を中心に、島の民宿の女将さんを取材し、ポスター作成する活動を、今年も行うことになった。

同研究室は、三宅島の民宿の全ての女将さんのポスターを作ることを目標にしており、昨年九月の滞在中に四件、同じく昨年十二月の滞在中に四件、計八件の旅館に取材をし、ポスター制作を行った。今回の滞在中（六月二十二日～二十五日）に新鼻荘、つくば、オーシャンクラブNO．3、アンバージャック、モロミドの五つの民宿にそれぞれ二、三人のグループに分かれて取材を行う。

今回初めて三宅島を訪れたリサーチグループ最年少の環境情報学部二年の田中優里は「このリサーチの間に、三宅島の旅館の女将さんをインタビューし、そしてポスターを作らせて頂く。外から来る私たちを笑顔で旅館に迎え入れてくれる島の顔でもある女将さん。インタビューを通して、彼女たちの仕事への想い、島への想い、そして女将さん自身の魅力に迫り、素敵なポスターを作成したい。」と抱負を語ってくれた。

重要なことは、ポスターと言っても民宿の宣伝ではなく、あくまで女将さんのポスターということである。民宿の女将さんのお話を伺い、およそ一時間という短い時間の中で浮かび上がった女将さんの性格、ストーリーについて考察したうえで、女将さんの魅力が最大限に伝わる写真、キャッチコピーを考え、出来上がったポスターを通して、他者から見た女将さんの良さを再認識するというものである。

三宅島でポスターを作るのは三回目だが、毎回一枚のポスターでは表現しきれないほど魅力的な女将さんばかりなので、写真選び、キャッチコピーの決定作業も本当に時間をかけて行う。ポスターという限られた枠組みの中で、どうしたら女将さんの魅力が最大限引き出されるのか、中には夜通しかけて作業を行うグループもある。

出来上がったポスターは印刷して、御蔵会館にてプレゼンテーションを行い、その後取材先の民宿の女将さんに届けに行く予定だ。届けた時に、完成したポスターに驚く人もいれば、喜ぶ様々だ。今回はどんな女将さんに出会えて、どんなポスターが出来上がるだろうか。島の大きな魅力の一つである「女将さん」に会いに、今日も島を巡る。

（長富将成）



6月23日は、新鼻荘へこの三人で伺います！
田中優里　佐藤龍ノ介　大川朝子

船酔い日記

船での旅は、私にとって初めての経験である。乗り物酔いすることの多い私は、不安でいっぱいだった。周りに言われるがまま酔い止めを飲み、私は船に乗り込んだ。



船が出港するとレインボーブリッジの下をくぐり、都心の夜景を横目に見ながら東京湾を進んでいく。波の少ない湾にいる間は、船はあまり揺れないらしいが、この揺れでさえ私は限界である。

少しでも早く寝ようと思い、皆が酒を飲み盛り上がってきたところで床についた。寝てしまえば揺れなど関係ないのだ。そう思っていた私は、すぐに間違いに気付くことになる。

深夜三時ごろ、目が覚めた。狭いスペースで寝返りを打ったせいで起きてしまったのだろう。もう一度寝ようと目を瞑ると、激しい揺れが私を襲った。さっき起きたのも揺れのせいだったのだろう。不安と恐怖が私に降り掛かった。

このまま起きていては酔ってしまう。しかし、寝ようとしても揺れですぐに目を覚ましてしまう。そこで私は揺れと最後まで闘う覚悟を決めた。

それからは我慢の時間である。目を瞑り、雑念を捨てる。どんなに船が揺れたとしても、心までは揺れさせない。不動の心だけが私の支えだ。

そしてついに歓喜の瞬間がやってきた。船内にアナウンスが流れ、三宅島に到着した。私は闘いに勝利したのだ。荷物をまとめ、意気揚々と三宅島に上陸する。磯と山の混じった匂いを嗅ぐと、船での苦しみなど身体から逃げ出していくようだった。帰りの船での不安は隠しきれないが、晴れやかな気持ちと共に三宅での日々が始まりを迎えた。

（佐藤龍ノ介）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

ぽつんと生える草

河村裕次郎

初めての三宅島に心躍らせながら行きの船に乗る。実際は硬い二段ベッドに大きな揺れ。浅い睡眠に出鼻をくじかれた。島に着くと、体験したことのない大自然が。綺麗な青い海が大きな波をあげ、強風が吹き荒れ、目の前には大きな山。三宅島の大自然に圧倒され、眠気も吹っ飛ぶ。

宿舎に着き束の間の休息をとったあとは、バスで三十キロに及ぶ三宅一周道路を通り島内見学に出かけた。山手線とほぼ同じ距離ということで、ある程度島の大きさを把握することができた。火山ガスの影響で錆びやすいという環境の中、キーキーと鳴りながら走るバスは三宅島らしさを醸し出す。島の各所に解説が記載された、ジオスポット。が設置されており、三宅島のこと、火山のこと、自然のこと、様々なことをわかりやすく学ぶ事が出来る。

三宅島に来て最も強く感じたことは、自然の壮大さに他ならない。島に打ち付ける波や、生い茂る木々、大路池のような大きな池にも衝撃を受けたが、何と言っても火山の跡が凄まじかった。その中でも一九八三年に起きた噴火の跡を目の当たりにした時には言葉が出なかった。一見普通に積み上げてできたような岩の壁には、溶かされた車の一部が残っていた。火山流の直撃を受けた阿古小学校跡には生々しい被害がそのままの状態で残っている。壊れた黒板やロッカー、割れた窓、そして固まった溶岩は建物の三階部分にまで及んでいた。噴火被害の現実を目の当たりにし、自然の脅威を痛感した。



溶岩の中にぽつんと生える草。枯れた木の下には下草が生え渡っていた。過酷な環境下でも生き延びる、自然の壮大な生命力が目の前にあった。火山という自然の脅威と同時に、自然の力強さも感じることができた。また、このような厳しい環境下に住む住民の方々には、それ相応の覚悟があることを悟った。この草木のような光り輝く生命力が住民からも感じられた。

素敵な強い島

相原瑛里

船に乗って初めてきた三宅島は、波の激しい雨の日だった。三宅島と言えば火山が噴火した島で有名なので、山のイメージが強い。着いて私が真っ先に上を見上げると、山の頂上は雲に覆われており、島全体の荘厳な様をみたような気がした。

写真のなかで見るだけだった三宅島は、一体どんな島だろう——考えるだけでもわくわくした。宿に着いてから一行はバスに乗り込み、三宅村役場の須永禎晃さんに島を案内して頂いた。須永さんは島について沢山のことを教えて下さった。

須永さんに島を紹介して頂くに連れて、私は「ここは強い島だ」と思った。天気がその日荒れていたからということもあるかもしれないが、とにかくそう感じたのだ。というのも、住む人びとを含む島全体が「自然を受け入れ、自然と共に生きている」と感じられたからである。島の人たちは、火山噴火で溶岩の影響を受けても、それを新たな資源として島をつくっている。どんなに風が強くても、海が荒ぶっていても、ダイナミックで、島らしい」と言う。そして、溶岩の跡からどんどん自然が回復して行くところや、晴れた時に島から見える景色を「三宅島でしかみられない、素敵な風景だ」と言う。そう語る島の方のお話を聞いて、「ああ、この人たちは島と自然とともに生きているんだ」と感動を覚え、胸が熱くなった。島の人たちは、景色が良くても悪くても、風を感じ、自然を感じてそれを素敵だ、好きだと言うのだ。そういう姿を、私は素敵だと思った。集落や住んでいる地区は違えど、「三宅島の強い一体感」を感じる事が出来た一日であった。

初めての 三宅島の風

中田茉夏

どんよりと分厚い雲に覆われた、風の強い午前五時。ごつごつした奇妙な形の黒い岩が、私たちを迎える。ついに三宅島にやって来た。大自然に囲まれた孤島での滞在への不安を越えて、初めての土地を訪れる喜びと興奮が溢れてくる。

三宅島の気候は全く読めない。青空が見えたかと思うと、突然バラバラと雨が降ってきて、気がつくとびしょ濡れになっている。海の潮を乗せた風がすさまじい勢いで吹いてくる。台風などかわいいものだ、と思ってしまうほどの強風。知らぬ間に髪も顔もしょっぱくなっていた。

バスに乗って、島を案内してもらう。



この島が幾度もの大災害を経験し、それを乗り越えてきた土地であることは、事前に知っていたつもりだった。それでも、実際に大量の溶岩石やかつての学校の姿を目にすると、その迫力に圧倒されてしまった。わかっていたつもりになっていただけだった、と感じた。字を読んで学ぶことの限界を感じた。旧阿古小中学校跡では、かつてそこに息づいていた子どもたちの生活が容易に想像できてしまう。

夕食前に、海岸沿いをカメラと共に歩いた。めがね岩にぶつかる波のしぶきの勢いが凄まじかった。今日はまだ、三宅島での生活のスタート地点に立っただけ。明日から、島の人々とのコミュニケーションがとれることが今はとても楽しみだ。五感を使って全身で、この島の空気を精一杯とりこみたい。感じた全てのことを、持って帰りたい。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
6月23日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十三号

手作り手渡しのかわら版

慶應義塾大学加藤文俊研究室三宅島滞在二日目。今日は同研究室が発行している『あしたばん』を三宅島の各商店や施設に置いていただけるようお願いしに行った。

第一号から続くこの『あしたばん』は、毎号同研究室のメンバーが記事を作成するかわら版である。メンバーが三宅島に来てから体験したこと、感じたこと、考えたことなどを記事にまとめる。何度か三宅島に通っている人の新たな発見や、今まで三宅島とは無縁な生活を送っていた人の初上陸による強烈な印象が記事になる。当然、感性は人それぞれであるため、記事も多種多様であり、そこには書いた人の個性が宿る。

『あしたばん』編集者としての読者へのねらいは、私たちのような島外からの来訪者（編集者）が、三宅島に対する素直な印象、感情、意見を『あしたばん』にアウトプットすることにより、それを読んだ島民に三宅島の良さを再認識してもらうことである。そして、『あしたばん』を介して対面することで、本来お互いほとんど関わりのない島民と大学生の間に接点を生むことである。

自分たちで作成し、その設置を商店や施設へ自分たちでお願いしに行く、というこの一連の行程が、私たちと三宅島とのコミュニケーションに繋がっている。

そして、『あしたばん』はかわら版であるため、不定期ではあるが、この先もずっと継続していくものである。同研究室は定期的に三宅島に訪れているため、その度に新しい『あしたばん』を発行する。

今回持って行くのは、第二十二号。まずは以前より『あしたばん』を置いてくれている商店や施設に行き、新しいものに差し替える。「あしたばん歴」が長いところだと、「毎回ありがとう」と声をかけていただけることもある。今回は、元々『あしたばん』を置いていなかった商店や施設にも、新たに置いてもらおうとお願いしに行った。快く受け入れてくれるところばかりで、これからのコミュニケーションの広がりが大いに期待できる。今日もまた最高の『あしたばん』を作るため、同研究室メンバーはより良い言い回し、人を惹き付ける内容、あるいは制限文字数と闘うのである。

あしたばん設置商店、施設一覧

○坪田地区	○伊豆・神着地区
アカコッコ館	岡太楼本舗
木村電器商会	スナッパー
築穴商店	正大ストア
二幸商店	清漁水産
新鼻荘	ペンション・オレンジ
三宅島空港	ハウス・パロン
	三宅島酒造販売
○阿古地区	山下商店
北川商店	利八屋
共栄荘	（設置順）
シタヤマ	
ふるさとの湯	
ホテル海楽	
前田商店	
691	



（青山大毅）

料理の魔法

私は、料理ほど多くの人を簡単に幸せにできるものはないと思っている。そんな私にとって、三宅島の食材で食事を作れたことは、何よりも心に残る体験だった。

私は二人の研究室の後輩とともに、今晩の食事の調理を任命された。条件は、①ご飯もの②合宿らしいもの③簡単に作れるもの。Twitterでアイデアを募集したところ、カレー、中華丼、焼きそばなどの案が出た。しかし、ぱっとしない。三宅島だからこそ食べられるものは何だろうか。

考え込んだ私たちの目の前には、三宅島の人々からいただいた食材の数々。きゅうり、大根、じゃがいも、たまねぎなどの食材の他に、現地ならではのアシタバや、ニガタケもあった。話し合った結果、アシタバとニガタケの天ぷら、様々な調味料を入れたカレー、そして大根も入ったみそ汁という豪華な献立になった。

午後二時半に買い出しに行き、四時に私たちの滞在場所に着いてから、三時間に及ぶ調理が始まった。第一の関門は、カレーだ。私たちは少し冒険をして、ワイン、四種類のスパイス、さらにはグレープフルーツの果汁を加えた。さらにワインを加えることで、カレーが格段にまろやかになったのは発見だった。この献立の中で、私の一番のお勧めは、アシタバとニガタケの天ぷらだ。特にアシタバの天ぷらは、お酒と相性が良さそうな一品となった。

どんな食事も、自分と関わる場所や人との出会いによって初めて成り立つ。今晩は、様々な三宅島の人々の好意の上で成り立っている夕食だった。食材を通じて、私も三宅島のことを少し学び、三宅島の人に少し近づけた気がした。

（逢生まり）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ
島びより

女将さんに会ってきました

田中優里

三宅島滞在二日目。今日は新鼻荘の女将さんである平田節子さんに会ってきた。(なんと平田さんは三宅島大学の学生さん！　私は昨日学生になったばかり。)島外から来る私たちを温かく迎え入れてくれる女将さんであり、三宅島大学の先輩でもある平田さんにインタビューを行った。

「お客さんが財産だと、災害を通して気付いた。」と平田さんは言う。「一度は宿が災害でダメになってしまったが、お客さんが早く宿を再開してと応援してくれたから頑張れた。」と笑顔で話してくださった。そこから人と人との繋がりの大切さ、そして、お客さんが新鼻荘にまた来たいと思って応援するほど、この宿は皆に愛されているのだと感じた。新鼻荘の歴史について伺ったところ、平田さんはもともと宿を始めるとは考えていなかったそうだ。気づいたら人が家に集まり、宿になっていたと話す。私はインタビューをしながら、平田さんには人を惹き付ける魅力があるのだと思った。朝に採れた野菜をお裾分けしてくださり、美味しい調理の仕方まで説明してくださる。そして三宅島の自然の話をたくさん聞ける会話も楽しい。そんな平田さんに、また会いたいとお客さん同様、私もそう思う。

私たちはそんな素敵な女将さんの魅力を伝えるためポスターを作成している。撮らせていただいた何枚もの写真からその人らしいものを選び、言葉で表現し、ポスターでその魅力を表現する。平田さんの他にも四名の女将さんの紹介ポスターを作成するので、是非皆さんに見ていただき、少しでも島で活躍している女将さんを知っていただけると嬉しい。



島の風を感じる

和田勇人

土曜の島をグルグルと車で走った。日差しもあり、窓からは心地良い風が吹きこんでくる。

今回は本紙『あしたばん』の広報活動として、すでに設置している商店や民宿などに加えて新しく設置させていただけるお店などを探しながら島中を散策した。研究室メンバーそれぞれが島内の各地に散り、島の人とのコミュニケーションを取りながら設置のお願いをした。

伊豆・神着地域には以前にポスター制作にも協力してくださった民宿などがあり、最新号をお届けするとともに、最近の三宅島大学の活動などの報告をして会話に花を咲かせた。以前作ったポスターを飾ってくださっている民宿を見ると、自分たちの活動が浸透し始めていることを改めて実感する。新たに設置をお願いする場所のなかには、まだ訪れたことのない場所もある。そういった場所に関しては、まず一人でも多くの方に記事を読んでもらうところから始まる。なかには細い道を抜けた先、海沿いにあるまだオープン前のカフェなどにもお邪魔させていただいた。今後とも自分たちの活動に少しでも興味を持っていただけるよう、記事を読んでいただいたうえでお話をさせていただくことも出来た。

島では土曜にもかかわらずほとんど人が歩いていない。車もほとんど走っていない。きっかけがなければなかなか人とふれあうことも難しい。ドライブをしながら、窓からは心地良い風を感じた。

『あしたばん』とともに島を走り抜けた。

特別な島

尾内志帆

一九八三年。この数字は私にとって特別だ。同年の九月、私は群馬県で生まれた。その約一カ月後の十月、三宅島では大噴火が起こったという。初めて訪れる島なのにどこか親近感を抱いた理由は、これだけではない。初日に三宅島を観光する際、バスで案内してくださった三宅村役場の須永禎晃さんも、群馬県出身者だったのだ。不思議な縁を感じずにはいられなかった。

滞在二日目の今日は、研究室のメンバーとともに商店を訪ね回った。

御蔵会館を出発した車は、都道二二二号線を反時計回りにひた走る。後部座席からフロントガラス越しに眺める道は、一見変わった様子はない。しかし、しばらく進んでみると、エリアごとにさまざまな表情を見せた。商店が点在するエリア、民家を木々が囲むエリア、溶岩流が風景を生み出したエリアなど、同じ一つの島にもかかわらず、たくさんの「顔」に出会った。

三宅島のことをほんの少しだけ知ることができた。今度はこちらが自己紹介する番だ。目の前に広がる自然に「こんにちは」と語りかけた。耳を澄まして聞こえてきたのは、浜に打ち寄せる波の音。今度はレジに立つ店員さんに「こんにちは」と語りかけた。すると、いらっしゃい」という返事とともに、笑顔をくれた。

三宅島は、私にとって特別な島だ。

情報求む!!

探しています！「三宅高校ファッションショー」第一期生

「ファッションショーも、危機があったんですよ。二〇〇〇年の噴火の時に。つくっていた衣装を被服室に置いてきていた女子生徒がいて。私が被服室に取りに行ったんですよ。」と三宅高校の元教員・山本政信さん。心をこめて作った衣装が、なくなってしまう危機を乗り越えてもファッションショー開催をあきらめず、秋川分教校の予餞会にて開催。帰島後も途切れることなく、続いているとのこと。三十年以上も続くこの行事は家政科の生徒さんの発表の場として始まったそうですが、資料を追っても正確な年が今の所わかっていません。

こんなにも全校生徒のみなさんで一生懸命につくりあげようとして、途切れることのないこの舞台のはじまりには、どんな物語があったのだろうととても関心があります。正確なはじまりの年度や、起こったできごと、今ファッションショーへどんなことが引き継がれているのか、一期生の方へお聞きしたいと思っています。(大西未希)

◉一年目の舞台をつくったご本人の方、お知り合いの方、なにか情報をご存知の方は左記のメールアドレスまでご連絡ください！

m_onishi@sfc.keio.ac.jp

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
6月24日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十四号

三宅島は「ジャストサイズ」

ポスター制作活動二日目になる今日は、アンバージャック、オーシャンクラブNO．3、つくば、モロミド(五十音順)の四つの民宿の女将さんを取材させていただいた。取材といっても堅苦しいものではなく、自身についてあるいは世間話等することによって女将さんの魅力を探りだすお話し会のようなものである。このポスターは、取材者から女将さんに手渡す手紙のようなものでもあるが、それ以外にも女将さんから引き出した魅力を私たちがポスターという形で表現し発信していくことを通して、少しでも多くの方に改めて島に興味を持ってもらうきっかけを提供するという役割もあると思う。そんな風に考え、今回も素敵なポスターをつくりたいと思いながら、私はオーシャンクラブNO．3の女将さんアサヌマカズコさんの元に伺った。

三宅島を訪れるのは五回目の私であったが、オーシャンクラブNO．3を訪れることは初めてだった。前を通ったこともなかったので途中場所を間違えそうになりながらも何とか辿り着くことができた。そういえば三宅島へ出発するまえ大学から民宿に取材のアポイントの電話をかけていたときにふと思ったことがある。どうして「NO．3」なんだろう。帰り際にそのことを思い出しカズコさんに伺うと、旦那さんじゃないとわからない、とのこと。次お会いした際にはぜひお聞きしたい。

さて肝心の取材はというと、とてもお話のしやすい方で、カズコさんの笑顔に引き込まれ思わず一緒になって笑ってしまうことも度々あった。カズコさんはもともと東京都練馬区の出身だというが、昔から島が好きでスキューバダイビングをしに出かけていたそうだ。将来三宅島に住むなんて想像もしていなかった彼女が、いま三宅島のことを"ジャストサイズ"と表現する。近すぎる大島でもなく、大きすぎる八丈島でもなく、いろいろな意味で良い「距離感」をもった三宅島。三宅島を舞台にした私たちのこの活動と彼女が選択した三宅島、ここで会えたのも何かの縁かもしれないと思う。ずっと飽きられないような、思い出に残るポスターをつくりたい。



(新飼　麻友)

取材の取材
ビデオ班

今回のポスター制作の活動において、私はビデオ班だった。土日の二日間に渡って取材に出かけるメンバーに同行しその様子をカメラで撮るという、いわば取材の取材をする係である。インタビューをする訳でもなく、かといって取材をされる訳でもなく、インタビューがすすめられていくようすをカメラで記録し続ける。取材現場から一歩引いた第三者の目線から自分達の活動を観察することができる一方で、自分で何も出来ない歯がゆさを感じる係でもある。

二日間で私は二つの班に同行することが出来た。どの班を撮影していても、取材する人される人の両者に対して、自分が取材する時以上に心の動きに敏感になっていることに気付く。取材する学生側が緊張していれば、それは女将さんにも伝わり緊張した雰囲気が続いてしまうこと。しかし取材がすすむにつれてリラックスした様子がどちらかに見えてくると、次第にお互い笑顔が増えていくこと。取材をとおしてお互いの感情がまるで波のように伝わり合うことを、改めて感じた。

取材を終えた学生にインタビューすると、取材前の固い表情とは打って変わって晴れやかで嬉しそうな笑顔で答える。緊張からの解放によるものだけでなく、女将さんから感情が伝わってきたことへの喜びや、自分の思いが少しでも伝わった嬉しさに溢れた笑顔だ。

心の動きがなければ私達の取材は、味気ないただの作業になる。感情は単純且つ複雑で、それを伝えることは難しくそれでいて楽しい。もっと相手のことを知りたいという気持ちで、私達の取材活動は続いていく。(竹下　絢)

初めての見送り

色とりどりの紙テープを見ると、ちょうど一年前の今ごろのことを思い出す。たくさんのテープを持った『じぃ』の姿がだんだん小さくなっていった、あの日の景色は昨日のことのように覚えている。じぃは、片手にテープの束を持ちながらいつまでも手を振ってくれていた。風になびくテープの先にいるじぃと、その背後に広がる雄大な島の姿を目に焼き付けないと後悔すると強く思うほどに、心を揺さぶられた瞬間だった。

デッキから桟橋にいる私へテープが投げられ、慎重にキャッチする。出航の汽笛が鳴り響いた瞬間、テープを握る手にぎゅっと力が入り、港を後にする仲間たちに、私は大きく手を振った。あの日のじぃの気持ちをふと想像してみる。手の中のテープは目まぐるしい速さで回り、あっという間になくなっても、ずっとずっと手を振り続けた。

桟橋を離れる人は、海を渡るときも、船を背にするときも、少しの間ほんのちょっぴりさみしい気持ちになる。でも、家が近づくにつれて、次に会う日のことを思い浮かべて、笑顔になるのだった。

(森部　綾子)



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

車道をはずれて

三島 麻里江

三回目となる三宅島滞在。名所と呼ばれる場所はあらかた訪れ、都道沿いはほぼ把握できたと高をくくっていた。そんな折、『あしたばん』設置のためお邪魔したペンション・オレンジハウス・バロンにてママさんから興味深いお話を伺った。

二十四日の神着では七月十四・十五日に行われるお祭りの準備が進められていた。その話題から神社の話になる。三宅島には大小合わせ約百二十の神社があり、人口に対する比率は日本一の高さとも言われている。そのうちのひとつを教えてもらった。水の神様が祀られた祠が近くにあるという。そのそばには水がたまっており、昔は生活に必要な水を求めて人々が集う場所だったらしい。

初めて耳にする情報に胸を躍らせバロンの向かいの下道を行く。最初に車で通り過ぎただけでは見つからず辿り着けるかどうか不安になる。道端の木々を注意深く見ていくと大人ひとりがやっと入れるような獣道を発見。一列になって恐る恐る落ち葉を踏みしめていく。お気楽なサンダルで歩くのはなかなか厳しい。鳥が間近でさえずり木々が頭上からかぶさる小径はジブリ映画に出てきそうな雰囲気だ。

しばらくするとひらけた場所に出た。空を覆っていた枝葉もなくなり日の光が射しこんでくる。聞いたとおりの小さな祠とささやかな水たまり。この場所に人が集い、生活に必要な用を足し、はたまた井戸端会議をし、それぞれの家へと帰りまた集う様子に思いを馳せてみる。祠の前には榊が供えてあり、今も誰かが手入れしている気配がある。

なぜだかあたたかい気持ちになりながら車道へと引き返していく。この祠の存在から、時を超えて受け継がれる生活のにおいと自然への敬意を感じることができた。三宅島にはまだまだ知らない場所がたくさんある。そのことを強く実感した小さな冒険だった。



一年たちました。

上地 里佳

去年発行した『あしたばん』を見てみると、ちょうど去年の今ごろに創刊、発行していた。つまりは、初めて三宅島を訪れてからちょうど一年が経ったということなのだ。初めての船泊に興奮してあまり寝られなかったこと、噴火跡を見学して自然の雄大さに圧倒されたこと、『あしたばん』の取材をとおして多くの人に出会い、その夏のアルバイトまでもが決まったこと、本当に鮮明に覚えている。

しかし、一年前とは明らかに違っていることもある。三宅島の地区の位置関係は身体にしみ込み、簡単な道案内はできるようになった。ありがたいことに、困ったときに頼れる人もできた。また、今回の滞在では、前号でも記事になっているとおり、ポスター制作以外にも、島内の商店や施設に『あしたばん』の設置をお願いしに行っている。今日、『あしたばん』の設置をお願いしたのぼりや旗とピンがあった。これは、去年の八月に島に滞在していた際に制作したものなのだ。いつのまにか途絶えてしまっていた『あしたばん』の島内配布だったが、かすかにでもその形跡が残っていた。「なかなか来ないな～」と思っていたのよ」と言うコトバが素直に嬉しかった。島内を巡り、手渡ししていくことは地道な作業かもしれないけれど、それが今のわたしと三宅島の関係をつくっていることを、しみじみと思うのだ。



若い世代たちへ

廣野 吉隆

複雑で、考えれば考えるほどあまりよく分からない。いろんな人がいろんなことを話してくれるけど、そのすべてに頷いてしまう。というか、知ったふりをしてしまうときが多くて、どれも全部、所詮他人ごとみたいな感覚に浸ってしまっている。でもどこかでこの国の行く先に対するちょっとした不安が日に日に膨らんで、自分の小さな鍋みたいな器に、じゃぼじゃぼと放り込まれてゆく。

そんなことを思いながらも、僕らのような十七歳～二十二歳の若い世代は十年後には二十七～三十二歳になり、社会を背負う年代に近づいていく。その度に世代間の常識は変わっていって、どういう感覚でそのような価値観を共有できるかはとても重要なことだと思う。

僕たちのような大学生が三宅島になにができるのか。それは決して大それたことではないけれど、小さなことを一つひとつアクションに起こして、島の人々が少しでも笑ってくれればと願っている。もっと私たちがこの島の若い世代と連動して、良い未来にするためには今日をどう過ごすかをもっと考えるべきだ。未来の三宅島を支えるのはここに暮らす若い世代なのだから、彼らが今のうちになにもしないまま、東京で終わってしまうのはもったいない。十年後を担う人たちに、今の三宅島の状況が、十年後も続くとは限らない、僕らの出番がやってくるのだ、ということをもっと伝えていきたい。噴火を何回も乗り越えたこの島の人々には、そんな自然災害にも負けず、いつまも胸を張ってこの島を大好き、といえるほどの力があるのだから。

そんな中で過ごした今回の三宅島滞在では、この島がどれだけ美しい風土と自然に守られているか、ということを肌身で感じた。本島の人々たちに伝えていきたい。



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
7月31日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十五号

築穴パン屋の『つぶやき便』?!

八月一日より実施

あげあんぱん、パピロ、ミルクアーモンド…。三宅島では誰もが知っている島で唯一のパン屋、『築穴製菓』。そんな築穴製菓さんのパンの包装袋に、八月一日から約一ヶ月間、『築穴パン屋のつぶやき便』というラベルが貼られる。

この『つぶやき便』は、私、上地里佳が主導となり築穴製菓さんの協力のもと、修士課程の研究調査の一環として行うものだ。『つぶやき便』に掲載されているのは、築穴製菓の主人、築穴一也さんが、何十年も前から続けているカレンダーへの記録である。そこには、その日の天気や飛行機の就航状況、会った人や出来事などが記録されており、短い日記のようになっている。ある個人の日々の暮らしの様子からは、島の生活、時の流れ、島にある雄大な自然の変化を見ることができるだろう。それは、火山ともに逞しく、強く生きてきた三宅島を知ることにもつながっていくはずだ。

『つぶやき便』のラベルには、何年か前のその日に記録された内容が掲載される。ラベルは一日百二十枚、築穴パンの商品にランダムに貼られ、島内の各商店に配達される。見つけた際にはぜひ手に取っていただきたき、当時の三宅島に想いを馳せ、思い出すことのきっかけや、その思い出話に花を咲かせたり、知らなかった三宅島の一面を知ったり、『つぶやき便』が新たなコミュニケーションを生み出すメディアになってほしいと願っている。

これから一ヶ月間、『つぶやき便』に掲載されていく過去の日記から、島に想いを馳せてみよう。それは、当時のその日、どのようにして過ごし、どのようなことを積み上げてきたか、自分自身をふり返る一つのきっかけにしていただければと思う。

(上地 里佳)





ラベルを集めると賞品がもらえる！
詳細は裏面へ！

夏のはじまり

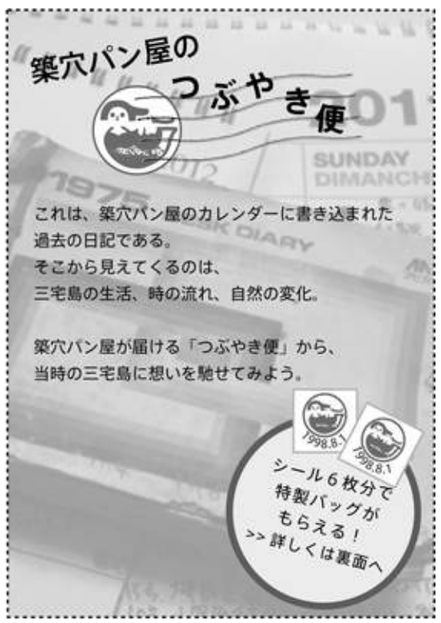
七月二十二日、第六十五回東京都中学校野球選手権大会の開会式が行われた。東京都駒沢硬式野球場は多くの野球球児たちで埋め尽くされ、大会の開幕試合となる一回戦は、なんと三宅中学校野球部の試合だ。対戦相手は、八丈島三原中学校である。

私は、三宅島滞在中に友人になった男子中学生からこの情報を聞き、しかも試合に出場するということで、彼の勇姿を見届けるためにも観戦へと出かけた。猛暑が続いていた都内だが、この日は涼しい天候に恵まれた。三宅島側の応援スタンドに向かうと、予想以上に観客が多く、中には野球部OBの学生や、家族連れ、教師、お年寄りといった幅広い人々が応援に駆けつけていた。試合前の練習がグラウンドで始まると、ボールが勢いよくミットに入る音が会場に響きわたり、フェンスにはえんじ色の校旗がくくりつけられた。練習風景を見ていると、つい声にして言いたくなるのか、「いいね～！」「もっと声出せ～！」といった声かけが増えていき、観客席は徐々に熱気を帯びていった。

先攻は三宅中学校。観客席は、ボールの行方で一喜一憂していた。アドバイスの声が飛び交い、おじいちゃんも腹の底から声を出していた。球児たちは、緊張しながらも声援を受けとめ、懸命に守備と攻撃を繰り返す。いつのまにか、私も名前を呼んで応援していた。スポーツ観戦には、大人も子どもも関係ないのだ。

残念ながら、試合は敗退という結果になってしまったけれど、最後まで全力投球で挑み続け、試合終了後にスタンド席に向かって礼をした姿には、ぐっと胸にこみ上げるものがあった。しかし、これで終わったわけではないのだ。次は八月下旬開催の離島甲子園。彼らの夏はまだ始まったばかりだ。

(上地 里佳)



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

二年分の熱気
～牛頭天王祭～

七月十五日、神着地区にて『牛頭天王祭』が行われた。去年行われた『富賀神社大祭』とは違い、この祭では神着地区だけを神輿が巡行する。去年は行うことができなかったこともあり、神着地区には二年分の熱気が満ちていたに違いない。前日となる十四日の夜には、御笏神社にて宵宮祭がひらかれ、帰省客や他地区の人々など多くの人が集まり、神着太鼓や盆踊りの音とともに、夜は深まっていった。

祭当日。私が神社へ到着したときには既に多くの人が集まり、神輿の出御をいまかいまかと待ち構えていた。神輿が出御されると、担がれた神輿は神着地区をくまなく巡行する。大久保浜では、子ども神輿が海に浸かり、子どもたちは海水に濡れながらも神輿を手放すことはなかった。神輿を担ぐことを楽しんでいる子どもたちの笑顔は、とても印象的なものだった。



神輿は、神着地区を巡行し終わると、御笏神社の一の鳥居前にて、木遣り歌と神輿を揉むことを繰り返す。木遣り歌とともに、ふらつきながらも休まずに神輿を揉んでいる姿は、神輿を担げる嬉しさと強い誇りを感じていた。私が特に感動したのは、神着の木遣り太鼓だ。太鼓の音が絶えないのだ。一つの太鼓を、絶妙なタイミングで次の人へ、そして太鼓の音はつながっていく。低くした姿勢、力強く太鼓を叩くその姿、バチが振り落とされるその瞬間、全てがかっこよく、惚れ惚れしてしまう太鼓だった。

神輿を奉納する時間が近づくにつれ、太鼓の力強い音は担ぎ手たちを奮い立たせ、参加者の気持ちは昂り、担ぎ手は最後の力を振り絞って、一の鳥居をくぐるために神輿を揉む。神輿が一の鳥居をくぐった瞬間、多くの人からの拍手と歓声が起き、神輿の担ぎ手たちは階段を駆け上がっていった。

（上地　里佳）

地域活性学会研究発表
三宅村全戸対象アンケートから

七月二十八日、高知工科大学にて行われた『地域活性学会　第四回研究大会』にて、三宅村での研究成果発表を行った。二〇一二年二月～三月に三宅村全戸からランダムに抽出した方へ、郵便にてふだんのコミュニケーションやIP告知端末の利用に関するアンケートを送付させていただいたのだが、今回の発表はその分析の報告を行うものだった。

アンケートを分析しながら驚いたことは、七割以上の方が「ほぼ毎日外出をしている」と答えており、直接顔をあわせてのコミュニケーション機会も多いこと。またIP告知端末についても、ほぼ毎日／最低でも週に一度使用している方がほぼ半数という結果だったことだ。コミュニケーション機会も多く、情報機器も使いこなしながら生活されているととらえられる。



今回の学会発表の準備のためこのアンケート結果を見つめていると、三宅村の滞在時に出会った方々が思い出された。避難施設に滞在していたときに、手づくりのお菓子をうれしそうに渡してくれたおばあちゃん。前に宿泊したことを覚えていてくれて、外を散歩中に声をかけてくれた民宿の女将さん。思えば三宅村に滞在しながら、三宅の方と触れ合うことのなかった日は一日もなかった。商店での買い物や散歩などという日常のなかでも、声をかけあう環境があったり、お裾分けをし合うコミュニケーションの機会があちらこちらに散らばっていた。アンケート結果と三宅村で出会った具体的な人を並べてみて、三宅村のなかでのコミュニケーション環境のリッチさを、また実感するのであった。

発表当日はぎりぎりまで緊張したが、改めて三宅村にはじめて来てからの一年を振り返る機会になった。アンケートにご協力いただいたみなさんには、心から感謝を伝えたい。

（大西　未希）

▼発表内容は以下のURLから閲覧することができます。
「東京都三宅村におけるコミュニケーション環境に関する研究：「超高齢化」「情報化」の現状と課題」（大西未希・上地里佳・加藤文俊）
http://web.sfc.keio.ac.jp/~monishi/miyake_research

『つぶやき便』を6枚集めてもらおう！

特製オリジナルバッグもらえる！



※この用紙を三宅島大学本校舎までご持参ください。
賞品の数に限りがあります。ご了承ください。

氏名：　　電話番号：

住所：

キリトリ線

『つぶやき便』詳細はコチラ！

【応募方法】
『つぶやき便』の消印部分の六枚分を一口として、右記の応募用紙に貼り、三宅島大学本校舎（阿古一八〇七ー一）までお持ちください。賞品と引き換え致します。留守の場合は、記載している連絡先までご連絡ください。

【注意事項】
●賞品は数に限りがあります。
●担当者不在の場合は、後日ご連絡させていただきますので、連絡先のご記入をお願いします。
●賞品のデザイン・仕様等は、変更になる場合がございます
●一回目のご応募の方から優先的に賞品をお渡ししています。あらかじめご了承ください。
●賞品引き換えの際に、十～十五分程度のインタビューを予定しております。

あしたばん

2012年
(平成24年)
8月9日
木曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十六号

三宅島大学を考える手引き
―ガイダンス講座開催―

八月五日、三宅島大学本校舎にて「三宅島大学」ガイダンス（入学説明会）が行われた。この講座は、三宅島大学の概要を説明するとともに、これまでの活動、現在進行中の活動の紹介など、改めて三宅島大学を考えるひとつのきっかけとすることを目的としている。

まず、猪股春香さんから今年の三宅島大学の講座の流れの説明が行われた。今年は既に講座日程が決まっており、八月四日～十一月十八日の隔週週末に八回開講される予定だ。基本的に土日に開講され、「海」「山」「人」をテーマとして、各講座が組み立てられていく。ぜひスケジュールを確認していただき、一つでも多くの講座を受講していただきたい。

私からは、本紙『あしたばん』、民宿の女将さんのポスター制作についての紹介をさせていただいた。私たちは、三宅島滞在をとおして、見て、聞いて、感じたことを素直な思いで発信しつづけてきた。『あしたばん』やポスターを制作することによって生まれた島民の方とのつながりや、島民側が改めて島を知るきっかけとなったこと、といったこれまでの活動紹介をおこなった。

また、インターネットを介したビデオ通話を利用して、慶應義塾大学の加藤文俊教授にも参加していただいた。加藤先生からは、十八日から始まるキッズリサーチについてお話していただいた。キッズリサーチでは、午前中に学校の勉強を教え、午後は子どもと一緒になって島を知り、世界を知り、時には子どもたちが先生となる。子どもを通じて、島を知るのだ。決して一方的な関係ではなく、互いの学びの場となる講座を行っていく。

最後は『三宅島在住アトレウス家』について、長島確さんからの紹介が行われた。『アトレウス家』とは、ギリシャ悲劇に登場する家族の物語を借りながら、その家族を通じて家やまちを見つめ、住まいや暮らしを考えるプロジェクト…らしい。ここで「らしい」と書いてしまうのは、彼らが何者なのか私の中でまだ整理ができていないからだ。演劇でもなく、ワークショップでもない、けれど「何か」を表現し続けている彼ら。そんな彼らは今回、三宅島とほぼ同面積である山手線、この二つを重ね合わせた地図を製作し、公演に向けてのリサーチを行っている。三宅島と山手線。異なる二つの場所を重ね合わせてみると、大学本校舎は代官山エリア、村役場は渋谷区役所にほど近く、三池港は東京駅付近…と、場所同士がゆるやかなつながりを思わせてくれる。その感覚が不思議で、面白くて、山手線を知っていればいるほど、島を知っていればいるほど、自分の中にある地図が刺激されていくだろう。

これまでの活動を島民の方々に改めて話す。あるようでなかった機会に、自分自身で考え、三宅島大学を考え、それを島民の方々に話すということはとても貴重な機会をもらえた講座だった。

（上地　里佳）

夏の若おかみへ

「いってらっしゃ～い」「おかえりなさ～い」

何気ない一言だけれど、そう言ってもらえると嬉しい。玄関先で見送ってもらえると嬉しい。そう言って私たちを見送ってくれるのは、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）の常駐マネージャー、猪股春香さんだ。三宅島には七月初旬に来たばかりで、滞在してから約一ヶ月が経とうとしている。三宅島大学のアートコーディネーターとして講座の組み立てや進行をおこなっており、島民の方々や施設利用者からは、「はるちゃん」や「おかみ」という愛称で親しまれている。私も、「はるちゃん」と呼ばせてもらっているひとりだ。今回は、若おかみ「はるちゃん」を取材させていただいた。



私が初めてはるちゃんに会ったのは、神着地区で行われた『牛頭天王祭』の前日、本校舎にふらっと立ち寄ったときのことだ。やわらかい関西弁に、めいいっぱいの笑顔で話をするはるちゃんに、こちらも自然と緊張がほどける。三宅島に来る前にはルーマニアに滞在しており、帰国してすぐ三宅島にやって来たというフットワークの軽さには脱帽である。初めて三宅島に降り立った朝、「とうとう来てしまった」という不安な思いもあったが、目の前にそびえる雄山、ところどころ枯れてしまっている木々、プレートをかかげた民宿の方々の朝迎え、これまで知っていた島とは異なる光景が広がる三宅島は、なにもかもが新鮮で、驚きに満ちていたという。今では多くの島民の方々から声をかけられたり、お裾分けをもらったり、地域での活動に積極的に参加したりしているところからは、三宅島での生活が充実したものであることが伝わってくる。

「人間がすごく好き」、というはるちゃん。誰にでも、どんなことにでも興味を持ち、真摯に聴き、素直に聞くのだ。それが心地よくて、いつの間にかはるちゃんファンになっている人は少なくない。「三宅島大学をとおして、大学時代にできる友人のような関係性を築いていきたい」と言うはるちゃん。今後どのような三宅島大学生活を送っていくのか、これからとても楽しみだ。

（上地　里佳）

おすそわけの三宅島茄子でお料理



まるくぎっしりとして、重みのある茄子が十本以上。濃い緑色のおおきなゴーヤ、これも十本。たまねぎ、きゅうり、キムチ…。八月七日、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）に到着した朝、台所にたったわたしは驚いた。前回ここに来た時はがらんとしていた冷蔵庫に、たくさんの食材が並んでいた。こんなに充実していたっけ。

先に到着していた上地、管理人の猪俣さんに聴いてみると、「これは○○さんから…」「こっちは■■さんからで…」とおすそわけしていただいたものだとわかる。これまでも滞在中に何度も食材をいただく機会があったのだけれど、この冷蔵庫の充実度はすごい。

食材を見ていて、いただいた方の顔が思い浮かぶ。

わたし自身は東京生まれ東京育ち。近所の方ともののやりとりをしていたことはあったけれど、「田舎からたくさん送ってもらったから！」と林檎や桃などの、果物をお裾分けし合うようなことしかなかった。おすそわけはこういうもの、とどこかで思っている節があったのかもしれない。こんなにたくさん食材をいただくことに驚きながら、素直にとてもうれしいと思った。

さて、と両手に茄子とゴーヤを手に取り考える。たくさんあるので、いろんな料理で食べられたほうがいい。そうだ、浅漬けにしよう。ゴーヤを漬けたことはなかったけれど、めんつゆがあったので、どうにかなりそうだ。

夕飯までに浅漬けを漬けて冷やしたかったので、夕方に北川商店へ。「塩昆布ありますか?」と声をかけると、商店のおかあさんがわたしを覚えていてくれた。「今日は何をつくりますか～?」と笑顔で応えてくれる。茄子ときゅうりがたくさんあるから、浅漬けにしようと思っていると伝えると、「塩昆布で?」となんだか不思議そうな表情。浅漬けに塩昆布はわりとスタンダードだと思っていたので、こちらも不思議な気持ちになる。「三宅島の茄子は焼き茄子が一番おいしいのよ、生姜と一緒に」と教えていただく。なるほど、茄子の食べ方は三宅島ならではのものがあるんだと納得した。当たり前のことではあるけれど、長期で滞在しながら自炊をしていないと、わからないことがたくさんある。「三宅島の茄子は焼き茄子」の定番は、たくさん茄子を差し入れていただいたこの機会じゃなかったら知ることはなかったかもしれない。つくったものを、今度はお裾分けしよう。そしてこんなふうに少しずつ、三宅島の定番に触れてゆきたい。

（大西　未希）



『つぶやき便』を見ていてつぶやく

あしたばん編集部員、上地が修士研究のプロジェクトとして『築穴パン屋のつぶやき便』をはじめている（詳細は『あしたばん』二十五号参照）。朝シール貼りの準備にでかけ、夕方商品がなくらふ商店をまわり残数を確認しに行くというルーティーンを繰り返す上地を間近で見て、同時に三宅島内の「つぶやき便」の浸透も見ている。

八月七日は一日で二名、シールを集めてパックの引き換えに三宅島大学本校舎を訪れる方がいた。一日に開始しているので、毎日ひとつか、それ以上「つぶやき便」のシールつきパンを購入されている計算。このスピード感に驚いてしまう。

つぶやき便の内容も、パックと引き換えの際の話題になっていた。何年前かの今日、何があったか…は自然と話の種になる。ちょうど今ごろは富賀神社大祭のある日で、私自身も去年のことを懐かしんだ。築穴パックを持った人のまわりでは、「つぶやき便」の話題になるのだろうか。「つぶやき便」がまた次のコミュニケーションを生むようにみえて、とても楽しみだ。

（大西　未希）

『つぶやき便』詳細はコチラ！

【応募方法】

『つぶやき便』の消印部分の六枚分を一口として、右記の応募用紙に貼り、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）までお持ちください。賞品と引き換え致します。留守の場合は、記載している連絡先までご連絡ください。

【注意事項】

●賞品は数に限りがあります。

●担当者不在の場合は、後日ご連絡させていただきますので、連絡先のご記入をお願いします。

●賞品のデザイン・仕様等は、変更になる場合がございます

●一回目のご応募の方から優先的に賞品をお渡ししています。あらかじめご了承ください。

●賞品引き換えの際に、十～十五分程度のインタビューを予定しております。

『つぶやき便』を6枚集めてもらおう！

特製オリジナルバッグもらえる！



※『あしたばん』を切らずに三宅島大学本校舎までご持参ください。
賞品の数に限りがあります。ご了承ください。

氏名：　　電話番号：

住所：

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2012年
(平成24年)
8月19日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第二十七号

キッズリサーチ始まる！

～期間限定の「寺子屋」～



この看板が目印です。

明け方の四時半すぎ。東からゆっくりと昇る太陽とともに、船は島に到着した。もう何度目かになる三宅島への道中でも、下船する前にデッキに出て島の全貌をみることは初めてだった。夏も終盤に差し掛かり、涼しい風と静かな波の音がこれからの三宅島での活動を歓迎してくれているようだった。

今回、私たち慶應義塾大学加藤文俊研究室が島を訪れているのは、三宅島大学キッズリサーチを開催するためだ。キッズリサーチというとよく分からないかもしれないが、小中学生が大学生と一緒になって島について学ぶ交流の場であり、お互いがもっと島を好きになるためのプログラムでもある。たとえば私たち学生が、小中学生に島のお気に入りのスポットを教えてもらうことで、島の魅力をいつもと違う角度から感じることもあればまた、子どもたちが比較的年の近い「大人」とふれあうことで、自分の五年後や十年後をぼんやりと見つめる機会にもなる。時には夏休みならではのやり残した宿題を持ってきて、みんなと机を並べて勉強をする時間も楽しいかもしれない。

初日の十八日は午前・午後、延べ四人の子どもが遊びに来てくれた。夏休み親子プールに負けまいと、三宅島大学の看板に手作りのポップを貼ってアピールした効果があったかもしれない。初回だったので簡単なアイスブレイクも兼ねて一緒にゲームをしたり宿題に取りかかったりした。午後はカメラを持って外に出かけ、子どもの目線で島を切り取ってもらった。撮った写真は校舎に戻ってきてからデータを取り込み、みんなでそれを囲んだ。島に住む子どもならではの遊び場や空の風景が記録されており、目を奪われてしまうものばかりだった。これからも多くの子どもとふれあい、たくさんの記録を残していきたい。

午前は持ってきてくれた宿題を中心に、午後はカラダを動かしながら島で学ぶ。各日参加自由なのでお気軽にお越しください。夏休みの思い出に、ぜひ。（詳細は下記参照）　（新飼　麻友）

十歳と二十歳の男二人旅

名は、彦坂信也。現在十歳で、小学五年生。三宅島が好きで、海が好きで、なにより釣りが大好き。今日も平気で四時間釣りをした後、僕らの前に真っ赤な皮膚を携えて現れた。人見知りをしないようで、明るく社交的。お互い軽い自己紹介を終えた後、彼に三宅島におけるお気に入りの場所を教えてもらうべく、三宅島大学本校舎である御蔵島会館から、僕と彼の二人で外へ繰り出す。

釣り師である彼のお気に入りの場所は、つまり、よく釣れるポイントである。彼がよく釣りをしている錆ヶ浜周辺を一緒に歩くことにした。その途中、錆ヶ浜港への「秘密の近道」を教えてもらう。かつては草が繁っていたその道を抜けると、一気に海が開ける。海が見えたからか、お互い多少緊張がほぐれたようで、距離が縮まった気がした。

いよいよ彼のお気に入りの場所の一つである、錆ヶ浜港へ。彼はしきりに海面を指さしては、魚の存在を教えてくれる。「ほら、あそこの黒い筋は魚の群れ」僕には、目を凝らしても、いつもと変わらぬ海面にしか見えない。きっと、彼の目に映る海は、僕らが見ている海と違っている。三宅島の海は、透き通るほど綺麗。しかし、それは一般的な感覚で、釣り師である彼の目には、さらに澄んだ海が見えている。小さな魚の動きさえ逃さない。



三宅島の海はいつでも新鮮である。海に撒き餌をすると、そこに熱帯魚がたくさん集まってくる。横浜で暮らす僕にとって、その光景はあまりにも非現実的で、恥ずかしいくらい感動してしまった。彼にとってはそれが日常であり、むしろ熱帯魚には目もくれない様子。熱帯魚が去った後、お目当ての魚が来るらしい。

彼は、海のマナーをとても大切にする男だ。堤防や海岸に捨てられている空き缶やペットボトル、ビニール袋などのゴミを、必ず拾う。いつどこでそのゴミを処理できるかは分からないが、とりあえず拾う。他人が出したゴミを拾うなど、年齢問わずなかなかできることではない。彼は、それほど三宅島の海を愛していて、魚を愛しているのだ。マナーに年齢は関係ない。

彼と一緒に歩くことで、僕は多くのことを学ばさせてもらった。それは三宅島のことに限らず、釣り、魚、海におけるマナーまで。誰でも良かったわけではなくて、三宅島の彼と歩いたからこそ。彼も、僕と歩いたことで何か学べたのなら、とても嬉しい。朝は部屋で涼みながら机に向かって学んで、昼からは外で汗をかきながら動いて学ぶ。今ではなかなか見られない習慣が、ここでは根付いている。三宅島ならではの夏休み。

（青山 大毅）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島大学でとっておきを学ぶ

八月四日、三宅島大学本校舎にて「三宅島大学」二〇一二年度初めての講座が開講された。今回は島に住みはじめて間もない方や、初めて島へ来た方のための「三宅島」講座ということで、先月に三宅島へ来たばかりの私でも気軽に楽しめるテーマを設けた。

講師は中山吉人さん。実際に島で生活している島民ならでは視点から、分かりやすく三宅島の魅力を解説していただいた。

午前中は座学「島初心者のためのとっておき島ばなし」で、島と噴火との関係から教科書には載っていないようなディープな歴史まで、更に知識を深めたくなるような切り口で島の基本を学んだ。

午後は「島初心者のためのとっておき島あるき」として、島内探検を続けている中山さんのとっておきのスポットを実際に歩く。鬱蒼とした森の道を抜け、険しい岩場を進むと「為友の打ち抜き岩」の裏側へたどり着いた。そこには自然の力でハート型になった岩があり、参加者の皆さんは記念写真をパチリ。



島へ観光に来た方にとっては何も知らずにいたら見過ごしてしまうような、島内に住んでいる方にとっては「知ってはいるけど自分ではなかなか行かない」穴場的存在の、ちょっと特別な島の魅力を発見できた一日となった。

誰もが先生、誰もが生徒になりうる三宅島大学で、特別な資格ではなく島民の方が持つ「三宅島を愛する気持ち」に大きな可能性を感じている。

（猪股 春香）

盆踊りにアンコール

今年もお盆の時期になった。昨年発行の『あしたばん』九号でも、坪田地区の盆踊りの記事を掲載している。同じ行事を取り上げられることは、なんだか感慨深いなあと思う。とはいえ、わたしは今年はじめて参加するので、どんな雰囲気だろうと楽しみにしていた。

八月十一日～十二日は坪田地区、十三～四日には阿古地区の盆踊り。坪田地区盆踊りは前日まで雨予報だったので心配していたけれど、無事開催。旧坪田小学校グラウンドにはちょうちんが並び、射的や焼き鳥などの食べ物の屋台が出て、音楽や人のにぎわいの音ではなやかだ。あちらこちらで、「あー、こんばんはー！」という挨拶の声がきこえる。

「踊って踊って！」と声をかけてもらって、輪に入ってみる。見よう見まねでトライ。前で踊る方に「ああ、難しいです！」と話しかけると、振り返りながら教えてくださった。「右、左、右…。」と進みながら少しずつ、振りの順番に慣れてくる。恥ずかしさも消えて、思わず笑顔になる。

盆踊りに参加するなんて、何年ぶりだろうか。わたしのようにまわりを見ながら踊っている人はおらず、手をしなやかに動かしながら、全力で踊っている。最後の曲だと思ったら、「アンコールします？」と声があがる。これはじめてのアンコール、アンコールに経験だった。アンコール！この夏の夜をみんなで楽しむ気持ちが感じられる「アンコール」だった。

（大西 未希）

一年ぶりの島市



三宅島に初めて足を踏み入れてからちょうど一年が経った。その夏、初めて参加させて頂いた時も三宅島漁協駐車場だった為〝島市〟というとこの場所が印象的だ。

会場に近付くにつれて陽気な音楽と商工会女性部の皆さんの元気な笑い声が聞こえてくる。

十一時開始前に配られる整理券は持っていたが、やはり十二時を過ぎるとほとんどが売り切れてしまう。三宅島の野菜はみずみずしく野菜本来の甘みが味わえる、と私たちも自炊をしながらその美味しさを感じている。

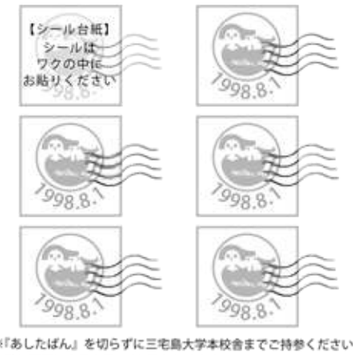
焼きそばやコロッケの香ばしい香りが私たちの食欲をそそる。惑わされながらも、私はその中から「うまかか棒」を選んだ。ムロアジのすり身に人参などの野菜を混ぜて揚げたこれはもう一本と手を伸ばしたくなる美味しさだ。出来たてをほおばりながら青々とした海を眺める。なんとも贅沢な日曜日のお昼である。

皆が自分たちの三宅島を愛しく、誇りに思っている。島市はそれを中からも外からも実感できる場所なのかもしれない。太陽に照らされた海面のように今日の島市も活気にあふれていた。

（吉田 あんな）

『つぶやき便』を6枚集めてもらおう！

特製オリジナルバッグもらえる！



※『あしたばん』を切らずに三宅島大学本校舎までご持参ください。
受付期間は8月1日～31日となります。

氏名：　　電話番号：

住所：

『つぶやき便』詳細はコチラ！

【応募方法】

『つぶやき便』の消印部分を六枚分を一口として、右記の応募用紙に貼り、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）までお持ちください。賞品と引き換え致します。留守の場合は、記載している連絡先までご連絡ください。

【注意事項】

●賞品は数に限りがあります。
●担当者不在の場合は、後日ご連絡させていただきますので、連絡先のご記入をお願いします。
●賞品のデザイン・仕様等は、変更になる場合がございます
●一回目のご応募の方から優先的に賞品をお渡ししています。あらかじめご了承ください。
●賞品引き換えの際に、十～十五分程度のインタビューを予定しております。

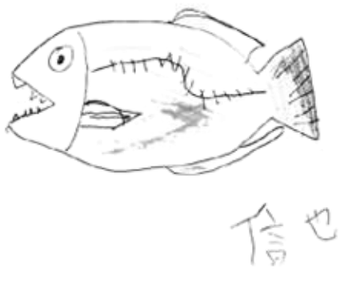
三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
（平成24年）
8月23日
木曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
夏休み特別号

キッズリサーチ五日目は、十人の子どもたちと「あしたばんづくりにとりくみました。きじのテーマは「三宅島のすきなところ」です。じぶんのすきなことについて、もういちどかんがえてみたり、ほかのおともだちのきじをよんでいろいろないいところをしりましょう。





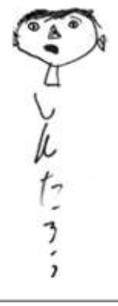












この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

あしたばん

2012年
(平成24年)
8月25日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十八号

子どもたちの力作揃い
～発表会を開催～

八月十八日から始まった、三宅島大学の夏休み限定講座「キッズリサーチ」。小中学生を対象としたこの講座は、慶應義塾大学加藤文俊研究室の学生たちと小中学生たちが、共に教えあい、学び合うことのできる場を目指し行われてきた。開催初日には数人しかいなかった子どもたちも、日ごとに増えていき、大学生たちを圧倒する元気さで取り組んでいた。

午前中は、主に宿題や持参した勉強を教室で共に取り組み、午後はテーマに沿ったものをつくりに外へ出かける。カメラを首から提げた子どもたちが二、三人で島を歩いている様子は、一見すると遊んでいる様に見えたかもしれない。けれど、自分たちの目で探し出して見つけること、そしてそれを写真や映像、新聞やイラストなどに表現することは、自分のからだで実際に体験して分かる大切な「学び」だ。鉛筆を持ったいつもの「学習」とはまた違う学びを、この講座を通して子どもたちに感じてもらえたのではないだろうか。

そして何より、たくさんのことを学んだのは、子どもたちよりも私たち学生の方だ。三宅島から見える島や海のこと、虫や魚のこと、港に到着する船のこと、そして子どもたち自身のこと。これらは島に暮らしている彼らにとっては、当たり前のことかもしれない。しかし、学生たちの普段の生活の中では気付くことの出来ないものの見方や、それを表現する言葉を教えてもらった。数人に分かれて行動するとき、誰もが率先して協力し、すぐに一つの「チーム」をつくる子どもたち。そうして出来たチームを動かす行動力と団結力にも驚かされた。



そんな九日間の講座も終わりに近づき、いよいよ最終日である八月二十六日は発表会を行う。子どもたちがつくったものの展示や、学生たちが子どもたちに向けて作成したポスター等を三宅島大学本校舎にて展示し発表する。子どもたちは勿論、保護者の方や、今まで参加したことのない方も入退場自由である。子どもの視点からとらえた三宅島を、様々な人に見に来て欲しい。

（竹下　絢）

▼キッズリサーチ発表会

【日時】八月二十六日（日）
【場所】三宅島大学本校舎　（御蔵島会館）
【時間】十時～十二時
（途中入退場自由）
【対象】どなたでもお越しください

それぞれの想い

八月一日より始まった『つぶやき便』（詳細は二十六号を参照）。早いもので、実施期間は残すところ一週間となった。開始してからの三週間、なんと計三十二名の方がシールを集めた台紙を持参してくださり、賞品との引き換えをさせていただいた。

『つぶやき便』を始めてみて、少しずつではあるが『つぶやき便』の反響をじわじわと感じている。引き換え第一号の方が三宅島大学本校舎（御蔵島会館）に来てくださったときの感動と嬉しさは、今でも忘れられない。他にも、商店とお客さんの会話の種になっていること、ツイッターへの投稿や、消印部分を切り取ったあとに手帳に貼っている人、差し上げたバッグを実際に使用している人との遭遇など、『つぶやき便』をとおして、島民の方との新たなつながりが生まれている。『つぶやき便』は自身の修士研究における調査の一環として行っているものであり、賞品の引き換えをする際、任意でのインタビューをおこなっている。実際にインタビューをしていくと、『つぶやき便』から生まれた島への想いや、人への想いに触れることができている。

「この台紙は、絶対に持って行こうと思ったの」と、シールが貼られた台紙を本校舎に持参してきた女性がいた。台紙を届けることによって、この取り組みを見ている人がいて、そしてそれを応援しているという気持ちを伝えたかったのだという。『つぶやき便』シールを集めた台紙が、何十年もの間、島でパンを製造し続けている築穴製菓へのラブレターになっていたのだ。「バッグはその記念なの」と、島と人を想う彼女の存在に、なんだか私まで嬉しくなった。このインタビューは、もちろん『つぶやき便』に関する話を聞くのが一番の目的ではあるが、これまで話をする機会がなかった島民の方々と話をする機会が得られたことで、本当に多くの、様々な想いに触れることができている。



島は、新しいことに敏感だ。『つぶやき便』を始めた当初は、「よくわからない」といった反響が耳に入ってくることが多かった。そのような声が多く聞こえてくるのは、多くの人が島を想い、人を想っている証拠なのではないだろうか。これを実感することができたのは、『つぶやき便』を始めたからこそだと思う。

（上地　里佳）



みんなの描く島

二十一日の午後、子どもたちとみんなで港へ見送りに行った。空は澄んでいて、遠くの島までよく見え、雲の白さがいつもより際立っていた。子どもたちは、一人一本ずつ紙テープを持ち、離さないようにしっかり持つのに集中していたかと思えば、手元からテープが離れたあとは、すぐさま桟橋の先まで手を振りながら全力疾走。そのまま海に落ちてしまうのではないかと本気で心配してしまうほどに、子どもたちの勢いはすごいものだった。

船が、真っ青な海をぐんぐん進んでいくなか、子どもたちは、桟橋に腰を下ろし、それぞれが好きな景色を切り取って、描いていく。この日の午後の授業は「イラスト」。同じ場所にいても、少し見る方向が違うだけで、全くと言っていいほど異なる景色が広がっている。海と三本岳を描く子もいれば、山を描く子もいて、たくさんの三宅島の表情を見てとることができた。

校舎に戻ってから、小さな画用紙をみんなで協力して貼り合わせた、大きな画用紙の周りをぐるりと七、八人の子どもが囲んだ。「今度は、みんなで三宅島を描くよ。みんなでひとつの絵を完成させるんだよ。」とだけ声をかけて、私はそっと見守ることにした。

あれも、これも描きたいと子どもたちのアイデアが次々に出されていく。各々が、好き勝手に描くのではなく、みんなで大きな絵を一枚。子どもたちは相談を繰り返し、色鉛筆やペンを譲り合いながら、真っ白だった画用紙をあっという間に彩っていく。気づけば、真ん中には三本岳が描かれ、空にはきれいな虹がかかり、何色も重ねられた色鮮やかな海の中にはたくさんの魚、海の上にはみんなが乗ったロケット、左手にはそびえ立つ雄山。みんなで力を合わせなければ完成しなかった、一枚の三宅島の絵が、教室の窓際に飾られた。一人ひとりの思いが団結すると、まだまだ身体の小さな子どもたちでも、こんなにも大きな力になるのだと、この一枚の絵を通じて教えてもらった瞬間だった。ありがとう。

（森部 綾子）



子どもたちの 兄貴

八月二十一日、はじめて島に足を踏み入れた。船が海に接岸したとき、湿気を含んだ風は硫黄のにおいがして、三宅島に来たんだと実感した。

今回のキッズリサーチでは、島の子どもたちとたくさんの時間を過ごしている。毎日小学生が多く来てくれるなか、普段あまり子どもと接する機会がないわたしは、彼らの底抜けの元気っぷりに驚いた。子どもたちのパワフルさとどう付き合えばいいのかわからず、空回りしていた。今思えば、そのときの緊張が伝わり子どもたちも気張ってしまい、わたしたちに強くぶつかってきていたような気がする。

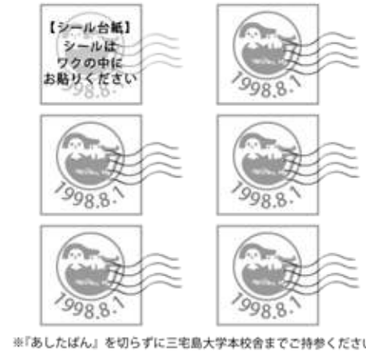
そんな戸惑いを感じていると、教室にひとりの男の子が現れた。彼は中学一年生で、部活を終えてから覗きに来てくれたらしい。教室に入ると、「あ！」「来てくれた！」。一斉に子どもたちが集まってきて、彼らからみんなの兄貴として慕われているのが伝わった。彼が口を開けば、子どもたちも落ち着いて耳を傾けている。そして彼自身も、子どもと対等に接していた。子どもたちがなにかをやらかしたときも、頭ごなしにそれを止めるのではなく、ひとりひとりの名前を呼んで理由を話し、注意していた。しかし、最後には子どもの笑顔をとり戻している。伝えることに手抜きをせず、芯を持っている姿がとても印象的だった。自分が小学生のときを思い返せば、中学生はまるで遠いところに住んでいるような存在で、甘えたり、叱られたりすることがなかったから、うらやましく思う。

夕方にスイカを切り、外へ出てみんなで揃って食べていた。ふと、兄貴が食べ終わったスイカの皮を草っぱらへ投げる。すると次々に、「おれも」「わたしも」と真似をして、皮を投げていた。なんてことのない出来事だが、それを見て、こうして年上の人の背中を見ながら、一緒に遊んだり、真似をしたり、叱られたりして、子どもたちは大きくなるのだと思った。彼らとの時間ものこり少し。兄貴を見習いながら、いっしょにいる時間を大切にしたい。

（龍山 千里）

『つぶやき便』を 6枚集めてもらおう！

特製オリジナルバッグもらえる！



※『あしたばん』を切らずに三宅島大学本校舎までご持参ください。
受付期間は8月1日～31日となります。

氏名： 電話番号：

住所：

『つぶやき便』詳細はコチラ！

【応募方法】

『つぶやき便』の消印部分を六枚分を一口として、右記の応募用紙に貼り、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）までお持ちください。賞品と引き換え致します。留守の場合は、記載している連絡先までご連絡ください。

【注意事項】

●賞品は数に限りがあります。

●担当者不在の場合は、後日ご連絡させていただきますので、連絡先のご記入をお願いします。

●賞品のデザイン・仕様等は、変更になる場合がございます

●一回目のご応募の方から優先的に賞品をお渡ししています。あらかじめご了承ください。

●賞品引き換えの際に、十～十五分程度のインタビューを予定しております。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2012年
(平成24年)
9月14日
金曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第二十九号

キッズリサーチ、一日復活！

～九日間をふり返る～

九月十四日、私たちは三宅島に到着した。八月に三宅島大学キッズリサーチを終えて島を後にしてから、二十日ぶりの三宅島である。

キッズリサーチは、私たち慶應義塾大学加藤文俊研究室が八月十八日から二十六日までの期間に三宅島大学で行ったプロジェクトだ。島の子どもたちと大学生たちが一緒に島の魅力を学ぶことを目指し、盛夏の三宅島を歩いた。テーマに沿って写真やビデオに撮り、イラストや新聞にまとめた。普段子どもたちにとって「当たり前」である島をもう一度歩き、感じたことを表現する活動を通して、子どもたちだけでなく私たち学生にとっても多くのことを学ぶことができた。

キッズリサーチ最終日には、子どもたちがつくったものと、学生たちが作成したポスター等を展示し、一緒に発表会を行った。当日は今まで参加してくれた子どもたち、そして保護者の方も三宅島大学に足を運んで下さり、あっという間の九日間は幕を閉じた。

そして今回、一日だけのキッズリサーチを開催する。夏休みのキッズリサーチを通して具体的にどのような活動が行われたのかを、子どもたちがつくった成果物や、学生たちの記録ビデオ、写真を見ながら振り返り、講座の概要や経過を紹介する。学生たちからは期間中にお世話になったたくさんの感謝を込めて、活動をまとめた冊子とDVDを「おみやげ」として準備してきた。キッズリサーチに今まで参加した子どもたちは勿論、少しでも興味のある方はどなたでも気軽に参加して欲しい。

たくさんの方のご来場をお待ちしています。

（竹下 絢）

▼「キッズリサーチ」を振り返る

【担当】加藤文俊研究室
【日時】九月十五日（土）
【場所】三宅島大学本校舎
（御蔵島会館）
【時間】十時～十二時
（途中入退場自由）
【対象】どなたでもお越し下さい



ポスター制作の裏ガワ大公開！！

私たち加藤文俊研究室はこれまでに、岩手県釜石市、新潟県上古町、和歌山県田辺市など全国各地様々な場所へ行き、その「まち」でくらす人々にスポットを当てたポスターを制作している。取材としてのインタビュー時間を頂き、その中でその人の魅力を掴む。取材中に撮った写真からその人らしさを感じさせるものを選び、キャッチコピーを考える。取材ペアと意見を交わし、試行錯誤を繰り返しながらその晩中にポスターを完成させる。その場で作り、ご本人に直接手渡しすることが大切なのだ。そのポスターから生まれるコミュニケーションを私たちは望んでいる。自分達の暮らすまちの魅力を改めて見つける。「あら、こんなこともしていたのね」そんな会話から繋がるのもきっと楽しい。

実はこの三宅島でも実施しているのをご存じだろうか。ひと月前からは各港に三宅島の子供たちの笑顔がある（※右記参照）。この三宅島でのポスター作りは丁度一年前の台風直後に始まった。三度行っており、民宿の女将さんシリーズだけで既に三十弱ものポスターが出来上がっている。

そして今回は、そんなポスターが皆さんの目に触れるまでどのように作られていくのか、制作の裏側を見て頂きたい。活動としてはもちろん初めての試みである。

今回の講座で題材となる取材は十四日にご協力頂いた伊豆・神着地区にある〝三宅島パーディ〟だ。ダイビングを目的に島へ来るお客さんが多いようで、外にはウェットスーツがいくつも干してある。ハイビスカスが囲むように咲くプールもついており、小さなペンションにグループごとで泊まることが出来る。ここは私も宿泊させて頂いたことがある。シャイで可愛らしい女将さんが、どのように表現されるのか楽しみだ。

（吉田 あんな）

▼三宅島ポスタープロジェクト

【担当】加藤文俊研究室
【日時】九月十六日（日）
【場所】三宅島大学本校舎
【時間】十時～十二時
（途中入退場自由）

キッズの魅力

先月キッズリサーチを開講していたとき、私たち学生のあいだでもう一つ動いていたことがある。それは校舎にきてくれた小学生や中学生のポスターをつくるという活動だ。私たちはこれまでも民宿の女将さんのポスターをつくってきたが、今回はその子ども版に挑戦した。

数時間という短い時間のなかでも、三宅島の自然のなかで子どもとふれあい見つけた、子どもたちのキラリと輝く瞬間をカタチにした。そのポスターはいま、伊ヶ谷港や錆が浜港の船待、空港に掲示されている。子供たちの元気あふれる姿が、大人にも負けないパワーを放っている。ぜひ、一度ご覧ください。

（新飼 麻友）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島大学でまなびあう

『「社会調査」で見る三宅島』講座開講

三宅島大学が開校され、約一年。三宅島大学本校舎を拠点として、隔週に講座がくみたてられるようになった。私も九月に開講された講座に参加し、「生徒」として単位認定をしてもらった。九月一日には長島確さんの『いろいろな地図・それぞれの地図』。二日は『マネージャートーク【三宅島のひと】沖山雄一×音楽』。

『マネージャートーク』では、J-WAVEサマーセミナーの第一回卒業生である沖山さんから、音楽を流しながらさまざまなアーティストの話、音楽の選び方などのお話があった。海のみえるカフェのなかで、洋楽が心地よく流れる雰囲気は不思議。三宅島というよりハワイにいるみたいな、そんな空気感だった。この講座の案内を聴いて、はじめて沖山さんの音楽好きな一面を知った。『今度『691』に寄ったら、どんな音楽の話をしよう?三宅島大学講座で、こういうきっかけができていくのがとても面白いなと思う。

いちどこうして講座をうけて、ログシートにサインをもらうと、「先生」と呼びたくなってくる。三宅島大学のしくみのなかで、コミュニケーションが新たにうまれて、「先生」になったり「生徒」になったりと、それぞれが繋がり合っていることを感じる。

この三宅島大学の「しくみ」のひとつの柱として、「調査・研究」という一面がある。三宅島にある文化や人、自然を改めて調査しながら講座の実施としてのフィードバックや、環境整備とつながることを目指して行く。九月十七日に開講する『「社会調査」で見る三宅島』は、この「調査・研究」に位置づけられる講座だ。

『あしたばん』二十五号でも紹介した、三宅島全戸対象アンケート調査結果の紹介をしたり、三宅高校で恒例行事として行われるファッションショーの調査や『つぶやき便』の取り組みの振り返りをお話し、私たち加藤文俊研究室が調査してきた、外側からみた『三宅島』について考えてみたいと思う。

(大西　未希)

▼『島をあるく・人に出会う・島をかんがえる』

【担当】スザンネ・クリーン
【日時】九月十五日(土)
十時～十二時
九月十六日(日)
十三時～十五時
十五時半～十九時
【場所】三宅島大学本校舎

▼「社会調査」で見る三宅島

【担当】加藤文俊研究室
【日時】九月十七日(月)
【場所】三宅島大学本校舎
【時間】十時～十二時
(途中入退場自由)

三宅島エッセイ

島びより

今日もここで

森部　綾子

たくさんの人に見送られながら島をあとにしたのは、先月の終わり。そして、私は今日再び島へ降り立った。こんなに間をあけずに島へ来たのは初めてのことだ。風がなんとなく涼しくなったような気がして、夏が終わり、秋が始まりを告げているのだと感じた。前回の滞在が十日間だったために、島での生活も初めて来たときに比べたら、だいぶ慣れてきているように思う。

空気が澄んでいる朝や、夕暮れ時に三宅島大学の校舎から徒歩三十秒ほどの『あの場所』で海に浮かぶ三本岳を撮影するのが、いつしか日課となった。私もいつかムーンボウなんていうものを撮ってみたいと思いつつ、ご挨拶がてらの会話も弾む。そのささいなやりとりが楽しくて、校舎からでると、私の足は自然とここへ向かうようになっているのだろう。そんな場所ができたことで、また少し島の暮らしに近づけたような気がして、さらに三宅島に対する愛着が強くなっていく。人びとの温かさと雄大な自然を肌で感じるたびに、三宅島の新たな魅力を感じずにはいられないのである。もっとその魅力に触れていきたい。



あれから一年…

長富　将成

昨年九月、美しいハンドベルの音色が奏でる楽曲「一〇〇〇年のこども」とともに行われた三宅島大学開校式典から早一年が経過した。開校前の六月からのリサーチ期間も入れると、一年以上経過したことになる。当初は右も左もわからず、よそ者感にあふれていた自分達も、商店を訪れた際に「あ、この前来てくれたよね」等の言葉をいただくこともあり、少しずつ島に溶け込めているのかなと感じる。

島の民宿を訪ねた際、以前より確実に三宅島大学を知ってくれている人が増えてきてくれていること、移動中に車の中から何気なく商店を見ると、三宅島大学のポスターが貼ってあるのを発見したりする時、三宅島大学が島の人々に浸透しつつあることを実感する。

自分達も、当初と比べて講座を通して島民、島のことについて、より深く考えることができるようになった。その一方、島民と関わり、講座を進めていくうちに、続けていく難しさや、これからも三宅島大学を続けていかなければ、という使命感を感じるようにもなった。

島民や自分達にとっての三宅島大学に対する意識が徐々に変わりつつある一方、変わらないものも確かに存在する。船から見える圧倒的な島の景色や海、潮風、夏の暑い日差しは、昨年初めて訪れた時から何も変わらず自分達を迎えてくれる。そして「久しぶりだね」と声をかけてくれる島民の方々には何とも言えない温かみがある。それらを感じた時に自分は島に「帰ってきた」と実感する。

昨年の夏の終わりも島を訪れ、過ぎゆく夏に思いを馳せながら秋を想った。島に来ると夏の終わりを感じる。自分にとって島はいわば夏のフィナーレを飾る場所でもある。今年の夏の終わりはどんなことが待っていて、どんな人と出会えるのだろうか?期待に胸を膨らませつつ、今年も夏の集大成である四日間が幕を開ける。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
9月17日
月曜日

あしたばん編集部
発行所:加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十号

会話が生まれるポスター作り

～三宅島ポスタープロジェクト～

九月十六日、三宅島大学本校舎で「三宅島ポスタープロジェクト」が開催された。加藤文俊研究室の学生は十四日に、民宿『三宅島パーディ』へ取材に伺った。その時の写真やノートを受講者の方と見て、話合いながらその場で参加者の方々と一緒にポスターを作りあげていく。この講座はいわば、ポスター制作のライブだ。

今回のポスター講座は三宅島大学にとっても、そして加藤文俊研究室にとっても初めての試みであった。三宅島でのポスターは、民宿で働く女将さんや島のこどもたちを取材対象に制作されてきた。何度も試行錯誤する中で完成に近づけていくポスター制作の過程では、悩み考える時間が多いため、限られた時間内で完成させることができるのか、緊張しながら講座は開始した。

参加者された方たちからは、当初想像していた以上に、たくさんの意見を聞くことが出来た。特にポスターにいれるメッセージには、女将さんを表現する様々なアイデアが出てきて、どの言葉にするかPCの画面を見ながら話し合った。そうして、全員が納得できるポスターが講座時間中に完成した。講座を終えて、「普段見るだけだったポスターの作り方を実際に体験することが出来て、楽しかった。」という嬉しい感想も頂けた。



出来上がったポスターは、今までのポスタープロジェクトと同じようにその日のうちに印刷をし、取材先の女将さんに渡しに伺いたかった。しかし講義が行われたのは日曜日。いつも印刷させて頂いている役所が閉まっているために直接ポスターを手渡すまでのプロセスを、最後までやり遂げることが出来た。

今回の講義を通じて、ポスターというちいさなメディアを通してコミュニケーションが生まれることの楽しさを改めて実感した。ポスター取材を通しての女将さんとの会話や、ポスターを作りあげる過程での話し合い。そしてそこで出来上がったポスターを作った人、作られた人、そしてそれを見た人たちとの間で生まれる会話。普段この島で生活していない「よそ者」である私たちにとって、このポスターを通じて、もっとコミュニケーションをたくさん島のことを知りたくなる。

昨年の台風直後に開始した三宅島ポスタープロジェクトも、制作を始めてからようやく一年が経った。これからも女将さん、そしてたくさんの島の人々との会話の手段として、じっくりと一枚一枚、ポスターを作り続けていきたい。

(竹下　絢)

キッズリサーチを振り返る

夏休みが終わって間もない九月十五日、加藤文俊研究室による「キッズリサーチを振りかえる」講座が行われた。キッズリサーチとは、八月十八日～二十六日に行われた、小中学生と加藤研究室がお互いに島について学び合う講座である。

夏休みの活動の成果もあってか、この日は集合時間の十時前から三宅島大学の校舎である御蔵島会館に来る子どもたちもおり、久しぶりに再会した大学生の顔をみた瞬間に元気よく駆け寄ってきた姿が印象的だった。

今回の講座で行った主な内容は、加藤先生によるお話から始まり、キッズリサーチ中の様子をまとめた冊子を見たり、子どもたちと一緒に読み上げたりしながら、期間中の様子をまとめたDVDを上映するというものであり、この日はリサーチに参加してくれた子どもたちから保護者、大人の方まで総勢十一名の方が校舎を訪れた。

講座開始直後から元気いっぱいの子どもたちを見て、加藤研究室のメンバーはまるで三週間前に戻ったかのような気持ちになった。まとめ冊子を読み上げる際に恥ずかしがる他のメンバーに声をかけたり、DVD鑑賞で自分の映った場面になった時には声をあげる等、講座は終始和気あいあいとした様子で進んだ。中には子どもたちとおしゃべりしたり、子どもを膝の上に載せて抱きかかえながら話を聞いたりする姿もちらほら見られた。

講座の最後には、大きな白い紙に来年の三宅島で行いたいことのスケッチを皆で行い、画用紙に思い思いの絵を描いた。振り返りのキッズリサーチ中に描いたスケッチもそうだったが、子どもたちの発想力、表現力の豊かさには驚かされる。DVDの中の子どもたちがカメラで撮った島の風景も、大人視点からでは決して見えない世界が映し出されていた。

子どもたちと自分達、どちらも生徒、どちらも先生であるということを改めて実感した。

およそ二時間の講座を終えた受講生と加藤研究室のメンバーは、一夏の余韻に浸りつつ再開を願い、溢れんばかりの笑顔でしばしの別れを惜しんだ。

(長富　将成)



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

一人ひとりの目線で

私は十六日行われたスザンネ・クリーンさん（ドイツ日本研究所）の「島をあるく・人に出会う・島を考える」の講義に参加した。十三時に三宅島大学校舎（御蔵島会館）をバスで出発し、まずは七島展望台へ向かった。今日は運よくとても晴れていたため、御蔵島、三本岳、新島の表面まで見渡せた。式根島は土地として薄く平べったいため落雷事故が問題になっていることを知り、新澪池の水蒸気爆発で出来た跡、それによって飛んだ大きな石が意図的に残されている道をこの目で見た。

三宅島をガイド付きでまわるのは初めてで、私にとってはどれも新鮮だが、一番印象的だったのは島の方の教えてくれる話だ。観光マップや通常の案内ルートには記されていない地区と地区の境目に立つ「大機和尚」。これは授業に参加して下さった女性の近所に位置する場所に在る疫病除けの塔である。講師のスザンネさんが展望台下のレストハウス跡に興味を持っていたのを受け、建築物関連のこれを教えて下さったのだ。通常の大学授業などとは違い、双方向の情報を交わすことで誰もが先生、生徒になり得るカタチが実現している。これこそ三宅島大学の姿勢だ。

また、その後の大学校舎で行ったスザンネさんと今回特別参加の木村健世さん（アーティスト）の撮った写真について読み解いていく時間では研究者とアーティストの目線が私たちと異なることを大いに認識した。普段海や、山の景色を撮りがちな私にとって島ならではの粒つぶした表面のコンクリート、削られた石柱など、日常にひっそりと存在するモノに目を向けてみるのを新たな発見につながるのだろう。

（吉田 あんな）

祝・あしたばん 三十号記念によせて

■記念すべき第三十号、おめでとうございます。「かわら版」というのは、誰のものでもなくて、誰のものでもある、不思議な空間だと思います。自由闊達に語ることのできる、コミュニケーションの場であり続けることが大事です。もっともっと、書き手の個性が感じられる記事を期待しています。

（加藤 文俊）

■三十号まで継続して、思い出すのは直接渡したときのうれしさ、最初の一枚が刷り上がった時の興奮。商店に設置のお願いをするときも、「あ、またこう取っていってくれるよ」と言ってもらえたりするようになった。『あしたばん』が三宅島のちいさなメディアとして、これからも動き出していってもらえたら。

（大西 未希）

■記念すべき三十号に、記事を書くことができて、本当にうれしいです。行し始めてから、もうすぐ一年半、あっという間でした。これからも、『あしたばん』が三宅島ではもちろん、島の外でもたくさんの人の手にわたるすてきな「ちいさなメディア」であり続けますように！三十号おめでとう！

（森部 綾子）

■島の方との会話を通して、三宅島大学やあしたばんについて知ってもらう機会が段々と増えてきた。特にあしたばんを持参して商店へ伺ったとき、「あっという間になくなっちゃうのよ。だから多めに置いていって。」と言われた言葉が忘れられない。まだまだ島について知らないことばかりの私たちは、その自覚を持ち続けながら、これからも一号ずつ、書いて伝えるという作業を重ねていきたい。（竹下 絢）

■初めて島に来てからたくさんの人と出会い、島の魅力をたくさん見てきました。でも、もっとたくさんの人に出会いたい、一緒に話がしたい、みんなの思いを伝えたい、島について深く知っていきたい。そんな思いがあるかぎり、まだまだあしたばんは続きます。これからも人と島を大切に。

（長富 将成）

■あしたばん三十号発行、おめでとうございます。そして、ありがとうございます。一号から関わってきて、コツコツ書いてきた積み重ねがもう三十枚にもなると思うと感慨深いです。日刊紙なら一ヶ月分かもしれないけれど、一年三ヶ月かけてここまでつくってこれたのは、「あしたばん」を受け入れてくださる、三宅島の方々のおかげでもあると思います。これからもどうぞ、よろしくお願いします。（新飼 麻友）

『あしたばん』一面記事一覧

【第1号】 2011年6月19日（日）始動、三宅島大学！
初めての三宅島、新たな出会いを求めて（上地里佳）
【第2号】 2011年6月19日（日）ぐるりー周
三宅島大学プロジェクトチーム　リサーチ開始！（小澤慶輔・長富将成）
【第3号】 2011年6月20日（月）水中スケッチ大会行われる
伊ヶ谷浜で水遊びをする子供たち（新飼麻友・高木静香）
【第4号】 2011年6月21日（火）二時間／三年間にかける思い
～三宅高校ナインが挑む夏（長富将成）
【号外】 2011年6月21日（火）あしたばん制作の裏側に迫る（上地里佳）
【第5号】 2011年6月22日（水）たくさんのありがとうを　―三宅島での５日間―（森部綾子）
【第6号】 2011年7月18日（月） お待たせしました！『あしたばん』（高木静香）
【第7号】 2011年7月25日（月）まだ見ぬ三宅島を想う「ロック～わんこの島へ」（仲尾千枝）
【号外】 2011年8月1日（月）『KAITEKI のかたち』とは
―「KAITEKI のかたち」展～アートと技術の化学反応～」（大西未希）
【第8号】 2011年8月8日（月）富賀神社大祭、始まる（上地里佳）
【第9号】 2011年8月15日（月）富賀神社大祭での各地区の受け渡し
最終日までを完全レポート！（上地里佳）
【第10号】2011年8月22日（月）三宅島大学、開校日決定！！（大西未希）
【第11号】2011年8月29日（月）火の山からの挑戦状　トライアスロン開催！（上地里佳）
【第12号】2011年9月19日（月）いよいよ、三宅島大学開校！
―みんなで、大学に入学しよう―（新飼麻友）
【第13号】2011年9月21日（水）“いま”が響き続けるように（吉田あんな）
【第14号】2011年9月22日（木）キックオフのあとで、考えた。（加藤文俊）
【号外】 2011年9月26日（月）東京都に実家ができました。（上地里佳）
【第15号】2011年9月26日（月）ポスター完成！
～ご協力ありがとうございました～（吉田あんな）
【第16号】2011年11月14日（月）応援旗にこめられた想い　三宅島大学講座
「応援学：応援旗をつくろう」（上地里佳）
【第17号】2011年11月28日（月）三宅島大学、十二月講座
―講師より予告―（飯田達彦）
【第18号】2011年12月2日（金）ポスター完成！！
「ポスターをつくろう」講座（丸本智也）
【第19号】2011年12月5日（月）甘い香りと笑い声につつまれて
～三宅島クッキーをつくろう！～（水谷晃毅）
【20号特別号】2011年1月31日（火）「あしたばん BOOKs」誕生
慶應義塾大学 加藤文俊研究室フィールドワーク展vol.「某」（大西未希）
【第21号】2012年3月3日（土）レディースパワー溢れる！
第二回三宅島レディース・ラン（大西未希）
【第22号】2012年6月22日（金）今年もやります、伝えます！
島の魅力「女将さん」に迫る（長富将成）
【第23号】2012年6月23日（土）手作り手渡しのかわら版（青山大毅）
【第24号】2012年6月24日（日）三宅島は「ジャストサイズ」（新飼麻友）
【第25号】2012年7月31日（火）築穴パン屋の『つぶやき便』?!
八月一日より実施（上地里佳）
【第26号】2012年8月9日（木）三宅島大学を考える手引き
―ガイダンス講座開催―（上地里佳）
【第27号】2012年8月19日（日）キッズリサーチ始まる！
～期間限定の「寺子屋」～（新飼麻友）
【夏休み特別号】2011年8月23日（木）「三宅島のすきなところ」
（キッズリサーチに参加した子どもたちとの共同制作）
【第28号】2012年8月25日（土）子どもたちの力作揃い～発表会を開催～（竹下絢）
【第29号】2012年9月14日（金）キッズリサーチ、一日復活！～九日間をふり返る～（竹下絢）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
（平成24年）
10月2日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十一号

そこでやめるな最後まで…

～三十六人の島人魂！三高祭開催～

九月三十日（日）、都立三宅高等学校にて学園祭「三高祭」が開催された。台風十七号の接近が心配されたなかだったが、当日午前九時には風も穏やかになり、無事に幕があけた。今回の学園祭テーマは「そこでやめるな最後まで…　～突っ走れ島人魂～」。

物販・展示ー作品ならぶ

生徒数三十六名というなかで、物販や作品の展示が数多く並んだ。シフトを組んで、一人いくつもの催しをかけもちしている。磯辺焼きやフランクフルト、パウンドケーキといった飲食販売は午前中のうちになんと完売！「SOLD OUT」の文字が立ち並ぶ。保護者の方だけではなく、近隣の住民の方も多くおとずれ、三高祭をとても楽しみにされているようだ。

買い物をしていると、「ねえ！お化け屋敷入った！？めっちゃ怖いよ！」キッズリサーチで出会った子ども達に背中をつかれた。子ども達は、「ぼく、十一回も入ったよ！」と自慢する子がいるくらいにお化け屋敷に夢中。各学年の造形制作や舞台発表、九時から十五時までのプログラムは盛りだくさん。大変そうだなあと思ってしまうけれど、生徒たちはみんないい笑顔でお客さんを迎えていた。



COLORードレス色づく

そしてなんといっても、学園祭の最後に発表されるファッションショーは目玉。私は修士課程の研究として、このファッションショーの制作過程を見させていただいていた。今年は一年生から三年生までの有志団体八名で、デザイン画から制作していた。

三年生四人にとっては、最後のファッションショー。とくに三年生は夏休みも返上で、朝九時から十七時までミシンに向かっていた。糸くずをたくさん身体につけながら、被服室はいつも笑顔であふれる。よそ者のわたしが訪れて行き、輪を乱してしまったら…ととても心配したけれど、あたたかく迎えてくれた優しい生徒たち。はじめはこちらも緊張していたが、そのうちに「未希さん」と呼んでくれるようになって、手を動かしながらお話するようになって。集中もしながらも「みんなでつくる」ことをとても大切にしているところが感じられた。無理がたたって眠そうにしている子を、タイミングよく起こしてあげたり。後輩たちに型紙のつくりかたから、丁寧に教えていたり。お互いに気遣い合って、ショーの成功に向かっていて。話を聴きながら、同じ空間に居ながら、実はうらやましいなあと思っていた。こんな経験を高校生のうちにするって、ほんとうに素敵だ。八月の終わり頃、「まだまだ出来てなくて…！」と言っていたショードレス。放課後の活動を続け、前日の校内発表後も残ってドレスを縫っていた。ぎりぎりまで、全力。

迎えた当日、客席には約八十人の人々がショーを楽しみに訪れた。全校生徒のほとんどがモデルや照明などのスタッフになり、持ち場でスタンバイ。照明が落ち音楽が鳴り始め、一着目のドレスを着たモデルがランウェイに現れると、自然と拍手が起こった。

テーマは、「COLOR」。シーチングと呼ばれる生成り色のドレスから、カラーのドレスへ色づく様子が表現された。春夏秋冬をコンセプトに構成され、春はチューリップ、秋はいちょう等をモチーフにしたドレスが登場する。各季節の最後には、三年生が自身でつくったウェディングドレスを着てランウェイを歩く。ドレスの美しさと真剣な表情に、生徒たちの想いが伝わってくるようで、はっとする。

一人の卒業生の方が、「ファッションショーは高校生活のシメ」とおっしゃっていた。ショーのあとの生徒たちのこぼれる涙と笑顔を見て、高校生たちの素敵なシメとなり、全員にとって大成功となっただろうなと思えた。

最後に。この夏をそばで過ごさせてもらい、みんなから学ぶことばかりでした。三宅高校生がかっこいいと、皆に自慢したいです。ありがとう。

（大西　未希）



キッズポスター展示中

「三宅島大学 キッズリサーチ」にて加藤文俊研究室が制作したポスターが、新たに三宅村役場入り口にも展示された。この村役場入り口では全十二種類のポスターが閲覧できる。図書館や資料館に訪れた際には、ぜひお立ち寄りください。

▼キッズポスター展示場所
錆が浜港船待合所／伊ヶ谷港船待合所／三宅島空港／三宅村役場



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

漁網でつくるアート「そらあみ」
―三宅島に還したい―

「三宅島でのベテラン漁師さんとの出会いから、はじまりました。網を編むように、島の方たちと繋がっていけたらと思います。」

十月二日早朝。アーティスト五十嵐靖晃さんが、三宅島に帰って来た。

昨年三宅島大学開校前のリサーチに訪れた五十嵐さんは、滞在中に出会った島のベテラン漁師さんに漁網の編み方を習うかたちで弟子入りし、三宅島での時間を過ごされていた。漁師さんから受け継いだ技術はその後、五十嵐さんの手によって「そらあみ」という参加型アート作品にふくらんでいた。空にむかい、参加者みんなで大きな網を編み上げて行くことでつくられる、おおきな漁網アート。これまでに京都府の舞鶴・岩手県の釜石市にて展開されている。各地で「そらあみ」を行って来た五十嵐さんは、「網を編む行為が『通行手形』になって、これまでの地域の海辺の暮らしに入っていくことができるようになりました。他の地域でならい、見てきたものを三宅島に還していけたら」と、三宅島へ帰ってくるまでの経緯をお話ししてくれた。

魚を穫るために、漁網を編むという行為。海に囲まれた様々な地域に、それぞれ漁師さんがいて、その地域独自の漁網があり、さまざまな人びととの出会いがあったんだろうなと想う。編むことが『通行手形』になったという五十嵐さんの言葉からは、海辺の地域での人びとの暮らしを垣間見ることができた。

五十嵐さんはこれから十月二十二日までの二十日間三宅島に滞在し、「そらあみ」づくり体験講座を行う予定だ。十月六日（土）は三宅島大学本校舎にて説明会が開催され、二十日（日）には完成した「そらあみ」の発表会が行われる。三宅島からうまれ、さまざまな海辺の地域を渡って来た「そらあみ」。どんな作品が出来上がり、どんなドラマが生まれるのか、二十日後の発表会がいまからが楽しみだ。

（大西　未希）

▼「そらあみ」体験講座
十月六日（土）―二十日（土）
日中開催予定
【説明会】
十月六日（土）十時～十二時
（会場：三宅島大学本校舎）
【発表会】
十月二十日（日）十時～十二時
（会場：三宅島大学本校舎）
参加費無料／島内各所で実施予定
詳細はウェブサイト／お電話にて
090―9278―9541
（三宅島大学事務局）



「見かけたら気軽に声をかけてください！」と話す五十嵐靖晃さん（アーティスト）

一二四日間の三宅島を想って

三宅島が恋しくなって、二十八日目。八月に実施した『つぶやき便』を無事に終えて、私は九月六日の船に乗って離島した。今日この日までに、飛行機に乗って三宅島に行こうか本気で悩んだり、三宅島の写真を見ては夏にあった出来事を再確認したり、挨拶がしきれなかった人を思い出しては後悔したり、最終日にいただいた手ぬぐいや三宅島の地図を見て心がほっこりしたりを繰り返している。

ふと先日、これまで三宅島での滞在数を数えてみた。二〇一二年九月までで、計一二四日間滞在していることがわかった。初めて三宅島を訪れた去年の六月から、十六ヶ月中、約四ヶ月は滞在していたことになる。この数を出してみて、同時に多くの人と出会ったことを思い出す。最初に島を訪れたときに怒られたことや、都道沿いでヒッチハイクをして高校から酒造まで乗せてもらったこと、築穴製菓を最初取材したのもそのときだ。築穴製菓でアルバイトをした八月には、島にある商店の数を知り、位置関係もだんだんわかるようになった。富賀神社大祭に参加し、神輿を担がせてもらったり、本紙『あしたばん』の取材として突撃取材もした。それから、島の季節は冬になって、欠航流人という称号をいただき、お裾分けをもらうようになり、商店に入り浸り、「なんか三宅島によく来る若い人」になった。そして今夏、再び築穴製菓さんにお世話になり、『つぶやき便』を実施し、商店の人からは「パン屋のおねえちゃん」と呼ばれるようにもなった。思い返せば本当にきりがないくらい、色々なことがあった。そこには必ず人が関わっていて、多くの人にお世話になっていることを実感している。「やっぱり島の人はあったかいよね」ってことを言いたいのではない。もちろん、あったかい。でもそこには、厳しさを含んでいると思う。怒られて、注意をされて、島の暮らしを掘り下げて学ぶことができた。以前、女将さんのポスター制作にて「島は厳しい。だからこそ優しい。」というキャッチコピーを出させていただいたことがある。そのことを自分の実感として、身にしみて感じられるのは、私にとって大きな学びとなっている。

せっかくなので、お世話になってきた方々への短い挨拶を添えて、この記事の結びとしようと思う。「お元気ですか？わたしは元気にしています。三宅島シックになっている私は、こんなことを考えています。季節の変わり目ですが、体調を崩さないよう、気をつけてくださいね。また島に行くときは、会いにいきます。なので、これからも、どうぞよろしくお願いします。」

（上地　里佳）



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

女将さんポスター取材完了

加藤文俊研究室による民宿の女将さんのポスター作りがいよいよ佳境を迎える。民宿を切り盛りする女将さんの人としての魅力に光を当てポスターとして表現するこの活動は、二〇一一年九月の三宅島大学開校直後から開始した。島民の方も参加しての作成や島内各所や東京都庁での展示も行なった。

これまでにたくさんのご協力を受け十四人の女将さんを取材してきた。二日に訪ねた二軒をもって女将さんのポスター作りはひとまず終了となる。

人生は楽しまなくちゃ
―ラッパ荘―

出迎えてくださった時の第一印象は明るく気さくそうな方。さっそく中へおじゃましてインタビュースタート。なぜラッパ荘の女将になったのか、この仕事にどんな思いがあるかを語っていただいた。

ラッパ荘で生まれ育ち、高校卒業後東京にでたが、週末になるとお客さんと一緒に三宅島にきて実家のお手伝いをしていた。そんな彼女にとって、常連のお客さんはみんな顔見知りで友達のような親しさだそう。早朝に出かけていく釣りのお客さんににぎり飯を持たせてあげたらよろこぶだろう、と午前三時から起きてつくっている。朝早くからの仕事なのにネガティブな感情はなく、むしろ楽しそうなのである。

「私はテキトーな性格なので、特に仕事に対して嫌な気持ちはない。むしろ、あれもやろうこれもやろうと思うと、楽しくなってくる。人生は楽しまなきゃね！」女将をするかたわらコーラス隊に所属したり、みずから畑仕事もしたりするなど積極的な活動スタイルをとる彼女の顔は、とても生き生きしていた。

「このラッパ荘は五年後にさらにパワーアップするのよ。それを考えるとますますファイト湧いちゃうでしょ？」道路の拡張工事で建物を取り壊す関係上、新しい宿舎を建てることになっている。今だけでなく、未来に対してもポジティブだった。

東京から船で七時間。たしかに、三宅島は一見なにもないかもしれないけれど、毎日を充実させて人生を楽しく過ごしている彼女の姿が、少し羨ましくなった。せっかくこの世に生きているのだからもっと人生を楽しもうじゃないか！

先日から風邪をひき鼻水が止まらなかった私に、彼女はお供え物の柿をお土産に持たせてくれた。「これでも食べてしっかり栄養つけなさい」。初対面の私を気遣ってくれたのが本当に嬉しかった。きちんと栄養と睡眠をとって、少ない三宅島生活を精一杯楽しもうと思う。女将さん、柿おいしかったです。

（山根賢一）



島で生活するということ
―すずらん―

女将さんはお義母さんのときから営んでいる民宿を受け継ぐことを決め、今はお二人で切り盛りしている。

「宿では島のものを食べてもらいたい」。島で捕れる海鮮物をはじめ、自宅で耕す畑から野菜を収穫し、民宿の料理に活かしている。三宅島の特産・あしたばは、天ぷらや胡麻和え、炊き込みご飯にするなど、いろんな味わいを楽しんでもらいたいという思いを込めて、料理を作っている。

昭和中期の『島ブーム』による観光客の増加に合わせ、かつてはすずらんの周りにもたくさんの民宿があったが、今はその多くがなくなってしまったという。お義母さんの代が終わるのを機に、すずらんも三年ほど宿を畳んだが、ご本人の仕事が一段落し、「空いた時間で何かしたい」と思ったのをきっかけに一年前から民宿を再開させた。

女将さんは民宿を引き継ぐ以前、島で福祉関係の仕事をしていた。忙しい時は朝九時から夜九時まで平日は働き通し、土日は民宿の手伝いをしていた。「起きて仕事して、帰って寝ることの繰り返しだった。これは身体がおかしくなっちゃうんじゃないかと思ったよ」。端から見ると、島の時間は都会よりもゆっくりと流れ、ゆとりのある生活を送っているように思える。私は彼女のその言葉にはっとさせられた。

旦那さんの故郷に家族で住み移るのと同時に、彼女の三宅島での生活は始まる。それから何年も家族で生活を支え合ってきた。場所や環境に関わらず、腰を据えて生きていく覚悟が必要だということが伝わってきた。

いまは民宿が混み合う時期の合間に、友人と家でお茶をしたり食事をしに行ったりと、時間にゆとりができたという。お話をうかがった時も、三宅島のおいしいものが食べられるお店をたくさん教えてくださった。

島に住んでいる人を通じて、色んな面を知ることができる。その繋がりを大切にしながら、島の時間をこれからも重ねていきたい。

（龍山千里）

あしたばん

2012年
(平成24年)
11月3日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十二号

告知

三宅島大学　日曜日の講座のお知らせ

「ワークショップ」ってなんだろう？

四日（日）の十時から十二時まで三宅島大学本校舎にて、『ワークショップ』ってなんだろう？」の講座が開催される。講師は加藤文俊慶應義塾大学教授と長岡健法政大学教授の二名である。事前申し込み・受講料は不要で、開始十分前までに校舎に行けば参加できる。

そもそも「ワークショップ」とはなにか。両教授の対談や参加者とのやり取りから掘り下げていく。日曜日の校舎で肩の力を抜き、「ワークショップ」そのものや生み出すものについて学び合う場になれば幸いだ。

どなたさまもお気軽にご参加ください。

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島で魅力ある〈場所〉について考える

経営学では、あらゆる事柄を「効率」という視点から考える。お金の使い方はもちろん、時間や道具、そして、空間の使い方についてまでも、「無駄はないか」ということが常に問われる。その結果、オフィスという空間は、どこにも死角のない正方形の空間に、隅々まで蛍光灯の明かりが照らされ、最新の理論に基づいてデザインされた机と椅子が整然と並ぶ。おそらく、このような「無駄のない空間」は、仕事の効率を大幅にアップさせるだろう。

ただし、最新の機器が整然と並んでいる無駄のないオフィスについて、「そこは魅力ある〈場所〉ですか?」と問われたなら、多くの人が「奇麗だけれど、場所としての魅力は低い」と感じるのではないだろうか。どうやら、私たちが魅力的に感じる場所は、必ずしも「新しく、整然とし、奇麗で、明るい空間」ということではないようだ。確かに、雑然としていて、薄暗く、ノイズが飛び交うような空間では作業効率は上がらない。しかし、騒然とした中にほんの少し存在する静けさや、古びた空間の中に置かれた先端的でメタリックなオブジェのように、一見相容れない異質なものが混ざり合った感覚が、空間の魅力をつくり出していることも多いのではないだろうか。

さて、十一月三日午後、『魅力的な場所〉について考える』という講座を開講する。火山活動が生み出した自然は、人間を拒絶するように荒々しい。その一方、のどかな雰囲気と緩やかな空気の流れは、訪問者の心を浄化する。これら好対照のものが混ざり合った感覚が独特の魅力を生み出している三宅島で、「人はどのように〈場所〉に惹かれるのか」について語り合いたい。「無駄のないオフィス」ではけっして思いつかない魅力的なアイディアが、ここでなら思い浮かぶはずだ。

（長岡　健）

写真の風景

車で七島展望台へ向かった。青々とした空と、太陽の光で銀色を交え、雲の影が映りこんでいる群青色の海が見えた。近くで見た波は高かったのに、遠くから見るとおだやかで、静止しているようにも見えた。山には立ち枯れた樹木が寂しく立ち並び、下草が生い茂っていた。足下では大小様々の赤と黒の石が堆積し、ススキが穂をなびかせていた。立っているのがやっとなほど風が強く吹いていて、カメラを構えるのを許さないような気高さがあった。七島展望台から帰る途中、溶岩流で壁が剥がれて鉄骨がむき出しになった建物や、半分埋まってしまったタイヤ、食い破られたような柵があった。今日、カメラを構えるとき不思議な感覚があった。目を通して見ている風景とは違うものを写した写真になるような気がしていたのだった。それが、日頃過ごしている東京という場所とのギャップなのか、三宅島が初めて訪れる場所だからなのかは分からないが、写真を撮るという行為自体が安っぽいもののように感じられていたのは確かだった。

（深澤　匠）



はじめての島

午前五時、辺りはまだ暗く、肌寒さを感じる三池港に降り立った。澄んだ夜の空に星が心なしかいつもより綺麗に見えて、風に微かな硫黄の匂いを感じた。港に停まっているバスに乗り込み、宿泊所まで約三十分の道のりを走る。段々と辺りは明るくなりはじめ、バスの窓からは次第に暗闇では分からなかった三宅島の姿が見えてきた。

その後、はじめて三宅島に訪れた私は案内してもらい島の外周を一周した。ぐるりと一周してみることで、ひとの暮らしを感じるとともに過去に火山噴火があったのだという名残を見せつけられた。一見、自然豊かな島に見えたのだけど、確実に今もその爪痕は残っている。自分が生まれ育った島を離れなければならないというのはどういうものなのだろう。想像が出来ないけれど、ふとそんなことを考えた。

また、三宅島大学の学生として『あしたばん』を配布しながら島を歩いていると、「こんにちは」とまちゆくひとによく挨拶をされた。めて島に足を踏み入れた私にとってはそれがなんだか嬉しかった。明らかに島のひととは違いでたちの私。よそ者を拒まない暖かさがこの島にはあるみたいだ。車だと一時間程度で回れてしまう小さな島、でも私はまだ右も左も分からない。もっと自分の足で歩いて、ここに住む人々の話を聞き、少しずつだけどこの島のことを知っていきたいと思った。

（神通絵里花）



今回の講座

11月3日(土)～4日(日)

▼ 3日（土）10:00-12:00　場所：三宅島大学本校舎（御蔵島会館）
講師：加藤文俊研究室（慶應義塾大学）

キッズと一緒に「ゲイジュツの秋」

大学生と交流しながら、
「のれんづくり」のワークショップを行います。

▼ 3日（土）13:00-15:00，17:00-18:30　場所：三宅島大学本校舎（御蔵島会館）
講師：長岡 健（法政大学教授）

魅力ある<場所>について考える

人びとを惹きつける、活気に満ちた〈場所〉とは何か。
みんなで思い出やエピソードを共有します。

▼ 4日（日）10:00-12:00　場所：三宅島大学本校舎（御蔵島会館）
講師：加藤 文俊（慶應義塾大学教授）、長岡 健（法政大学教授）

「ワークショップ」ってなんだろう？

そもそも「ワークショップ」とは何か。
あらためて考えてみましょう。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2012年
(平成24年)
11月4日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十三号

ゲイジュツの秋 ～のれんで愛着を～

今年の八月から始まったプロジェクト、「三宅島大学キッズリサーチ」が再び帰ってきた。キッズリサーチは、大学生である私たちが、三宅島の子どもたちにさまざまな学びの場を提供しつつ、子どもたちから三宅島について教えてもらう、というものである。第三弾にあたる今回は、十一月三日土曜日の十時から十二時、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）にて、「のれんづくりワークショップ」をおこなった。これは、みんなでひとつののれんをつくり、三宅島大学本校舎の教室に飾る、というものである。キッズリサーチとしてのワークショップであったが、大人の方も参加し、大学生らも含めて、終始和やかな雰囲気で進められた。

講座の前半は、本校舎から外へ出て、布に貼り付ける素材を採集しに行った。参加者は、葉や枝、木の実、石、貝殻など、さまざまな素材を拾い集めており、中には両手いっぱいに握っている子もいた。限られた時間、範囲ではあるのだが、三宅島の豊かな自然が参加者の表現意欲を刺激したようである。講座の後半は、拾い集めてきた素材を使用して、のれんを構成する帯をひとり一枚作成する。それぞれ、素材を木工用ボンドで貼り付けたり、糸で器用に縫いつけたり、マジックで直接布に絵を描いたり、スタンプをおしたりと、特に守るべき決まりはなく、自由に表現してもらった。いつもは元気に動き回る子どもたちも、この時ばかりは机に向かい、夢中になって制作していた。三宅島であればどこでも見つかるような素材が、参加者の手によってのれんの装飾へと変化させられていく。それぞれの帯を棒に通して統合し、オリジナリティ溢れるのれんの完成である。

なにかを手作りし、できあがりを少し離れて眺めてみると、どうも作品が愛しく感じるものである。それぞれがつくった個性的な帯を、一本の棒に通してのれんにする。文字にしたらたったそれだけのことであるが、そこには愛着が宿っているかもしれない。そこで生まれた愛着が、少しでも三宅島大学への愛着に変換されることを願って、私たちはこのワークショップを考えた。今回の講座で完成したのれんは、三宅島大学本校舎の教室に飾られている。是非ひとと目観に来て欲しい。

（青山大毅）



〈場所〉としてみる

今回私は法政大学長岡教授の「魅力ある〈場所〉について考える」という講座に参加させて頂いた。長岡教授は組織社会学を専門に研究をされており、最近では〝学びのサード・プレイス〟に興味を持たれている。サード・プレイスとは私たちの生活において第一を家、第二を仕事場とすると、カフェや飲み屋のような誰でも集まれるような場所だ。今回はそういった観点で三宅島を考えてみた。本講座は二部構成になっており、第一部は実際に場を観察する。第二部では各々が感じたことを踏まえ〈ふるさとの湯〉〈misaki+Cafe〉〈船客待合所〉など三宅島に関する場所を挙げた上で、それらに対する考えを小グループに分かれて発言した。私は一部の待合所に関して意味を深めたいと思ったため、第二部のテーマも〈船客待合所〉を選んだ。

そこは出港する人が船を待つ場であり、島民同士の情報交換の場としても利用されている。ただ待つだけでなく、魅力ある場所にするにはどんなアイディアがあるだろうか、と考える。ランチ・読書・お茶会……思い思いのアイディアを次々と出した。同じグループの島民の方からは噴火によって変化した三宅島についても伺うことができた。一つの〈客室待合所〉という場から、島の再生という話までに展開できたようだ。私たちのこの講座が即座に計画として実行されるのは難しいが、この話し合いが次への一歩となって欲しい。



今回の講座に参加して特に感じた事は〈場所〉は人それぞれのエピソードによって語られるということである。受講していた島民の方は「幼いころの記憶がとても強い。島をこんなにじっくり考える事もなかった」と語る。三宅島を改めて〈場所〉として観察することで、記憶や経験から自分を気付くきっかけとなったように感じたのだ。

最後に長岡教授は「〈場所〉は建設されることで完成するのではなく、時間とともに沢山の人に使われていくことで、変化し続けていく」と仰っていた。私達が三宅島に何度も訪れる中で島の方との関係も少しずつ築いていければ、と願う。

（吉田あんな）

女将さん大集合！

島には、こんな凛々しさがあります

二〇一一年九月の三宅島大学開校直後から開始した、女将さんのポスター作りが、今回の作成をもってひとまず終了となる。これまで五回の活動を行い、三宅島観光協会に登録されている宿のうち、十六人の女将さんを取材してきた。それぞれ二枚ずつ、計三十二枚ができあがった。ポスターはA1サイズに印刷し、取材先に届けており、宿の中に貼ってあるものも沢山ある。また、一部は第二回レディースランや、東京都庁でも展示された。

限られた時間ではあるが、様々な話の中の言葉や表情から読み取った女将さんの魅力を、文章と写真で表現する。島や民宿に対する想いは十人十色。そのどれもが強くて、優しい。ポスターにもそれがあらわれているのではないだろうか。

ここに、これまで作成してきたポスターを全て並べた。細かなところは、直接民宿を訪れて女将さんと一緒に見て欲しい。今後、これらすべてを島内で展示する『ポスター展』の開催も考えている。



あしたばん

2012年
(平成24年)
11月4日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

女将さん特別号

ご協力してくださったみなさま

この順番です。

①伊波荘
②やまのべ旅館
③スナッパー
④オレンジハウス・バロン
⑤阿蘇
⑥おしどり
⑦サントモ
⑧夕景
⑨アンバージャック
⑩オーシャンクラブ№3
⑪つくば
⑫モロミド
⑬新鼻荘
⑭バーディー
⑮ラッパ荘
⑯すずらん
（敬称略）

ありがとうございました！

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

「ワークショップ」について考える

近年、「ワークショップ」ということばが、さまざまな場面で使われるようになった。あたらしい学び方、問題解決やトレーニングのあり方について考える上で多彩なヒントを提供してくれる、重要なキーワードとして扱われているようだ。「ワークショップ」という方法は、ぼくたちに何をもたらしてくれるのだろうか。他の手法と、どうちがうのか。じつは、一〇年以上前から、長岡先生とともに、こうした問いに向き合ってきた。

そもそも、「ワークショップ（工房・作業場）」は、「ファクトリー（工場）」に対抗するコンセプトとして紹介されてきたという。「ファクトリー」は、流れ作業に代表されるような、定型的で時として無機的なイメージだ。誰がやっても、（手続きさえ正しければ）同じ」結果を生み出すことができる。効率的ではあるが、当然、個性は消失する。いっぽうで「ワークショップ」は、個性が際立つ創造の場を想起させる。ひとつ一つの事案を丁寧に理解し、個別的に扱うことで成り立つものだ。

少々ややこしいのだが、「ワークショップ」ということばが広く知られるようになり、多くの人びとが実践を試みるようになったことで、本来の工房や作業場が持つべき性質が失われているかもしれないのだ。「ワークショップ」という方法は、ここ一〇年ほどで一般化がすすみ、個性のない、容易に再生可能な〈型〉へと姿を変えつつある。これでは、対抗すべき「ファクトリー」への服従だ。

だからこそ、いま、あらためて重要だと思うのは、「ことばを与えること」「命名すること」で「世界」が創造されるということだ。「ワークショップ」が、本当に、ぼくたちにふさわしい「世界」を語るためのことばであるならば、もう一度、そのことばについて考えてみる必要がある。ぼくたちは、ことばを発し、ことばで表現することによって「世界」を変えるのだ。一〇年経って、ふたたび長岡先生と語るときが来た。

（加藤文俊）

手渡しの会話

～最後の女将さんポスター完成～

女将さんポスター作りの最後の取材へ、ラッパ荘の山﨑春代さんを訪れた。仕事のことやご自身についてなど、取材を通してたくさんのお話が出来た嬉しさと同時に、自分たちが感じた魅力をしっかりとポスターにまとめあげたいという使命感に近いものを感じながら、ラッパ荘を後にした。

ポスター作りの中で、取材そのものやその後のメンバーでの話し合いは大事だが、印刷してその場で女将さんにお渡しする、ということを私たちは大切にしてきた。取材を終えて数日のうちにポスターを完成させること。出来上がったポスターを通じて、女将さんとの会話や表情を直接みること。そういうポスター作りの作業を何度も重ねていくうちに、女将さんたちだけでなく三宅島の人たちとも、お互いのことを少しずつでも知っていけれれば、と思う。



今回の滞在では大きな紙に印刷をすることが出来なかった。それでも、なんとか女将さんに直接手渡したいという想いで試行錯誤をした。そして、A4の印刷紙を切り貼りすることで、いつもと同じA1のポスターを完成することが出来た。

普段とは違う質感のポスターを抱え、取材翌日に再びラッパ荘にお邪魔した。初めてお会いした取材の時よりも、心なしか柔らかな表情で迎えて下さった春代さんに、完成したポスターをお見せした。大きく入れたポスターのコピーは、「芯のあるひとだよ」「ますますファイト湧いてきちゃうよ」。私たちが感じた春代さんの魅力を表現したポスターのコピーを、春代さんから頂いたこの言葉が、女将さんポスター作りを終えた私たちの今後の活動の背中をおしてくれたのは、言うまでもない。

（竹下　絢）

「三宅島へ行く」

三宅島に来ることの楽しさはいくつかある。ひとつは船に乗って、いつもと違う環境へ時間をかけて向かうということ。もうひとつは、大自然のなかでゆっくりとした時間を過ごし心身共に充たされる場があるということ。でも最近はそれ以上の楽しさを見つけたような気がしている。それは「人」に会えるということだ。

島への渡航が今回で八回目になる私には、三宅島（三宅島大学）での思い出がたくさんある。例えばあしたばんの発行、女将さんのポスター制作、受講生としてメガネ岩の上で溶岩ダンスをしたこと、水中スケッチなどいくつも挙げられる。しかしなかでも、キッズリサーチにおける子どもたちとの出会いは格別だった。キラキラと輝く目で毎日楽しそうに校舎にやってきてくれる子どもたちをみることが本当に嬉しかったし、この活動が子どもたちの夏休みの一ページになり、いつか大人になったとき、ふと思い出してくれたらなんて思ったりもした。

ただ私にとっての喜びはその後の交流からもきていると思っている。はじめてリサーチした八月から一ヶ月後、九月にも一日限定復活でキッズリサーチのふり返りを行った。そのときにもたくさんの子どもが集まってきてくれた。そして今回も「ゲイジュツの秋」というタイトルで講座を行なった。そうして何度も対象者を定めた講座を開くことで、子どもたちと何度も会い勉強し、深い関わりを持つことができるようになった。島という一体感を持った空間のなかで、再び訪れたとき自分の顔を見て名前を呼んでくれる、そんな人ができたことが何よりの喜びだと思っている。

（新飼麻友）

編集室の風景



晩ご飯の回鍋肉と麻婆豆腐のおいしそうなにおいに満たされた部屋の中で、険しい顔つきで黙々とキーボードを叩いている。見出しの言葉ひとつで夜中まで議論を交わしている。この光景が心地よく感じてきたのは、いつ頃からだろうか。

いくつもの記事を書いても、読んで下さる方への感謝の気持ちは変わらない。一号一号こころを込めて、全力でつくるからこそ、手渡す手にも自然と力が入る。この『あしたばん』を手にしたときに、この風景を思い浮かべてみていただければ、それほどうれしいことはない。

編集部一同

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

増刊 ましたばん

2012年
(平成24年)
11月4日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
編集・発行：森部 綾子
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

あしたばん増刊号

あしたばん制作者の素顔 大公開?!



いつも『あしたばん』をお手にとっていただき、ありがとうございます。今回は、増刊号として『あしたばん』を制作している私たちのことを少しご紹介しようと思います。

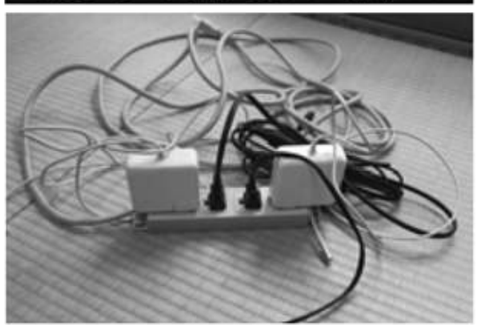
三宅島大学に頻繁にぞろぞろと出入りしている私たちは、慶應義塾大学加藤文俊研究室（ゼミ）に所属している学生である。ふだんから、人びとのコミュニケーションの生まれる【場】について理解を深め、地域、生活コミュニティにおけるコミュニケーションを生み出し、デザインしていくことに研究の重点をおいている。

その一環として、「ポスタープロジェクト」「『あしたばん』制作」「キッズリサーチ」などといった三宅島大学の活動を行っている。昨年六月に初めて三宅島に来て以来、一ヶ月に一度のペースで訪れ、三宅島への興味関心を深めつつ、島のみなさんと交流を持つようになっていった。ポスターや『あしたばん』などは、ひとつのメディアとして人びとの手に渡っていく。それらは、ひとつひとつを手渡しできる規模の「ちいさなメディア」なのである。私たちが、これらの「ちいさなメディア」を制作するにあたっては、不特定多数向けの大量発行されるものではなく、メディアを介することで、言葉を交わしながら、島に暮らす人びととの関係性を地道に築きあげていく、継続的なサイクルを生み出していくことを目標としている。私たちが五感を最大限働かせ、感じ取った「三宅島」を伝えていきたい。

「ポスタープロジェクト」も、『あしたばん』も、取材を終えてその日のうちに制作に取り掛かり、翌朝には仕上げ、印刷し、ポスターをモデルとなってくださった方にお届けしたり、あしたばんを商店などに設置し、自由に持ち帰ってもらえるようにしたりと、必ず、「仕上げて、届ける（置いて帰る）」のだ。できあがったものは、ウェブでも公開し、過去に制作したものから最新のものまで全て見ることができる。（加藤文俊研究室 http://fklab.net/）



明かりの消えない部屋？



取材から戻ってきてからの編集作業は、時間との戦いでもある。翌朝には完成させなければならないため、締め切りぎりぎりまで最大限クオリティを高めるために、集中力を注ぎこむ。どこのまちへ行くにも、各自ノートパソコンを持参し、延長コードを絡ませ、電源を補給しながら制作に励む。皆で画面を覗き込みながら、ああでもない、こうでもないと意見を交わしていく。作業が夜中まで続いてもポスターのなかの人の喜ぶ顔を思い浮かべると、眠気も吹っ飛び、早く届けに行きたいという気持ちで力がわいてくるのである。



よそ者目線で

私たちは、全国各地をめぐりながら、ポスターやかわら版などのちいさなメディアを制作している。今まで訪れた土地は二十ヶ所以上にもなり、三宅島はそのフィールドのひとつなのである。ポスタープロジェクトでは、民宿の女将さんシリーズと称して、女将さんをモデルにしたポスターを制作してきた。また、今年の夏新たにスタートした「キッズリサーチ」は、夏休み限定の寺子屋として、島の小中学生たちと互いに学びあう場を築きげ、子どもたちと交流を深めることができた。

私たちがまちを訪れ、そこでの暮らしや生活にできる限り近づき、理解していくためにフィールドワークという方法を用いている。フィールドワークでは、現場に身をおいて、自分の足で歩き、感じたものをていねいに記録し、残し、伝えていくことが必要とされる。

ほんの一日、二日滞在するだけでも、そのまちの生活に少なからずよそ者が入り込んでいることになる。ただよそ者が来ただけで終わるのではなく、その目線でまちの魅力を切り取ることで、そこで暮らす人びとに、新たな気づきを得てもらえるようなアウトプットを残すこと、そのアウトプットのかたちをデザインしていくことが私たちの学びの中心にあるのである。

この『ましたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
（平成25年）
1月25日
金曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十四号

想いは強く、そして優しく。「女将さんのポスター展」開催中！

二〇一三年一月二十四日より、三宅島郷土資料館にて「女将さんのポスター展」が開催された。この展示会では、慶應義塾大学加藤文俊研究室が二〇一一年九月から制作してきた「宿の女将さん」のポスターが掲示されている。私たち学生が女将さんの取材をおこない、それを通じて感じた想いや強さを受けとめ、写真にことばを添えてポスターの制作してきた。掲示されているポスターは三十二枚、計十六名の女将さんたちが勢揃いした。

展示会場には、初日から取材を受けた女将さんたちが何人か見に来てくれた。彼女たちは自らの姿が写るポスターの前に立ち、それを見ながら、友人や女将さん同士で話に盛り上がっていた。その光景は、ポスターを制作した私にとって、他の学生たちにとってつい顔がほころんでしまう瞬間である。また、ポスターでしか知らなかった女将さんたちを目の前にして、有名人にやっと会えたような、不思議な嬉しさがこみ上げてくるのだ。



ある女将さんから「わたしを取材した子たちは来てないの？」と尋ねられた。残念ながら今回は島に来ていないことを伝えると、彼女が持っていた紙袋を渡された。「取材にきた男の子がね、そのとき風邪をひいていたから、青森のりんごを持ってきたの。でも来てないならしょうがないね。みなさんで食べて。」と言い、渡された紙袋にはりんごがごろごろと入っていた。彼女から受け取った紙袋から感じた重さは、取材にきた学生たちを想ってくれていることを実感できた。取材時間はわずか二、三時間かもしれないが、女将さんと学生たちの間に築かれていた関係性は豊かなものだった。



島の魅力は、実は暮らしに身近なところにこそあるのかもしれない。そしてそれは、島への想いを持ち、生きている人びとなのだ。「女将さんのポスター展」は、二月三日まで開催されている。ぜひこの機会に多くの島民の方々に足を運んでいただき、島を考えるきっかけとなれば幸いだ。（上地 里佳）

一歩ずつ また一歩ずつ

女将さんポスタープロジェクトの報告会は、二十四日、十時からおこなわれ、ポスターのモデルとなった四名の宿の女将さんたちと、役場関係者も含む島民の方々が訪れ、用意した椅子はほぼ満席となった。報告会という名ではあるが、堅苦しくなく、終始和やかな雰囲気のなか進められていった。加藤文俊先生から、ポスタープロジェクトがスタートした経緯や、他地域を含むこれまでの活動紹介、経過報告があり、私たちが今までやってきたことを、実際にポスターのなかの女将さんたちにも詳しくきちんと見ていただけるよい機会となった。

私たちは、ポスター制作における取材を通じて、女将さん自身のことはもちろん、そこから島のことも少しずつ知っていく。時間をかけながら島の暮らし、生活のリズムを身体で理解していくことが必要なのだと感じている。島の人びととの関わりを深めながらじっくりと進めてきた三宅島でのポスタープロジェクトは、女将さんシリーズにとどまらず、昨年夏には、島の子どもたちシリーズも制作し、展示する機会にも恵まれた。

こうして少しずつ広がりつつあるポスタープロジェクトだが、今後制作されたポスターを、どう活かしていけるかがひとつのカギとなる。「三宅島にもう一日長くいたい」と島へ来た人に思わせるような仕組み作りにこそ、ポスターをうまく使ってもらえるようになりたい。女将さんのポスターを見て「この女将さんに会いたい」「ここに泊まってみたい」とお客さんの心をつかんで、女将さんたちとの交流を楽しんだり、滞在期間を長くしたりする人が増えていけば、三宅島の魅力もより増していくのではないだろうか。



今回、この報告会で女将さんたちから「もっといろいろなところに貼れたらいいのに」との声があがったのがとてもうれしかった。ポスターをお渡しした後でも、こうした交流の場を設けることができ、「竹芝桟橋の待合にも」などという積極的な意見も飛び交う、場の活気を島全体に広げられるよう、また一歩ずつ前へ進んでいきたいと思う。（森部 綾子）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

「キャンプ」はつづく

加藤 文俊



ぼくたちは、フィールドワークを中心とする調査研究の方法を「キャンプ」と呼んでいる。いわゆる野営と間違えられることが多いので、説明するのはなかなか難しいが、最近の活動の本質を表すのに適したコンセプトなのだ。

これまで八年ほど「キャンプ」を続けてきて、わかってきたことがある。「キャンプ」では、まちや地域コミュニティに暮らす人びとに接近し、滞在中にアウトプットを仕上げる。現場でのさまざまな体験を「まちに還す」活動であることはまちがいないのだが、それ以上に、ぼくたち自身に変化をもたらしたように思える。

「キャンプ」では、役割関係が柔軟に変わる。現場の動きに合わせて、適宜調整しなければならないことがたくさんあるからだ。事前にどれほど周到に準備をしておいても、現場では何が起こるかわからない。そこで、いちいち立ち止まって悩んでいる余裕もない。だから、〈その時・その場〉で判断しながら、目の前の出来事と向き合うことになる。まだ、きちんと言語化できないのだが、回数も頻度も増えてきたおかげか、「キャンプ」をつうじて、あたらしいグループのあり方が見えてきたように思う。それは、関わり合うことを尊ぶグループだ。



いままでの「キャンプ」は、すべて楽しかった。これからの「キャンプ」も楽しくなければならない。楽しさを追求するというゴールをみんなで共有してさえいれば、ぼくたちは、現場で自律的に動き、そのなかで人を想う力を発揮できるはずだ。

現場で得る



フィールドワークのなかで、人びとに焦点をあて、まちやそこでの暮らし、生活に近づいていくと、人の生きざまが少しずつ見えてくる。取材の受け手側は、私たちの質問に答えるために、過去をふり返りつつ、今なぜこの仕事をしているのか、どうしてこの場所に住んでいるのか、取材をする私たちくらいの年代のころは、何を考えていたか、どういう道を選択したかなど、取材中のわずかな時間で情報を整理し、凝縮させ、声に出していく。そうすることで、忘れかけていた初心を思い出したり、改めて自分の身の回りのことを考えたりするそうで、完成したメディアを手にすることも含めて、「よい機会になった。」というお言葉をいただいたこともある。

私たちも、取材を通じて自分の考え方を見直したり、将来の選択肢を広げる機会になったり、改めてまちと人、人とひととの関係性について考えさせられたりする。人の生きざまに触れ、直に受ける人生の先輩からの言葉は、他から受ける情報とは比べられないほどに実感をともなった言葉なのである。私たちは「キャンプ」を通じて、住んでいる場所、進む道もさまざまである、たくさんの人びとに出会い、コミュニケーションを築き上げていく。そのなかで、私たちよそ者が得たもの以上のなにかを、きちんと見えるかたちで、まちに還せるようになりたい。

心地よい空気につつまれて



私は、これまでに「ペンションおしどり」と「アンバージャック」の女将さんのポスターを制作させていただいた。試行錯誤を重ねながら夜遅くまで作業し、ポスターを完成させ、翌日直接お渡しできたときの喜びは今でもはっきりと覚えている。その後さらに加えてうれしいことに、ポスターを民宿の玄関付近に掲示してくださり、『あしたばん』も設置させていただけることになった。「『あしたばん』最新号です！」と言って扉を開けると、笑顔で女将さんと女将さんのポスターに出迎えてもらえるのがすごくうれしくて、このプロジェクトに携われて本当によかったとそのたびに感じるのである。ポスターを制作した後も続いているこの交流を、これからも大切にしていきたいと思う。



長く続いた学生生活も終わりを告げ、社会へと飛び出していく日がだんだんと近づいてくる。社会人になったらなかなか三宅島へ来る機会もないのかと思うとさみしいというか、ぽっかり穴が開いてしまうような感じで、せっかく少しずつなじめてきた島の環境と、来るたびに好きになっていくこの島の空気をますます恋しく思ってしまいそうだ。これでもかというくらいに身体いっぱいに吸い込んで、できることならためこんで帰りたい。でも、またきっと来る。必ず来たい。そのときを楽しみに、小さくなっていく島をいつまでも眺めていようと思う。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

壮大な自然

三宅島に足を運ぶようになってからずっと、行ってみたいと思う場所があった。それは「新鼻新山」だ。写真で見たり、女将さんの話には聞いていたものの、なかなか行く機会もなく見れずじまいになっていた。しかし今回その願いが叶い、時間や天気にも恵まれて壮大な自然を目にすることができた。



新澪池の近くに車を停めて入り口に進むと「どこから入るの。これ入ってもいいの」と思うくらいの草が生い茂っていて一瞬戸惑ったが、奥に進んでいくと道が開けて大きな岩場があらわれた。圧巻だった。まさに百聞は一見にしかずで、目にしたときは大きな感動に包まれた。私はこれまでこんな大自然を見たことはなく、気がついたらみんなで頂上目指して走り出していた。だれもいない風の吹き抜ける広い砂利道を駆け抜けるのはとても気持ちがよく、爽快感でいっぱいだ。頂上まであがると眼下には透き通るブルーの海が広がり、後ろをふり向くと西陽に照らされオレンジがかった山々が綺麗な景色を作り出していた。

こんな景色に出会うと他にもまだ、私の知らない三宅島の魅力がたくさん眠っているのではないかと思い、わくわくしてしまう。またしばらくして島に足を運んだときも同じような自然は変わらず残っていてほしい。

（新飼 麻友）

いのちを食べている

富賀浜にクジラが打ち上げられていると、郷土資料館のポスター展に来た人に教えてもらった。数日前に流れ着き、まだそのすがたが残っているらしい。島のお店へ訪れたら、マスターがからだを張ってその日の朝取ってきたという立派なクジラの歯が店のカウンターに置いてあった。どのくらい大きいのだろうという好奇心を胸に浜へ行くと、風が強く吹いていて、わたしたち以外人の姿はほとんどなかった。崖の下を覗き込んで見たら、岩場にからだを打ち寄せた真っ白なクジラの姿があった。少し離れたところからでも、生き物の死骸の独特のにおいがする。



今から遠く昔、天保三年も三宅島のくさんのカラスが飛んできた。餌の在処を報せ合っているようで、いつしか多くの鳥がクジラの肉を啄んでいた。自分たちだって、いつでもいのちを食べて生かされているんだということを、ふと思い出させてもらった風景だった。

（龍山 千里）

気楽に、同じ時間をいっしょに「誰もが先生、百人先生」

ポエム先生、しめ縄先生、百人一首先生。三宅島では最近、いろんな名前の「先生」が増えている。

これは「冬の島おとこ」として三宅島大学本校舎に駐在しているレジデンスアーティスト、開発好明さんがおこなっている「百人先生」というプロジェクトによってうまれているものだ。それぞれの人が、趣味や得意なことを持ち寄って「先生」という名前で呼び合うと、いつもと違う時間になるという。ふだんふつうに行っていることが「わぁ、すごい！」と言われ、ほかのだれかの「わぁ、すごい！」も見つけられる。うれしくて、ちょっとだけ気恥ずかしい。そんな気分になれるのが、「百人先生」の魅力なようだ。

開発さんから最近出会った先生について聴いて、思わず誰かに話したくなったのが「奥歯先生」。ごはんを食べているときに、どんなものが奥歯にはさまったら素敵な気分になるのか、次回予定されている講座では分もこれについて語るそうだ。

「先生って言葉は、ハードルを上げちゃうところもあるけれど、気楽に来てほしい。同じ時間を一緒に過ごしてほしい。」と開発さん。三宅島に来ると、いつも身の回りにはなにかを教えてくれる先生ばかり。たくさんの先生たちで満たされた教室に、参加してみたいと思った。

（大西 未希）



三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
(平成25年)
6月21日
金曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第三十五号

人を繋げる「若大将」

新マネージャーの素顔に迫る

「一人一人が集まった時に新しい価値観や考え方が生まれ、人が繋がることによりもっと強くなっている」そう語るのは、今年から三宅島大学マネージャーに就任した塩野谷卓さんだ。塩野谷さんはさわやかな好青年という印象を受ける。

そんな塩野谷さんがマネージャーに就任することになった経緯は、もともと様々なアートプロジェクトに参加し、全国各地を転々としているうちに三宅島大学のプロジェクトを知り、応募したことがきっかけだ。「二十年に一度噴火を経験する中で、それでも三宅で生きていこうという人々に興味があった」と、当初のイメージを語ってくれた。

元々山育ちの塩野谷さんは、初めて島を訪れた際に海に囲まれた島の空気感を「怖い」と感じたようだ。苦労話を聞いても、普段は三宅島大学の校舎である御蔵会館に一人で住んでおり、広い空間で一人で過ごす怖さに慣れることに苦労したそうだ。怖さを払拭すべく塩野谷さんが始めたことはなんと大学の掃除。塩野谷さん曰く、掃除をすることで自分の知らない場所を無くす事により、徐々に怖さを無くしていったそうだ。やると決めたら徹底的にやる性格で、大学の裏庭にあった大量の空き缶やペットボトルをなんと二日間かけて全て掃除したそうだ。



そんなエネルギッシュな塩野谷さんに、これからの三宅島大学について伺うと「講座が無い時でももっと気軽にたくさんの人が大学に来てくれるような場所にしたい、色々な人が集まることによって、もっと面白いことが起きる」と語ってくれた。大学の屋根が気に入りの場所らしく、そこから度々阿古全体の景色や海を見渡すのだそうだ。

「何事も人と繋がらないと始まらない」と語る塩野谷さんは毎日島の外回りや、夜に伊豆の中学校で行われるバスケット等に参加して、大学のPRや島の人との関係を広げるべく活動している。今後塩野谷さんがどれほど島に溶け込み、人のつながりを広げていくのだろう。想像もできないが、今よりもたくさんの人と繋がり、今よりもっと面白いことに取り組めるようになった時、大学の屋根から見える島の景色はきっと格別なものになるはずだ。

（長富将成）

◇暮らしと環境◇

昨年の十一月以来、七か月ぶり八回目の三宅島である。伊豆避難施設からはじまり、御蔵会館をお借りしてから早二年。拠点としているこの三宅島大学校舎には何度も訪れているが、今回はどこか新鮮さを帯びていた。

三宅島大学校舎の玄関を入ると白い波紋状の模様や迷路が描かれた大きな窓ガラスに、壁に張り出された百人先生の顔写真、三宅島・アートに関連した冊子が並ぶ小さな図書館。

廊下には学校らしい釣り部活の部員募集の張り紙かと思えば、リビングには腰掛がゆったりとしたソファと観葉植物。誰かのお宅にお邪魔したようなアットホーム感と学び溢れる賑わいを兼ね備えたなんともいえない感覚になった。これは大学として授業を重ね、授業内容としても授業スタイルとしても進化し続けている証だろう。

物や環境は使う人が、使い易いように自然と様子を変えていく。私たちは鍋の置き場所、香辛料が並ぶ棚、食器の重ね方など、あらゆる暮らしの場面で自然とオリジナルを生みだしているのだ。

変化といえば、校舎近くの錆ヶ浜港の様子もガラッと変わっていた。まだ工事中らしく中の様子は分からなかったが、今までの一面的な広い待合所から幾何学的なホール状の建物になっていた。茶色の外壁と黒く高い屋根は、これまでの誰もが気軽に入れる〝ひろば〟から威厳を備えた〝建造物〟であった。使う人が環境を変えるとともに、建物がかわる事で使い方、利用者の振る舞い、様子を変えていくのだろうか。今年も三宅島大学にとって進化の一年がはじまる。

（吉田あんな）

噴火が魅せる景色

はじめて三宅島に来た。三宅島の地を踏んでたった一日。そんなわたしが文章を綴ってみる。三宅島のイメージは、噴火。わたしがまだ幼かったころ、ただ言葉しか知らなかった〈噴火〉が近くの島で起こった。

いざ島を歩きだしてみても「三宅島にきた」という感覚はない。しかし歩き続けていると、葉の付いていない、黒くて、細い木が多くあることに気づく。海岸には冷え固まった溶岩ばかりで、わたしたちが普段目にしているような海岸ではない。だんだんと噴火の跡が見えてくる。そんな中でも、わたしの目に留まり続けていたのは海の色だった。ところどころ見える、透明感の水色。常に動き続けるその色は、わたしの目に映り続けていた。この透明感のある色の下は、冷え固まった黒い溶岩である。噴火が生み出した溶岩が、この海の色を生み出しているのだ。噴火がなければ生まれなかった色、生まれなかった景色がそこにはあった。

二十年ごとに起きる噴火は、島の人々にとって、どんなものなのだろうか。わたしはわからない。しかし、噴火があるからこそ見ることのできる景色が存在するということはわかる。わたしはまだ、この島を知らない。鳥のさえずりを聞きながら、ゆっくり歩きながら、知っていきたいと強く想う。

（小笠まゆる）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

たったひとつの生き方

初めて島を訪れたのが二年生の時だからちょうど三年目になる。それから何度も訪れて、今回でかれこれ十回目になる。右も左もわからず、ただただ圧倒されていた二年生、少しずつ慣れてきて島の景色や人を見る余裕が出てきた三年生、そして四年生になった今、自分は大学生活の集大成として、卒業制作を三宅島で取り組むことに決めた。背景は色々あるが、一番の理由は大学でのゼミ活動の中で一番長く、深く関わってきたフィールドであるからだ。考え方も背景も違う様々な人との関わりの中でその人たちに魅力を感じ、その人たちの魅力を何か一つのカタチにしたいと強く思った。

今回、島の様々な人たちの中で自分が取材を行おうと決めたのは島の漁師さんだ。理由は、長年にわたって島の主要産業であり、島の人々の生活を食の面から支えてきた姿、生き方に非常に魅力を感じたからだ。具体的には、島の漁師さんにインタビューをして、取材で得た「生の声」を伝えるインタビュー集を作ろうと思っている。島で長年生きてきた漁師さんの経験がギュッと詰まったインタビュー集だ。

たったひとつの島でたったひとつの生活を営む人の生きざまが載っているそのインタビュー集を見て、その人が積み重ねてきた年月の尊さを感じてくれるような成果物にしたいと思っている。また、可能な限り生の声と姿を届けていきたいので、漁に同行させてもらうことで自分の肌で漁師の生活を感じることも考えている。自分の学生生活の集大成、そして自分の三宅島での活動の集大成として精一杯取り組んでいきたい。

（長富将成）



「記憶に残る場所」

台風四号が接近しているなか、船は進む。荒波に揺られながら、離れていく東京湾を背に、着岸できるかという不安を抱えていた。三池港に着いた頃から大雨が続き、夜まで降り続いた。わたしにとって、今回が四度目の三宅島である。ほぼ二十年ごとに噴火をくり返し、復興という問題に向き合ってきたこの島は、わたしたちの〈これから〉を考える上で、色んなことを教えてくれた。わたしが三宅島にきたのはちょうど一年前だ。この一年間のあいだに、三宅島がどう変わっているか、想像もつかなかった。

この前、岩手県釜石市、陸前高田市に訪れた。記憶に新しい東日本大震災の被災地である。〈被災地〉というフィールドは、私にとって初めてだし、どんな場所へ、誰に会いにいけばいいのかさえ分からなかった。誰もがこの状況で、自分に何ができるかを真剣に考え、悩んでいた。自分は震災と無関係だと考える人はいなかった。当たり前のことが、当たり前に起きていた。大きな被害についても、誰もが知り、揺れの強弱の差はあるが、誰もが経験したこと。ゆえに、「東北」と聞くと「津波避難所」の看板があちこちに散らばっていて、二年経った今でも、その被災した街並はそのままであった。メディアから見た被災地や、東京での火の凄まじい自然の力を物語っている。しかし、溶岩で真っ黒に染まった大地も、その隙間から新しい緑が芽生え、徐々に回復しているとも言える。島に対する三宅島。私たちは当たり前のように来島し、ときに観光地のように楽しんでいたときもあった。この違いはなんであろうか。東北では景色に胸が痛み、歩くことさえ困難であった。しかし、この三宅島も過去に被災し、家も店も失ったひとがいることを忘れてはいけない。東北と三宅島が同じ状況であったとは言わないが、「まちを失う」という部分では同じなはずだ。時間が経ち、私たちはその土地の歴史についての記憶と感覚が鈍くなる。

東北で出会った人たち、三宅島に出会った人たち、両者に共通していることは、「過去に生きていない」ということだ。もちろん、個人差はあるが、悲しみの記憶に生き続けているわけのはいかない。前に進めないほど辛い体験をしていても、そして時間は進むのだ。

（廣野吉隆）





ポスター展開催の告知

慶應義塾大学 加藤文俊研究室による
ポスター展を開催致します。

6月23日（日）午前
三宅島大学本校舎（御蔵会館）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
6月22日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十六号

おかげさまで、三年目。



今年も加藤文俊研究室が三宅島にやってきた。本研究室が三宅島を初めて訪れてから今年で三年目に突入し、今回は一七名という大所帯で滞在している。三宅島大学本校舎（御蔵島会館）を活動の拠点とし、家事を分担して大家族のように生活している。

三宅島の滞在は二泊三日が基本であり、その中で取材、『あしたばん』発行など、さまざまな活動を行なう。金曜日、本研究室が三宅島に到着してまずやることは、仮眠をとることである。都会の生活に馴染み、船に揺られることに慣れていないわたしたちが、船で熟睡することは不可能に近い。五時間の睡眠を船で取れたとしても、島に上陸すれば疲労を感じるものである。そのため、三宅島大学本校舎に到着したらまず二時間程度の仮眠を取る。ここでの睡眠が、今後の活動に大きく影響するのである。

仮眠が終わり次第全員集合し、その日における動きの打ち合わせに入る。壁一面の黒板を使用し、タイムスケジュールを書き込んでいく。しかし、必ずしもスケジュール通りに進行するとは限らない。天候による船の就航状況など、さまざまな条件によって流動的に動くことを余儀なくされる。どんなことがあっても、柔軟に対応することが求められるのである。

打ち合わせ後は、それぞれの活動を開始する。取材に行くひと、『あしたばん』の記事を書くひと、夕飯の買い出しに行くひと、それぞれに同行してムービーを撮るひと。ここで鍵となるのは、一台の車である。本研究室の活動は、この乗車定員四名の車をいつ、誰が使用するかによって大きく左右される。取材先が遠ければ送迎が必要であり、夕飯の買い出しにも、『あしたばん』の配布にも必要となる

三宅島に住むとは？

「葛藤と戦い」。それは、誰もが帰属する社会で何らかの対象物に対して直面することだ。私が今回取材した食事処「花鳥羽」の花田さんは、葛藤と戦いという現実問題に対して、離島という素朴感、無垢感の中で移り変わる時代とともにそれを感じていた。

花田さんは現在六八歳であり、青森県出身である。これまで三宅島以外にも船橋、川口、赤羽、東京芸術大学の学食などさまざまな環境で経験を積んだ。また国内という垣根を超えて、フランス、ドイツなどでも料理研修を行い活動の場は多岐に渡るが、その中でも生活する環境として、または商売を営む場として何度も選択する場が三宅島。

二度の噴火に苛まれ、やむを得ず島を後にしても、また三宅島に戻ってくる。その理由は花田さんが頑固であるという性格以上のもの。親方に憧れ、島まで追い求めて来てからこれまでたくさん島民と接し触れ合う中で生まれた「島を愛する」気持ち。旅人となりたくさんの地を巡る中で自然と感じる事になる三宅島の情景は、花田さんの心に色濃く残っている。それは彼自身の支えであり、生きることである。

花田さんはこうおっしゃった。「東京芸術大学で食べた、豆腐ともやしとバターの和え物の味が忘れられない。今度学生じゃないけど入ってみようかな。あれは俺が三宅島に行くことになった原点だから」。冗談まじりでとても気さくな方。その中にも忘れる事のない故郷への哀愁と変わりはしない三宅島への情景がこれからの彼を駆り立てているように思えた。

「噴火が終わって帰ってきたけど、三宅島の人は良い意味でも悪い意味でも都会の影響を色濃く受けて帰って来た。でもそれってたまったもんじゃねえな…。あ、もちろん島は大好きなんだよ」

（小川健太）

島の情 宅の表 三

三宅島さんぽ。探険気分で島を歩いてみて、私はその穏やかさに驚いた。青い海を見ながら、その海から吹く爽やかな風にあたるだけで時の流れを忘れることができる。数日前までビルに囲まれながらせかせかとした生活を送っていたことが信じられない。

三宅島大学を出て三宅島一周道路を歩いていると、波の音だけでなく、ふとウグイスの鳴き声が聞こえてきた。鳥のさえずりを耳にするなんていつぶりだろう。東京は人工的な音で溢れかえっていて、風の音や鳥の鳴き声などが知らず知らずの内に埋もれてしまう。こんなにも鮮明に自然の音が聞こえてくるのもこの島の、のどかさ故である。

そのまましばらく歩くとメガネ岩に辿り着いた。景色が一気に開けた途端私の目に飛び込んできたのは、想像をはるかに超えた光景であった。壮大な海と黒い岸壁に打ち付けられる白い波、その波が押し寄せるたびに響く大きな音と振動と波しぶき…その姿はまさに圧巻で、私は思わず息をのんだ。噴火によって出来たメガネ岩が、噴火によって姿を変える。それまでの穏やかな島の印象から一変、自然の威力を感じた瞬間だった。調べてみると、メガネ岩はダイビングスポットとしても有名とのこと。澄んだ水と入り組んだ海底、そこに住む多種多様な生物の姿を想像しただけでワクワクした気分になる。崖の上から覗く海の姿も美しかったが、水中からの見渡す景色はまた格別なのだろう。穏やかさにある力強さや自然の摂理、三宅島にはまだまだ魅力が潜む予感がする。

（枡野友香）



また訪れる日までのお約束

三宅島滞在三回目。初めて訪れる前、私の三宅島のイメージは火山だった。今の私にとって三宅島は、未知数。訪れる度に新しい発見がある場所だからだ。あと二ヶ月半で大学を卒業する。この三日間の滞在が、私にとって学生生活最後の三宅島への旅となった。

最初に訪れたのは、二〇一二年の六月。鮮明に覚えているのは、緑の森の中から、黒い木々が手を伸ばしているように点在していること。火山の煙によってところどころ葉が生えなくなったと聞いたこと。メガネ岩から見る夕日や溶岩でできた浜。火山はテレビの向こうの存在だった私にとって、ここまで自然の力を肌で感じたことはなかったし、この島にしかない魅力だと感じた。

何よりも思い出深いのは三宅島での食事。カメノテで作ったお味噌汁や、アシタバを使ったてんぷらなど、三宅島特産の食材を使った料理は新鮮だった。都会で生活しているとインスタント食品や外食で済ませてしまうことも多い。しかし、生の素材の良さが活きている料理の味は格段に違う。大事なのは、ひとつの素材の活かし方をたくさん知って、工夫すること。私が三宅島で出会った人々は、そんな工夫上手な人達だった。食材を差し入れて下さる時、「この食材はオリーブオイルで味付けすればいいのよ」「お味噌汁に入れればいいのよ」などとアドバイスを頂いた。ひとつの「素材」への活かし方や、生活の知恵の裏には、噴火の危機の中をくぐりぬけてきた経験と三宅島への想いがあるようだった。

その場でしか見ることが出来ない景色。その場でしか味わえないもの。ひとつひとつのことを記憶に留めておきたい。この島の人のように、私も誰かを料理で笑顔に出来るような人になって、また訪れたい。

（蓬生まり）

ポスター展

慶應義塾大学 加藤文俊研究室によるポスター展を開催致します。

6月23日（日）午前10時～
三宅島大学本校舎（御蔵会館）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
6月23日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第三十七号

暮らしを映しだす、ポスターを



二十二日、土曜の役場に伺った。期日前投票に訪れる人達と共に、私は二階に上がった。大きな印刷機の前に座り、電源を入れる。これからここで、ポスターを印刷する。

加藤文俊研究室の学生達は二十一日、三宅島に到着した。到着早々、三名の島民の方に学生達が取材を行った。取材を終えその日のうちに、ポスターの大きさを活かしきる写真、そしてそれだけでは伝えきれないことを言葉で綴り、制作をすすめていく。取材という短い時間の中で、自分達にお話ししてくれた方の表情や、話の中から浮かび上がってくるその方の信念。少しの時間の中で惹かれた多くのことを、その方自身、そしてポスターを見た方に伝えたい。私達は夜中まで、何度も試行錯誤を繰り返す。

そうしてようやく出来上がったポスターを刷り終え、私は御蔵島会館へ戻った。一緒に作った仲間と、そして取材させて頂いた方とポスターを眺める。何度経験しても取材先の方にお渡しする瞬間は、緊張と高揚を感じる。

普段この島で生活していない、よそ者の私達だからこそ感じる魅力。島で暮らす人、そしてこの島のことをもっと知りたくなる。ささやかな一枚のポスターが、少しでも島の生活を映すことができるように。この思いで、これからも私達は作り続ける。

（竹下 絢）

鯨神社

阿古地区に面白い神社があると聞いて足を運んだ。御蔵島会館から少し歩いたところに、こぢんまりとした神社がある。錆ヶ浜の海を臨む場所に建つ、屋根だけの小さな社の中には、人の顔ほどもある大きな鯨の骨が安置されている。神社の名は「鯨神社」。鯨を祀る、全国でも珍しい神社だそうだ。

この阿古地区に、古くから伝えられている話がある。天保年間、三宅島は大変な飢饉に見舞われた。農漁業ともに不振が続き、離島ゆえに食するものもなく、住民の飢えも限界に達した。そんなとき、錆ヶ浜に巨大な鯨（全長四十八メートルとも伝えられている）が打ち上げられた。島の人々は、この肉を切り取って五つの村に分配することで、当分の間飢えをしのいだらしい。後に、その鯨の骨を錆ヶ浜に葬り供養したところ、農漁業は豊作豊漁となり、島は飢饉から逃れることが出来たそうだ。

後年、先祖の志を継いだ島の人々が鯨供養のために祠を建て、その鯨の骨の一部をご神体として祀ったのがこの神社である。鯨は捨てるところがないと言われ、肉や脂だけでなく骨や皮までが様々な用途に使用可能である。飢饉に苦しむ当時の人々にとって、打ち上げられた鯨がどれほどありがたかったことかは想像に難くない。



鯨神社を出ると、目の前には青い海が広がっていた。三宅島と鯨の関係を知ったあとでは、海の景色も違って見えた。この海の中を大きな鯨が泳いでいるのかと思うと、なんだか神秘的な気分である。

三宅島周辺の海には、鯨の一種であるイルカが多く生息しており、ドルフィンウォッチングやドルフィンスイムが盛んである。三宅島と鯨の関係は、今も形を変えながら続いているようだ。

（齊藤 崇）

島の子供

朝七時、バタバタと廊下を走り抜ける音が響いた。様子を見に行くと、見たことのない少年が全速力で元気よく走り回っている。その少年は寝起きでまだ朦朧としている先輩と親しげに話したりじゃれたりと、朝からものすごいエネルギーだ。少年の名前は彦坂信也。趣味はロッククライミングと釣り。三宅島で生まれ、三宅島で暮らしている小学五年生だ。加藤文俊研究室とは去年のキッズリサーチ以来からの付き合いだという。始め私とはあまり会話を交わさなかったが、一緒に遊んだり話したりしている内に、自然に壁をなくすことが出来た。

信也はとにかく元気だ。朝に魚を釣り、昼は虫を追いかけ、夜は食卓で釣った魚を振る舞う。いたずらを仕掛けては笑い転げるものの、大人に囲まれた十一才の信也は、みんなの役に立とうと一生懸命夕食の手伝いをする。

彼の活発さと素直さはこの島に育まれたものだろうと私は考える。流れる時間、島民の人柄、自然の豊かさ。一つ一つが彼に吸収され、島を駆け抜ける彼の姿は、都会の子供にはない魅力がある。

「三宅島の海がキレイだから好き」と彼は言う。私は信也にこれからもこの三宅島の海の様にキラキラとした明るい青年に育ってほしいと思う。

（白羽相仁亜）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

男の海の精神

民家に隣接した小屋の中には、何本もの釣り竿、様々な太さの釣り糸と針、工具や釣りに関する本が山積みされていて、奥の座椅子に腰をかける人の姿があった。五十年以上坪田で漁師をされてきた筑波昭一さんへの取材で、島やヒトの見方、生き方を見直すきっかけを頂いた。

昭一さんは十八才で漁師になり、あらゆる漁船に乗り合わせては海の幸の捕え方をひとつひとつ身に付けたという。未熟だった若い頃、天草を採るために潜水時間を伸ばそうと「バイクに乗って、電柱を十何本通り過ぎるまで息を止める」という地道な訓練を毎日ひたすら続けていたそうだ。いつも日常の片隅に「ありたい漁師の姿」を思い描いて、小さな努力を繰り返してきたのだ。直にその積み重ねが、多くの船から引っ張り凧になるほどの実力となった。



彼は漁師の仕事の他にも家族のため、島のため常に何かを試して、挑んでいた。イルカウォッチングの船出しや、農業用水で行なうスッポンの養殖、建築用木材の伐採をも引き受けた。様々な仕事をしているのは家族を養うという理由だけでなく、島全体を豊かにしたり、繰り返される生活に刺激を生みたいという思いがあった。その地に深い愛情があるからこそ、島の魅力が多くの人に伝わるような「三宅にしかないもの」を探して、かたちにしようとする堅実さがひしひしと伝わった。

病をきっかけに漁師の一線から身を引いたものの、毎日小屋に腰を据え、黙々と釣り道具に手を動かす。避難生活や闘病当時のことを思い出しては、「ありがたい」という言葉を繰り返していた。彼の話を通して、つつましく強く、島で生きる海の男の精神に触れることができた。

（龍山千里）

変化する自然、＋大きな自然

「時間あるか」。

つくば荘の筑波昭一さん（愛称：おとうさん）の元でところてん作りをし終えた帰り道、おとうさんが三宅島を車で案内して下さった。

最初に自前の船を見に港に寄った後、まだ一度も行ったことがない私たちのために大路池へと車を走らせて下さった。大通りを右に曲がると、ジブリの『千と千尋の神隠し』の序盤に出てくる、どこか違う世界へつながっていそうなガタガタした道が現れた。車が上下に揺れる、揺れる。ひたすら突き進むと、鳥の鳴き声しか聞こえない、木々に囲まれた空間に出た。

さらに奥に進むと、大きな湖が目の前に。車から降りて湖の前に立ってみる。ビルや電柱に囲まれたいつもの生活とはかけ離れた世界。電波が届かないからこそ情報から解放される世界。何も考えなくていいと思えるくらい、とてつもなく心が休まった気がした。一人でずっとそこにいたいという衝動に駆られた。



その場から離れるのが少し惜しい気持ちのまま、引き続き車に乗り次の場所へ進んだ。向かった先は展望台。急なカーブの続く上り坂を進むと、今は使われずに放置された牛舎やレストランがあり、火山灰で白く変化してしまった木々、そして赤茶色の火山岩が一面に広がっていた。改めて高い場所から見た三宅の景色。広大で、だけどどこか自然の厳しさを感じる圧倒的な風景が目の前には広がっていた。

海があり、山があり、火山があり。一つの島から日々変わる環境や自然の魅力を感じることが出来た。

そして何より、帰ろうとしていた私たちを心配して車で送り、ついでだからと三宅島の良さを伝えようとして下さったおとうさんの気持ちが嬉しかった。

（井上千聖）

三宅島を感じる食卓

「三宅島では自炊をしてもらう」。出発前、私は加藤先生の言葉にわくわくしていた。船旅を終えて島に到着し、御蔵島会館で初日の夜を迎える。部屋の中ではポスター制作をする人、『あしたばん』の編集作業を進める人、その日の夕食を作る人に分かれ、様々な事が同時進行で行われる。所属メンバーで仕事を分担し、全員が一つとなって、作業を進めるのが私たちのやり方なのだ。

活動二日目、私は夕食作りの担当。



進学を機に一人暮らしを始めたものの、自炊はほとんどしたことがない。みんなの胃袋を満足させられる、そして簡単に作る事の出来るものは何だろうか。悩んで決めた。ハヤシライスを作ろう。料理の得意なメンバーに助けてもらいながらなんとか完成させる事が出来た。準備から後片付けまで、仲間の優しさがうれしかった。

料理を作っていてうれしい事がもう一つあった。それは三宅島に住む方々から様々な食材を頂いたことだ。取材先の方々のご好意で、三宅の海で獲れた様々な貝類やところてん、明日葉など様々な食材を頂いた。それらを用いた料理がハヤシライスを囲み、食卓を賑やかにする。三宅島の自然やそこに住む人々のあたたかさを感じる事が出来る最高に贅沢な食事となった。

（伊藤 圭）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
(平成25年)
7月28日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第三十八号

やってきた、夏の風物詩



夏の風物詩と言えばあなたは何を思い浮かべるだろうか。風鈴の音、蛍の光、花火、地域や人によってさまざまだが、大抵の人が思い浮かべるのが夏祭りではないだろうか。地域の人が集まり、浴衣姿で盆踊りを踊る。屋台から流れてくる焼きそばや綿あめの香りに高揚感を覚える人も少なくないはずだ。

ここ三宅村でも、夏の風物詩である「マリンスコーレ21フェスティバル」が七月二七日（土）午後三時より、ふるさと体験ビレッジ駐車場にて開かれた。この祭りは、三宅村の商工会が主体となって行なう祭りであり、今年で十九回目を迎える。この日は午前二時頃から雷を伴う大雨が島全体を襲っていたため、開催を心配する声もあったが、無事に開催することができた。

祭りの内容は、オープニングセレモニーから始まり、ステージ上で行われるモノマネショー、郷土芸能、宝くじ大会などであった。その中でひときわ印象的だったのは、神着郷土芸能保存会による木遣太鼓と伊豆青年団による天神太鼓だった。どちらも太鼓を介して二人で向かい合い、ぴたりと呼吸を合わせて勢いよく太鼓を叩く。二人とも同じタイミングで叩いているのに演奏中に目が合うことはほとんどない。太鼓が透き通っているのではないか、そう思わせるくらい洗練された技術を目の当たりにして驚く一方で、その域に到達するには一体どれほどの練習を積んだのだろうかと考えると頭が下がる。演奏が終わった後には、会場一杯の拍手は勿論のこと、アンコールの声も挙がったほどだ。

太鼓と同じくらい大きな盛り上がりを見せたのは、ラッキー宝くじ大抽選会だ。村長や議長が箱の中から数字の書かれたボールを四つ取り出し、その四桁の数字があらかじめ購入した抽選券に押されたスタンプの番号と一致していたら豪華な景品がもらえるというもので、なんと特等は十五万円分の海外ペア旅行チケットであった。段々と数字が一致していくにつれて会場のあちらこちらで悲鳴や歓声が聞こえ、非常に大きな盛り上がりを見せていた。

祭りの最後には錆ヶ浜港桟橋からおよそ六〇〇発の花火が打ち上げられた。七色に三宅の空を染めたその花火に観客は酔いしれ、最後の一発が打ち上げられた時には祭りのフィナーレを惜しむかのように大きな歓声と拍手が送られた。夏は長いようで短く、この夏は二度戻ってこない、だからこそ尊い。誰もがそんな夏の訪れを体全体で感じた一日であった。

（長冨将成）

ムロッケ作りに潜入
―祭りが育む人の繋がり

週末にマリンスコーレを控えた七月二五日、三宅島避難施設に商工会の女性が集まった。祭り当日に販売する「ムロッケ」を作るためである。ムロッケとは、三宅島の特産物であるムロアジのすり身と牛蒡、人参、味噌を混ぜ合わせた種にパン粉を付けて揚げたもの。外はカレーパンのようにかりっとして中身はふっくらやわらかく、すり身の味がやさしい。牛蒡がいいアクセントになって、ついつい手が伸びてしまう。島民に長く愛されている食べ物のひとつだ。

午前十時をまわる頃、女性たちは自然と自分の持ち場について仕事を始め出す。全員がお互いのはたらきを補い合うように手際よく動き、みるみる作業がすすんでいった。手を動かしながら、日ごろの生活のあれこれや冗談を言い合い、賑やかな笑い声が建物に響く。長いこと島で商売を営むベテランの面々の中には、筆者と同世代の女性のすがたもあった。「コロッケのかたちを整える時は、指先じゃなくて手の脇を使うのよ」「合わせ味噌を作る時も、ひとつの容器に味噌はそれぞれ分けて入れておくといい」。些細な、しかし生活に必要なこと一つひとつをしっかりと伝え、若手が学んでいく。何気ないやりとりの中に、暮らしを代々受け継ぐ島の女性の絆の強さを感じた。



「祭りの準備とかで人に会うのが、気分転換になるのよ」。民宿阿蘇の女将さんは、みんなと集まることがいつも楽しみだと言っていた。特にお客さんの多い夏の時期はなかなか仕事場を離れることができない。何かの機に、互いの顔を合わせて他愛もない話をするひとときの時間が、とめどなく過ぎる毎日に潤いを与えているようだった。

三宅島は年間を通して多くの行事が行なわれている。その度に人々が集まって、ひとつのことに取り組む時間が島の繋がりを育んでいるのだろう。

（龍山千里）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

想いが交差する場所で

以前からとても気になっていた。派手な色遣いのデザインとその独特な形、島外の人間から見ても三宅らしくないと感じる建造物。その正体は、七月三日に落成式を迎えた三宅島阿古船客待合所だった。

茶色と黒で色づけされたその外観は、島のシンボルであるアカコッコが羽を広げて島民や船客を迎え入れる様子をイメージされて作られたものである。一〇〇人以上収容できそうなその大きさは、すぐ隣にある旧待合所と比べたら明らかだ。



中に入るとすぐに涼しさを感じることができる。主に待合室として利用される一階には、待ち合い用のイスの他に観光協会の事務所、チケット売り場があり、おみやげなども売っている。二階に上ると展望台があり、そこから海を一望でき、天気の良い日は絶景だ。

そんな新しい待合所を利用した坪田出身の女性にお話を伺ってみたところ、「初めて見た時には一体何かわからなかった。まさか待合所だとは思わなかった。」と話してくれた。初めて利用した感想については、「涼しくて非常に快適だし、人がたくさん集まっていると活気がある。でも、おみやげのスペースを増やしたり、まだまだ良くしていける所もたくさんあるよね。この待合所のように三宅らしくないもので島を盛り上げる方法もあるけど、三宅らしいもの、既存の物を活かして島を盛り上げようとすることも大事だよね。」と、待合所の話から島の事まで話を広げて語ってくれた。

たくさんの人の想いが詰まって作られた新しい待合所で、誰もが気持ちよく島を行き来してくれると良いと願い、待合所を後にした。

（長冨将成）

歩き続けること

阿古にある民宿、阿蘇の女将さんは、毎朝家の周りをウォーキングしている。夏は日が昇るのが早いので五時過ぎには家を出発。火山体験遊歩道をメインのルートに設定して、約五千歩も歩く。女将さんが毎日辿る道のりを、二日間一緒に歩いてみた。

早朝は、景色が開けた見晴らしのいい道を歩いても、なかなか人の姿が見当たらない。健康のために始めたというが、誰も見ていないところでひとつのことをコツコツとやり抜くことは、何事もむずかしい。「自分に勝つってしんどいよね。」それを噛みしめながら「しんどさ」と向き合う女将さんの根性は、歩くことにとどまらず、彼女の生活の細部にまで染み込んでいるのだろう。



遊歩道を歩きながら五八年の噴火の話を聞くと、目の前に広がる溶岩の景色でかつて何が起こったのか実感が湧いた。阿古の集落で生活していた人たちのこと、避難時の家族の様子や噴火後の暮らしについて聞いていると、女将さんを始めとする阿古地区の人、そして島で生きる全ての人がどんなに多くのことを乗り越えて今の生活をしているのかが、ひしひしと伝わってきた。

ある朝、女将さんがいつものように歩いていると、空高くに大きな虹が掛かっていたという。自分のまえに広がる雄大な景色を独り占めしたような気分で、とても感動したそうだ。島の風景を目にしながら女将さんの話を聞いたことで、自然に恵みを受けながらともに生きていく、覚悟を据えた島への深い愛情を感じた。

（龍山千里）

三宅島＋夏＝キッズリサーチ！

今年の夏も、「三宅島キッズリサーチ」を実施するため、慶應義塾大学加藤文俊研究室が三宅島に訪れることとなった。去年から開始した本プロジェクトは、三宅島に暮らす小中学生らを対象に、さまざまな学びの場を提供するものである。午前は三宅島大学本校舎（御蔵島会館）で机に向かって学校の教科を学び、午後は外へ出てカメラやビデオを使用し、自己表現の手法を実践的に学ぶ。キッズリサーチに参加することで、学力と自己表現力をともに高めることができるのである。

加えて重要なポイントは、「教える側」として見られがちな大学生も、子どもたちに多くのことを教えられている、ということである。子どもたちにカメラを持たせれば、その独創性や色彩感覚に驚かされる。一緒に外を歩けば、抜け道やお気に入りの場所を教えてくれ、新たな三宅島の魅力に気付かせてくれる。キッズリサーチでは、誰もが先生であり、誰もが生徒なのである。誰にとっても、学びの場となる。

二回目となる今回のキッズリサーチは、二〇一三年八月十二日から十八日までの七日間に行なわれる。そのうちの数日は三宅小学校と三宅中学校に出張することが決定しているため、開催場所に注意してもらいたい。午後は去年と同様、すべて三宅島大学本校舎で行なう（左図参照）。最終日には、六日間にわたる活動の成果発表を行なうため、子どもはもちろん、その両親にも来てもらい、一緒に活動のふりかえりをしてもらいたい。

キッズリサーチに参加する大学生が大幅に増加したため、前回と比較して規模が大きくなることが予想される。また、午後のプログラムにおいても、去年と同じことをするものはなく、毎日新たな学びが用意されている。申込不要、受講無料であるため、是非とも多くの子どもたちに三宅島大学本校舎へ足を運んでもらいたい。

（青山大毅）

	午後	午前
12日	大学で 図工	みやけ小で 宿題
13日	大学で 絵	みやけ小で 宿題
14日	大学で 写真	みやけ小で 宿題
15日	大学で 図工	大学で 宿題
16日	大学で ムービー	みやけ小で 宿題
17日	大学で 新聞	大学で 宿題
18日	×	大学で 発表会

内ようは へんこうになる場合があります

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
（平成25年）
8月11日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第三十九号

富賀神社大祭、集まる熱気

遠くからアツい声が聞こえてくる。その声はだんだんと近づいてくる。「さぁもうすぐ来るよ。準備して！」騒がしい時間がやってきた。

八月四日からの六日間、二年に一度の富賀神社大祭が開催され、その最終日に、私は御神輿の給水ポイントのお手伝いをさせて頂いた。私は一昨年まで、東京にある実家でも御神輿の休憩所のお手伝いをしており、久しぶりの参加を楽しみにしていた。

研究室のメンバーと一緒に砂糖水を作ったり、梅酒を注いだり、ポップを描いたり。この日用意していた梅酒は島の方の自家製で、今年の四月から浸け始め、まだ四ヶ月しか経っていないが味はとても濃い。ボトルになみなみと注がれた梅酒はなめらかに揺れていて、視覚からも私を刺激してくる。あぁ呑みたい。我慢、我慢。

クーラーに氷水を張って、砂糖水と梅酒を冷やす。少しずつ氷が溶けていき、しゅわしゅわと氷に含まれていた空気が浮かび上がっていく。涼しさを感じながら御神輿がやってくるのを待った。「わっしょい、わっしょい」。声が聞こえてくる。私たちは慌てて路上に用意した飲み物と、すいかを並べ始めた。あっという間に、御神輿は私たちのところまで熱気とともにやってきた。その熱気でじわりじわりと汗がでてくる。彼らはすでに汗でびしょびしょであった。「いただきます！」と担ぎ手たちは飲み物を一気に飲み干す。「美味しい。これは自家製？」「このまま呑んでいたい」と、どれも好評だった。

担ぎ手は二〇から三〇代の若い人が多かった。私は今回で三宅島に来るのは四回目であったが、こんな大勢の若者を見た事が無い。今年は島の方の息子さんたちが多く帰省しており、いつも以上に活気があるそうだ。しかし、おじちゃんたちも彼らに負けない熱気を纏っていた。低く太い雄叫び、迫力のある身体つきに焼けた肌。男の魅力を感じる。飲み物を渡しつつ、失礼ながらまじまじと見てしまった。



休憩はほんの数分で終わり、彼らはまた次の場所へと御神輿を担いで行った。せっかくの機会なので、私は数時間後の宮入りの様子も見に向かった。神社の前で担ぎ手たちは御神輿を揉む。疲労しきっている身体で何度も、何度も。飛び散る汗。高まる掛け声。その場にいる人全員の心が高揚していった。このお祭りは、五八年の噴火以前までは毎年開催されていたそうだ。以前のように、毎年見たいなという気持ちがある。しかし、二年に一度だからこそ、熱気は少しずつ貯蓄されていき、生き生きとした姿がこの祭りで爆発するのではないだろうか。私のアツい三宅島生活はここからスタートした。

（田中優里）

一本の木

昨夜、この島の一角に会話があふれる場所があった。築穴製菓の築穴一也さん（通称かずさん）が主催したバーベキューである。わたしは島のみなさんとは初対面だったのだが、そのことを感じさせないくらいにみんな気さくに会話を楽しんでいて、そこには笑い声が飛び交っていた。

その中でも、まるで太い木の幹のような存在感を放っていたのは、やはりかずさんだった。その場には二〇人ほどが集まっていたのだが、かずさんは席の位置に関わらず、たとえ遠くても大きな声で全員と話していた。まるでみんなに枝を届かせて、その場全体を一本の木のようにしてしまう、そんな印象を受けた。はじめてのひとばかりだったが、その空間はとても心地よかった。はじめて訪れたひとにも「また来たい」と思わせる空間をつくる彼らは、とてもかっこいい。

ご存じの方も多いと思うが、かずさんは二五年前からカレンダーにその日の出来事を書き続けている。その日の天候や、その日に食べたもの、その日に会った人。書きたいことを自由に書き込む。その書き溜めたカレンダーの一部をわたしたちにも見せてくれた。かずさん自身は「まだ見たくない」と言いながらも、わたしたちに様々な話をしてくれた。かずさんは本当に楽しそうに、過去のこと、いまのこと、そして将来のことを語る。そんなかずさんが紡ぐ言葉は、きっと誰よりも説得力があるのではないだろうか。

「十年後、二十年後に見るのが楽しみ。老後が楽しみになる。みんなもやってみな」。この言葉を何度も繰り返していた。それは想いが強いからか、それともお酒が入っていたからか。きっとどちらもだ。

わたしも記憶に留めたい出来事を、スケジュール帳に書いている。かずさんの話を聞いて、これは習慣として続けていこうと強く思った。そしてわたしも、かずさんのように楽しそうに思い出を話すのだ。

（小竿まゆる）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

今日もしたたかに。

「どうもありがとうね」、「お世話になりました」、「また来ます」。こんな声が、新鼻荘に響く。記念写真を撮り、お客さんを最後まで見送るのは、平田節子さん(通称おかみさん)である。「あ～、いいひとたちだったね」。すがすがしい声で言う。そして、達成感を伺わせる表情をしていた。

民宿には、様々なお客さんが来る。ときには教員の集まり、ときには高校生、ときには昔なじみの仲間同士、もちろんお偉いさんだって来る。しかし、おかみさんの態度は一切かわらない。皆に、同じ接し方をする。自然とお客さんも気さくにおかみさんと会話を楽しめる。

食事のときには、お茶を淹れ、絶えずお客さんと話をする。食事の時間もお客さんの要望に答える。お客さんが宿に着くやいなや、「お風呂が沸いていますよ」と声を掛ける。日々の掃除から、庭の手入れまですべてにおいて、手が行き届く。不自由がないよう、お客さんへの気遣いは「常に」だ。お客さんが外出する日中は、おかみさんの緊張感が唯一解ける。「お客さんがいないと気が楽だわ」と冗談まじりで言う。

そんなおかみさんは新鼻荘を一人で守り続けて二〇年目。ふとした瞬間に、おかみさんが自身のことを語ってくれる。中高生の六七人のバーベキューを終えた日の夜、『経験は人を強くする』ということについて語ってくれた。この日のために、おかみさんは試行錯誤をし、様々なことを考えたり、工夫をしたり。かなりの覚悟をしていた。「一度経験すれば、怖いものなんてないのよ」とおかみさん。お客さんを見送るときの表情が頭に浮かぶ。ひとは、経験をし、強くなる。しかし、おかみさんが語るからこそ、人の心を動かす。

おかみさんの言葉は、どれもおかみさん色に染まっていた。とても「したたか」だ。強さがあり、包容力があり、柔軟性がある。だからこそ、お客さんは満足し、笑顔になるのだろう。そして「ありがとう」の声が、笑顔が新鼻荘を満たす。おかみさんも、笑顔である。このような二〇年間の日々の経験が、この「したたか」を生み出したのだろう。



(原田ふくみ)

生命の力強さに迫る

八月八日から二泊三日、新鼻荘に東京農業大学第一高等学校と中等部の生物部が宿泊した。総勢六七名で島に訪れた部員たちは、このほかに民宿つばとラッパ荘の三カ所に分かれて滞在。三日間を通して島の生き物や植物の生態を調査する。生徒の要望に応えて、今回初めて三宅島に来た。

「これはワラビの仲間でしょうか」「ワラビはもっと葉の先が細かく分かれているよ」「葉の端っこに胞子嚢がびっしり付いているのが特徴的だな」。二泊目の晩、宿の廊下に学生と先生が寝転んで頭を寄せ合いながら、フィールドワークの道中で採集した植物と図鑑を見比べて話し込んでいた。島に生える植物の名前を調べては、ひとつひとつ記録をとる。種類が判明したものはていねいに新聞紙に挟み、重しをのせて段ボールに詰めた。三ヶ月から五ヶ月かけて標本にするらしい。植物の色味を残す為に採集したものはすぐに平たく潰して、一週間おきに新聞紙を取り替える。二、三ヶ月自然乾燥させた後に、ようやく完成するそうだ。

顧問の武中豊先生は、溶岩の土地や火山口付近で植物が育つ仕組みが興味深いと話す。「研究者が現地を歩いて判明したデータをもとに、ようやく十年ぶりに島の高校の教科書が変わりました」。かつての教科書は溶岩の岩場に苔がまず生えて、だんだんと植物が繁殖し、森になると書いてある。しかし実際に歩いたらその工程で植物が育った形跡はなく、いきなりハンノキの木が岩場にぽつりぽつりと生えていた。ハンノキの根っこには根粒菌が含まれており、貧しい土地でも空気中の養分を取り込んで生長できる。そのうえ土壌にも養分を与えるので、ほかの植物も育つことができるそうだ。古くから土地を豊かにする植物として重宝され、ハンノキ山を開墾して畑にしていた。今でもアシタバ畑の周辺に生えて土地に養分を与えながら、夏にはちょうどいい日陰を畑に作り、冬には葉を落とし日射しを取り込んでいる。噴火のガスにも耐え得る、島では頼れる植物なのだそうだ。「過去のデータだけでは分からないことがまだまだある」。島の生態を知る為に、これからも訪れたいと話していた。



(龍山千里)

荒波に揺られて

八月十日、曇り、風は南西。荒波に大きく揺れながら、船は進んでいく。四〇分ほどすると、雲でぼやけながらも、御蔵島の影が見えてくる。島近くの沖に船を留め、ウェットスーツ、シュノーケル、フィンを装着し、海へ飛び込む。眼前が一面青に染まる。海水に顔をつけると、小さな魚がたくさん見える。今日は、イルカと泳ぎに来た。

大海原に身ひとつで漂っていると考えると、どうしても恐怖感がつきまとう。海水で喉が痛くなるし、単に浮いているだけでも体力を消耗する。船の上には、酔いで元気のない人が数名。ドルフィンスイムは、なかなか過酷なものだった。

ふたつ目の着水ポイントは、波が高かった。それでも必死に海面に顔をつけ、動き回っていると、真下をイルカが泳いだ。ほんの一瞬だったが、たしかに野生のイルカと一緒に泳いだのである。

イルカに遭遇できるかどうかは、天候や波に大きく左右される。つらい思いをしたとしても、絶対に会えるという保証はない。しかし、つらい思いをしなければ、この達成感、充実感は得られないだろう。なにごとも、自分を追い込んで得たことの方が記憶に残るのである。荒波から遭遇まで、忘れられないものとなった。

(青山大毅)

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
8月14日
水曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十号

キッズリサーチスタート

八月十二日朝八時、三宅小学校の入り口に看板が立った。その看板には寺子屋の白い文字。そう、今年も三宅島大学キッズリサーチがスタートしたのだ。二年目となる今回の開催期間は八月十二日～十八日の七日間。午前中は三宅小学校や三宅中学校で子どもたちと夏休みの宿題に取り組み、午後は御蔵島会館を拠点に日替わりでワークショップを開催する。



初日の午前は二人の小学生が会場となる三宅小学校に訪れ、各自の宿題を進めた。算数でわからないものがあったり漢字の書き順を間違えていたりすると、隣に座る大学生がアドバイスをするなどして一学期の復習を行っていく。最初は顔に緊張の色が見えた二人であったが、休憩時間に話をする内に少しずつ笑顔が見え始め、会話も弾んだ。午後は、ワークショップの手始めとして五人の小学生と折り紙やペンを使用して世界で一枚のオリジナル名札を作った。その次に、自分の名前のあいうえお作文で自己紹介文を作り、他人の紹介を互いに作り合ったりした。そうしている内にあっという間に終了の時間となってしまい、子どもたちは帰路についた。

二日目の午前は六人の小学生が勉強をする為、三宅中学校の集会室に集った。宿題を進めていくのは昨日同様で、休憩時間にはデジタルカメラで写真を撮って遊ぶ姿も見受けられた。午後には十年後の三宅島をテーマに絵具やカラーペン、クレヨンを使って大きな模造紙に絵を描いた。後半には全員で錆ヶ浜の海岸まで足をのばし貝殻や海藻を採集して、模造紙を装飾した。

二日間の活動を通して感じたことは子どもたちの溢れんばかりのエネルギーである。それは体力に限った話でなく、身体全体で表現する力や発想力からも見て取れる。名札を作成した時は、皆に描いてもらった似顔絵を貼る子や海の生き物の絵を色とりどりに描く子等、個性豊かなものが完成しカラフルな名札を各々の胸につけていた。絵に関してみても、私たちが決してしないような色の混ぜ方や大胆な塗り方をしたりと、何事にも全力でエネルギーを注ぐ様子が見られ、見ているこちら側が圧倒されてしまう程であった。一つ一つの言葉や行動の純粋さに驚くとともに、いつの間にか自分がなくしてしまったものを一つ一つ再確認している気分になった。

(枡野友香)



三宅島大学　卒業生誕生か

ついに三宅島大学に初めての卒業生が誕生しようとしている。その記念となる第一号はころっちさんこと田中耕介さんである。

まず大学卒業というと、最終成果物としての卒業制作が必須単位となってくる。既に一一一単位を取得し、最終成果物の制作に取り掛かったばかりの彼に、今の心境を窺ってみた。すると、とても率直な応えが返って来た。それは「あっという間」という一言だった。大学開校から丁度二年が経とうとしているが、その期間を振り返るととても早く感じるそうだ。彼は講義を受けるだけではなく、先生として講義を持った経験もあり、両方の立場で三宅島大学に関わっている。そんな彼にとって、数ある講義の中で印象に残っているのは『ポスターをつくろう』と『坪田の方言を聞こう』、彼自身が講師を務めた『一〇〇人先生』の麺打ち先生の三つだ。これまでの講義への印象を聞くことで、彼自身の三宅島に対する想いを垣間見ることが出来た。

彼は坪田地区で生まれ育ち、全島避難の為内地へ移ったのち、二〇〇七年に島へ戻って来た。東京で五、六年程過ごしたことで自然あふれる三宅島の魅力を再認識し、それらを記録として残したいという想いから趣味でカメラを始めた。彼が初めて受講した講義である『ポスターをつくろう』でも、それが活き、三宅島大学に対しての関心を高めるきっかけとなった。

ではそんな彼が何を作るのか聞いてみると〈虹のモザイクアート〉だそうだ。L判の写真を九〇〇枚印刷し、色とりどりの写真を並べる事で七色の虹を描くらしい。さらに続けて、是非島民の方々にも参加して頂きたいと彼は言う。島ならではのしっかりした発色の色鮮やかな花や風景、人情味溢れる島民の方々など、三宅島に関するものであれば被写体は自由である。写真として多くの方に参加して頂き、一枚の虹の絵を完成させることで、彼の卒業制作でありながら島全体の共同制作にもなるのだ。

現段階では今年の九月に彼の卒業式を行う予定で、卒業制作はその後も進められるよう。今から『三宅島の虹』の完成がとても楽しみだ。

(吉田あんな)

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

熱気に包まれた盆踊り



日中の刺さるような太陽が傾き少し涼しくなってくると、軽快な祭りばやしが聞こえてきた。昨日から二日間、阿古地区青年団主催の阿古地区盆踊りが三宅島漁業協同組合駐車場にて開催される。

駐車場の中央にはこの土日で用意された櫓が立っており、温かい光の提灯が並ぶ。和太鼓が身体に響き、胸が弾む。お盆であるこの時期は、学校や仕事が休みの人々と共に、島に帰省してきた人々も合わさり賑わいを見せる。午後六時から始まったお祭りは七時半近くになると、盛り上がりのピークを迎え、八時になると伝統の阿古獅子舞が披露された。間近で見るととても迫力があり、大人でも迫ってくると驚いて思わず身体を引いてしまうほどである。この獅子舞に頭を噛まれると災いを防ぎ健康な身体になれるといわれ、小さな子供達が親に抱えられ、泣きながら頭を噛んでもらっていた。他にも老若男女問わず、獅子舞に駆け寄っていく姿が多く見られた。

この盆踊りでは、定番の炭坑節から子供向けのアンパンマン音頭、また新三宅島音頭など曲は全部で十三曲もあり、今年から新しくマイム・マイムが加わったそうだ。小さな子供からご高齢の方までみんなが輪になり、音に合わせて盆踊りを踊る。私も一緒に輪に混ざり、踊り方を周りの人に教えてもらいながら踊った。その輪の中で水色地に金魚柄の浴衣を着て始めから終わりまで完璧な踊りをしている女の子がいた。話を聞いてみると、彼女は毎年この盆踊りに参加しているらしい。全てが終わった直後、このお祭りの何が一番楽しいか尋ねると「これです」というとてもシンプルな一言が返ってきた。しかし、この一言の中にお祭りの魅力が全て詰まっていると感じた。一緒に踊り盛り上がることでわかる一体感や高揚感。始めから終わりまでやり通した彼女だからこそ出てきた言葉だったのではないだろうか。最初は涼しいと感じていたのに、いつのまにか熱気で心も身体も熱くなっていた。

（大川朝子）

海から食卓へ

豊かな海に囲まれた三宅島、この地で今も昔も変わらずにずっと島民の食生活に欠かせない食材である魚、今回はその魚を取り扱っているいきいきお魚センターで取材を行ってきた。お魚センターには、島の漁師さんが定置網を使い、樽に詰めた魚や一本釣り釣った新鮮な魚がたくさん届けられる。そしてその魚をその場で売ったり、民宿や島のスーパーに届けたりするなど、島で口にされる魚のほとんどはここを経由している。

「魚が傷んじゃうから冬場でも氷を入れた水に手を入れて魚をあつかわなくちゃいけないの、暖房もつけられないし」と、苦労話を語ってくれたのは友達の誘いがきっかけで働き始めて七年目となる青沼恵子さんだ。お魚センターでは、ただ魚を売るだけではなく、民宿や地域の各家庭に魚を供給しているだけあって地域の方々との関わりも深い。離れた地区から他の用事でバスに乗ってきたおばあちゃんが、ふらっと顔を出しておしゃべりをしにきたり、民宿の女将さんや主婦の方々と魚料理の話で盛り上がることもあるという。「最近では、若い方々が色々な魚の味付けや食べ方を考案していて、新たな発見がたくさんある」と語ってくれ、更に「以前はただレジでお魚を売るだけだったけれども、少し前からお店が忙しくなければ鱗を取って、三枚におろしたりするところまで行うようになった」など、島の魚の魅力を活かそうとさまざまな新しいことにチャレンジしている姿勢がうかがえる。お魚センターで働く方の中で最も長く働いている人の一人で、島で様々な人と出会い、経験を重ねてきた青沼さんは最後にこう述べてくれた。「島の人とこの場所で魚の事について語れること、当たり前のようだけど実はそれが一番嬉しいんだよね」。

（長富将成）

一〇〇人先生、折り返し地点

三宅島大学の一〇〇人先生夏期講座が、今月十七日から九月一日まで開講される。一〇〇人先生とは「誰もが先生、誰もが生徒」を合言葉として、島民を中心に島外の人も先生・生徒となりワークショップやトークを行うもので、受講料や申し込みも不要だ。今回の開講にあたって、主催者であるアーティストの開発好明さんにお話を伺った。

「三宅島大学は元々島全体で学ぶもの。島内の色んな地域の人とやりたいというのもあるし、そこに外部から来た人たちも合わさって、趣味だと思っていたものを人と共有することで、意外と面白いものが色んな角度から生まれるのではないか」とのこと。一〇〇人先生の告知に関しては、「知らせることがすごく大切。前回の講座



（昨年の十二月から今年の三月までの三ヶ月間）ではIP告知だと島内に伝わりづらいことが分かった。なので、チラシやスーパーへの貼り出しで告知するなど、色んな人が興味を持つような環境作りをしている。そして、参加という行動に移してもらう。現状として島内よりは島外からの参加者が多い分、今度は島民に来てもらうためにどうすればいいのかを考えて、授業を作っていきたい」と語った。

前回では半分の五〇人分の講座が終わり、今回は二五人分開講される。今冬に残りの二五人分が予定されているので、それが終われば一〇〇人の目標が達成されることになる。折り返しとなるこの機会に、参加したことのある方もない方も、足を運んでみてはいかがだろうか。

（深澤 匠）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
8月15日
木曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
四十号特別号

でこぼこな島？



八月一三日（火）、天候は曇。知人の島の方にお世話になり、雄山林道付近を散策することにした。午前中、だんだんと陽射しが強くなっていくなか坪田を出発し、火の山峠や七島展望台、牧場跡などを回った。海水の温度が高いことで海面上に靄がかかり、そこからみる景色は残念ながら絶景とはならなかったが、何に邪魔されることなく美しい景色をひとり占めできたことは、私を晴れやかな気持ちにさせてくれた。

三宅島に来るといつも、青い空を見上げ、それから溶岩がつくりだすゴツゴツとした岩肌を遠くに望む。どこまでも三宅島の自然は美しいと思う。しかし今回の散策で見た三宅島は少し違っていた。散策の途中、ところどころ適当な道中で車を停めそこから島を眺めた。でこぼこの舗装されていない道を行った先にはだいたい、遠くに広がる海と、足元には伸び放題の草たちが生い茂っている。そしてそこから上にも似たような景色が続いている。

私にとって意外であったのは、その眺めの「見え方」だった。私にとって「上から」の景色というのはなにか特別なものだと思っていた。たとえば展望台に登って遠くのまちを眺めるように、あるいは何十メートルも下、すぐ真下にみえる人間や車の小ささに驚くように、ある種の感動や驚きがそこにはあると思い込んでいた。しかし、ここでは違っていたのだ。私の見たものは、ざっくりといえば似た景色の連続であり、私の期待していた、一周道路が輪を描いてみえる、だとか家一軒一軒の様子をはっきりと目にとらえることができるというのは難しいことであった。見えそうなのに見えない、見たいのに見られないそんなもどかしさに、どこか三宅島ではないようにも感じ、もやもやとした気持ちが残った。

しかしよく考えてみれば納得。私の想像していた景色はすべて上空から見下ろすものに限られていたのだ。それに対し、もちろん島はきれいな円錐ではないから急勾配もあれば緩やかにつづく道もある。東京タワーやスカイツリーとは違うから上下の視野の範囲も異なる。それになにしろ山頂ではないのから三六〇度見えるわけでもないのだ。むしろ、もしかしたら自然のなかではそれが叶う場所は少ないのかもしれず、また私の想っていた景色こそ人工的なものであったのだと気がついた。

都会の景色に見慣れ、かたくなってしまった頭に、また少し刺激をもらった。

（新飼麻友）

三宅島を歩いて一周しよう！



それは、約半年ぶりに三宅島に向かう船での何気ない会話からはじまった。そしてその三日後、島歩きは実現した。

八月一一日の早朝四時四〇分。私と加藤文俊研究室OBの森部は、朝焼け広がる坪田地区を出発した。島の周囲は約三十二キロ。猛暑が続いていたなかでの島歩きは、周囲の人からは「絶対無理だよ」と言われてしまうほど無謀な試みだったようだ。しかし、それでも「島を歩く」ことは、私にとってどうしても実行したかったことだったのだ。

私は、初めて三宅島を訪れてから約二年と半年が経とうとしている。島の地理も把握し、知っている人も増えてきた。だからこそ、三宅島に「慣れた」感覚を持っている自分がいた。しかし、島の地図を見てみると、サタドー岬にも牛乳せんべいの店にも行ったことがない。ここには、まだまだ知らない人や広がる景色、場所がある。知らない三宅島がもっと見たい、という好奇心が私を突き動かしていた。





実際に歩いてみると、やはり車での移動では見過ごしがちな小道や建物を見ることができた。昇るごとに赤みを増していく朝日も目にできた。しかし、その充実感以上に、歩いているときに声をかけてくれる人や、手を振ってくれる人がいたという嬉しさで胸がいっぱいだった。

「島一周？気をつけて頑張れよ！」「これ差し入れのお茶～」「じゃあ、この味噌持って行きな」「梅ジュースもあるよ！」「あと一〇分！ファイト～」

私たちは、無事に島を一周歩ききった。そのなかで、私たちを気にかけてくれる人たちがいたこと、それを改めて実感させてくれたことこそが、計一三時間の島歩きで手にしたものだった。久しぶりにも関わらず、笑顔で手を振ってくれる人がいる。なんて嬉しいことなのだろう。雄大で美しい自然よりも、その笑顔こそが私の足を再び三宅島に運ばせているのである。

（上地里佳）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

対談

メンバーが入れ替わりながらも三年目に入った三宅島大学。あしたばん四〇号記念として、創刊号制作に携わった加藤文俊研究室のメンバーで対談をしました。(メンバー:加藤先生、上地、新飼、長富、森部、吉田)

＊　＊　＊

―これまでをふりかえって、一番の思い出や印象深い記事は?

上地:初期は三宅島を全く知らないなかで「自由にいってこい!」と出されたぶん、バスで島をめぐったりだとか、ヒッチハイクをしたりだとか結構無謀なこともやっていたよね。船上や岩場で突然インタビューするなんてことも…

森部:ありましたね、伊ヶ谷の海岸で!

上地:そうそう。それでまたその人に別の場所で会って「あの記事よかったよ。嬉しかったよ。」なんて言ってもらえたりもしてね

森部:そういうの嬉しいですよね。他にも、にがったけをたくさんもらったこともありましたね

長富:あったあった!

吉田:にがったけが好きって記事に書いたら差し入れをいただいたんですよね

新飼:うん。他にも、昔の記事を読み返していてキッズリサーチに来てくれている子供たちの写真が出ているのを見つけるとすごく嬉しくなりますね

森部:そう!全然知らずに載せていたけれど、数年後に会えたんだと思うとつながっている感じがする

―あしたばんってどう広がっているの?

上地:それにしても四十枚って結構な枚数だよね

森部:全部積み重ねてみたい!一号からだとだいぶ厚みがあると思うんですよね

上地:全部取っておいてくれる人とかいるのかな

森部:そういうのも調べてみたい。「お手元にあるあしたばん見せてもらえますか」とか

加藤:そうだね、あとどのくらい読まれているかっていうのも大事だよね

上地:いまも商店とか民宿に、地道に配っているの?

長富:そうですね、商店の店員さんを通じては評価をいただいたりします。でも正確にどれくらい読まれているかというのはよくわからないんですよね。場所によってはすぐになくなるところもあるし、あとはインタビューをした時に「あ、見たことある」「このまえ私のおばが載っていたよ」という反応もありました。そういう意味では浸透しているのではないかと思います



森部:知人が載っていたら少しびっくりしますよね、三宅島のサイズだからこそ起こりうるのかな

―最近のあしたばんをどう思う?

上地:初めは弾丸が多かったこともあり、印象的でおもしろかった気がする

加藤:たぶんそれは僕も似ていて、もしかしたら最近あんまりおもしろくないのかもしれない。安定はしてきていて、来ると必ずつくるでしょ。このあいだも三人でやっていて、少人数でもきちんと出せるようになったことはすごいんだけど、そのぶん突撃でやるとか、なにを書こうかという企画にみんながチャレンジすることが少しおとなしくなってきてしまったかもしれないね。良い意味でも悪い意味でも慣れてきていて

長富:僕も最初のころ、先輩とふたりで三宅高校に取材に行ったことありました。本当に突撃だったんですけど一時間くらい時間を割いていただいて。いま思うと失礼なことをしたかなと思いますが、とてもありがたかったです

―これからのあしたばんは?

加藤:型にはまりすぎてしまっているところがあるからね、なんとなく。思い切って紙面リニューアルとか。横書きとか4ページになるとかどう?

吉田:それはおもしろいですね

加藤:あるいはこれを廃刊にして全く新しいものにつくりかえるとか…?でも五〇号まではいきたいよね

長富:そうですね。これを楽しみにしてくれる人のためにももう少し続けたいです

吉田:はい、私も頑張ります!

まさかの廃刊予告?!

…いえいえ、あしたばんはまだまだ続きます!これからもよろしくお願いします。

「あしたばん」イチメン記事一覧

これまでにあしたばんで書かれた記事です。
気になったものがあればぜひ遡って読んでみてください! ▶ あしたばん

【第1号】2011/6/19 始動、三宅島大学!
【第2号】2011/6/19 ぐるり一周
【第3号】2011/6/20 水中スケッチ大会行われる
【第4号】2011/6/21 二時間ノ三年間にかける思い
【号外】2011/6/21 あしたばん制作の裏側に迫る
【第5号】2011/6/22 たくさんのありがとうを
【第6号】2011/7/18 お待たせしました!
【第7号】2011/7/25 まだ見ぬ三宅島を想う
【号外】2011/8/1 KAITEKIのかたちとは
【第8号】2011/8/8 富賀神社大祭、始まる
【第9号】2011/8/15 富賀神社大祭での各地区の受け渡し
【第10号】2011/8/22 三宅島大学、開校日決定!!
【第11号】2011/8/29 火の山からの挑戦状
【第12号】2011/9/19 いよいよ、三宅島大学開校!
【第12号】2011/9/19 いよいよ、三宅島大学開校!
【第13号】2011/9/21 "いま"が響き続けるように
【第14号】2011/9/22 キックオフのあとで、考えた。
【号外】2011/9/26 東京都に実家ができました。
【第15号】2011/9/26 ポスター完成!
【第16号】2011/11/14 応援旗にこめられた想い
【第17号】2011/11/28 三宅島大学、十二月講座
【第18号】2011/12/2 ポスター完成!!
【第19号】2011/12/5 甘い香りと笑い声につつまれて
【20号特別号】2011/1/31 「あしたばんBOOKs」誕生
【第21号】2012/3/3 レディースパワー溢れる!
【第22号】2012/6/22 今年もやります、伝えます!
【第23号】2012/6/23 手作り手渡しのかわら版
【第24号】2012/6/24 三宅島は「ジャストサイズ」
【第25号】2012/7/31 菊穴パン屋の『つぶやき便』?
【第26号】2012/8/9 三宅島大学を考える手引き
【第27号】2012/8/19 キッズリサーチ始まる!
【夏休み特別号】2011/8/23 「三宅島のすきなところ」
【第28号】2012/8/25 子どもたちの力作揃い
【第29号】2012/9/14 キッズリサーチ、一日復活!
【第30号】2012/9/17 会話が生まれるポスター作り
【第31号】2012/10/2 そこでやめるな最後まで…
【第32号】2012/11/3 女将さんポスター取材完了
【第33号】2012/11/4 ゲイジュツの秋
【第34号】2013/1/25 想いは強く、そして優しく。
【第35号】2013/6/21 人を繋げる「若大将」
【第36号】2013/6/22 おかげさまで、三年目。
【第37号】2013/6/23 暮らしを映しだす、ポスターを
【第38号】2013/7/28 やってきた、夏の風物詩
【第39号】2013/8/11 富賀神社大祭、集まる熱気

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
(平成25年)
8月17日
土曜日
あしたばん編集部
発行所:加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十一号

キッズリサーチ 中間ダイジェスト!



今年のキッズリサーチもいよいよ終わりが近づき、ありがたいことに三宅島大学本校舎は連日賑やかである。前号で初日と二日目の様子をお伝えしたため、今号は三日目から五日目までの様子を振り返る。

キッズリサーチ三日目にあたる八月十四日。この日の午後は、「気になるもの」を写真におさめさせた。そこに十枚までしか撮ってはいけないという制限が与えられ、子どもたちが厳選した「気になるもの」だけが写真に残るのである。前もってなにかを撮ろうと考えているのではなく、いろんなことを発見しながら撮影しているようだった。また、十枚という制限しか与えていないにも関わらず、それぞれの写真には個性が宿っていた、とキッズリサーチに携わるメンバーは語る。

四日目にあたる八月十五日の午後は、前日の「気になるもの」の写真を使用し、すごろくを制作した。大きな模造紙に簡単なコマ割りのみしておいて、写真の配置やコマの内容は子どもたちが考える、というものである。子どもたちは、模造紙に描いておいた海や山の絵と、昨日撮影した写真が合うように配置をしていた。完成したすごろくで実際に遊んでみると、なぜか「スクワット十回」のコマで盛り上がる。スポーツに力を入れている三宅島に暮らす子どもならではの反応だろう。

五日目にあたる八月十六日。この日は、二人一組で「他己紹介」のムービーを録った。ハンモックに乗ってみたり、招き猫の前に立ってみたりと、さまざまなロケーションで撮影を行なっていたが、三宅島大学本校舎周辺では、錆ヶ浜港が人気のようである。他己紹介の仕方もさまざまで、中にはオリジナルのニュース番組を制作しているところもあり、ここでも彼らの個性が光っていた。

八月十七日の午後は、加藤文俊研究室が三宅島で発行している『あしたばん』を、子どもたちと一緒に制作する。去年は「三宅島の好きなところ」というテーマでつくられた夏休み特別号が、今年はまた新たなテーマで発行される。

そして最終日の八月十八日、午前十時から正午まで、成果発表会を三宅島大学本校舎にて行なう。子どもたちと一緒に制作した名札や絵、すごろく、新聞が展示され、他己紹介ムービーが上映される。また、去年好評を頂いた「キッズポスター」が今年も並ぶ。これは、キッズリサーチに参加してくれた子どもを対象に、同研究室が制作するものである。来年のキッズリサーチに繋げるためにも、今年のキッズリサーチにおける集大成を親子で見に来て頂きたい。

(青山大毅)

今日も楽しみだ!って。

わたしたちには子供たちをつうじて「三宅島の人びとの暮らしやその魅力を感じる」という目的がある。しかし、それだけではない。ある一定の期間だけ子供たちと触れ合っていれば、互いの距離が縮まり、仲良くなる。友達になる。夏休みの宿題やその他の授業をつうじて、子供たちにとっても、大切な思い出を共有しているのだ。そんなわたしたちが行なっているキッズリサーチに、子供たちの親御さんはどんな印象をもっているのだろうか。

わたしがお話を伺ったのは、徳光さんである。お子さんのしんたろう君は二回目のキッズリサーチであった。

「親御さんにとって、キッズリサーチはどう思われますか?」

「ありがたいですね。しんたろうは毎日楽しみにしてて。『お母さん!今日も朝からいくよ!』だからわたしは水筒にお茶をいれてね。うちに帰っても、ごはん食べてすぐ寝て、みんなで遊べてよかったねって、明日もいくって」と話してくれた。とても有り難い言葉だった。

夏休みの宿題をやって、みんなと遊ぶ。カメラを使って遊んだり、ムービーを録ってCMを作ったりすることが、子供たちにとっても、新鮮で刺激的なのだ。外でたくさん遊んで帰ってきた、子供たちの輝いた目を親御さんたちは理解し、わたしたちに任せてくれていた。

最後に、徳光さんがおっしゃっていた。「しんたろうにとって、ここにくるのが一番楽しみだって。ここだとみんないるし、できれば来年も……」。そう言ってくれるひとをわたしたちは大事にしなくてはいけない。期待に応えたいという使命感があった。

今回で二回目となるキッズリサーチも後半戦だ。せっかく子供たちと繋がったプロジェクトを終わらせることはできない。もちろん、大学生のメンバーは変わってしまうけれど、キッズリサーチはずっと続けていかなくては強く思った。



(廣野吉隆)

「何をやっているかわからない」が、誉め言葉

九月に開校二周年を迎える三宅島大学。今回、プロジェクトの実行委員会事務局の吉田武司さんに、お話を伺った。

吉田さんはこれまで、アートNPOの事務局として行政と関わりながら、アートプロジェクトを主宰していた。その経験が行政の立場として関わることへの興味に繋がり、三宅島大学事務局を務めるひとつのきっかけとなったそうだ。「自分一人では動かせないことを色んな人とつくることで、自分が想像していたものを超える瞬間があることが面白さであり、難しさでもある」と話す。

三年目を迎える三宅島大学だが、実は役場として事務局が作られたのは今年の四月からである。事務局として運営していく過程で、「数字が大きな割合を占めることが多いプロジェクト評価において、より定性的な、プロジェクト過程への理解を増やしていきたい」と話す。講座の参加人数を増やすことだけでなく、たとえ少人数の参加者の中で一人でも考え方が変わる機会になるのであれば、その過程をつくることに重きを置くことも大切だ。

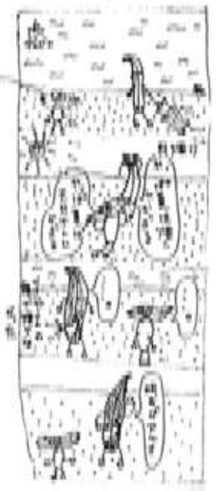
そして何より村役場として行っているからこそ、三宅島大学が島民の方々により一層必要とされることが一番の目標である。「三宅島には海だけじゃなくて、大学がある」。そう言われるように文化として島に根付き、島民の方々が誇りに思えるような三宅島大学をつくっていきたいという。

今後を見据え、「講座やサークル活動を通じて、色んな人が自分自身の価値観を考えるきっかけとなるようなことをしていきたい」と吉田さんは語る。「教える人だけでなく教わる人にとっても、それまで気付くことの出来なかったことを考える時間を作りたい。三宅島大学は、ある人には観光、また別の人には福祉、さらにまた別の人には教育など、様々な捉え方が出来るプロジェクトだ。豊富な種類の講座をひらくことで、島民の方々が三宅島について考える場にしていきたい」という。多様な講座やサークルを持つプロジェクトだからこそ、三宅島大学が何をやっているか分からない、と言われることが誉め言葉でもあると話す。

普段はその和やかな雰囲気と会話が魅力的な吉田さん。今回の取材では三宅島大学にかけるアツい思いを淡々と語ってくれた。終わり際、「昨日決まったばかりだけど……」と十一月からの講座についてもこっそり教えてくれた。これからも一人一人に響くような、新たな試みに取り組んでいく。まだお伝えすることの出来ないその講座については、三宅島大学からの情報発信を楽しみに待って頂きたい。

（竹下　絢）





お盆の過ごし方
尊ぶ心の表れ

一月と八月の十六日は地獄の釜が開くといわれている。十五日に神様やご先祖様を送り出して、翌日は彼らが帰路に立つ。その日に海へ入ると水面の下から足を引っ張られ、一緒に連れて行かれるという言い伝えがあるのだ。そのため島で建設業に携わる方々は、水難事故などに遭わないよう仕事をお休みするという。夏は海水浴客で賑わう海岸が、この日だけは静まる。

三宅島のお盆の過ごし方や風習は地域によってかなり異なる。例えば、阿古に住む方たちは十五日に「線香まわり」をする習慣がある。線香を手に持って、自分たちにゆかりのある家をひとつひとつ訪れ、仏壇に線香を上げながら村を回るそうだ。その日船が出た錆が浜の港でもお線香が焚かれていたのを目にした。翌日にお墓参りをするという。

一方で、坪田に暮らしている方たちは十五日にお墓参りをすることが多い。親族に限らず、近しい知人や友人などたくさんのお墓を回り、お線香を上げたりお供え物をすることが特徴的だ。十六日は午前中に住民の人たちが海蔵寺という寺院に集って、住職さんにお経を上げてもらう。お焼香は、亡くなった親族が新盆を迎える人、海で亡くなった人などそれぞれに分かれて行なうそうだ。最後にみんなで踊りをおどって、昼頃に一段落するという。

午後は、海の近くまで足を運んで神様やご先祖様を供養する為に、一日中動きっぱなしである。ふつうは、地域の中でも家庭によって仏教や神道など信仰の違いから習慣が異なるが、坪田はそれが分かれておらず、ひとつにまとまっているところが他と比べてめずらしい。住民の方曰く、本土からより離れた方角に位置する坪田は、少し文化が特殊なのだそうだ。

他にも、神道の文化が根付いた神着ならではの風習があったり、場所によって様々なお盆の過ごし方がある。小さな島であるにも関わらず、島の反対側は天気も違えば、根付いている文化もまったく違う。祭りやお盆の行事を通して、島の人々がご先祖様を尊ぶひたむきで真摯な心を感じられた。

（龍山千里）

キッズリサーチ
成果発表会を開催します。
8月18日（日）午前10時～12時
三宅島大学本校舎（御蔵島会館）
是非、親子でいらしてください。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
(平成25年)
11月16日
土曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十二号

わたしたちの目に映る島

二〇一一年九月の三宅島大学開校直後から、わたしたち慶應義塾大学加藤文俊研究室は三宅島大学のリサーチプログラムの一環として島内で暮らす人々のポスターづくりを行なってきた。このプロジェクトは島内で民宿を営む女将さんを取材し、島と女将さんの魅力を詰め込んだポスターをつくることからスタートした。その後は、三宅島キッズリサーチに参加した子どもたちや、島で働く男性の魅力を伝えるポスターをつくり、三宅島大学本校舎である御蔵島会館で小さな展示会を何度か行なってきた。そして今年、過去のポスターを一挙に展示する「三宅島ポスタープロジェクト展」を開催することとなった。展示の会場は竹芝旅客ターミナル（東京会場）と三宅村交流センター（三宅島会場）の二カ所。九月六日から東京会場の竹芝旅客ターミナルで、三宅島で働く女将さんのポスターを展示している。

そして今日、三宅島ポスタープロジェクトのもうひとつの会場、阿古船客待合所ここぽーと二階の三宅村交流センターの会場準備をわたしたち加藤研究室と三宅島大学のスタッフで行なった。ここでは、三宅島キッズリサーチで制作されたポスターと島で働く男性のポスター、今年三宅島大学を卒業する田中耕介さんの卒業制作「三宅島モザイクアート」を展示する。十一月一六日（土）から十一月二三日（土）までの七日間、九時から十七時まで展示をしている。島民の方々にはぜひ足を運んでいただきたい。（都合により十八日・十九日は展示をお休み）



昨晩、わたしたちは竹芝旅客ターミナルのポスター展を見てから船に乗ってきた。ポスターを見ると過去二年半の活動がよみがえり、同時に三宅島の様子が頭をよぎった。六時間の船旅を終えて、三宅島会場でポスター展の準備をしていると、この島に住む人の魅力をこの島の人たちに知ってもらいたいという想いが湧いてくる。年に数回三宅島に足を運ぶわたしたちの島への関わり方は断片的であり、わたしたちが見つけ伝える事の出来る三宅島の魅力は数ある島の魅力のほんの一部かもしれない。それでも、わたしたちが継続してきた成果がこのポスターであり、わたしたちの目から見た三宅島でのものである。内地へ行く機会のある方には、東京会場のポスタープロジェクト展も見てもらいたい。わたしたちは日曜日の船で内地に戻る。ポスター展に足を運んだ方は感想をぜひ聞かせてほしい。

（伊藤　圭）

おかえり、そらあみ。

全長一一一メートルにもわたるそらあみには全部で約五〇万個もの結び目がある。二年間に渡る〝そらあみ行脚〟では全国およそ一〇〇〇人もの人がこの〝そらあみ〟という物語を紡ぎ続けてきた。

そらあみとは、日本各地でその土地の漁師、地元の方々と共に編んだ色とりどりの漁網を空に掲げる、という作品である。青、白、黒、黄色、緑…と網に使われる糸の色はそれぞれの土地の色を表している。空に向かって掲げた時に、糸の色と背景の青い空や白い雲との組み合わせ、見る角度などによっても様々な見え方をするそれは周りの風景と共存し、景色に溶け込み、景色の一部となる不思議な作品として完成される。網と網のつなぎ目が斜めになっていることや編み目の大きさが一つ一つ異なっているのは、力加減や編み方のくせなど全国各地のそらあみの紡ぎ手の個性が表れているためである。

「あみが初めて空に向かっていったのは舞鶴だったね」そう話すのは、そらあみを制作するアーティストの五十嵐靖晃さん。五十嵐さんが三宅島の漁師に漁網の編み方を教わったのは二〇一一年六月、三宅島大学開設の為の事前リサーチで三宅島に訪れた時である。「これで何か出来ないかな…」「この網が空に立ち上がったら面白いな。」そんなひらめきから全国を股に掛ける五十嵐さんの〝そらあみ行脚〟は始まった。



そらあみは人の関係性をも変えてしまう。言葉ではないコミュニケーション、五十嵐さんはそう形容する。

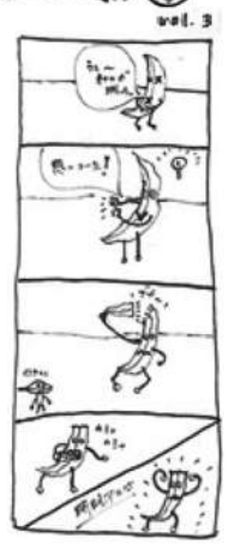
浅草、塩竈、釜石、瀬戸内、三宅島で紡がれてきたそらあみと、それらによって繋がれた各地の紡ぎ手達が三宅島に帰ってきた。日本各地で編まれてきたそらあみは三宅島で一つの大きなそらあみとして仕立て上げられる。

全国を巡ったそらあみ。誕生の地、三宅島で一体どんな表情を見せてくれるのだろう。

『そらあみ・三宅島』帰島式は本日より三池港で行われる。ぜひ足を運んでみて欲しい。

（秋庭大志郎）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。



好奇心がつなぐ縁

三宅島大学のマネージャーである上地里佳さん（二十五歳）にお話を伺った。今年の十月一日から三宅島に住み始め、すでに一ヶ月以上過ごしている彼女は、今夏まで慶應義塾大学院政策メディア研究科の学生として過ごし、このあしたばんを発行している加藤文俊研究室に所属していた。生まれは沖縄の宮古島で、実家はパン屋を営んでいる。高校卒業と同時に島を出て東京に来た。そして、三宅島を研究対象とした論文で修士号を取得し、今に至る。

彼女が初めて三宅島を訪れたのは、二〇一一年の六月。その夏に、「女の子のバイトを募集している」と呼びかけていた築穴製菓さんの元で住み込みバイトを二ヶ月続けた。まだ縁もゆかりもない島で働くなんて尻込みしてしまいそうだが、「なんか、面白そうだな」と思ってやってみることにしたそうだ。実家がパン屋ということも、何かの縁が巡っているのだろう。

その後に研究活動として島で過ごす時間も多く、マネージャーとして住み込んでいる期間も加え、初滞在からの二年半で実に百六十日間は三宅島で過ごしているそうだ。親には「何で島を出て、何で島に行くん」と言われることもあったらしい。三宅島大学のマネージャーになる際は、「こんなに三宅島に関わるのか」と自分でも思ったそうだ。任期は半年。来年の三月いっぱいまでだ。



自分のことを無鉄砲と表する上地さんの語り口調は、なんだか朗らかだ。それは、強い好奇心から滲み出ているもののように思えてならない。その好奇心から始まった三宅島との関わりはすでに長く、そしてこれからも続いて行く。ひとえに「周りの人に生かされてきた」と語る上地さんの謙虚な姿勢が、ここまで彼女を導いているような気がした。

彼女は、この夏まで僕の大学の先輩だった。また、同じ研究室の所属としても一年間同じ時間を過ごした仲間でもある。こうしてまた会えて、話を聞くことが出来たのも、上地さんがつないでくれた縁によるものだと思う。

（深澤 匠）

食卓への架け橋

三宅島での食事を語る上で欠かせない食材である魚。毎回私達のお腹を満たしてくれるその魚は、様々な人の手を渡った後に食卓まで運ばれる。

今回私は、神奈川の横須賀出身の石戸祥一さんにお話を伺った。石戸さんは、三年前に島に来て、現在は島の漁業組合で現場作業員として働いている。普段は阿古港にて漁師が釣りあげた魚の仕分けをし、お魚センターや東京の漁連等に魚を売るという仕事も行っている。普段はあまり表に出ることのない仕事であるが、毎日四百キロとの近い魚を仕分けて売る、いわば漁師と私達の食卓の間の架け橋であるこの仕事は、島の生活を大きく支えている。

石戸さんのお話を聞いていると、魚が好きな様子がひしひしと伝わってきた。仕事で嬉しかったことを聞いてみると、三百キロのマグロがあがった話をしてくれ、オンとオフの切り替えが仕事の秘訣だと話してくれた。休みの日の過ごし方を聞いてみると、堤防で魚を釣ることだと即答してくれた。なるほど、魚が好きという理由で三宅島に来たのもうなづける。



魚一つとっても多くの人が関わっているのだと思いながら噛みしめたその日の夕飯は、いつもよりも少しだけ時間がかかった。

（長富将成）

弾力がある？

天候はくもり。もっと自分の足で歩こうと、三宅島大学から外に出た。すぐ出たところにある赤いのれんの下がったところが、平野食堂であった。向かいにある壮大な海岸線の手前で、私たちを誘うように営業していた。入り口の横にある陳列棚にはお持ち帰り用のおまんじゅうが二種類置いてある。のれんをくぐると、中央に四人用テーブル席が数個と、右側にカウンター式のテーブルがはっきりと見える。メニューは中華料理が専門。夫婦で料理を作る。私はタンメンを注文したが、コシのある細麺は、色とりどりの野菜と舌を滑らかにすり抜ける至極のものだった。また、岩のりラーメンを食べた小笠まゆる（学生）は、これを「弾力がある」と表現した。

営業は三十年間続いている。昭和五十八年の噴火を機に一度は中断したが、現在は店舗を移転して営業している。以前の店舗は溶岩で埋まってしまったそうだ。今まで営業していて良かったことを尋ねると、「年寄りだからいつまで続けていられるのかな。」という悲観的なものであった。しかしその言葉の奥に、コシの強い細麺のような、得も言わぬ忍耐の日々とお店に対する愛情を私は確かに感じた。

（小川健太）

三宅島大学ポスタープロジェクト展

三宅島会場 11/16(土)～11/23(土・祝) 9時～17時 ※18(月)・19(火)はお休みです ◎三宅村交流センター

東京会場 9/6(金)～12/1(日) 7時～22時 ◎竹芝旅客ターミナル

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2013年
(平成25年)
11月17日
日曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十三号

「そらあみ・三宅島・」帰島式

みんなで見上げる三宅島の空

海と空の境界線がない三宅島で、色とりどりのあみが翻った。

一昨日から続く設置作業は、強風により難航。あみをかけるワイヤーが切れてしまうというハプニングを乗り越え、アーティストの五十嵐さんを中心に作品を完成させていく。

塩竈でそらあみを編んだ高田彩さんは、三宅島での展示を心待ちにしていた。「空をバックにしたそらあみを見るのは、今回が初めて。自分の土地で掲げられたものが、他の土地で掲げられるとどういう風に感じるのか…。そらあみに関わった人とのつながりを感じられたり、景色が少しちがって見えたりするかもしれない」

午後からは「そらあみ体験会」が開催され、加藤研の学生も参加した。初めて経験する漁網編みに、私たち参加者は悪戦苦闘。そらあみ経験者や漁師さんらに手取り足取り教えてもらった。「初対面の人とこんなに近くに座ることなんて、めったにないですよね」という五十嵐さんの言葉の通り、横一列に並んで糸を手繰る私たちの距離はとても近い。少し不思議な居心地の良さを感じた。うまく編めたとはしゃいでいた学生たちは徐々に真剣な顔つきになっていき、黙々と編み目を作り続けた。最後の編み目が整い、そらあみが完成した。各地で紡がれた想いがつながり、いよいよそらあみが空に昇ってゆく。そこにいる人みんなが、そらあみを、そして三宅島の空を見上げていた。



大きなそらあみのは十五時半過ぎ。長さは百十メートルもあり、一つ一つ手で編まれた結び目の数は五十万個にも及ぶという。カラフルな四角形が組み合わさり、色調を変えながら空を横切る様は壮観だ。

夕方からは三宅島本校舎で講義「そらあみ『物語を編む』」が行われ、そらあみの発祥やこれまでの活動を振り返った。あみを編んだ数え切れない人々の存在を知ってから見上げるそらあみは、ただの美しいアート作品ではなくなっているかもしれない。

（山田晴香）

三宅でまなぶ

二〇一一年九月に始まった三宅島大学プロジェクトが今年度、委託期間としての一区切りを迎えることとなる。

今回私は、慶應義塾大学加藤文俊研究室四年生の長富将成にインタビューを行った。彼は三年前の東京都文化発信プロジェクトによる三宅島事前リサーチより、三宅島大学プロジェクトに関わり続けてきたメンバーの一人である。「三宅島大学はこどもから高齢者の方まで島民の方々がふらっと立ち寄れる場所になった。授業を履修してくれなくても、島民の方々の拠り所に、島民の集いの場になってくれれば」彼はこう語る。



開設当初の三宅島大学の認知度は決して高いものであったとは言えない。継続的に活動を続けたことで認知度はあがっていった。授業を履修したり、講師を担当して下さったりするなど多くの島民の方々が三宅島大学に関わってくれるようになったのだ。「ここまでこられたのは非常に大きなこと。僕たちはきっかけを与えることは出来たけど、結局最後は島民の方々次第」と長富が言うように、今後の三宅島大学の活動や私たち加藤文俊研究室の島への関わり方について再び考える時期であると感じる。

実は彼自身、三宅島という一つの場で継続して活動を続けることの難しさやそれに伴う達成感、面白さを感じている。そして、大学の卒業プロジェクト制作の場としてこの三宅島を選び、漁師達のインタビュー集を作成している。島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。

私たちはこの島で多くのことをまなび、多くのことを考えてきた。明日はどんなことがまなべるのだろう。三宅でのワクワクは止まらない。

（秋庭大志郎）

新しい発見！

三宅の海で、ふとたくさんのカラスが飛んでいることに気付く。彼らは秋の味覚を狙っている。その中でも、今のお目当ては山葡萄。そんな山葡萄を、氷と砂糖と一緒に焼酎でつけて飲むのが島での楽しみ方だ。かかる時間は三日間ほどと、手軽にその味を楽しめる。酸っぱく、舌を紫に染めるビタミン豊富な健康的な飲み物である。

島のひとは道端で山葡萄の葉を簡単に見つけ出す。その蔓を引きずり出し実をとる。しかも、どっさりと。

「どこにあるのだろう」「私でもとれるはず」

気が付くと、この旅で三宅島での歩き方が変わっていた。

（井上千聖）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅の海を歩く

気持ちの良い朝に、透き通った空、光る海、潮の香りに誘われて、わたしは漁港に来ていた。ちょうど出航する船を見つけ、それを見送る二人の男性に声をかけた。写真右手にいる短髪の方が古谷さん、左手にいる帽子をかぶっている方が広瀬さんである。

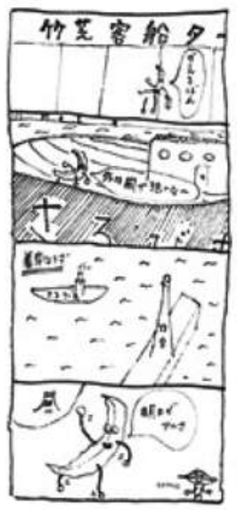
冗談で始まり、冗談で終わった約一時間。彼らは陽気でステキな漁師であった。七〇歳を越えているとは思えないほどパワフルで、終始その元気さに圧倒されていた。「今の若い衆はきつい仕事が全くできん！」と喝を入れられた。古谷さんは生まれも育ちも三宅島で、小さい頃から父に連れられ漁に出ていた。物心ついた頃から船に乗り、七〇年以上も漁に出続けているのである。そんな古谷さんは漁師になったことを宿命と表し、漁師の仕事にやりがいを強く感じている。「きつければきついほど価値あるよ」そこで一番大変であった話を尋ねた。「七〇年もやってたら語りきれねーよ」彼の言葉に彼は、漁師らしい強さが表れていた。



「ここらへんじゃあ古谷さんを知らねーもんはいないよ」とおっしゃっていた広瀬さん。サラリーマンから漁師に転職し、それ以来古谷さんにお世話になっているらしい。古谷さんにまつわるエピソードを話して頂いた。噴火が起き、下田に避難した島民の輪の中にはいつも古谷さんがいた。避難所近くで料理をふるまう、彼の船にはひとが集まっていた。「三宅はみんな知ってて、みんな親戚みたいなもんだ」ひとを集める古谷さんの人柄を、この小一時間の会話でも感じ取ることができた。

暖かい日差しの中でキレイな海辺を歩く。港には多くの船が停まり、そこには三宅で生きる気さくで強い漁師たちがいる。三宅を歩いたという感覚。ステキな出会いのあった、土曜の朝。

（河村裕次郎）



三宅島歴五ヶ月目

働く男のポスターシリーズにまた新たな物語が加わる――わたしたちは今回、阿古船客待合所ここぽーとの一階にある三宅島観光協会事務所にお邪魔させていただき、そこで働く磯谷泰斗さんにお話を伺った。

観光協会の仕事は、観光で外から来たひとが困ったときに対応することだ。夏になると、計画を立てずに島に来るひとも多いらしい。早朝五時頃に港に到着するひとを出迎えることからはじまり、ダイビング、釣り、観光スポットなど、三宅島の魅力をホームページにも合わせて紹介する。また、毎日午前三時半にフェリー・飛行機の運行状況などをブログに更新することも仕事の一つであり、観光協会の職員が交代で行っている。

磯谷さんが三宅島に移り住んだのは今年の六月。もともとは静岡県静岡市で広告関係の仕事をしていて、デザインがとても好きとのこと。お話を伺ったときに着ていた服は、磯谷さんがデザインしたお土産Tシャツ。全五色でそれぞれデザインが異なる。

三宅島に来てよかったことを聞くと、大好きな海にすぐ出られることだと言う。そんな磯谷さんは色黒で、いかにもスポーツマンといった出立ちである。三宅島に来る前には小豆島でシーカヤックのガイドをやっていたこともあるそうだ。また島のひとびとは夜が早く、観光協会の仕事も午後五～六時には終わる。夫婦で過ごす時間が増え、喧嘩が減ったことはとてもよかったことだと笑いながら語った。

はじめは少し固い面持ちであった磯谷さんも、好きなデザインの話になると緊張がほぐれた様子だった。「また今度、続きをお話しましょう」彼はそう言ってわたしたちを見送ってくれた。

（中島彩也香）



「内地」からの観光客

錆が浜港からメガネ岩へと続く海岸沿いを歩こう。一人で歩くには少し距離はあるが、今日は天気がいいからきっと誰か海岸にいるだろう。

硬い革のブーツで細かい砂の上を歩いていると、一組の男女が海を見ていた。声をかけてお話を伺うと、二人は神奈川県川崎市から来ている夫婦だと分かった。三宅島を歩いていて人に会うことは珍しい。特に、島外から来ている夫婦に出会ったことは一度もなかったので、彼らがここに来たわけを知りたくなった。「なんとなく島に来てみたいと思っていたの。島っていう響きに惹かれて」と奥さんが一言。とにかく何も考えずにゆっくりとした時間を過ごしたいと思って三宅島に来たそうだ。同じ伊豆諸島でも大島は少しにぎやかすぎるし、八丈島だと遠すぎるから三宅島。二人で四連休を作り、木曜の夜の便で島にやってきて月曜日の船で帰る。実際に来てみて、本当に人が歩いていない事に驚いたと言っていた。

会話の中で「ここも東京都なんだよね。なんだろう、日本じゃないみたい」という言葉が印象的だった。確かにここは東京都三宅村。しかし三宅島の島民はここを「島」とよび、海の向こうを「内地」と呼ぶ。その感覚が初めてこの地を訪れた二人にも伝わっていたのだろうか。

（伊藤　圭）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。





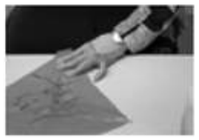
























三宅島大学
開校から卒業式まで

あしたばん

2013年
(平成25年)
11月18日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十四号

卒業式

三宅島大学が開校して以来、島内では数多くの授業が開かれてきた。あれから三年。三宅島大学にとって初の卒業生が誕生した。式は十七日、阿古船客待合所「ここぽーと」にて執り行なわれた。卒業生は、「ころっちさん」と親しまれている田中耕介さん。この卒業式を行うにあたり、欠かせない人物にお話を伺った。三宅島大学マネージャーの吉田武司さんと上地里佳さんだ。この二人による絶妙な連携により、卒業式が成功したと言っても過言ではない。運営面でのサポートをした吉田さんは「ころっちさんの作品をたくさんの人に見てもらいたい。だから島の玄関口であるここでやりたかった」。田中さんの相談役であった上地さんは「作品への愛着が持て、やりたいと思っていることができるよう最大限サポートしたかった」と話していた。二人は田中さんをよく理解しようとし、モチベーションを保つ工夫をされてきた。彼への想いは大変強いもので、今回の卒業に対し本当に嬉しいと感じておられる。お話を伺う中で、三宅島大学で共に歩んできた彼らの時間は尊さを感じる素敵な卒業式へと繋がっている。

式は九時から厳かに始まった。まずは卒業証書授与。メンターの加藤文俊教授をはじめ、多くの大学関係者が見守る中、卒業証書を受け取る田中さんの姿は少し寂しそうに見えた。その後副村長である内田峰夫さんからの式辞、そして卒業生答辞へと続いた。答辞を述べている田中さんは凛とした姿で、すらすらと想いを語っていた。大学時代につけていたログを見ながらの答辞であったため、話が進むにつれ自分の中で伝えたいことが増していき、より熱く語っていたのではないか。「普通の大学とは違う。机に向かう勉強だけではない、それ以上の魅力が三宅島大学にはある。これからも三宅島大学が繁栄されることを願っています」。こうした彼の言葉で式は終わった。

次に卒業制作成果発表が行われた。卒業制作タイトルは、「虹アルバム」。人との関わりやコミュニケーションが大好きな彼は、「皆さんで完成させたい」と話しており、現在も写真を募集している。続いて、慶應義塾大学加藤文俊研究室の学生による三宅島を対象とした研究の発表が行われた。夏に行われたキッズリサーチ、慶應の卒業プロジェクトとして行っている研究二つと、上地さんが在学中に取り組んだ修士論文の報告が行われた。これらの研究によって、彼らと三宅島との繋がりが深くなっていることを改めて感じた。最後は慶應義塾大学加藤教授と東京文化発信プロジェクトの森司さんによる、三宅島大学の振り返りが行われた。

これからどのように発展してくいのか楽しみである。田中さんに続く卒業生の誕生を期待したい。

（細井美香）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

あしたばくん vol.4

三宅島大学初の卒業生 田中耕介さん

卒業式会場でひときわ目立つ虹。三宅島大学初の卒業生、田中耕介さんの卒業制作「虹アルバム」は、大きなパネルを五枚並べて作った白いキャンバスに五色の写真を貼って作った虹のモザイクアートだ。海や夕焼けの空、植物など、三宅島に関するものを写した赤・緑・オレンジ・青・黄色の写真が並ぶ。使った写真は撮った人も場所も年代もバラバラ。近くで見るとその写真に対する持ち主の思い出が虹の周りに書かれていたりと一つ一つに色々な想いが詰まっていることが伺える。

大事なポイントは、この虹がパネルの端から端まで完全に架かりきっていないということ。この卒業制作は、未完成なのだ。田中さんは「好きな写真で、三宅島を表現した。制作開始当初は自分の写真だけでモザイクアートを作ろうとしたが、たくさんの人の視点や思い出を込めた方がいいのではないかと、加藤先生と話すなかで決まってきた。今後、観光客も制作に携われるような工夫をしていきたい」と語ってくれた。島民、観光客、様々な人が見た「三宅島」が、虹のモザイクアートに反映されていく。

三宅島で生まれ育ち、今もなお三宅島で介護のお仕事をしながら暮らしている田中さん。三宅島大学には、二〇一一年の開講当初から積極的に参加してきた。「生まれた坪田地区の言葉にフォーカスした、『坪田の言葉を聴こう』という講座が印象的でした。坪田の言葉は少し独特なのですが、普通に暮らしていたら坪田の言葉などただおじいさんおばあさんが話している言葉に過ぎない。しかし、三宅島出身ではない外部の人がそこに面白さを見出したことによって価値が生まれた。受講して、ますます坪田が好きになりました」。

今まで触れ合わなかったことや人との出会いが、自身に新たな価値観や発想をもたらしてくれたという。船の待合室で楽しそうに虹アルバムを作る人々の姿が見られるのも、そう遠くないかもしれない。

（堀越千晴）



また行きます

「どんなポスターにしたい？」取材の帰り道で話し合いが始まる。

今回私たちがお話を聞かせていただいたのは、三宅島観光協会の磯谷泰斗さん。とても気さくな方で、気づいたら一時間半も話し続けていた。磯谷さんに限らず、取材に応じてくれる方たちは初対面である私たちのために時間を割いて多くの話をしてくれる。そして笑顔でお別れをする。会えてよかった、そう思う。そのひとの心を、見るひとの心を揺さぶりたい。だから私たちはポスターを作りたいと思うのだ。

そのひとの魅力や、そのひとが伝えたいことを『そのまま』ポスターという形にする。この、『そのまま』が難しい。悩んで悩んで、言葉を選ぶ。夜通し意見をぶつけ合って、二枚のポスターが出来た。

届けにいくとき、緊張と不安が心を支配する。自分の手から磯谷さんの手にポスターが渡ったら、自分のポスターを眺める磯谷さんの表情を、じっと見る。照れた表情に変わっていく。「あ、このポスターの表情だ」。

磯谷さんは照れながらも「飾っておくよ」と言ってくださった。ポスターは目に見える形として残り続ける。見るたびに何かを考えたり、何かに気づくきっかけになったり、ほんの少しでも人の心に刺激を与えられたら……そんな願いが込められている。そして、見るたびに私たちのことも思い出してほしいな、なんてわがままな感情も芽生えてしまうのだ。

午後二時二〇分。船の上から港を見下ろすと、磯谷さんの姿が見えた。取材をしたときは船を見送ることはしていなかったのに。テープを投げる。

「また来てね」。

（小笠まゆる）



夏の思い出

今夏、三宅島大学主催のキッズリサーチが行われたことを覚えているだろうか。今年で二年目のこの企画。午前中は三宅小学校や三宅中学校で子どもたちの夏休みの宿題に取り組み、午後は御蔵島会館を拠点に日替わりのワークショップが開催された。あれから三ヶ月。私たちは、ひと夏の記録を冊子とDVDのセットにまとめた。冊子には各日程の概要が子どもたちの写真や作品とともに掲載されており、DVDには子どもたちがワークショップで制作したCMや七日間のまとめが盛り込まれている。私たちは、完成品が子どもたちの手に渡るこの時を楽しみにしていた。

十一月一七日、参加者だった三兄弟に会うために、私は錆が浜港に駆けつけた。出港を待つ人や見送りの人で賑わう待合室の中で小さな彼らの姿を探す。三ヶ月振りに会う彼らの背は少し伸びていて、雰囲気もどこか大人びたように見えた。しかし、成果物を見せた時の笑顔は相変わらずあどけなく、冊子やDVDを興味津々に見つめては小さな歓声をあげていた。会えたのは、たった十分程度ではあったが、彼らのパワーがぎっしり詰まった時間だった。すぐにまた会えるわけではないが、彼らの成長をどこかで見ていたい、そんな気分になった。次に会う時には、どれくらい大きくなっているのかとても楽しみだ。

（枡野友香）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
12月8日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十五号

今と昔をつなぐモノ

幼い頃、あなたはタイムカプセルを埋めたことがあるだろうか？自分の宝物や大切にしているものを埋め、それを何年か後に掘り起こす。

さて、一年も最後の月を迎えた十二月七日、映像ディレクターの山城大督氏による三宅島大学の講座「ビデオレターを撮影しよう」が行われた。当講座が行われるのは今回で三回目で、七年後の自分にビデオレター撮影して送るという内容であり、既に十五人ほどの人たちが撮影したそうだ。ビデオレターとは、読んで字のごとくビデオで撮る手紙である。山城氏いわく「手紙だと書いている途中にペンを止めてじっくり内容を考えることができるが、ビデオだと一度回したら止まらず、一見無駄な時間も映る。しかし実は言っている内容よりも、そういった自分の仕草や表情が未来に残ることが面白い」そうだ。七年間という時間設定も、十年だと長すぎてイメージがわかず、逆に三年後だと近すぎるので、七年という時間設定にしようと思ったとのこと。

講座はまず、メッセージのみを二分間録音して、その後録音したメッセージを聞きながらビデオ撮影を行うといった二段構成となっている。これは、いきなりビデオ撮影を行うと緊張してしまい、カメラから目をそらしてしまうことがあるので、このように徐々に慣らしていくのだそうだ。自分も受講生として参加したのだが、メッセージを録音するだけでもかなり緊張してうまくしゃべることができなかった。更に、七年は遠すぎず近すぎずとはいっても、未来の自分を想像することはとても難しい。

その後、ビデオ撮影を行うために海岸に向かった。この日は波も高く風も強かったため、波が撮影機材にかかりそうになり、撮影場所を移動するといった様子であったが、講師の山城氏が非常に気さくな方であったので、終始リラックスムードで無事に終えることができた。

感想としては、普段自分に対してメッセージや何かを伝えるということはないので、何を話してどう伝えるか非常に苦労した。しかし、未来の自分思いを馳せ、メッセージを伝えるということは、同時に必ず比較対象である今の自分のことを振り返ることにもなる。そういった意味で、自分を見つめ直すとても良い機会になり、同時にこのビデオレターを見た七年後の自分にとっても、過ぎ去った日々を振り返り、自分を見つめ直すきっかけとなってくれればと思った。

（長富将成）



手渡すまで

二〇一三年十一月十五日から十七日、加藤文俊研究室が三宅島に滞在し、「はたらく男の人」ポスターを制作した。今回は、観光協会、ココナッツガーデン、ホテル海楽の三件に取材をし、それぞれ二枚ずつ、計六枚のポスターが並んだ。

それから二週間経った十二月一日、阿古船客待合所ここぽーとの一階、三宅島観光協会事務所にて取材した磯谷泰斗氏に、A1サイズに印刷した完成版のポスターを手渡しに行くことができた。前回の滞在から少々時間があいてしまったが、またこうして再会することができて嬉しく思う。

ポスターを手渡す瞬間は、何度経験しても緊張するものである。気に入ってくれるだろうかとか、話を正しく理解できていただろうかとか、いろいろ考えてしまう。しかしどちらにせよ、A1サイズになったポスターを目の当たりにした反応を直接見ることができるのは、とても嬉しいことである。完成して一番に見せたい相手は、やはりポスターに写っているひとであることは間違いないだろう。

目の前でポスターを広げて見せると、大きく写し出された自分を見て、「もっとちゃんとしとけば良かった」と照れ笑いを浮かべる磯谷氏。隣にいる妻の磯谷麻美氏も笑っている。「あら、喧嘩減ったの？」と周りの人が声をかけ、それに答えるご夫婦。ポスターを介して、ポスターに写っているひとと、それを見たひとのコミュニケーションが生まれた。そして、帰り際に「ありがとうね」とお土産を持たせてくれる。



たった一度、数時間取材をしただけで互いに親しみを持つことができ、どうしようもなく、いつかまた会いたくなる。そのうち、その土地に愛着さえ抱いてしまう。それは、アポを取り付け、取材をし、ポスターを制作に頭を抱え、本人へ手渡すという一連の流れによって生み出される感情なのである。同研究室が行なっているポスタープロジェクトは、自分と相手との濃密な時間を、ポスターという形にしてアウトプットする。それを手渡す度に、「またすぐに来ます」と言って別れるのである。

（青山大毅）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

あしたばくん vol.5



三宅島エッセイ

島びより

ひとり

青山 大毅

二〇一三年十一月二八日、昨年六月から数え、十一回目の三宅島へ向かう。冬の寒さのせいか、デッキにひとの姿は見えない。汽笛が鳴り、出港する。いつもなら酒を飲む頃だが、レインボーブリッジの真下を通り過ぎたところで船室へ。本を読み、眠気を待った。

船がギイギイと音を鳴らしながら揺れ、目が覚めてしまう。冬の海は荒れると聞いていたが、想像以上だった。眠れないと、得体の知れない大きな不安が押し寄せてくる。時刻は深夜二時半。まだ、三宅島は遠い。

「バリン」という破裂音。続いて、アルコールの強い臭い。どうやら、船の揺れによって酒瓶が落ち、割れたようである。日本酒だろうか。臭いだけで酔っ払ってしまいそうである。数分した後、また大きな物音がした。これは、わたしのキャリーバッグが落ちた音だろう。着いたら直そう。

何度目の目覚めだろうか。ようやく到着の船内放送が流れる。カーテンを開けると、そこには誰かが直してくれたであろうキャリーバッグが立っていた。

下船すると、強烈な風が襲ってくる。内地より寒い。向こうで手を降っているのは、三宅島大学マネージャーの上地里佳さん。思わず駆け寄る。頂いたカフェオレが暖かかった。





編み続ける人

三宅島大学本校舎に入って右手を見ると、ふと目に留まる赤と黒のハンモック、更に進むともう三つほどぶら下がっていて、どのハンモックも細部までしっかりと編まれている。聞けば、四つのハンモック全て同じ人が編んだそうだ。編んだ人の名は、阿古に住む元三宅島漁業組合長の沖山邦男さん。三宅島大学の講座である「ポスターモデルをしたり、作ろう」のポスターモデルをしたり、そらあみプロジェクトに関わったりして、「クニさん」の愛称で親しまれている。

クニさんは元々式根島出身で、テングサを取るために三宅島に移り住んだそうだ。若い頃はテングサ漁の他、二〇人がかりで漁に出かけ、網を引っ張り、魚を採っていたそうで、多い時はなんと一回の漁で十トン近くの魚を揚げることもあった。その一方で、一度網を上げ始めたらどんなに波が強くても上げなくてはならず、また、夜の漁では波が見えないために危険も伴ったそうだ。

「テングサ景気」と呼ばれた頃には、組合員と一緒にジェット機を二台貸切って温泉旅行に出かけることもあったそうだ。飛行場を建設する際に当時の組合長らと揉めた時は、組合員を取りまとめ、組合員からの信頼を築いた。その後一九九九年から漁業組合長を十二年間務め、全島避難の際は下田や大島等各地に避難した組合員の元を一人一人訪問して話したり、励ましたりしたそうだ。しかし、避難解除の後に多くの若手漁師が島に帰らず、そのまま避難先で職に就いたりするなど、人手不足により網の漁ができなくなる事態に陥った。そんな決して順風満帆とは言えない状況の中、クニさんは十二年にもわたって島の漁業組合の中心として支えてきた。

雨の日も風の日も、毎日毎日阿古を散歩して黙々と網を編み続けるクニさん。一漁師として、一組合長として今までどれだけの苦労や困難に直面して乗り越えてきたのだろうか、本当に様々な経験を指摘したのだろう。帰り際、もっと色々な話を伺ってみたいと思いつつ家路に着くクニさんを見送ると、だんだん小さくなっていくクニさんの背中がとても大きく見えた。

（長冨将成）



お知らせ





三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2013年
(平成25年)
12月18日
水曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十六号

年の瀬に、みんなで

年の瀬に、地域の住民が集まりお餅をつく。小さな子供からお年寄りまで、みんなで和気藹々とお餅をついて寒空の下で食べる。お餅をつくことで自然と住民同士のコミュニケーションが生まれ、新年を清々しい気持ちで迎えることができる。

さて、島でも十二月十四日にみやけじま風の家にて餅つき大会が行われた。この餅つき大会は、二〇〇五年から行われており今年で九回目を迎える。みやけじま風の家現地事務教区長の坂上幸一郎さんにお話を伺ったところ、この餅つき大会は、二〇〇五年に全島避難から帰ってきた時、島民の方々のふれあいの場として風の家が生まれ、みんなで元気づけになるようなことができないかという話になった時、餅つき大会の案が出て、開催に至ったそうだ。坂上さんは「最初に第一回交流会って言って、第二回って付けたもんだから第二回ってのもあるのかいという話になって、これまで続けてきたんだ」と語ってくれた。普段風の家に足を運ばれている高齢者の方々のみではなく、餅つき大会には小さい子供や中学生など様々な年代の人が参加していた。この餅つき大会は様々な方がそれぞれの立場で手伝っており、若い方はテントを設営したり、少し足の不自由な方も看板を塗ったり、看板に貼る花を作ったりと本当にみんなの手で作っている様子が伺えた。



続けていく上での苦労を坂上さんに聞いてみたところ、「島民方々が非常に協力的なおかげで、特に苦労は無い。僕たちは環境を作るが島民の方々が主体的に活動していて、様々な方々が応援してくれているので非常にやりやすい。お餅をみんなでつくのもそうだが、僕らの願いはこの大会を通じて島民の方同士友達になってもらい、普段島で歩いている時等の何気ない時にでも繋がりを継続していってほしい」と胸の内を語ってくれた。

十一時時過ぎから行われた大会は終始みんながリラックスムードで、お餅をつく時にみんなで「ヨイショー」と元気よく掛け声を出しており、お昼過ぎにはみんなでお餅や焼きそば、そしてぎにはみんなで温かい豚汁を食べた。そして最後にはみんなで輪になって、楽しかった時を噛み締めるように歌を歌った。全てのプログラムが終了し、みんなで片付けを行っている時に参加者の方々から自然と「来年はどんな歌を歌おうか」等のことを話しているのを聞いて、坂上さんが「続けていく上での苦労は特に無い」と言った理由がわかったような気がした。

（長冨将成）

pika pika

二〇一三年十二月十四日、三宅小学校の体育館に約二〇名の小学一年生が集い、PTA行事が行なわれた。縦横無尽に走り回る子どもたちの姿は、まさにエネルギーの塊である。その有り余るエネルギーを、今回は「pikapika」というものにぶつけてもらった。pikapikaとは、一定時間シャッターを開けたまま撮影することにより、光の軌道を写真に収めたものである。光量が多いと真っ白な写真になってしまうため、カーテンを閉め、電気も全て消して行なった。

まずは、懐中電灯を子どもたち一人ひとりに配布する。ライト部にセロハンテープを貼り、そこをマジックで好きな色に塗れば、その色の光が映し出されるようになり、自分だけのオリジナルライトとなる。青、橙、緑、紫など、色とりどりの光が揃い、子どもたちはその色彩に興奮していた。次に、くじびきによって自分の担当する文字を決め、その文字が割り当てられている場所に移動してもらう。位置についたら、pikapika が一体どういうものなのか、どう写るものなのかを理解してもらうために、簡単な練習を行なった。飲み込みが早く、数回の練習ですぐにコツを掴み、彼らなりのアレンジをも加えられていた。いよいよ、本番の撮影にうつる。

与えられた五秒間の撮影時間で、指定された文字を描く。約二〇名が一斉に描き、ひとつのメッセージにするため、ひとりでもミスをしてしまえば、もう一度全員でやり直しをしなければならない。呼吸を合わせて、一思いに描いていく。四回目の撮影にて、pikapika は完成した。美しく、それでいてそれぞれの個性が活かされているような作品となった。



その後、親子やグループ単位でpikapika を撮影した。今度は形が指定されていないため、子どもたちが考えて作成する。星やハートが人気だったが、中には身体を型どったものや、クリスマスツリーといった高度な作品に挑戦する子たちもいた。撮影した二枚の pikapika を上下に配置して印刷をしたら、オリジナルクリスマスカードの完成。子どもたちに対する、少々早めのクリスマスプレゼントである。

（青山大毅）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

景色と風と

十二月十五日、三宅中高合同でマラソン大会が行われた。このマラソン大会は昔から行われており、全島避難以前は男子が島一周女子は半周走っていたが、現在は男子七キロ女子五キロを走るそうだ。

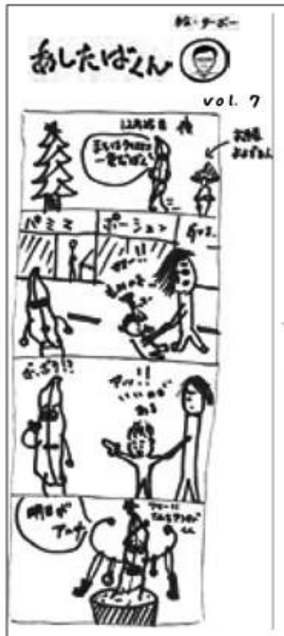
寒空の下、みんな元気いっぱいに走っており、中には半袖短パンで走る生徒もいた。生徒に声援を送っていた三宅高校の先生に話を伺ってみたところ、「是非良い記録を出して欲しいが、それよりも島の風景を覚えておいて欲しい。そして、この冷たい風の中走りきったという達成感を味わってほしい」と話してくれた。

日曜日ということもあってか生徒が走る道路沿いには多くの父兄が集まって熱心に声援を送っていた。高校二年生の娘がいる保護者の一人に話を伺ったところ、「自分の娘が目の前を走ると興奮して娘よりも熱くなってしまう。ほとんどの生徒を知っているから応援に力が入る」とのこと。実際に娘さんが目の前を通った時はハイタッチをするなど、非常に熱心な様子が伝わってきた。来年でマラソン大会が最後になる娘さんへのメッセージを伺ったところ、「順位よりも、島を感じながら走ってもらえれば」と感慨深げに語ってくれた。

中学、高校と六年間続くマラソン大会、六年でおよそ島一周分走り終えた時には素晴らしい達成感が味わえるのだろう。

(長富将成)





マサちゃん

今回私たちが取材させていただいたのは古谷優（ふるやまさる）さん。名前の通り、優しくて黒い肌がよく似合う漁師さんである。

一日目の取材は三宅島高校の脇にある倉庫の中で行なった。そのとき、優さんは漁で使用する網を編んでいた。煙草を吸いながら、見事な手さばきでどんどん網を編んでいく。優さんの真面目な表情に、私たちは緊張していた。一つの網を編み終わって、お互いに目を見ながら会話が始まる。正直それまでは少し怖い印象を抱いていたのだが、優さんはとの会話は本当に楽しくて、あっという間に時間が過ぎてしまった。緊張によって強ばっていた私たちの顔も、優さんとの会話によってどんどん柔らかくなる。完全に優さんのペースに飲み込まれてしまうのだ。さっきの真剣な表情とは打って変わって、優さんはくしゃっと笑う。その笑顔はとても魅力的で人を惹きつける。取材を終えた日の夜、一本の電話がかかってきた。「明日坪田港に来れば、船の写真も撮らせてやれるぞ。あんなところじゃ、ポスターも作れないだろうから」。

翌日、坪田港で優さんの船、大洋丸を見させていただいた。優さんは漁だけでなく、ダイビングのお客さんと共に海へ行ったりもしていて、その日はダイビングの帰りだった。ダイビングのお客さんは優さんのことを〈マサちゃん〉と呼ぶ。彼らは一年に数回、優さんの船でダイビングをするために千葉から訪れるそうだ。船から降りると、笑い合いながら記念撮影をしていた。その姿を見て、優さんは多くのひとに愛され、囲まれている漁師さんなんだと確信した。



冗談をたくさん言うような明るい優さんだが、「漁師みたいに苦労する仕事はないよ」とも語る。「青春なんてなかったよ」と。それでも、そう語る優さんの表情は柔らかい。その表情に、優さんの強さを感じた。

優さんの話が聞けないと三宅島に来た気がしねえ、なんてことを言うお客さんがいる。笑顔が似合うおちゃめな優さんに会うために三宅島を訪れているひとがいる。私たちも「またね」と言ってお別れをした。

(小竿まゆる)

三宅島エッセイ

島びより

ヘリコプター

小竿 まゆる

朝四時半。車に布団を詰めてヘリポートへ向かい、私たちはヘリコプターの切符を手に入れた。

出発の約三〇分前になると、手荷物検査などを行なう。ここで見送りの方とはお別れだ。ロープで仕切るという簡素な区切りではあるが、この区切りが〈別れ〉を意識させる。

待合所から外を眺めていると、想像以上の速さでヘリが接近してきた。機体を後ろに傾けながら後輪、前輪の順に地面につけ、着陸。プロペラは回ったままだ。エンジンの轟音のなか、ヘリへ近付く。後ろを振り返ると、三宅島で出会った家族が手を振っていた。

嬉しさを感じながらヘリへと乗り込む。ヘリは運転手席に二人、お客さんは最大九人乗ることができる。携帯電話の電源を切って、シートベルトを着用したらいよいよ離陸だ。エンジン音が大きくなって一気に上昇する。人、家、木々、まちがどんどん小さくなっていく。船からは見ることのできない景色が広がる。いままで数回この島を訪れているが、三宅島を上から見たのははじめてだった。船より値段は張ってしまうけれど、違った三宅島の姿が楽しめるかもしれない。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2014年
(平成26年)
1月11日
土曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十七号

「生」と島。

我々が滞在する三宅島大学本校舎は、和気藹々としているなか、一番奥の部屋は、どこかひっそりしている。思わず、息を潜めてしまうような空気感が漂う。その部屋の扉には「場の力」という表題が掲げられている。

日比野克彦氏。芸大の教授をしている傍ら、三宅島大学プロジェクトにも参加していた。段ボールに絵を描くことで有名で、幅広くアート活動を行っている日比野氏だが、「場の力」においては、油絵の作品を展示している。これらの作品には、キャンバス地に印象に残った三宅島の風景が描かれている。自然の荒々しさ、静けさ、そして豊かさ。

三宅島でよく見かける、火山で生を失った立ち枯れは、切なさ、はかなさを想起させる。青白く、血の気がない。しかしながら、「SHITTORIJINJA」という作品に描かれているものは、なぜか力強い。死んでいるのに、生きているようだ。たとえ生を失っていても、存在がそこにあるだけで、「生」を意味することを示唆している。一見、矛盾しているようであるが、生は死をも含むことを証明しているかのようだ。間違いなくこの島は生きているのだ。

ひっそりとしている三宅島の冬。目には見えないものの、島の鼓動は確実に、高鳴っているのだ。ゆっくりと、熱が大地を駆け巡っている。



この絵の制作を見届けていた、三宅島大学の吉田武司氏にそのときの様子を伺うことができた。一月五日と六日の二日間で仕上げた。飛行機も発着するくらいすがすがしい快晴の日、島の各地へ向かい、印象に残った場所に目星をつけた。もうすでに、日比野氏には構想は見えていたようだ。色のついていない筆でキャンバスをなぞっていたそう。下書きなどは、ない。思うままに、描き下ろした。だからこそ、純粋に見えた世界が目の前に広がっている。そして、その風景は、絵を通して、我々の目にうつり、訴えかける。

外の世界は、確実に我々の生活に影響を与える。その姿こそ、生きている証拠でもある。そう、確実に、この島は生きているのだ。

(原田ふくみ)

あるがままに 作り続けて…

海に囲まれた三宅島の特産品といえば、岩のりやイセエビなどの海産物のイメージが大きいだろう。しかし、昔から観光客や帰省客の人気を博しているものとして、岡本楼本店の牛乳煎餅がある。五〇年前から営業をはじめ、現在の主人は二代目になるそうだ。店舗の入り口にはギョロ目の牛の模型が二頭、私たちを待っているかのように置かれている。牛乳煎餅は、水を一滴も用いず、牛乳のみを使用していることが特徴である。何よりバター、卵などの乳製品の甘くほのかな香り、煎餅のサクサクとした噛み応えは、とても美味しい。

「嬉しいことは、お客様が喜ぶ姿です。つらいことや心配、葛藤などは全くないです」と主人は語った。その流暢な話し方、佇まいの中には、どこか牛乳煎餅を彷彿させるような優しいものがあった。

古くから伊豆諸島の文化交流の中心地として役割を担った三宅の地で、煎餅を作り続けて気付けば五〇年。素朴な印象を抱くこの店は、あえて人を引き込もうとするのではなく、静かにあるがままの自然体で佇む。その幽寂な様子に惹かれて訪れるものに、甘く優しい安らぎを与える。

(小川健太)



一人の青年と、一人の少年

来る一月十二日、御蔵島会館で一つのドキュメンタリー映像が上映される。その名も『ライン』。慶應義塾大学加藤文俊研究室所属の四年生、青山大毅氏が大学の卒業プロジェクトとして制作したものだ。彼はこの三宅島でひとりの少年と巡り会い、友達になった。その少年のために、共に過ごす時間を一つの形に残した作品である。

一昨年の春に同研究室に入り、三宅島大学としてこの島に関わるようになった当時三年生の彼が少年と出会ったのは、同年の夏。その後三宅島に滞在する度、接してきた。釣ってきた魚を食べたり、島のことを話してくれたり。いつしか、一人の子どもの存在が彼の中にはなくてはならないものとなった。少年にとってもまた然りだろう。上映にあたって青山氏に話を聞くと、「この作品を通して、三宅島で出来た関係性を残したい」と語った。その眼や口調の端々に、熱源にも似た決意を見た。

私たちは、人生の中で数多の人たちと接する。一期一会の出会いの中で、ひたむきな姿勢を誰かに傾けることは、数少ないのかもしれない。真摯に誰かのことを思い続ける姿が、この集大成には込められている。二人の中に紡がれたラインに、私たちは胸を打たれることだろう。

(深澤 匠)

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

やまのべのラブ

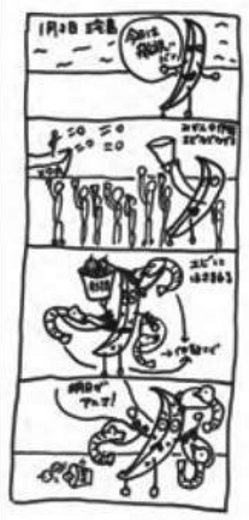
お昼ご飯に釜飯を食べようとやまのべ旅館を訪れると、ひと際大きな体で目一杯にシッポを振り、いまにも飛びかかってきそうな勢いでお出迎えしてくれた犬がいた。お昼ご飯を食べに来た僕らの本来の目的を忘れさせてしまう程の愛くるしさを持つその表情には何か人を惹きつける魅力があるようだった。

今年三歳になるという温厚でひとなつっこい性格のこのゴールデンレトリバーはラブという名前だ。実は、噴火で全島避難を余儀なくされた家族とそのペットである犬のロックの実話をもとにした物語、『ロック - わんこの島 -』でロックの子犬役を演じたのがこのラブである。しかし、ラブは三宅島出身の犬ではない。

生後一ヶ月の生まれたての時期に親と引き離され、映画の撮影の為に内地からやってきた犬なのだ。映画では犬の成長スピードに合わせて二匹の子犬がキャスティングされていた。撮影期間が伸びたことで一匹目の"子犬ロック"が大きくなりすぎてしまった為に二代目としてラブに白羽の矢が立てられたのである。ラブがこの島で暮らし始めてからはもう三年が経つ。映画の撮影が終わった後も内地に戻ることは無く、やまのべ旅館に引き取られ生活をしているのだ。

三宅島を好きになった人が島に移住してくるという話は聞いたことはあるが、人の都合で連れてこられた犬がこの島で生を全うすることになり、数奇な一生を送ることになるといった話はあまり聞いたことがない。内地で家の中で手厚く育てられるのか、三宅で自然と寄り添い目一杯に生きるのか。犬にとってどちらが幸せな人生なのかは正直わからない。だけど、自ら首輪を外し、これでもかというくらいに尻尾をふり、一生懸命にやまのべ旅館の庭をあっちへこっちへと走り回るラブの姿を見ると「ここに来て良かった」と、そう言っているように思えて仕方が無かった。

是非、やまのべ旅館へ足を向けてみて欲しい。きっとラブが全身全霊で尻尾をふって「遊んで!遊んで!」と、お出迎えしてくれるに違いない。



「寛いの場」

年も明け、寒い日が続いている。とりわけここ数日の身を切るような寒さは耐え難いものがある。そんな季節に恋しくなるもの、それは温泉である。はやる気持ちを抑えてじっくりと湯船に浸かると、体の芯まで冷え切った体が温まっていく。そして湯上りに外に出ると、行きの道はあれほど辛かったはずの北風すら心地良く感じられる。まさに至福のひと時である。

さて、今回私は三宅島唯一の温泉である「ふるさとの湯」を訪れた。中に入ると従業員の女性が元気な声で「いらっしゃいませ」と声をかけてくれる。中に入ると大浴場が一つ、露天風呂もあるそうだが、冬場はやっていないとのこと。ほのかに塩の香りがする茶褐色の湯船に浸かると、じわり、体が温まるのを感じる。最初は熱く感じてもすぐに心地よくなっていく。

従業員の女性によると、ふるさとの湯は平成七年に完成して、当初は島民用と観光客用の二つの温泉があり、観光客用には、明日葉湯、ジャグジー、露天風呂の三つのお風呂があったそうだ。最盛期には一日七九六人もの人が来たこともあり、その時は入口の外にある階段の下まで長蛇の列ができたそうだ。以前は源泉の温度が五十度以上あったため水で薄めなくてはならなかったが、今は逆に源泉の温度が下がって水で埋めなくてすむため、今の方が温泉としての効用が高いとのこと。





現在のふるさとの湯の利用客は多くが常連の島民の方で、ここに来ることが楽しみで毎日来る人も大勢いる。実際に三宅島漁業協同元組合長の沖山邦男さんも毎日通っていて、「自宅の風呂に入ったことがないくらい」と言うくらいだ。常連さん同士のコミュニケーションもあり、私が入っているときは、正月の過ごし方の話などをして会話を楽しんでいた。また、従業員と常連客との繋がりもあり、従業員の方曰く、「毎日来ている人が来ないと心配する」こともあるそうだ。そんな憩いの場であるふるさとの湯は、これからも多くの人々の心と体を癒し続けていくのだろう。

(長富将成)

試写会のお知らせ



あしたばん

2014年
(平成26年)
1月12日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十八号

三宅のパチンコ「初」体験

オレンジ一色で塗りたくられた外壁の建物がそこにはあった。阿古地区のホテル海楽の隣だ。なぜか看板はかけられておらず、外観だけで中身を計り知ることは不可能。恐る恐る中に入ってみる。縦列されたパチンコ台。けたたましい音楽と鉄球の金属音。タバコの匂い。それらが五感を通して、パチンコ屋たる輪郭を描いた。

五回目の滞在となる今冬の三宅島。その初日に、「三宅島にパチンコ屋がある」という話を聞いた。島を車で一周したことは数多く有れど、赫奕としたネオンで遠くからも目立つ派手な建物は思い起こせなかった。果たして本当に実在しているのだろうか。自ら視認するため、こうして足を運ぶ経緯となった。

せっかくなので玉を打つことに決めた。賭け金は千円。がしかし、何をどう動かせばいいのか全く分からない。何を隠そう、そもそもパチンコは未経験だったのだ。目の前の台に広がる未知の世界に身を投じたはいいが、あまりにも早く、無情に時間は約三分。あまりにも早く、無笑うかのように、千円札は塵となって消えたのだ。



その後、お店の小又さんにお話を伺うことが出来た。そもそもこのお店はパーラー三宅阿古店という名で、坪田地区にも系列店があるそうだ。それと異なる系列店が神着地区にもあり、三宅島にはパチンコ屋が計三つ営業していることが分かった。

噴火前からお店自体はあり、噴火後も営業を続けてかれこれもう十年近くになる。来店者の八割は三宅在住の方で、ほとんどが常連さん。後の二割は土建屋さんや漁師さん、役場の方などで占められているらしい。表の看板の「レバーを少しひねっていれば大丈夫」など憎越ながら手ほどきを頂き、初歩を踏み出した。それ以降、球が目の前で飛び跳ねるように暴れ回った。チャンスのエリアにいくつか球が入る。画面が目まぐるしく変化し、当たりの予感を匂わせる。けれども高鳴る胸とは裏腹に、どれも外れとなった。気付けば手持ちの球はなくなっていた。プレりにも行き詰まったため、店員さんに以前台風で飛ばされてしまったがそのままにしてあるとのこと。それでもこのお店を知らない人はいないので、無機質な色だった壁をオレンジ色に塗り替える対応のみにとどめたそうだ。

一つの経験を得、一つの疑問が解消された店を出る。お金は減ったが、なんだか得した気分だ。店を出て振り返る壁の色は、鮮やかさを纏っていた。

(深澤 匠)

ふたりのお店

つるりとした小さな貝、トゲトゲとした大きな貝、ショーウインドウの中には世界中の様々な貝が並んでいる。ここは阿古にある三宅島で唯一の貝の専門店「貝の店　やまだ」である。店に入ると笑顔が優しい店主の山田尉公子(いくこ)さんが出迎えてくれた。

この店は、もともと尉公子さんのご主人が開いたものだ。歴史は長く、昭和三八年から島で貝の販売をしている。かつては伊ヶ谷で店を営んでおり、いまの場所に移ったのは昭和六三年の末だという。噴火の前は、島内にも貝を取り扱う店が何軒かあり、それらの店や、伊豆七島全域に貝を卸していたとのことだ。

三宅島の浜には多くの貝が打ち上がる。とくに寒波の日などは、普段潜っても見えないところの貝が出てくることもあるらしい。ご主人はとても貝が好きな方で、そうやって浜に打ち上がった貝を拾い集めることが趣味だったそうだ。そのうち自分一人では保管しきれなくなってしまい、貝好きの人に紹介したところ、売ってくれと頼まれるようになった。現金の入った封筒が送られてきて、売ってほしいと頼まれたこともあったそうだ。そうして店をはじめることになったのである。趣味が転じて商売になったのだ。

十年ほど前にご主人が亡くなってからは、残ったたくさんの貝を引き継いだ尉公子さんがお店を切り盛りしている。貝のことについては詳しくないと語る尉公子さんだが、アクセサリー類は全て彼女の手作りなのだそうだ。商品は手頃な価格に設定されており、数百円から購入できるため、三宅島のお土産にももってこいだ。



おすすめの商品を伺うと、尉公子さんは柘でつくったイルカのストラップを差し出した。てっきり貝に関連した商品を案内されるのだろうと思っていた私はすこし驚いた。聞いてみると、このストラップはご主人が生前つくってあったイルカのパーツに、尉公子さんが編んだ紐をつけたものなのだそう。尉公子さんとご主人の想いのこもった商品なのである。

そのストラップを買って店を後にした。ご主人の想いを継いでお店に立つ尉公子さんの姿が、このストラップに表れているように感じた。

(齊藤 崇)

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。
三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

詣でるための小道

三宅島一周道路沿いを歩いていると白い鳥居と木々に囲まれた小道があらわれる。これが火戸寄（ほどり）神社の入り口だ。一周道路沿いには神社が数多く存在しているが、その中でも火戸寄神社の佇まいは特別に印象深いものであった。鳥居の脇にある案内板を見ると、この神社には剣を創造した神である迦具突智神（かくつちのかみ）が祀られていることがわかる。迦具突智神に関しては、姫を追って錆ヶ浜にやってきた大蛇を退治するための剣を作ったという神話もあるのだという。

鬱蒼と立ち並ぶ木々に誘われるようにその参道に足を踏み入れ、しばらく進んでみるが、その奥にあるだろうお社の姿などは一向に見えない。まるでトトロの森への入り口のように、このままずっと続いていくのではないかというような気もしてくる。

しばらくすると参道は一度途切れ、団地が現れるが、道はまだまだ奥に続いている。ふたたび足を踏み入れた参道では、歩を進めるにつれて傾斜もきつくなり、道も細かくうねりだす。自然と、一歩一歩を踏みしめる足への集中力が増す。



そんな参道の終わりは、賽銭箱も置いておらず小さなお社がひとつあるだけのこじんまりとしたものだった。しかし、森閑とした雰囲気やほどよい疲労感からか、とても神妙な心持ちで二礼二拍一礼をすることができた。「詣でる」や「参拝」などの神社に関する言葉の多くに「行く」という意味が含まれていることからも言えるように、神社という場所はそこに至るまでのプロセスに大きな意味が込められているのだということを実感した経験だった。

（郡司　斐）



じんわり

創刊号を発行した二〇一一年六月十九日から約二年七ヶ月。三宅島大学から発行される、三宅島の「あした」について語るこの『あしたばん』は、これで四八号を迎える。創刊号から本号まで続けていて、このかわらばんはどれだけ読んでいただくことができるようになったのだろうか。毎度『あしたばん』を設置していただいている商店や民宿に、最新号をお届けしつつお話を伺った。

設置はしているものの、あまり頻繁には読まないという方がいる一方、「わたしは好きなので読んでいますよ」とそう答えてくれる方もいた。「いつも隅から隅まで読ませていただいています」。そう答えてくれたのは、とある民宿の女将さん。彼女は、こう続けた。

――三宅島大学のみなさんのおかげで、いい三宅島のPRができているのかなと思う。ここぽーと（阿古船客待合所）の二階で展示されていたポスターもすごくよかった。あなたがたのこういった活動は、三宅の大きな力になっていると思う。

三宅島大学開校から三年、ずっと続けてきたこの活動から、じんわりと成果が目に見えるかたちであらわれはじめたのかもしれない。ひとりでもこういったことを思ってくれているのであれば、わたしたちの活動は価値があると確信することができる。

――本当に感謝です。

感謝するべきは、こちらのほうである。わたしたちを受け入れ、理解して応援してくれる方がいなければ、ここまで続けることはできなかったかもしれない。これからも『あしたばん』を通して、三宅島の「あした」を語るひとがじんわりと増えていくことを願う。



わたしたちの活動は、ひととの「つながり」で成り立っている。目に見えない「つながり」から目に見える成果を生み出すには、長い時間をかけて、ゆっくり、じっくりやらなければならない。今回頂いた女将さんからのことばは、それだけ大切なものなのである。

（青山大毅）

漁船に詰まった宝物

強い風と高い波で海岸の漁船がゆらゆらと揺れる。錆ヶ浜港に並ぶたくさんの漁船は、一見その風景に溶け込んでいるように見えて、実は特別な何かが凝縮している。それは、船に対する漁師の思い入れや、代々受け継いできたという事実、荒波にもまれた日を共にした漁師と船との絆だったりするのだろう。

おととい、漁師の山田順一さんのポスター取材に同行した私は、海岸に泊っている漁船に乗せていただいた。漁業という職種と関わりがないと、漁船をそこにある風景の一部としか捉えず、漁船そのものとして見ることがあまりない。しかし、ひとたびそれに注目してみると、その魅力にすぐに引き込まれた。船を操作するハンドルや潜る漁師に酸素を送る機械など、漁師の方にとっては普通のものも、私たちにとっては新鮮なものばかりだ。それに加え、漁船一つ一つに名前が付けられている。山田さんの漁船は、父親の名前を継いで「英丸」。そこには父親との絆と船への愛着があり、素敵なあたたかさがあった。

漁師になる決意を持たずとも、ただ漁師の素敵さを感じるために、今一度漁船を見てみてほしい。漁船に詰まった宝物が、より多くの人にあたたかさを届けますように。

（中島彩也香）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん
2014年
（平成26年）
3月8日
土曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十九号

ここにいなきゃ

三宅島の歴史に導かれて

三宅島の北部にある神着地区。ここに『島役所跡』と呼ばれる木造の建物が、大きな木に沿うように佇んでいる。車で走っているとうっかり見過ごしてしまいそうなほど、静かで厳かな雰囲気のある場所だ。建てられた時期は江戸時代後期と推定され、現存している木造建築の中では伊豆諸島で最古最大の規模を誇り、島内唯一の茅葺家屋でもある。島役所跡は三宅島の在地支配も行っていた壬生氏の屋敷であり、その名の通り役所として使われていたらしい。私たちは壬生家現当主の壬生明彦さんに、お話を伺うことができた。

壬生氏は、もともと島内の神社を統括する神官を担っている一族だ。「僕で六十代くらいかな。詳しいことは本を読んでね、間違ったこと言っていたら怖いし」と笑いながら語ってくれた。毎年夏に行われるお祭りの時期には、壬生さんは大忙しになる。阿古にある富賀神社からスタートし、伊ヶ谷、伊豆、神着、坪田と五ヶ村を一泊ずつ六日間かけて歩き、神輿を受け渡していくという恒例のイベントがあるからだ。「大変だったんだよ。」と、本音もぽろっとこぼれた。



過去には三宅島郵便局の局長を務めていた時代もあった。この島役所跡がかつては郵便局だったのだ。その後近くに場所を移したが、三宅島郵便局の消印スタンプは今もこの役所跡の外観がモチーフとなっている。その後伊豆、伊ヶ谷、阿古、坪田と五ヶ村全てに郵便局は設置され今もなお残っている。今は三宅島を一周する道路もきちんと整備されているため、車さえあれば五つの郵便局間のアクセスは比較的容易だ。しかし、車などなかった時代に島全体へと郵便物を届けるには、郵便局が一局だけでは難しかったのだろうと壬生さんは語った。

お話を伺う間「いいカメラ持ってるじゃん。」と目を輝かせながら、私たちが持っているカメラを指差した壬生さん。小さい頃から写真を撮るのが好きで、今では一眼レフで撮った写真をパソコンに取り込むこともお手のものだそうだ。腕前も相当で、フォトコンテストで入賞するほど。変化していく三宅島を、宮司と郵便局長という複数の視点から長い間見守り続けてきた。そんな壬生さんが切り取る光景を、是非見てみたいと思った。

（堀越千晴）

島人の見る島

「どこの島ですか？」「三宅島です。」「三宅島ですか、ぼく、三宅島出身なんです。」僕たちは三宅島に向かう船の中で、ある一人の青年と出会った。ちょっと待ってて下さい、と船内の階段を駆け下りて島の地図を持って来ては、あれこれと三宅島について熱く語ってくれた。彼は三宅島坪田地区出身の大学三年生。帰省のため船に乗っているのだという。

「あまり有名な場所ではなくて、知る人ぞ知るここは凄いぞって場所を教えて下さい。」大路池や七島展望台などの観光スポットを紹介してくれた彼にそんな要望をぶつけると、目をキラキラさせながら僕たちの知らない三宅島について語り出した。

三宅島を一周する道路の脇にある阿古地区を一望出来る絶景スポットや、伊豆の先にある大久保浜の風景、昭和十五年の噴火で出来たひょうたん山、昭和三十七年の噴火で出来た三七山などの三池地区の噴火跡を一望できる火の山峠は知る人ぞ知る絶景スポットだ。聞けば、山の中腹を一周する道路は、雄山が鉢巻きを巻いているように見えることから、鉢巻き道路と呼ばれているらしい。

今回の滞在では、もっと三宅島を歩こう。彼から聞いた話には、僕たちにそう思わせる力があった。これまでに十回近く渡航してきた三宅島大学のメンバーも、聞いたこともない場所・知らないことばかりだったのだ。

三宅島で生活している人が僕たちよりも島に詳しいことは当然のことである。しかし、例え二年半に渡ってこの島に通い続けても、地元の人には見えていてまだ僕たちには見えてこない、そんな島の姿には何かとても惹かれるものがあった。きっと、三宅島で僕らが何気なく通り過ぎていく脇道のその先には、未だ見ぬ島の表情や新しい発見が、これでもかというくらい眠っているのだろう。

「こうやって三宅に来てくれる人がいるのが嬉しいんです。」そう言う彼のふるさとを愛してやまない姿はこちらも思わず笑みがこぼれてしまう程の微笑ましいものだった。そして、「島で見かけたら声かけてもいいですか？」と聞かれると、またもう一人三宅島に知り合いが増えたようで嬉しくて「お願いします！」と即答せずにはいられなかった。

実は彼の実家は三宅島で割烹を営んでいるらしい。せっかくの巡り合わせだ、「あのときはどうも。」と割烹の暖簾をくぐってみたいと思った。

（秋庭大志郎）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

森づくり 島づくり

島一周道路を時計回りに散歩していると、ふと『森林組合』の文字が目に入った。海のイメージが強い三宅島にも森林組合はあるのだなという第一印象だった。興味の赴くまま、玄関をノックする。三年前に「村のために何かしたい。」との想いで三宅島にUターンしたという事務局長の加藤守さんは、快く取材に応じて下さった。

まるで墓標のように山に点在する立ち枯れの白い木々は元々、スダジイなどの広葉樹が生い茂った森だったそうだ。スギが群生していた箇所もあり、その手入れ・管理をし、木材として売ることを生業としていたが、二〇〇〇年の噴火で火山ガスが大量に噴出し、木々は枯れ、継続は断念せざるを得なかった。

以降は、荒れた土地に植林して昔のような森に戻す緑化事業に力を入れている。まっさらな地に八丈スキという背丈の高い品種を植え土地をならし、それを刈ってタブ、スダジイの苗を植えるという手法をとっているとのこと。苗は、まだまだ働き手の六十代前後の人に育ててもらうことで、少子高齢化が進み雇用も少ない三宅島の雇用促進を図っている。

「ただ木を植えるだけでなく、島全体で考えている。」と語る加藤さんは、数十年単位の時間がかかる『森づくり』から、三宅島の『島づくり』までを、長い目でゆっくりと見出そうとしているのだと思った。

（深澤　匠）





帰って来れる故郷

二〇一一年九月から始まった三宅島大学プロジェクトが今年で満期を迎え、閉校することとなった。今回私は、当初から三宅島大学のリサーチャーとして参加している吉田あんなさんに、三宅島大学との思い出を振り返るインタビューを行った。

彼女にとって、三宅島大学の一環であるキッズリサーチプロジェクトは、とても印象に残る体験だった。大学を寺子屋として開放する代わりに、子どもたちに島について教えてもらうというプロジェクトだ。初日の集まりはあまりよくなかったが、口コミ、親や子ども同士の強い繋がりのおかげで、徐々ににぎわいが増していった。このプロジェクトを始めてから、子どもが好きになったという。はじめは子どもとどう接すればよいか分からなかったが、一緒に無邪気に走り回り、名前を覚え合い、全力で仲良くしているうちに自然と友達になっていた。子どもたちにカメラを渡せば、大人の想像力を超える写真を撮る。子どもたちの自由な発想から、私たちは学ぶことが沢山あり、彼らの素直な反応や姿に彼女は魅力を感じたと言う。

「三宅島はいつでも帰って来れる、ふるさとの様な場所になった。」と語ってくれた。「三宅島大学がなければ三宅島との縁はなかっただろうし、キッズリサーチがなければ島の子どもたちと関わることはできなかったと思う。」

静かに思い出を語る彼女からは、しばらくのあいだ島を離れる寂しさと共に、またここへ戻ってくるという強い思いを感じた。

（白羽祖仁亜）



郵便局巡り

颯爽と走る赤い車。郵便局の集配車は、島の人たちに郵便物を届けるため島中を駆け周っている。郵便局は島に五つあり、それぞれ違う消印がある。その消印を集めて周る人がいるとの情報を得た私は、彼らのように消印を集めながら、郵便局員さんにお話を聞いて周る旅に出た。

まずは、三宅島大学から一番近い阿古郵便局。次は伊ヶ谷郵便局へと向かった。驚くことにここで働いていたのは、三宅島大学初の卒業生・田中耕介さんのお兄さん。彼に、『三宅島・御蔵島風景印島めぐり』という消印を集めるためのシートを頂き、坪田、三宅島、伊豆郵便局へ。三宅島郵便局員の前田昇一さんにお話を伺った。このシートが作られたのは噴火前で、三宅島PRの為に内地の郵便局で切手と共に一週間限定で販売されていたものだ。今では伊豆と伊ヶ谷の郵便局にしか残っておらず、噴火前の地形が分かる貴重な資料でもある。

郵便局巡りをして感じたのは、島の人たちとの新しい出会いと繋がり、そして温かさだ。

島の標識や看板、建物や置き物。細部に注目すると、新しい視点で島を見ることが出来た。そして私たちの活動が広がるにつれ、どんどん関係性が繋がっていくことに喜びを感じる。今回の旅で出会った方々はとても温かく、丁寧にまちや歴史、人を紹介してくださった。ぜひ皆さんにも、この体験をして欲しい。島の人たちにとって身近な郵便局を巡ることは、島の生活に近づく一歩だったのかも知れない。

（細井美香）

三宅島大学 卒業式・閉校式

日時　3月9日(日) 9:00-11:00
場所　三宅島大学本校舎（御蔵島会館）

三宅島大学の第二期生卒業式および閉校式を開催いたします。三宅島大学の最後の行事となります。多くの方のご参加、お待ちしております。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2014年
(平成26年)
3月9日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第五十号

文字が語る、私たちの見てきた姿。

「地球って本当にまるいんだな」

錆ヶ浜で思わずそう声に出した私は、まだ十九歳だった。初めて三宅島に上陸した時の印象は「雄大な自然と人々の支え合い」だ。当初は個人的に東日本大震災後の学びとしての意味合いを強く持っていたため、力強い姿というものばかりに着目していた事も影響していたのだろう。

開校式から本格的に私達の企画する授業も始まり、女将さんのポスターやキッズリサーチなどを通して次第に三宅島大学の認知度は高まっていった。その活動風景を記録し続けていたものが、この「あしたばん」である。江戸時代、時事性の高い出来事をより速く伝える手段として使われていた瓦版に習い、三宅島の今を伝えてきたあしたばん。富賀神社の祭典では共に御神輿を担いだり、クリスマス会ではアカコッコに成りきって賞まで頂いたりしたことなど、今迄に色々なことを記事にしてきた。また、大きなイベント事だけではなく、旧小学校で偶然彦坂さんと出会い、彼女に教わった明日葉レシピを再現したり、三宅島大学のメンバーとの共同生活についても綴ってきたりした。

そう、何かが起こるから行くのではなく、何かを見つけるために私達は動いていた。映画のようなドラマティックな展開は必ずしも約束されていない。しかし、暮らしに溢れる小さな発見や、あなたとのひとつひとつの関わりに私達が綴り続けて来た意味があるのだ。

普段は内地で島での生活とはかけ離れた暮らしをしている私達にとって、島で出会うもの全てが目新しく輝いてみえていた。まちを私達の目線で切り取り、記録として残す事を目的に文字を書き続けてきたこの活動で、特に印象的な事は商店での出会いである。あしたばんは発行直後に島内の旅館、飲食店、役場など様々な場所に配達させて頂くのだが、その中でも配達先の多くを占めるのが商店である。まちのあちこちのレジ横にはあしたばんが置いてあるのだ。配達時には直接「楽しみにしているよ」と読者の方からの声も頂いていた。手に取るメディアであるからこそ、手で渡すことに喜びを感じていたのだ。

今回あしたばんは記念すべき第五十号を迎えた。これは、私達の拙い取材を真摯に受けて下さった方、配達・設置を快く引き受けて下さった方々、そしてこのメディアを楽しみにして下さる読者の皆様によって成し遂げられた奇蹟である。

瞬間を文字に、目に見える形に、記録し続けたこのあしたばんは一先ず一区切りを迎える。

伝達としてのメディアが皆様の繋がりをより明るく、強くしていたことを夢に、感謝と希望を持って御礼申し上げます。ありがとうございました。

（吉田あんな）



イルカと自然な距離感で

商店に飾られている五枚のイルカの写真。海の中をのびのびと泳ぎ回る、イルカたちの色々な表情が収められていた。店の主人に聞けば、撮っている方はイルカのために三宅島へわざわざ移住して来たのだという。イルカへの愛情と、その情熱が写真からまっすぐと伝わってきた。三宅島で写真を撮り続けてもう十年近くなるという、高橋基道さんに今回お話を伺うことができた。



島に移り住んだのは六年前。イルカとの出会いは、それから更に二年ほど前だったという。友人とツーリングをしている時に偶然立ち寄った下田海中水族館で、イルカと泳げるプログラムの存在を知り、一度泳いだら楽しくなったのがきっかけで水族館に通い始めたのだそうだ。写真を撮り出したのもその時からで、初めは『潜るんです』という使い捨ての水中カメラ。今の写真もその延長線上で、泳いだ当初から「撮る」ということに関心があったのだという。

その水族館の繋がりで、野生のイルカへ会いに三宅島や御蔵島に通い出したのだそうだ。時には仕事の休みを一、二週間取って行き来していたものの天気が悪い日が続くと、海に光が差し込まず、せっかく来ても良い写真が撮れなかった。最高の瞬間に出会う為には何度も足を運ぶしかないと思い、移住を決める直前には三週間連続日帰りで島と内地を往復する生活をしていたのだそうだ。朝に船で島に着き、午前中イルカと泳いで、昼過ぎの船で帰る。それを繰り返した末に、その行き来が面倒くさくなってしまった。これが島に住む始まりだったという。

イルカを撮るときは、相手との距離感を大切にしていると言った。彼らは人と同じように、意識をしっかり持って生きていると思っているから、その撮り方も常に考えるという。相手の領域に入るとき、人と信頼を築いていくのと同じように、距離を少し置いて写真を撮る。すると、彼らから近づいてくるタイミングがあるのだそうだ。

イルカの写真を撮ることにとどまらず、イルカの生態を知ろうとすることで、より深みが増すという高橋さん。「なかなか面白いよ。」という言葉を節々で口にしていた。お話を通して、ひたむきな姿勢で自然と対峙しようとするからこそ、イルカとのたしかな繋がりを感じる写真を撮れるのだろうと感じることができた。

（龍山千里）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

二人目の卒業生

今日、三年間続いた三宅島大学が閉校する。そして同時に、二人目の卒業生が誕生する。笹井美由紀さん。二〇一二年四月に内地から赴任してきた保健師だ。

彼女が三宅島に来ることになったのは、二年間のローテーションで三宅島に赴任するという保健所のシステムがあったためだ。「これは復興支援なのだ」という説明を受け、三宅島を盛り立てることが自分の仕事であると思ってやって来た。三宅島の面白いところを肌で感じるために、参加できるイベントには全部参加して楽しまなければ、と思っていたそうだ。島に移る前から、三宅島大学のことも全力で応援すると決めていた。

そんな笹井さんだが、三宅島大学の卒業制作をすることに対してはあまり乗り気ではなかった。笹井さんの周りの人はやることを勧めてきたが、笹井さん自身は、三月に引っ越しが重なることが分かっていたため、同時期に卒業制作も作るのは無理だと考えていたのだ。しかし、「完成させなくてもいい」「一人でやらなくてもいい」という加藤教授の言葉を始め、たくさんの人に後押しされ、「もしかしたら楽しくできるのかもしれない」という思いが強まっていった。

彼女は自身の卒業制作を、「島民の生の生活を切り取ったもの」だと語る。それは、ガイドブックには載らないような、島民一人一人の生き方を発信できれば、という思いを形にしたものだった。笹井さんが赴任当初仲良くなった女友達や三宅島大学マネージャーの上地さんなど、みんなの力で作り上げた卒業制作は、彼女にとってかけがえのないものとなったに違いない。

取材中、何度も「楽しく」という言葉を口にしていた笹井さん。それは、三宅島を盛り立てるという思いを最後まで忘れずにいた何よりの証拠ではないか。二年間の赴任期間が終わり、今月末には内地へ戻る。それでも、笹井さんと島とのつながりが切れることはないだろう。

（中島彩也香）



別れの身支度

三宅島大学の閉校式前最後の行事、「大掃除」が御蔵島会館にて行われた。十二時を知らせる島内放送と共に掃除はスタート、まずは窓を開け放つところから。暖房で暖まった部屋にスッと冷たい空気が入る。空は青く、掃除日和。深く息を吸い込むと爽やかな気分になった。

会館には三宅島大学の軌跡がぎゅっと詰まっていた。窓いっぱいに描かれた落書きからは子どもたちと過ごした夏を、魚のオブジェからはインタビューをした方との楽しい時間が想起された。そういった思い出ともいえるものを片付けてしまうことはとても残念ではあったが、少しずつ綺麗になるごとに、まるで別れの身支度をしているようで、雑巾を握る手にも自然と力が入った。お風呂にこびりついた汚れも、会館の歴史を示している気がして、どこか感慨深かった。

一方、掃除と並行して、本日行われる卒業式・閉校式の準備が進んでいた。部屋の中や廊下には次々とポスターやメッセージが掲げられていたが、一つ一つの作品もずらりと並ぶと迫力が違う。端から順に見て歩くと、少しずつ構築されてきた島と大学の関係性が垣間見えると同時に、この三宅島大学のプロジェクトに少しでも携わることができたことを素直に嬉しく思えた。今日はとうとう最後の行事、きっと素敵な光景が見られることだろう。私たちもいよいよ、けじめをつける時がやってきた。最後の最後まで心を込めて、感謝の気持ちを持って島での時間を過ごしていこう。

（枡野友香）



三宅の徒路

今年が二回目という三宅小学校六年生の学年行事『三宅島一周ウォーキング』。六年生の児童の弟妹やお母さん、学校の先生とその子どもたちも参加し、みんなで歩いて都道を一周した。

子どもたちや先生のおしゃべりが聞こえてくる。「校長先生、『る』です！」列の前の方では、男の子と校長先生がしりとりをしているらしい。担任の先生だけでなく、校長先生までもが生徒と親しげに会話をする様子は、三宅小学校の、そして三宅島に住む人みんなの距離の近さを象徴しているようだった。

長かった小学校への道のりも、子どもたちと励ましあって歩いているうちに、終わりに近づいてきた。校舎に続く坂の下で、先生が横断幕とゴールテープをもってみんなを待っている。その姿を見ると、疲れているはずなのに小走りで坂を下りはじめる子もいた。

最後の一人がゴールテープを切ると、自然と拍手が沸き起こる。ちょっと疲れた顔色も見えるけれど、それ以上に「やりきった」という達成感と「みんなでゴールした」という興奮に満ちた雰囲気が、みんなの顔を輝かせていた。

子どもたちと一緒に歩ききった先生、車を出してみんなをサポートして下さったお母さん方、道端から声援を送ってくれる近所の方など、多くの人の力で『三宅島一周ウォーキング』は成功を収めた。でも一番頑張ったのは、きっと、最後まで歩ききった子どもたちだ。

おしゃべりをしながら、いつもの道を歩く。当たり前の出来事も、今日に限っては特別な思い出となったかもしれない。がんばって島を一周したおかげで、今日の記憶がより印象的なものになり、みんなの思い出として彼らの心に刻まれたのではないだろうか。数年後、もしくは何十年後、彼らが『三宅島一周ウォーキング』のことを思い返すその日が楽しみだ。

（山田晴香）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん

2014年
(平成26年)
3月10日
月曜日
あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
号外

あしたがアルさ！

三宅島大学の校舎に校旗が掲げられた。あちらこちらで「おはようございます」と挨拶が交わされ、たちまち大学の玄関は靴でいっぱいになった。二〇一四年三月九日、三宅島大学の卒業式・閉校式が執り行われた。

「楽しく受講していたら、気付いたら単位がたまっていた」そう語るのは三宅島大学の記念すべき二人目の卒業生となった笹井美由紀さんだ。笹井さんは自身がそうであったように数年のスパンで島に滞在する人が、島に関して知ることができる環境が整っていないことに注目し、島に訪れる人が島の生活についてもっと知るための本、『Our Diary』を制作した。「みんなで作業するのがこんなにも楽しいのかと感じた」というように、女子会メンバーの協力などもあり今回卒業制作を完成させるに至った。

そして、三月九日をもって三宅島大学はひとまず休校となる。三年前、僕たちにとってこの島は縁も身寄りも無い土地だったが、いまでは名前を覚えてもらえるようになり、挨拶をしてくれ、久しぶり、と会話を交わせる人たちがたくさんできた。

「三宅島大学って最初はなにをしたいのかよくわからなかった」と島民の方は言った。それでも、いま「三宅島大学が僕たちにしてくれたことを、これからは自分が出来るようになりたい」「今度は自分が三宅島の良さを伝えていける発信者になりたい」といった言葉を聞き、三年間の活動を通して少しずつ、しかし確実に築き上げて来たものがここにはあったのだということを再確認出来た。ここは、人が出会い、想いが生まれ、三宅島の未来を語り合う、そんな場所だったのだと思う。

ある島民の方は三宅島の魅力を世界中に発信するためのラジオを始めようとしているんだとか。このラジオが放送されるなら少しばかり離れていたって問題は無い、なんたって僕たちの暮らす内地と三宅島はたかだか一八〇キロ程しか離れていないのだから。三宅島大学は島全体を大学に見立てたものだ。これは詰まる所、大学の校舎が無くなっても、そこに島があり、そこで島の人々が生活している限り大学が無くなることは決して無いということである。誰かが「三宅島大学は既に私たちの中にある」と語ったように、三宅島大学は私たちの想いの中で生き続けるのだ。

いつの日か、ラジオのチャンネルを合わせればイヤホンの先から三宅島の声が聴けるようになることを夢見て、また次の再会へ向けて想いを膨らますことにしよう。あしたがアルさ！

（秋庭大志郎）



寄り添って

初めて三宅島に来たとき、私は外へ出る際に地図と『あしたばん』を必ず持って出かけていて、いつも少し緊張していたことを今でもよく覚えている。どこに何があるのか、三宅島そのものについてもよくわからないなかで、三宅島大学のこと、そもそも島の外から来た自分自身は何者なのかを説明し、出会う人、たどり着いた商店などに『あしたばん』を配りながら島の中を歩き回っていた。それはまだ誰も三宅島大学のことを知らないのが当たり前だった、二〇一一年の六月のことだった。

知ってもらうというのは、想像よりもずっと難しくて、ただ情報の量が多ければいいというわけではない。三宅島大学は島民の方々の協力があって、皆で築き上げていくものだから、その間をつなぐきっかけとなる、メディアとしての『あしたばん』は、お互いの顔が見えるくらいの距離感を必要としている。自分たちの手で作ったものを必ず直接届けにいく。時間をかけてそれを繰り返し、私たちの行動範囲が広がるにつれて、『あしたばん』を置いてくださる商店や施設が少しずつ増えていった。人の目につきやすいようにと、レジの近くに置いてくださるなど、たくさんのご協力をいただいた。

今日の閉校式で、三宅島大学を知ったのは『あしたばん』を読んだことがきっかけだったと、ある参加者の方の言葉にうれしさで胸がいっぱいになった。イベントや講座に比べて、『あしたばん』は、その場で直接反応を受け取れることが少ないこともあり、どのくらいの人の手に渡り、読んでもらえているのかなど、手ごたえや効果を得るには時間がかかる。けれども、続けていれば必ず成果が出てくると信じて、三宅島に訪れた際は必ず記事を書いてきたことをふと思い出した。「いつも読んでいますよ」の一言にどれだけ励まされ、力をもらったことか。

三宅島大学とともに『あしたばん』も寄り添いながら歩んできた。ここまで続けてこられたのは、いつも手にとってくださる皆さんがいたこと、そしてバトンを引き継ぎ、つないでくれた後輩たちがいたからだと思う。三年分の成長を実感でき、とてもうれしく思います。ありがとうございました。

（森部綾子）



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

いつも

二〇一四年三月九日。「三宅島大学」の卒業式・閉校式がおこなわれた。穏やかな雰囲気のなか、式は卒業証書の授与まですすみ、参列していたひとり一人が、ひと言ずつ「三宅島大学」について語ることになった。

「ようやくここまで来たのに、もったいない」「ちがう形で、これからも続くといい」「この試みがなければ、つながりができなかった」など、閉校を惜しむ声がたくさん聞こえてきた。

プロジェクトの企画段階から携わってきた一人として、これは、喜ばしいことだった。この二年半、ぼくたちは何度も船に乗って島に渡り、「大学」としての仕組みづくりをすすめてきた。だから、惜しまれながら閉校を迎えるのは、きっと本望なのだ。

だが、こうした惜しむ声を反芻しながら、ぼくは、ちょっとした違和感をおぼえた。なぜだか「三宅島大学」が、すでに思い出として語られているように聞こえたからだ。思い出にするには、どう考えても早すぎる。そもそも、三年で消えてしまう「大学」など、聞いたことがない。長い関わりを想定して「三宅島大学」という仕組みを提案したのだ。

御蔵島会館は、ぼくたちの活動とともに息づいて、居心地のいい場所になった。いまでは、近所に暮らす人も気軽に立ち寄ることのできる、誇るべき「本校舎」だ。大切なのは、きょうで閉じられる「本校舎」が、「三宅島大学」のすべてではないということだ。じつは、「三宅島大学」の多くの部分は、ぼくたちのなかにある。ぼくたちが、この二年半の経験を語りさえすれば、「三宅島大学」は、いつも変わることなく存在し続けるだろう。海と森と山をモチーフにした「三大」の旗印は、その原動力なのだ。

（加藤文俊）



二年間

さすがに船で到着したばかりだと眠気があるため明るくなるまで寝ようとするのだが、横になるとさっきまで船で揺られていた感覚が身体に戻ってくる。確か、初めて三宅島に来たときもずいぶん揺られた。船旅は、島に流れる時間とじぶんの身体に流れる時間を少しずつ合わせていかなくてはならないことを半ば強制的に思い出させてくれる。

しかし今回の旅では、時間が知らないところで過ぎ去っていたり、いきなり巻き戻ったり、相変わらずだったり…最後まで不思議に時間が流れていった。二年も経てば変わっている風景がまず目に留まる。錆ヶ浜の船着き場には立派な待合所ができていたし、ある商店は素敵なカフェに風貌を変えていた。また、三宅島大学には人が集う校舎が生まれていた。これまでは気付いていなかっただけで、少しずついろんな変化があったのかもしれない。そう感じながら迎えた三宅島大学の閉校式で、今度は時間が巻き戻った。これまでの『あしたばん』や『島の女将さんのポスター』でインタビューをした方々にお会いして話をすると、懐かしい気持ちや苦労した記憶がふつふつとよみがえってきたのだ。「二年ぶりですね。」なんて最後に訪れたときをぴったりと覚えていて声をかけてもらったら、一気に当時まで時間が巻き戻った。

三宅島大学二人目の卒業生は、仕事で島に二年間滞在し、この三月に島を離れるということだった。なるほど、島にはあらかじめ決められた期間を過ごして離れていく人が一定数いることを知った。そういった人たちを迎える三宅島民にとっては、三宅島大学の姿をもう少し見ていたかった。

二十年に一度の噴火を経験してきた三宅島。思い返せば、この大きなサイクルがあることを初めての三宅島で知った。そして訪れる回数を重ねるにつれ、どんなに短い滞在でも、島を離れる最後のその瞬間まで、一緒に過ごす時間を大事にしてくれることを知った。雄大に流れる時間と、流れゆく時間を惜しむ気持ち。三宅島に流れる様々な時間とその受容のしかた。改めてそれに気付かせ教えてくれたのは、三宅島を離れていた二年間なのかもしれない。

（飯田達彦）

変わる努力

三宅島大学がこれで一区切りついてしまうことを、ありがたいことにも島の人からの言葉で実感した。三宅島に訪れた当初からお世話になった女将さんにお会いして、これまでの私たちの活動、これからの島について改めて考える機会をいただいた。

やまのべ旅館にご飯を食べに行った時、女将さんは自家製の明日葉のケーキを出してくださった。粉は使わず、直接摘んできた明日葉を絞って作っているのだそうだ。色味はやさしい緑で、ほのかに明日葉の香りがあった。茎の部分も砂糖漬けにして、明日葉をまるごと美味しく味わえる。「せっかく三宅に来ても、帰る時にお土産がないと寂しいと思って。」女将業の傍ら、空いた時間で作っては港のお土産コーナーに並べているという。たくさん作ることはできないけど、その手間ひまを掛けた作業がやさしい味となって表れていた。



お客さんの立場に立って思うことを、自分ができることから実践してみる。働きながら、常に変わっていこうとするエネルギーはまちがいなく島の魅力だ。個人でできることは限られるが、その思いを一人一人が持って行動することで新しい風は吹く。私も三宅島、ひいては自分たちの環境がどう在り続けられるかをいつも考えながら動いていかなければならないと実感した。

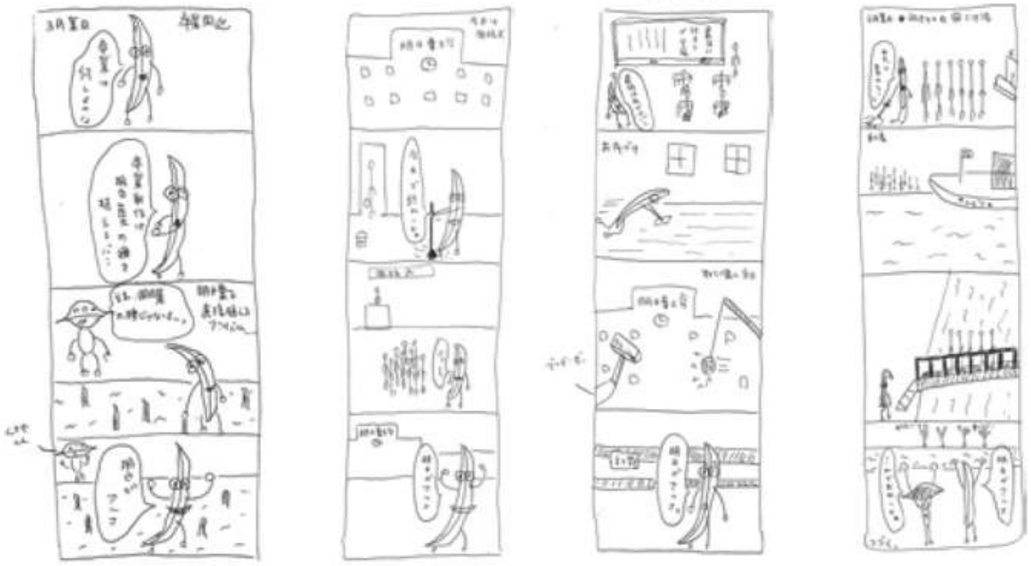
二年半、少しずつではあるがお互いの信頼を深めて行けるスタートにようやく立てたように思うと、女将さんは言った。「どうか繋がっていてほしい。」という言葉には、これまで自分たちが島に通ってきたことの意味、これからどうしていくべきかということが全て詰まっているように思え、強く胸に残った。

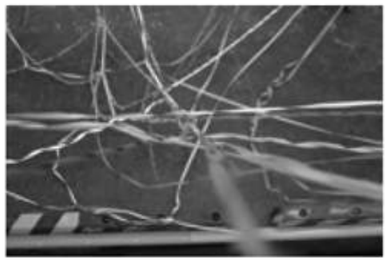
（龍山千里）

絵・テポー

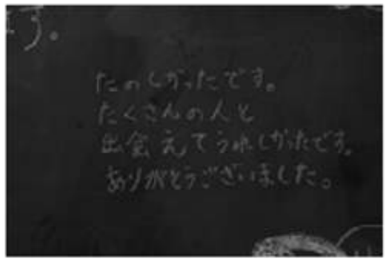
あしたばくん

VOL.12~15



















『あしたばん』一面記事一覧

【創刊号】	2011年6月19日（日）	始動、三宅島大学！　初めての三宅島、新たな出会いを求めて
【第2号】	2011年6月19日（日）	ぐるり一周　三宅島大学プロジェクトチーム リサーチ開始！
【第3号】	2011年6月20日（月）	水中スケッチ大会行われる　伊ヶ谷浜で水遊びをする子供たち
【第4号】	2011年6月21日（火）	二時間／三年間にかける思い〜三宅高校ナインが挑む夏
【号外】	2011年6月21日（火）	あしたばん制作の裏側に迫る
【第5号】	2011年6月22日（水）	たくさんのありがとうを　―三宅島での五日間―
【第6号】	2011年7月18日（月）	お待たせしました！『あしたばん』
【第7号】	2011年7月25日（月）	まだ見ぬ三宅島を想う「ロック〜わんこの島〜」
【号外】	2011年8月1日（月）	『KAITEKIのかたちとは―「KAITEKIのかたち」展〜アートと技術の化学反応〜』
【第8号】	2011年8月8日（月）	富賀神社大祭、始まる
【第9号】	2011年8月15日（月）	富賀神社大祭での各地区の受け渡し　最終日までを完全レポート！
【第10号】	2011年8月22日（月）	三宅島大学、開校日決定！！
【号外】	2011年8月26日（金）	島内ぐるり民宿めぐり　三宅島大学開校に向け、授業準備進む
【第11号】	2011年8月29日（月）	火の山からの挑戦状　トライアスロン開催！
【第12号】	2011年9月19日（月）	いよいよ、三宅島大学開校！　―みんなで、大学に入学しよう―
【第13号】	2011年9月21日（水）	"いま"が響き続けるように
【第14号】	2011年9月22日（木）	キックオフのあとで、考えた。
【第15号】	2011年9月26日（月）	ポスター完成！　〜ご協力ありがとうございました〜
【号外】	2011年9月26日（月）	東京都に実家ができました。
【第16号】	2011年11月14日（月）	応援旗にこめられた想い　三宅島大学講座「応援学：応援旗をつくろう」
【第17号】	2011年11月28日（月）	三宅島大学、十二月講座　―講師より予告―
【第18号】	2011年12月2日（金）	ポスター完成！！『ポスターをつくろう』講座
【第19号】	2011年12月5日（月）	甘い香りと笑い声につつまれて　〜三宅島クッキーをつくろう！〜
【第20号特別号】	2012年1月31日（火）	『あしたばんBOOKs』誕生　慶應義塾大学 加藤文俊研究室フィールドワーク展VIII『栞』
【第21号】	2012年3月3日（土）	レディースパワー溢れる！　第二回三宅島レディース・ラン
【第22号】	2012年6月22日（金）	今年もやります、伝えます！　島の魅力「女将さん」に迫る
【第23号】	2012年6月23日（土）	手作り手渡しのかわら版
【第24号】	2012年6月24日（日）	三宅島は「ジャストサイズ」
【第25号】	2012年7月31日（火）	築穴パン屋の『つぶやき便』？！　八月一日より実施
【第26号】	2012年8月9日（木）	三宅島大学を考える手引き　―ガイダンス講座開催―
【第27号】	2012年8月19日（日）	キッズリサーチ始まる！　〜期間限定の「寺子屋」〜
【夏休み特別号】	2012年8月23日（木）	「三宅島のすきなところ」
【第28号】	2012年8月25日（土）	子どもたちの力作揃い　〜発表会を開催〜
【第29号】	2012年9月14日（金）	キッズリサーチ、一日復活！　〜九日間をふり返る〜
【第30号】	2012年9月17日（月）	会話が生まれるポスター作り　〜三宅島ポスタープロジェクト〜
【第31号】	2012年10月2日（火）	そこでやめるな最後まで…　〜三十六人の島人魂！三高祭開催〜
【第32号】	2012年11月3日（土）	女将さんポスター取材完了
【第33号】	2012年11月4日（日）	ゲイジュツの秋　〜のれんで愛着を〜
【女将さん特別号】	2012年11月4日（日）	女将さん大集合！　島には、こんな凛々しさがあります
【ましたばん】	2012年11月4日（日）	あしたばん制作者の素顔　大公開？！
【第34号】	2013年1月25日（金）	想いは強く、そして優しく。「女将さんのポスター展」開催中！
【第35号】	2013年6月21日（金）	人を繋げる「若大将」 新マネージャーの素顔に迫る
【第36号】	2013年6月22日（土）	おかげさまで、三年目。
【第37号】	2013年6月23日（日）	暮らしを映しだす、ポスターを
【第38号】	2013年7月28日（日）	やってきた、夏の風物詩
【第39号】	2013年8月11日（日）	富賀神社大祭、集まる熱気
【第40号】	2013年8月14日（水）	キッズリサーチスタート
【第40号特別号】	2013年8月15日（木）	でこぼこな島？
【第41号】	2013年8月17日（土）	キッズリサーチ　中間ダイジェスト！
【第42号】	2013年11月16日（土）	わたしたちの目に映る島
【第43号】	2013年11月17日（日）	「そらあみ―三宅島―」帰島式　みんなで見上げる三宅島の空
【第44号】	2013年11月18日（月）	卒業式
【第45号】	2013年12月8日（日）	今と昔をつなぐモノ
【第46号】	2013年12月18日（水）	年の瀬に、みんなで
【第47号】	2014年1月11日（土）	「生」と島。
【第48号】	2014年1月12日（日）	三宅のパチンコ「初」体験
【第49号】	2014年3月8日（土）	ここにいなきゃ　三宅島の歴史に導かれて
【第50号】	2014年3月9日（日）	文字が語る、私たちの見てきた姿。
【号外】	2014年3月10日（月）	あしたがアルさ！

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

あしたばん全集

主催　東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、三宅島大学プロジェクト実行委員会、三宅村

企画・監修　加藤文俊（慶應義塾大学環境情報学部教授）
森司（東京アートポイント計画 ディレクター）

編集　慶應義塾大学加藤文俊研究室
吉田武司（三宅島大学プロジェクト実行委員会 事務局）
上地里佳（三宅島大学マネージャー）
大内伸輔（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）
長尾聡子（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）

デザイン　深澤匠（慶應義塾大学総合政策学部三年）

——

記事執筆（50音順・敬称略）　相原瑛里　青山大毅　秋庭大志郎　EAT&ART TARO　飯田達彦　伊藤圭　井上千聖　猪股春香　岩橋文弥　上地里佳　大川朝子　大西未希　小川健太　小竿まゆる　小澤慶輔　尾内志帆　加藤文俊　川村恵理　河村裕次郎　喜多直人　郡司斐　齊藤崇　佐藤悠　佐藤龍ノ介　白羽相仁亜　新飼麻友　神通絵里花　関取花　高木静香　竹下絢　龍山千里　田中優里　鳥羽彩加　仲尾千枝　長岡健　中島彩也香　中田茉夏　長冨将成　根岸明子　橋本匠　原田ふくみ　廣野吉隆　深澤匠　蓬生まり　細井美香　堀越千晴　枡野友香　丸本智也　三島麻里江　水谷晃毅　村上慧　森部綾子　安野太郎　山田晴香　山根賢一　吉田あんな　和田勇人

あしたばん題字　上地里佳

あしたばくん　吉田武司

——

発行・お問い合わせ　平成26年3月
東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒130 - 0026　東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
TEL：03-5638-8800　Fax：03-5638-8811　E-mail：info-ap@bh-project.jp

© 東京文化発信プロジェクト室　© 慶應義塾大学加藤文俊研究室

本書は「東京アートポイント計画」の一環として実施されている「三宅島大学」の慶應義塾大学加藤文俊研究室によるリサーチプログラムの成果物として作成されました。
なお、三宅島大学は平成25年度をもって終了します。本書については、上記お問い合わせ先までご連絡ください。

「三宅島大学」とは
三宅島全体を〈大学〉に見立てて、さまざまな「学び」の場を提供する仕組みです。自然との長い関わりについて考え、私たちの「想う力」を育む場です。学校教育法上で定められた正規の大学ではありませんが、〈大学〉の講座やプログラムを通じて人々が出会い、のびのびと語らう「学び」の場をデザインし、コミュニケーションの誘発を試みるプロジェクトです。　www.miyakejima-university.jp

「東京アートポイント計画」とは
東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。　www.bh-project.jp


東京文化発信
プロジェクト